新☆ハヤカワ・SF・シリーズ

5038

七人のイヴ I

SEVENEVES

BY

NEAL STEPHENSON

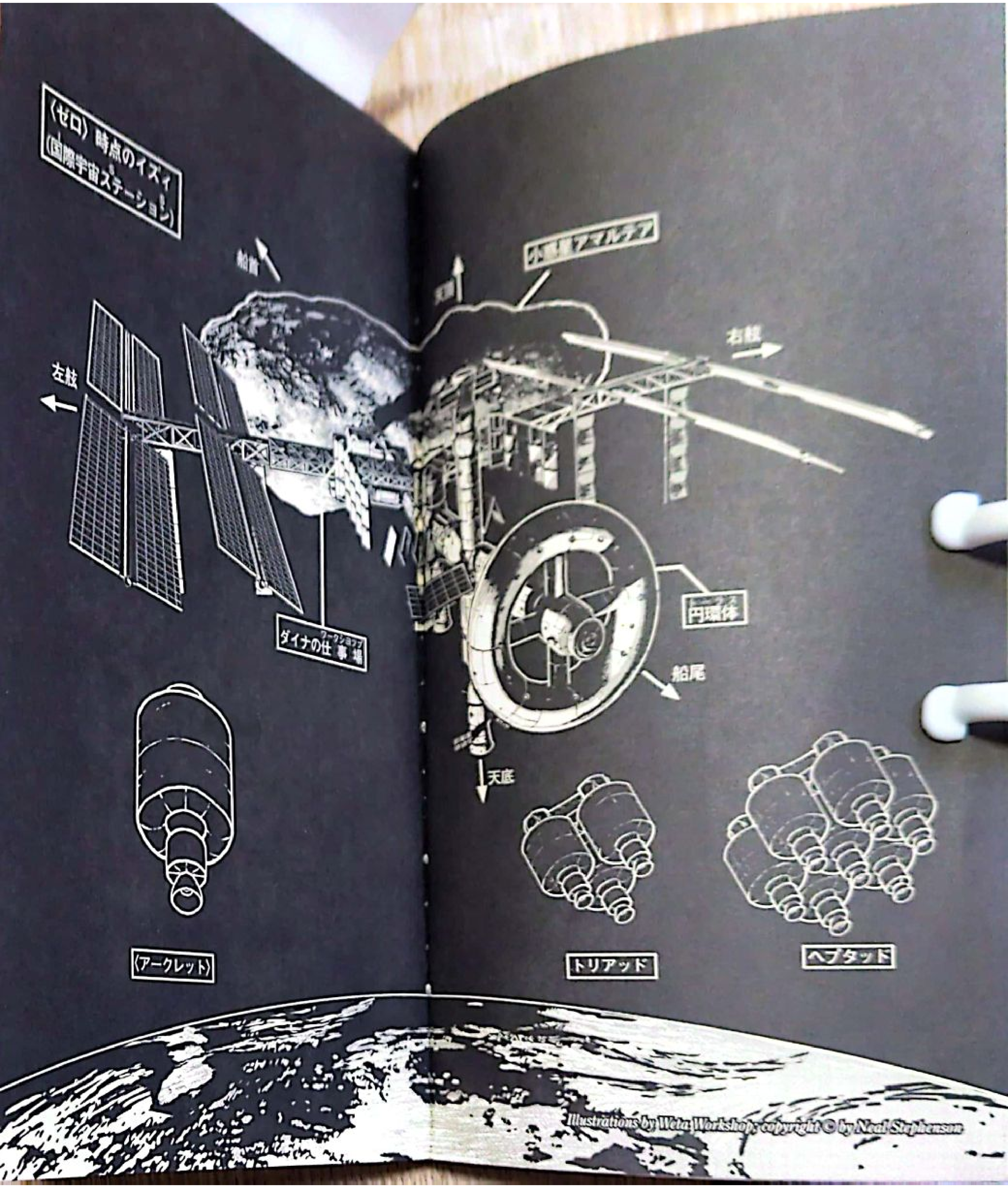
ニール・スティーヴンスン

日暮雅通訳

TOKYO HAYAKAWA BOOKS

A HAYAKAWA SCIENCE FICTION SERIES

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

登場人物

ダイナ・マコーリー……………………国際宇宙ステーション（イズィ）乗員。ロボット工学者
アイヴィ・シャオ………………………同司令官
リーナ・フェレイラ……………………同乗員。海洋生物学者
マーガレット（マージー）・コフラン………………同乗員。生理学者
コンラート・バルト……………………同乗員。天文学者
フョードル・アントノーヴィチ・パンテレイモン………同乗員。宇宙飛行士
リース・エイトケン……………………建築エンジニア
テクラ・アレクセイエヴナ・イリューシナ / マルクス・ロイカー……宇宙飛行士

デュボア（ドゥーブ）・ハリス………天文学者
ジュリア・ブリス・フラハティ（ＪＢＦ）………アメリカ合衆国大統領
ピート・スターリング…………………アメリカ大統領の科学顧問
ショーン・プロブスト…………………アルジュナ・エクスペディションズ会長
ルーファス・マコーリー………………ダイナの父。鉱山経営者
アメリア・イノホーサ…………………小学校教師
モイラ・クルー…………………………遺伝学者

第一部

CamScannerでスキャン

月がひとつだった時代

何の前ぶれもなしに、はっきりとした理由もわからぬうちに、月が破裂した。満ちていく途中の、あと一日で満月という日のことだった。協定世界時(UTC)で05：03：12。のちにこの時刻はA+0・0・0、あるいは単に〈ゼロ〉と呼ばれるようになる。

地上にいた人間で、異変が起きていることを最初に理解したのは、ユタ州のアマチュア天文家だった。そのちょっと前、彼は月の赤道近くのライナー・ガンマ領域付近に、かすみのようなものが広がっていることに気づいた。月面に落ちた隕石による粉塵雲(ダスト・クラウド)だろう。

そう考えてスマートフォンを取りだすと、こわばった親指で（彼がいたのは山の上で、空気は澄んでいたがかなり低温だった）、発見者の権利を確保すべく、できるだけ素早くブログに書き込んだ。ほかの天文家も、すぐに同じダスト・クラウドを観測するだろう――いや、すでにしているかもしれない。とはいえ――とにかく速く親指を動かせば――自分が第一発見者になれる可能性はある。隕石がはっきりしたクレイターを残せば、名声は自分のものだ。自分の名前がつけられることもありうる。

だが、彼の名前は忘れ去られることになった。ポケットからスマホを取り出したとき、彼のクレイターはすでに存在していなかったのだ。月そのものも。

スマホをポケットに戻し、望遠鏡の接眼レンズ(アイピース)をふたたびのぞきこんだ彼は、ののしりの言葉を吐いた。目に入るのは黄褐色のかすみばかり。身体が望遠鏡にぶつかって、ピントがずれてしまったのかもしれない。

CamScannerでスキャン

ピント調整用のノブをしきりに回してみたが、無駄だった。

あきらめて望遠鏡から身を離し、今度は肉眼で、月があるはずの場所を見つめた。その瞬間、彼は情報について特権をもつ科学者であることをやめ、全米にいる何百万という人たちと同じ存在になった。空を見上げた人類が初めて出会った、最も驚くべきものに対する畏敬の念に打たれ、ぽかんと口をあけていた。

映画の中で惑星が爆発するときは、火の玉のように燃えたあとで、その存在がなくなる。ところが、この月に起こったことはまったく違った。〈エージェント〉（月に作用した謎の力を、のちに人々はそう呼ぶようになる）が非常に大きなエネルギーを放出したことは確かだが、月の物質すべてを燃やすほどではなかったのだ。

最も広く受け入れられている説によれば、ユタ州の天文家が観測した粉塵の広がりは、何らかの衝撃によるものだとされている。言い換えるなら、月の外側から来た〈エージェント〉が、地表を貫き、地中深くまで掘り進んだあとにエネルギーを放出したということだ。あるいは単に、〈エージェント〉は反対側に向かって進みつづけ、その途中で残していったエネルギーが月を破壊したのだとも言える。別の説では、〈エージェント〉は原始時代にエイリアンが月に埋め込んだ何らかの装置で、ある種の条件が揃うと起爆するようにセットされていたのだという。

いずれにせよ、結果としての事実は二つ。ひとつは、月が七つの大きなかたまりと無数の小さな破片に砕けたということ、もうひとつは、それらの巨大なかたまりが互いに離れ、別個の物体として――ごつごつした巨礫として――観測できるものになったが、お互いから飛び離れていくほどではなかったということだ。七つの巨大なかたまりは重力で結びつき、共通重心をもとにして不規則に回転していた。

CamScannerでスキャン

その中心点――かつての月の重心だが今は宇宙の抽象概念となっているもの――は、何十億年もそうしてきたように、地球のまわりを回転しつづけた。だから今、地上にいる人々が夜空を見上げても、月が見えるはずの場所には、この白っぽい巨礫の群れがゆっくりと動いているだけだった。

粉塵が見えなくなったとき目に入ったのは、少なくともそういう光景だった。最初の数時間、かつて月だったものは月より少し大きいくらいの雲であり、ユタ州の天文家が唖然として西のほうを見つめるうち、夜明け前には赤みを帯びてきた。アジアでは、月の色をしたかすみが、ひと晩中見えた。ちりの粒が、近くにあるもっと重いかたまりにくっついていくうち、明るいスポットがいくつか目立つようになった。ヨーロッパで、次にはアメリカで、新たな状況がはっきり見えるようになった。月のあった場所にある、七つの巨大な岩が。

この月を破裂させたものが何であれ、科学、軍事、そして政治の世界のリーダーたちはそれを〈エージェント〉と呼びはじめたわけだが、それ以前にこの単語は、少なくとも一般大衆のあいだでは、B級映画におけるシークレット・エージェントやFBIのエージェントを意味するのが普通だった。もう少し技術的な知識のある人にとっては、ある種の化学物質、たとえば洗浄剤(クリーニング・エージェント)などに使われる言葉だった。その後ずっと使われるようになる意味で最も近いのは、フェンシングや格闘技に通じた人たちにとってのものだ。剣の訓練において、ひとりが斬りかかって相手が何らかの対応をする場合、斬りかかったほうをエージェント、受けるほうをペーシェントと呼ぶ。エージェントは作用し、ペーシェントは受ける。今回の未知の〈エージェント〉は、月に対して作用したわけだ。月は、地球上に住むすべての人間とともに、その作用を受ける側

となった。その後かなりの時がたって人類は、みずから行動を起こして奮起し、ふたたび〈エージェント〉になるわけだが、しばらくはペーシェントでしかない時期が続くことになる。

〈セブン・シスターズ〉

ルーファス・マコーリーは、アラスカ北部のブルックス山脈の黒い稜線の上に、その光景が広がるのを見てとった。彼はそこで、鉱山を経営していた。晴れの夜には、その日一日従業員の男たちと採掘をした山頂まで、ピックアップ・トラックに乗って行く。そして、荷台から口径一二インチのカセグレン式望遠鏡を下ろし、山頂に据えて星を見る。あまりにも寒いときは、運転席に行って（エンジンはかけっぱなしだ）エアコンの吹き出し口に手をかざし、指に感覚が戻るまで温める。身体のほかの部分も温まったら、その指は友人や家族、世界中の人たちとの通信に使う。

そしてまた、通信を切る。

CamScannerでスキャン

月が破裂したあと、自分の見たものが現実だと認識したルーファスは、さまざまな自然および人工の天体の位置を示すアプリを起動した。そして国際宇宙ステーションの位置をチェックした。彼の南方三二〇〇キロ、頭上四〇〇キロのところに浮かんでいる。

ルーファスは自作の装置を膝に載せた。自宅の工作所でつくったものだ。一五〇年は前のものだと思われる電信用のキーを、丸みを帯びたプラスチックのかたまりにくっつけた代物で、彼の膝にマジックテープで貼り付けるようになっている。ルーファスはそのキーでモールス信号を打ちはじめた。ピックアップ・トラックのバンパーに付けたホイップアンテナが、その信号を空に向かって送っていく。

彼の頭上四〇〇キロ、南方三二〇〇キロで、ISSの一部であるごちゃごちゃした缶のような構成区画（モジュール）に結束バンドでつながれた安物のスピーカーが、ツーッー、トントンと音を出しはじめる。

ISSの一端には、アマルテアと呼ばれるヤムイモ型の小惑星が固定されている。もしこの小惑星をそっと地上に下ろしてサッカー場に置くことができたら、片方のペナルティエリアからもう片方まで広がり、中心部をそっくり占めることだろう。これまで四五億年ほど太陽のまわりを回って漂ってきたが、その軌道が地球のものと似ていたのに、肉眼でも天文学者の望遠鏡でもとらえることができなかった。天文学者の使う分類法で言うと、この小惑星はアルジュナ群ということになる。地球の軌道に近いことから、アルジュナ群は地球の大気圏に突入して居住エリアに落ちる確率が高い。だが、同じ理由により、つかまえるのも比較的簡単だということになる。そうした理由がいいにせよ悪いにせよ、天文学者たちの注意を引きつけてきたのは確かだった。

アマルテアは、ハイテク億万長者たちが出資したシ

CamScannerでスキャン

アトル・ベースの企業、アルジュナ・エクスペディションズが小惑星探査のために打ち上げた、いくつもの天体望遠鏡衛星によって、五年前に発見された。一〇〇年以内に地球と衝突する確率が〇・〇一パーセントという、危険な天体だということがわかると、別の人工衛星をたくさん送り込んで、小惑星に袋状の装置をかぶせて引き寄せ、（太陽でなく）地球を中心とした軌道、つまりISSにほぼマッチする軌道に、少しずつ引っ張ってきたのだった。

　その間、ISSの拡張は予定どおり一歩ずつ進められていた。新しいモジュールが――ロケットで打ち上げられた、空気の詰まったブリキ缶とでも言うべきものが――ステーションの両端に加えられていった。ステーションの先端――世界中をめぐる鳥のような形の物体の、鼻の部分と思えばいい――には、計画の進むアマルテアと小惑星採掘プロジェクトのための居住空間が用意された。一方、後尾には円環体（トーラス）が――直径四〇メートルほどのドーナツ型居住空間が――建設され、メリーゴーラウンドのように回転して、わずかな人工重力をつくり出していた。

　こうして発展していく途中のどこかで、人々はISSと呼ぶのをやめて、老女に対するような〈イズィ〉という呼び名を使いはじめていた。偶然かどうか、このあだ名はステーションの両端がそれぞれひとりの女性の管理下に置かれるようになるころ、一般的になった。〈イズィ〉の先端の責任者は、ルーファスの五番目の子供で唯一の娘であるダイナ・マコーリー、〈イズィ〉全体の指揮を〝船尾〟のトーラスからとるのが、アイヴィ・シャオだ。

　ダイナは起きている時間のほとんどを、〈イズィ〉の最先端にある小さなワークスペース（〝私のショップ〟）で過ごし、石英ガラスの小さな窓からアマルテア（〝私のガールフレンド〟）を見つめる。アマルテアはニッケルと鉄でできている。太古の惑星が何らかの

原初的な爆発などで分裂したとき、高温の中心部に沈んでいったと思われる重い元素だ。ほかの小惑星は、もっと軽い物質でできている。アマルテアは地球に似た軌道のせいで、決定的な脅威と有望な資源活用候補の両方になったが、同様にそれを構成する高密度の物質のせいで、太陽系を周回する厄介ものと、研究対象として価値のあるものの両方になったのだった。小惑星によっては、ほとんどが水でできていることもあり、その場合は人類が消費するために貯蔵されるか、水素と酸素に分解されてロケットの燃料となる。貴金属を有する小惑星の場合は、地球に回収されて販売される。

アマルテアのようにニッケルと鉄のかたまりの場合は、精錬して軌道上の居住用構造物の材料とすることができる。だが、小規模の試掘以上のスケールでそれをやろうとすると、新しい技術を開発しなくてはならない。人間の採掘者を使うのは、軌道上に送り生存させておくのに費用がかかりすぎるので、問題外。当然、ロボットを使うことになる。ダイナが〈イズィ〉に送られたのは、ロボット実験室の下準備のためだった。六人のスタッフを使うはずだったが、ワシントンの予算争奪戦の結果、ひとりに減らされてしまった。

だが、ダイナとしては気に入っている仕事だった。彼女は父親のルーファス、母親のキャサリン、そして四人の兄弟たちとともに、アラスカのブルックス山脈や南アフリカのカルー高原、オーストラリア西部のピルバラ地域といった、人里離れた土地の硬岩採鉱場で育った。だが、彼女のしゃべる言葉は、そうした土地にいた形跡を残していない。また、学校へは行かず、両親による自宅学習で育った。それぞれの土地で家庭教師も使ったのだが、一年以上もつ教師はいなかった。キャサリンはピアノの弾き方やナプキンのたたみ方といった繊細なことを教え、ルーファスは数学や戦史、モールス信号、藪漕ぎのしかた、爆破の技術などを教えた。一二歳になるころには、採掘者生活においては

賢すぎるほどだと家族内で認められるようになり、アメリカ東海岸の寄宿学校に入学した。彼女の家庭は——それまでまったく感じなかったのだが——実は裕福だったのだ。

ダイナは学校でサッカー・プレイヤーとしての才能を発揮し、それを活かして運動選手の奨学金をもらい、ペンシルヴェニア大学へ進んだ。だが二年生のとき、右足の前十字靭帯（じんたい）を切ってしまい、アスリートとしてのキャリアは終わりを告げる。その後の彼女の関心は地質学に向き、本格的に勉強をしようと思いはじめた。さらに、ロボットの組み立てが好きな男の子と三年間付きあったことが、採掘業のバックグラウンドと結びついて、彼女を現在の仕事にうってつけの人間としたのだった。ダイナは地上のロボットオタクと親密な間柄になった結果、大学の研究員とハッカー（および製作者）コミュニティのフリー・メンバーとアルジュナ・エクスペディションズの有給スタッフが融合した存在として、現在の仕事についていた。彼女の仕事は、ゴキブリからコッカースパニエルまでの大きさ、つまりアマルテアの地表を這い回ってタスクをこなせるあらゆるサイズのロボットのプログラミングをし、テストし、評価したうえ、アマルテアの鉱物組成を分析し、破片を、ほかのすべてのものと同様、宇宙環境に適応するよう特別につくられた溶解炉に入れることだ。この装置から出てくる鉄のかたまりは、せいぜいペーパーウェイトくらいの大きさしかないが、初めて地球外でつくられたものであるし、今やシリコンバレー全体の億万長者のデスクで重要書類の上に載っており、どんな商品よりも有力な話のタネであるとともに、ステータス・シンボルなのであった。

アマチュア無線（ハム）に固執するルーファスは、減少を続ける世界中の旧友たちといまだにモールス信号による通信をしていた。（少なくとも〈イズィ〉が頭上を通り過ぎるときは）見通し線上にあるし、距離は問題な

いのだから、地上と〈イズィ〉のあいだの無線通信はむしろ簡単なものなのだ、というのが彼の言い分だ。電気はんだごてや電子機器の作業台に囲まれたロボット・ワークショップの住み込み仕事をするダイナにとって、父親の提供する仕様に沿って小型のトランシーバーを組み立てるのは、しごく簡単なことだった。隔壁に結束バンドで留めたトランシーバーは、ワークステーションの頭上にぶら下がったまま、かすかな雑音を出しているが、宇宙ステーションの換気システムが背後で立てる大きな音にかき消されてしまう。ただ、時おりビーッという音を立てることはあった。

もし宇宙遊泳中の飛行士が、〈エージェント〉が月を砕いた数分後に〈イズィ〉のダイナがいる側を見たとすると、まず目に入るのはアマルテアだろう。巨大な、ねじ曲がった金属のかたまり。長期間のあいだに消えつつあるその重力に引きつけられたスペースデブリ（宇宙ゴミ）によって、ところどころくすんでいるが、ほかの部分はこすれて輝いている。その表面をちょこまか走るのは、四つの独自な〝種〟に属する、数十体のロボットたち。ヘビのようなかたちのもの、カニのように横歩きをするもの、ジオデシック・ドームが回転しているようなもの、昆虫の群れにしか見えないものなどだ。これらがところどころで、ダイナが追跡に使っているLEDライトの青白い光や、ロボット自身がアマルテアの地表をスキャンするレーザーの光、そしてロボットたちが時おりくぐる紫がかったまばゆいアーク光を浴びて、輝いている。〈イズィ〉が地球のかげ、つまり夜の部分に入ると、こうした輝きのほかには、ダイナのワークステーションにある石英ガラスの窓から漏れる白色光しか見えなくなる。それも、彼女の頭の大きさくらいのかすかなものだ。ダイナは、麦藁色の髪を短く切っている。これまで、外見について特に気にしたことはなかった。採掘場にいたころ、服や化粧でためしに新しいことをすると、兄弟たちに

CamScannerでスキャン

必ず嘲笑されたからだ。卒業記念アルバムに「男のような女の子」と書かれた彼女は、それを一種の威嚇射撃ととり、一〇代の終わりから二〇代初めまで女らしい格好をしようと努力したが、エンジニアたちの会合でまともに相手にしてもらう必要があると感じたときに、やめたのだった。〈イズィ〉で仕事をするというのは、NASAの広報によるめんどうな筋書き付きのインタビューから、同僚の宇宙飛行士がフェイスブックにあげるスナップ写真の画像まで、つねにネット上にいることを意味する。無重力の状態でふくらむ髪に飽き飽きした彼女は、二、三週間ほど野球帽で髪を押さえつけていたあと、ショートカットにしたほうが便利だと気づいたのだった。髪を短くしたことで、男たちからの大量のコメントと、女たちからもいくつかのコメントが来たが、いずれも暇をもてあましているような連中からのものだった。

その日もいつもと同様、ダイナはロボットたちの行動を制御するコードが並んだ画面に注意を集中していた。ソフト開発者は、コードをつくり、コンパイラでプログラムに変換し、それを走らせて目的通りに動作するかを確認しなければならない。彼女もまた、コードをつくり、数メートル先のアマルテアにいるロボットたちに送り、正常に動作するかどうか窓からながめた。窓のそばにいるものほど彼女の注意を引きがちなので、母たる彼女の青い目の近くに群がるものには多くの命令を与えられるが、遠くの暗いエリアをぶらついているようなものにはあまり与えられない、ということになりがちだった。

いずれにせよ、彼女の注意はスクリーンかロボットに集中していた。長いあいだそれが続いたあと、隔壁に結束バンドで固定したスピーカーから、雑音に混じって一連の信号音が流れ出した。ダイナはスクリーンから一瞬目をそらし、頭の中で長短の符号をアルファベットと数字に変換した。父親からの呼び出し符号(コールサイン)だ。

CamScannerでスキャン

「今はだめよ、パパ」娘は父親からもらった真鍮とオーク材の電信キーをちらりと見て、申しわけなさそうにつぶやいた。キーは、ルーファスがイーベイで科学博物館やインテリアデザイナーたちと激しく張り合って高額で競り落とした、ヴィクトリア時代の遺物だ。

月を見ろ

「今はだめよ、パパ。月がきれいなのはわかってる。今デバッグの最中で……」

あるいは月だったものを

「え？」

彼女は窓に顔を近づけて、月の方向に首をひねった。そこにあったのは過去の存在であり、宇宙は変わっていた。

彼の名は、デュボア・ジェローム・ザヴィエル・ハリス博士。フランス語のファーストネームはルイジアナにいる母方の祖先からのものだ。ハリス家はカナダ系の黒人で、先祖は奴隷制度時代にトロントへやってきた。ジェロームとザヴィエルは聖人の名で、念のため二つにしたというにすぎない。一家はデトロイト＝ウィンザー間の国境を越えてやってきた。学校の友人からは当然ながら〝ドゥーブ〟と呼ばれるようになったが、それはまだみんなが小さくて、〝ドゥービー〟がマリファナ煙草のスラングだと知らなかったからだった。テレビにしょっちゅう出るようになった今は、トークショーの司会者やニュースキャスターが〝ドク・デュボア〟と紹介するせいで、ほとんどの人がそう呼ぶようになっている。テレビでの彼の仕事は、一般向けに科学理論を説明し、その意味するところが自分たちの世界観や生き方に反するので受け入れられない

という人たちや、軽はずみではあるが巧妙に否定する方法をあみ出す人たちに対する、避雷針になることだ。天文学の会合で基調講演をしたり、論文を書いたりといった学問の場では、もちろん"ハリス博士"である。

月が破裂した日、彼はカリフォルニア工科大学（カルテク）アシニーアム（カルテクの社交クラブ）の中庭で行なわれた資金集めのレセプションに出席していた。ようやく暗くなりかけたころ、それはチノ・ヒルズの上に昇る、冷たく青白い色の円盤でしかなかった。素人なら、南カリフォルニアではよくある、月のきれいな晩だと喜んだかもしれないが、ドゥーブは円盤のまわりにあるぼやけた境界線を見逃さず、そこに望遠鏡を向けても無意味だとわかっていた。少なくとも、科学的なことが目的ならばだ。ただ、広報ということを考えれば別で、彼は"ドク・デュボア"の立場から、アマチュア天文家による星を観る会（スター・パーティー）をよく催していた。イートン・キャニオン・パークに望遠鏡を据えて、月や土星の輪、木星の衛星といった人気スポットに向けるのだ。この日もそうした催しにぴったりの夜だった。

しかし、その晩彼がしていたのは、別のことだった。IT業界の金持ちたちと上等な赤ワインを味わいながら、ツイッターで四〇〇万のフォロワーをもつ、テレビでよく見る愛想のいい科学啓蒙家"ドク・デュボア"を演じていた。ドク・デュボアは、自分の視聴者たちをどう判断すべきか知っている。たたき上げのIT億万長者は議論が好きだが、パサディナのエリート層はそうでないこと、上流社会の夫人たちは、短くて面白いものであるかぎりは、講義を聞きたがること。自分の仕事はそういう人たちを楽しませて、彼らをプロの資金調達者たちにまかせることでしかないと、わかっていた。

ピノノワールのおかわりをもらおうとバーに戻っていったときも、彼のパーソナリティは完全にドク・デ

ュポアだった。相手の肩をたたき、こぶしをぶつけ合い、にっこり笑い合う。そのとき、ある男が息を呑んだ。みんなが彼の顔を見た。ドゥーブは、その男が流れ弾か何かに当たったのではないかと思った。男は凍りついたように片脚で立ち、頭上を見つめている。その視線を追った女性が、叫び声を上げた。

ドゥーブもまた、地球の暗い側で空を見つめる数百万の人たちと同じ状態になった。あまりのショックに、言葉を発するという高度な機能が停止してしまったのだ。ロサンジェルス広域圏にいるという意識からか、彼の頭に最初に浮かんだのは、すぐ近くに隠されたプロジェクターから透明な画面に向かって、ハリウッド映画の特撮シーンが映し出されているのではないかということだった。そんなサプライズ企画があるなどとは聞いていなかったが、資金調達の連中が奇をてらった行為に出たのか、それともこれ自体が映画撮影の一部なのか。

我に返ったドゥーブは、無数の携帯電話が音を立てているのに気づいた。彼自身のものも。それは、新しい時代の到来を告げる産声であった。

アイヴィ・シャオはトーラスにほぼ詰めっきりの状態で、〈イズィ〉全体の指揮をとっていた。彼女のオフィスがそこにあるからだが、自分では認めたくないものの、宇宙酔いをしやすいという理由もあった。二人が物理的に離れていること——つまりアイヴィが船尾のトーラス、ダイナが船首のアマルテア近くにいるということが——実際に意味はないのだが、彼女たちのあいだの違いを象徴していると、多くの人が思っていた。ほかの部分では、二人の違いは明らかだった。身体的なことで言えば、アイヴィはダイナより一〇センチ以上背が高いし、長い黒髪は三つ編みにしてジャンプスーツのえりに収めている。体格はバレーボール選手のそれだ。ロサンジェルスで神経質な両親のひと

りっ子として育ち、大学進学適性試験（SAT）に受かったあと、科学を志したが、途中で打ち切って海軍兵学校（アナポリス）に行き、プリンストン大学から応用物理の博士号を受けた。そのころ海軍から、授業料免除の見返りに数年間の軍務を要求された。ヘリコプターの操縦を覚えたあと、アイヴィはもっぱら宇宙飛行士のプログラムをこなし、すぐ上位に食い込んだ。ほとんどの宇宙飛行士は搭乗運用技術者（ミッション・スペシャリスト）――打ち上げ機（ローンチ・ヴィークル）が軌道に乗ったあとに特別な任務をこなす科学者ないし技術者――だが、パイロットのトレーニングを積んだアイヴィはフライト・スペシャリストでもあった。つまり、ロケットの操縦法を知っているということだ。スペースシャトルの時代がとうの昔に終わった今、操縦桿を握って、翼のあるヴィークルを滑走路に下ろす必要はない。だが、軌道上でドッキングなどの操船をする場合、ヘリコプターの操縦士としてモーター制御システムに通じ、物理学者の数学的マインドを備えた彼女は、最適なのだった。

この経歴は一種威圧的で、そういうものに感心する人たちさえも、当惑させるところがある。ダイナは感心などしなかったし、どちらにせよ経歴などまったく気にしなかった。彼女のアイヴィに対するくだけた接し方は、見る人によっては失礼なものに思えた。育ちの違う二人の女性のあいだの衝突は、実際よりもドラマチックな話としてつくられていった。二人はいつも、〈イズィ〉の乗組員や、それに指令を与える地上の人間たちが、ありもしない二人のあいだの亀裂を埋めようとしていることに、当惑していた。あるいは、それを複雑な政治的陰謀に利用しようとしているのも、不快だった。

月が破裂してから四時間後、ダイナとアイヴィはほかの一〇人のISS乗組員とともに、〈バナナ〉で会議を開いた。〈バナナ〉というのは、回転するトーラスの中で、障害物のない距離が最も長いセクションだ。トーラスの大部分は、床が平らで重力がつねに同じ方

向を向いているのだと脳が解釈するために必要な、最小の距離で切り刻まれている。しかし〈バナナ〉は非常に長いので、床はこちらのはしからむこうのはしまで約五〇度の角度で弧を描いていることが、わかってしまう。また、ここにいると、片方のはしにおける〝重力〟は、もう片方のはしにおける重力とは別の方向にはたらいているのだと、認識できる。したがって、このセクションにそって置かれた長い会議用テーブルも、やはり弧を描いていた。片方のはしから入ってきた人間は、反対側のはしに向かって〝上り坂〟になっているのを見るが、そちらに歩いていっても、昇っているという感じがすることはない。新たに入ってきた人は、テーブルに置かれたものが自分に向かって転がったりすべったりしてくるのではと、思いがちだ。

壁は淡い黄色に塗られている。今は作動しないオーディオ・ビジュアル機器が、地上の人々のライブ映像を表示するようになっており、理論上はヒューストンやバイコヌール、ワシントンなどとテレビ会議ができるはずだった。

会議が始まったA＋0・0・4〈〈エージェント〉が月に作用してからゼロ年、ゼロ日、四時間後〉、あらゆるものが作動しないので、〈イズィ〉の乗組員たちがしばらく自分たちだけでおしゃべりをする一方、フランク・キャスパーとジブラーン・ハールーンがコネクターをいじり、コンピューターにコマンドを入力して、すべてを再起動させた。〈イズィ〉では比較的新参の立場にある二人は、この手のことが得意であるとうっかり知られてしまったため、いつもお鉢が回ってくるようになっていた。ただ二人とも、おしゃべりをするよりはこうした仕事をしているほうが気が楽なのだった。

「原始的な特異点(シンギュラリティ)だな」というのが、部屋に滑り込んできたダイナが最初に聞いた言葉だった。ここの重力は地球の一〇分の一だから、人間が移動するのに

〝歩く〟という表現は正しくない。〝歩く〟と〝飛ぶ〟の中間で、一歩が長い、はずむような進み方だ。しゃべっていたのは、ドイツ人天文学者のコンラート・パルトだった。彼の真ん前でテーブルについているアイヴィが、〈バナナ〉にいる唯一の人間だが、彼女の反応から、パルトの言っている意味がほとんどわかっていないことが明らかだった。

「どういうこと?」とダイナは聞いた。こういう質問は彼女の役割になりつつあったからだ。ほかの連中はアイヴィのことを大事にしすぎているか、無知をさらけ出したくないかで、質問しようとしない。

「小型のブラックホールだ」

「なぜ〝原始的〟なの?」

「ほとんどのブラックホールは、星が重力崩壊するときにつくられる。だが、一部のものはビッグバンの直後にできたという説もある。そのころの宇宙には、かたまりがあった。そのかたまりのいくつかは、重力崩壊を起こすに足る密度をもっていたかもしれない。星としての質量をもつかわりに、非常に小さいブラックホールを形成することができる」

「どのくらい小さいもの?」

「サイズに下限はないと思う。問題は、そういうブラックホールは見えない状態で宇宙を飛び、惑星にぶつかってそれを貫くことができるという点にある。ツングースカ大爆発はそれのせいだという説もあるが、反証があがっていない」

ダイナはその事件のことを知っていた。父親がその手の出来事を好んで話したからだ。一〇〇年以上前の、シベリアでの大爆発。人里離れた地域で、何百万という樹木がなぎ倒された。

「さぞかしすごいものだと思うけど」とダイナ。「月を破壊するほどじゃないと思う」

「月を破壊するには、もっと大きくてスピードがないと」アイヴィが言った。「単なる仮説にすぎないわ」

CamScannerでスキャン

「でも、もう行っちゃったんでしょう？」
「かなり前にね。リンゴを撃ち抜いた弾丸みたいなものだ」
ダイナは、みんなが冷静に話していることに奇妙な感じを覚えた。とはいえ、これ以外に話のしようもない。感情だけではこれほどのことを受けとめられはしない。それに、これまでのところは、音声を消した映画の一シーンを見ているような視覚効果しかなかったのだ。
「潮汐には影響が出るのかしら？」と言ったのは、リーナ・フェレイラだ。海洋生物学者である彼女は、当然のことながら潮の満ち干が気になるのだろう。「月の重力によって起きるものだし」
「太陽の重力もね」アイヴィがうなずきながら付け加え、笑みを浮かべた。〈イズィ〉全体の責任者が彼女であり、ダイナでないのは、この点にある。部屋いっぱいの人間の前で海洋生物学の博士であるリーナの間違いを正したわけだが、相手を傷つけずにそれをできるのが、アイヴィなのだ。「でも答えは、おそらくほとんど影響なしね。月の質量は、もとあった場所の近くにそのまま存在する。ごく少量が飛び散ったけれど、破片のもつ集合体としての重心は変わらない。以前と同じ月の軌道上にある。潮汐表はこれからも通用するわ」
ダイナは無表情だったが、こんな不穏な状況下でもオタク少女のように科学のことをうれしそうに語れるアイヴィの能力に、感嘆していた。アイヴィがつねにメディアのインタビューを受ける一方、ロボットたちとの部屋から引きずり出されたダイナが、笑顔を見せろと何度も言われるのは、こういうことが理由だった。隠そうとしても、声のトーンにあらわれてしまう。命令を下すときや、パワーポイントのスライドを読むときのアイヴィは、早口で歯切れがいい。だが、科学について語るときは打ち解けた表情であり、声は陽気で

快活な、中国語の詩を朗読しているような調子だった。
「いったいなんでそんなことがわかるの?」ダイナの問いに、まわりはぎょっとした。上司へのぞんざいな物言いに顔をしかめる者もいた。「だって、まだ四時間しかたっていない」
「予想通り、コメントのスレッドが目白押しだし、中にははっきりしたかたちをとるメールもあるわ」とアイヴィ。
長いテーブルのはしから突き出た軽量モニターに、青い画面が浮かび上がったと思うと、NASAのロゴがあらわれた。「オーケー、つながったぞ」ジブラーンが横にあった椅子に飛びついた。
画面に映ったのは、ヒューストンのジョンソン宇宙センターにあるISS飛行管制室だ。見慣れた光景だった。ミッション運用部長(DMO)がカメラの前に座って、iPadをいじっている。カメラがオンになっているのに、気づいていないらしい。まもなく、カメラに映っていない場所でドアの開く音がした。軍隊上がりのDMOは、習慣でぱっと立ち上がると、腕を伸ばして、画面右側にあらわれた女性と握手をした。NASAの副長官、つまり組織全体のナンバーツーで、この手の会議に顔を出すことはめったにない。元宇宙飛行士の、オーリーリア・マッキーだ。彼女はほとんどの時間をワシントンDCで過ごすが、今もそのときと同じビジネススーツ姿だった。
「つながっているの?」画面の外の誰かに言った。
「ええ」〈バナナ〉側の何人かが答えた。
オーリーリアは驚いたような表情を浮かべた。当然ながら、彼女もDMOも、やや呆然としたような顔で話を始めた。
「そちらはどんな調子?」オーリーリアは何ごともなかったかのように、ビジネスライクな声で機械的に聞いた。型どおりのことを言いながらも、頭は現実に対応している。

「上々です」〈バナナ〉の誰かが、ひきつった笑い声で返した。

「何が起きたのか、全員が理解しているわね」

「こっちからはよく見えますから」ダイナがそう言うと、アイヴィがたしなめるような顔を向けた。

「もちろんそうでしょう」とオーリーリア。「あなたたちが何を見たか、どんな体験をしたかについて、じっくり聞きたいところね。でも、簡潔にしなければ。ロバート？」

ＤＭＯはｉＰａｄから目をそらすと、椅子に座りなおして前を見た。「そちらの周辺に浮かぶ岩石は、今後増加していくと予測される」月のかたまりのことを言っているのだ。「ほとんどは重力で結合しているので、大きなものは浮かんでいないが、中にはそこから離れるものもあるだろう。そこで、ほかのミッションはすべて保留にして、緊急時に備えてくれ。衝突があるかもしれん」

その意味するところを考えて、〈バナナ〉の全員が黙り込んだ。警戒を強めるだけでなく、〈イズィ〉をいくつかのコンポーネントに分離して、そのひとつが損傷しても全体の空気が漏れ出さないようにするのだ。手順を再確認することになるだろう。リーナの生物実験施設も損傷を受けるかもしれない。ダイナのロボットたちは休暇を楽しむことになるが。

オーリーリアがカメラに向かって言った。「指示があるまで、すべてのフライト・オペレーションは保留。誰もそちらに上がらないし、誰も下りない」

〈バナナ〉の全員がアイヴィを見た。

アイヴィのオフィスに入り、もう目に涙を浮かべても大丈夫だと感じた二人は、自分たちのＱ符号を使いはじめた。

Ｑ符号はアマチュア無線で使われる略符号だ。ダイナはそれを、ルーファスから教えられた。モールス信

号を送る時間を短縮するためにつくられた、Qから始まる三文字の組み合わせによる略記号で、「こちらはほかの周波数に変更して伝送しましょうか？」などというフレーズの代用として使われる。

ダイナとアイヴィがつくった略符号は、Qから始まるものではない。だが、三文字の組み合わせが多かった。

ULS（生意気なチビの田舎もん）は、寄宿学校に入ってすぐのころ、ダイナがサッカーの紅白戦で、ニューヨークから来た女生徒に送られたパスをインターセプトしたときにつけられた呼び名だ。

SAB（くそまじめ女）は、アナポリス時代のアイヴィがテールゲート・パーティー（駐車場でハッチバック車のバックドアを倒してするパーティー）で酒飲みゲームへの参加を断わったときに授かったものだった。

ULSもSABも、ダイナとアイヴィが会議のときにうまく利用していたが、どうやって使うかを会議の前に打ち合わせることもあった。

GLW（美貌の無駄づかい）は、ダイナが新たに髪を切って悲惨なことになったとき、メールの「全員に返信」機能が誤って連続して使われるという信じられない事態が起きた結果、つくられた。ダイナは興奮気味にこの略号をアイヴィに伝え、GLWは二人だけのコードブックにしまいこまれた。

呼吸音が混じったような少女っぽい声で「忘れてた（アイ・フォーゴット）」と言うときは、「メイクアップするのを忘れていた」の略で、これはNASAの広報係が言ったままのせりふだった。

アイヴィとNASAの管理官のあいだの辛辣（しんらつ）なやりとりから生まれた、SARもある。アイヴィの報告書を読んだ管理官は、「不必要な略語を、ほとんど病的なほど偏愛している」と彼女のことを評したのだ。アイヴィにとっては、いささか奇妙な言われ方だった。

NASA全体の文章自体に、頭文字が氾濫していると

思っていたからだ。説明を求めたアイヴィに対する回答は、彼女の略語は「女子学生っぽくて難解（ＳＡＲ）」だとのことだった。

　時期は違うが、ダイナもアイヴィもティーン時代に参加したことのある「スペースキャンプ」（宇宙旅行を模擬体験する青少年向けの体験学習）は、〈イズィ〉だけでなくＮＡＳＡの有人宇宙飛行というサブカルチャー全体を示すのに使われる言葉だった。

「母体器官（モーツ）はどうなるの？」ダイナが、収納ケースをかき回してテキーラの瓶を探すアイヴィに言った。

　アイヴィは一瞬身体をこわばらせてから、ダイナの頭をねらって瓶を棍棒のように振った。ダイナはひるまず、彼女の頭の上で瓶が止まるのを見ていた。

「何？」

「最初にあなたの頭に浮かんだのは『彼女がどう反応するか（ザ・モーグ）』なんだろうけど、私の結婚のことより母親のことをもちだすなんて、信じられない」

　ダイナは失敗した、という表情になった。

「まあいいわ」とアイヴィ。「『忘れてた（ユー・フォーゴット）』よね」

「ごめん。あたしはただ……あんたとキャルはどうあろうと結婚して素敵な人生を送るべきだと思っただけ」

「でも、モーグが犠牲になるのは確かよ」アイヴィはうなずきながら、二つのプラスチック・カップにテキーラをついだ。「すべてをやり直さなくちゃ」

「なんだか、そういうのが得意って言ってるみたい」とダイナ。「見くびるなってね」

「そのとおり」

「モーグに乾杯」

「モーグに」二人はプラスチック・カップをぶつけてテキーラを飲んだ。トーラスにいて受ける二次的恩恵のひとつは、チューブを使わず普通に飲めるということだ。低い重力に慣れる必要はあるが、二人はすでにそのベテランだった。

「あなたの家族はどう？　ルーファスから連絡はある？」とアイヴィ。
「親父はコンラートの〈広域赤外線観測プラットフォーム〉の生データファイルを欲しがってる。ネットで知って、月を壊した原因について好奇心を満たしたいらしいの」
「モールス信号でやりとりするの？」
「向こうもインターネットを使ってる。もう空（から）のドロップボックス・フォルダーをつくってるし。あたしがファイルを送ってやれば、いつものグチたらたらの生活に戻るわ。税金が高すぎる、連邦政府はまた縮小されるべきだ、そしたらおれの安全靴で踏みつぶしてやるって」

　天文学者にとっては、何をしたかより、何を知らなかったかということのほうが、ほぼ無限大の比率で重要な問題となる。そして、ウィキペディアのようなきちんと整理された知識に慣れている人たちは、宇宙で不可思議なことが起きるといつも、天文学のプロたちが不適格だという、あるいは少なくとも何かに失敗したという、認識をもつ。
　実際、それは日常的に起きていることなのだが、ほとんどの現象は天文学者だけが見ているので、いわば商売上の秘密とすることができる。ただ、隕石の落下のように明らかな現象となれば、ドク・デュボアの電話が鳴り響くことになる。電話が鳴れば、それは彼がいくつかのトークショーに出演することを、とりわけ、なぜ天文学者はそれを予測できなかったのか説明させられることを意味するのだ。なぜ隕石が落ちてくるのが見えなかったのか？　天文学者は、単なる役に立たない星オタクだったということなのか？
　ほんのちょっとの謙虚さをもてば大きな効果を生むことができるし、お偉方にすぐ切られないかぎり、政府が科学をもっと援助してくれるようにと嘆願しなが

ら仕事を続けることはできる。一般大衆は五つ子星団にあるウォルフ・ライエ星などに関心はないだろうが、燃えた岩が頭の上に落ちてくるのは避けたいと、確実に思っているはずだ。

ドゥーブはいつも、月の〝爆発(エクスプロージョン)〟でなく〝分裂(ブレイクアップ)〟と呼んでいた。この呼び方はツイッターのハッシュタグ#BUMで影響力をもちはじめた。だが、どんなふうに呼ぼうと、隕石の落下よりもはるかに大きな事態であることに変わりはない。だからもっと多くの説明を求められるのはしかたないが、説明のしようがないのも、また確かだった。隕石なら簡単だ。宇宙は望遠鏡では見えないような小さくて暗い岩石に満ちているから、そのうちのいくつかが大気に触れ、地上に落ちてきても、おかしくはないだろう。しかし月の分裂となると、通常の天文学的現象では説明がつかない。そこでドゥーブは――次の週のほぼ毎日生放送のカメラの前にいたが――ことあるごとにこの問題を避け、どんな天文学者にも原因はわからないのだと、ざっくばらんに言い放った。いわばど真ん中のストレートだが、次に彼は、ボールにスピンを加えた。これはきわめて興味深い出来事です。実際、人類の歴史上において、最も興味深い科学現象なのです。恐ろしい、心をかき乱されるような出来事ではありますが、実際のところ、空を見上げていたことで道路をはずれた運転手や、渋滞のうしろで追突したわずかな人たちを除き、誰も死んでいないのですから、と。

A＋0・4・16（月の分裂から四日と一六時間後）、彼は「誰も死んではいない」の部分を訂正しなくてはならなくなった。ほぼ確実に月の岩石の破片だと思われる隕石がひとつ、ペルー上空の大気圏に突入し、三〇キロにわたって家々の窓ガラスを割ったあと、農場に落ち、ひとつの家族が全滅したのだ。

だが、メッセージは変わらなかった。「これを科学現象ととらえ、私たちの理解していることからスター

CamScannerでスキャン

トしましょう」だ。ドゥープの味方は、astronomical-bodiesformerlyknownasthemoon.com(かつて月として知られていた天体ドットコム)というビデオストリーミング・サイトで、瓦礫の雲の高解像度フィードを二四時間流していた。インタビューの中でチャンスがあると、ドゥープはそれをスクリーンに出して雲の観察を始める。観察をすることで、人々の気持ちを落ち着かせることができるからだ。月は、ごく自然に〈セブン・シスターズ〉と呼ばれるようになった七つの巨大なかたまりと、無数の細かな岩石に分裂していた。しだいに、大きなものは名前が必要となってくる。その多くについて責任があるドゥープは、それぞれの性質や状態をあらわしつつ人を怖がらせないような名前をつけていった。ネメシス(応報天罰の女神)やトール(雷・戦争の神)、グロンド(トールキンの『指輪物語』に登場する巨大な破城槌の名)などではまずい。そこで、それぞれ〈ポテトヘッド〉(「まぬけ」などの意味もあるが、ジャガイモの顔をした人形のイメージか)、〈ミスター・スピニー〉(回転屋さん)、〈エイコーン〉(どんぐり)、〈ピーチ・ピット〉(モモの種)、〈スクープ〉(ひしゃく)、〈ビッグ・ボーイ〉(大物)、〈キドニー・ビーン〉(インゲン豆)という名称にすることとなった。ドゥープはこのことを説明したあと、それぞれの動き方に注目してほしいと言った。すべてが完全にニュートン力学にもとづいており、月の各片はほかのかけらを、その質量と距離に応じた強さで引っぱっているのだ。その様子はコンピューターで簡単にシミュレートすることができた。ラブル・クラウド全体は重力で結びついている。そこから抜け出す速度をもっていたかけらは、すでに飛んでいってしまった。残りのものは、ごちゃごちゃと寄り集まって漂っている。時おり互いにぶつかることもあるが、しだいにくっつき合って、ふたたび月が形成されはじめていた。

ただしそれは、カルテクのキャンパスでスター・パーティーが行なわれたA+0・7・0、つまり分裂からちょうど一週間後までしか通用しない理論であった。

通常の場合、スター・パーティーは丘の上の見晴らしのいい場所で行なわれる。だが、地球の近くにある巨大な岩を見るのなら、わざわざ車で山をのぼっていく必要はない。公園のような場所に一般客をできるだけ多く集めて望遠鏡をのぞいて観測するという、パーティーの趣旨も、一部カットされるということだ。ベックマン・モール（カルテクにある広場。ここの講堂で卒業式やコンサートが行なわれる）には黄色いスクールバスの列ができ、地元のテレビ局やネットワーク局の中継車もそこかしこに散らばって、ライブ映像を町に流せるよう、アンテナを張っていた。レポーターたちは投光器の光の中に立ち、芝生の上に立つさまざまなタイプと大きさの望遠鏡を、背景がわりにしている。参加者には、七枚組の小さなカードが配られていた。月のそれぞれの破片を各種アングルから描いて、名前でわかるようにしたものだ。子供たちには、望遠鏡をのぞいてひとつひとつの岩を確定し、用紙にチェックを入れてその観察結果を書くという課題が出されている。当然ながらほとんどの望遠鏡が〈セブン・シスターズ〉の方向を向いているが、隕石が見えはしないかと、双眼鏡や肉眼で空の暗い部分を見つめている一団もいた。第七日までに、何百という隕石が大気圏に突入していた。というより、発見されるほど大きなものが少なくとも何百、というべきか。そのほとんどが、地表に達する前に燃えつきていた。空にアーク光の尾を引きながら、青い激しい輝きで下の地面を照らし、大きな衝撃音をたてることも二〇件くらいあった。そのうち六個は地上に落ち、大小さまざまな被害を与えた。だが死者の数は、サメに襲われたり雷に打たれたりという地上の騒ぎにおける統計的な数字に比べれば、まだはるかに少なかった。

　パーティーは順調に進行した。すでに三人の子供を成人まで育て上げたドゥーブは、かなり以前から、小学校の教師たちが中心になって組織するイベントは、物流の面からも群集整理の観点からも非常にうまく行

CamScannerでスキャン

なわれるものだと思っていた。だから彼は、ドク・デュポアとしてリラックスして、子供たちのためにセブン・シスターズ・カードにサインをしたり、時おりハリス博士のモードになって仲間の天文学者と議論したりした。

会場をぶらつくあいだ、ミズ・イノホーサという小学校教師と別々の機会で三回出会った彼は、彼女に惚れ込んでしまった。珍しいことだ。この一二年間、誰にも惚れなかったのだから。離婚してから九年がたつ。それはそれで、月の分裂と同じくらいショッキングであることに気づいた。そして、同じ方法で対処しようとした。つまり、現象を科学的に観測するのだ。彼の仮説はこうだった。月の分裂が自分を若返らせたのだ。彼の精神にかぶさった感情的な皮膚肥厚（カルス）をはぎ取り、ピンクに輝く感受性の強い心をあらわにして、最初に出会う魅力的な女性のとりこになるようにしたのだ、と。

彼はアメリアに——あとでわかったのだが、それが彼女のファーストネームだった——話しかけたとき、頭上でブーンという音が聞こえ、中庭の上をそよ風のように通り過ぎていった。誰もが空を見上げた。

七つのかたまりの中でも大きいほうの二つ——〈スクープ〉と〈キドニー・ビーン〉が、互いに向かってまっすぐ動いていった。こうした衝突は初めてのことでなく、しょっちゅう起きている。しかし巨大なかたまりが大きな接近速度で正面衝突するのは珍しく、かなりの見ものになると思われた。ドゥーブは心の動揺をおさえ、口をつぐもうとした。その動揺は、アメリアと一緒にいることによって起きたのかもしれないが、頭のすぐ上で巨大な岩が今にもぶつかりそうになっているとき、まともな人間なら誰しもが抱く戦慄によるものかもしれなかった。幸いだったのは、人々がこの岩石群の進化を、一種の見て楽しむスポーツのように考えはじめており、怯えるのでなく魅力的なショーと

CamScannerでスキャン

感じていることだった。

〈スクープ〉の鋭くとがったはしが、〈キドニー・ビーン〉の名前の由来となったくぼみの部分に突っ込み、真っ二つに割った。もちろん、そのすべては超スローモーションによる出来事だった。

「これで八つになったわ！」アメリアが声を上げた。彼女は本能的に二二人の生徒たちのほうを振り返り、ドク・デュボアに背を向けることになった。「さあ、〈キドニー・ビーン〉はどうなったでしょう？」教師らしい口調で問いかけながら、生徒の誰かが手を上げないか、声を出さないかと見回した。「誰かわかる人？」

子供たちはなんとなく気乗りのしないような顔で、黙りこんでいる。

アメリアは〈キドニー・ビーン〉のカードを持ちあげて、二つに破った。

ドゥーブは自分の車に向かって歩いていった。途中で電話が鳴ったので、ぎょっとしたあまり、もう少しでスクールバスにぶつかってしまうところだった。何をそんなに考えこんでいたのだろうか？　頭皮がひりひりする感触があり、それは髪が頭の上で逆立とうとしているのだとわかっていた。携帯電話に目をやると、マンチェスターにいる仲間の学者からのコールだとわかった。だが電話には応えず、アメリアのためにつくった新しい連絡先の画面をながめていた。彼女の顔のスナップショット、といっても中継車のライトに浮かび上がる横顔にすぎないが、それと電話番号だ。彼は「保存」ボタンを押した。

この頭皮がひりひりする感触は、前にも一度あった。タンザニアでサファリに出たときのこと、ふと気がついてうしろをふり向くと、ハイエナの群れが物欲しそうにこちらを見つめていたのだ。そのとき恐れを感じたのは、ハイエナそのものにではなかった。ハイエナどころか、もっと危険な動物はいたるところにいる。

恐いのは、気を緩めてしまい、本当の危険がうしろに迫っていたのに、間違った対象に注意を集中していたことだった。

彼は「何が月を吹き飛ばしたのか」という、科学者にとって魅力的な謎に関わって、一週間を無駄にしていたのだ。

それは大きなミスだった。

〈スカウト〉たち

「われわれは今、何が起きたのかと問うのをやめ、これから何が起きるのかを議論する必要があります」ドゥーブが話しかけているのは、アメリカ合衆国大統領と、彼女の科学顧問、統合参謀本部議長、そして内閣の約半数の閣僚たちだ。

彼には、大統領がこの話を気に入らないことがわかっていた。ジュリア・ブリス・フラハティ大統領。その任期の一年目が、もうすぐ終わろうとしている。

統合参謀本部議長がうなずくと、大統領はそれを横目でにらみつけた。キャンプ・デイヴィッドの空から窓に差し込む明るい光のせいではない。議長の言葉には含むところがある、と彼女は思っていた。責任を転

嫁しようとしているのか。何か新しい計画のたぐいを押しつけようとしているのか。「続けて」と言ってから、マナーを思い出した。「ハリス博士」

「四日前、私は〈キドニー・ビーン〉が二つに割れるのを目撃しました。〈セブン・シスターズ〉が八つになったわけです。その後、〈ミスター・スピニー〉がもう少しで砕けるようなニアミスもありました」

「そのおかしな名前を聞かずにすむと、うれしいんだけれど」と大統領。

「そうなるでしょう。問題は、〈ミスター・スピニー〉がいつまでそのままでいるか、そこにはどんな意味があるかということです」ドゥーブは手にした小型リモコンのスイッチを入れ、大型スクリーンにスライドを映し出した。一同の頭がそちらをいっせいに向き、それ以上大統領ににらまれないとわかると、彼の気持ちは穏やかになった。スライドは丘を転がり落ちる雪玉と、シャーレの中で増殖する不鮮明な微生物、キノコ雲、そのほか無関係に思える現象の写真を合成したものだった。「これらすべてに共通することは、何でしょう？　指数関数的な存在だということです。何かが急速に増加するという意味をもたせたいとき、よく使われる言葉ですね。しかしこれには、特定の数学的な意味合いがあります。あることがより多く起きるとさらにもっと多く起きるというプロセスを意味しています。人口の爆発しかり。核の連鎖反応しかり。丘を転がり落ちる雪玉が増大する速度は、それまでどのくらい増大したかという量に連動しています」ドゥーブはリモコンのボタンを押して、指数曲線のグラフを描いたスライドを見せたあと、月の八つのかけらの写真を映し出した。「月がひとつのかたまりだったとき、衝突の確率はゼロでした」

「ほかに衝突する相手がいなかったからだ」口を開いたのは、大統領の科学顧問、ピート・スターリングだった。その説明に大統領がうなずいた。

「ありがとう、スターリング博士。かたまりが二つになると、当然ながら、衝突することができるようになります。かたまりが増えれば、そのうちのどれか二つがぶつかる確率は高くなります。しかし、衝突すると何が起きるのでしょう？」彼はまたリモコンのボタンをカチリと押して、〈キドニー・ビーン〉が割れたときの動画を映した。「そう、必ずとは言えませんが、半分に割れます。これは、かたまりが増えることを意味します。七つでなく、八つ。八つでなく九つに。そしてかたまりの数の増加は、さらなる衝突が起きる確率の増大を意味します」

「それが指数関数的だと」議長が口をはさんだ。

「確かに指数関数的なプロセスの特徴をすべて備えていると気づいたのが、今から四日前でした」ドゥーブは認めた。「今は、これがどういうことになるのかわかっています」

それまでドゥーブを熱心に見つめていた大統領の目が、ピート・スターリングのほうにさっと向けられた。科学顧問は片手を上げ、ホッケー・スティックの輪郭をなぞるような急上昇のカーブを描いてみせた。

「指数関数的な増加のグラフがホッケー・スティックの曲がり目に来ると」ドゥーブは説明を続けた。「デトネーション（音速以上の速さで伝わる燃焼、爆発）と区別がつきません。あるいは緩やかな、安定した増加に見えることもあります。すべては時定数（タイム・コンスタント）、つまり指数関数的現象が起きる固有の速度によります。さらには、われわれ人類がそれをどう知覚するかにもよります」

「つまり、何でもないかもしれないと？」議長がまた口をはさんだ。

「八つのかたまりから九つになるのは、一〇〇年後かもしれません」ドゥーブは議長に向かってうなずいた。「しかし、四日前私は、これはより爆発らしく見える現象かもしれないと、気になりはじめました。そこで、院生たちと一緒にちょっとした計算をしてみました。

時間の変化とともに動きを理解できるような、このプロセスの数理モデルをつくってみたのです」
「それで結果は？　ハリス博士。何かわかったんだろうね。でなければ、ここにはいないと思う」
「いい知らせとしては、地球がいつの日か、土星のような美しい環をもつようになるということがあります。悪い知らせは、かなりめんどうな事態になるということです」
「言い換えるなら」とピート・スターリング。「月のかけらがいつまでも衝突を続け、より小さなかけらになっていき、広がって環をつくるということです。しかしかけらの中には、地表に落ちて問題を起こすものもあるでしょう」
「それでハリス博士、いつ、どれくらいの時間でそれが起きるか、わかるの？」と大統領。
「まだ数理モデルのパラメーターを変えて、データを集めている段階です。ですから、私の予測値より実際には二分の一から三分の一だったということも、ありえます。指数関数的なものは注意を要するわけですが、私としてはこう考えています」
　ドゥーブは新たなグラフを映し出した。青い曲線が、時間とともに緩やかに、安定した変化で上昇している。
「グラフの下の部分の時間尺度（タイムスケール）は、一年から三年ほどです。この間、衝突の回数と新しいかけらの数はじわじわと増えていきます」
「BFRというのは？」とピート・スターリング。グラフの垂直軸にそう書かれてあるのだ。
「火球分裂比率（ボライド・フラグメンテーション・レート）。新たな破片がつくられる割合です」
「一般的な用語なのかね？」ピートの声は、反感を抱いているというほどではないが、いらつきが感じられた。
「いえ、私がつくりました。きのう。飛行機の中で」
ドゥーブは『私は造語を許されていますから』という

たぐいのことを付け加えたい衝動にかられたが、会議のしょっぱなから険悪な雰囲気にはしたくないと思っていた。

一瞬にせよビートが黙ったのを見とどけて、ドゥーブは話のリズムを取り戻そうとした。「われわれには、隕石の衝突数が増大することがわかっています。ものによっては甚大な被害をおよぼすでしょうが、全体的に見れば、人類の生活が大きく変わるほどではありません。しかし――」彼がまたリモコンをクリックすると、グラフの線が上に向かって急激に曲がり、白くなった。「――その後私たちは、〈ホワイト・スカイ〉と私が呼んでいる現象を目撃することになります。それは何時間か、あるいは何日かかけて、起こるでしょう。今頭上に見えているばらばらの小惑星群が、互いにすり砕かれ、さらに小さな無数の破片となります。それは白い雲（ホワイト・クラウド）に変わり、空に広がっていきます」

カチリ。グラフの線は急上昇を続け、新たな領域に入って赤くなった。

「〈ホワイト・スカイ〉現象の一日か二日後、私が〈ハード・レイン〉と呼ぶものが始まります。無数の破片全部が空にとどまってはいられないからです。一部は地球の大気圏に落ちてくるでしょう」

ドゥーブはプロジェクターのスイッチを切った。ふだんはやらない行為だが、パワーポイントによる催眠状態から全員を解放し、自分のほうに注意を向けさせることができる。部屋のうしろにいる補佐官たちはまだ親指でスマートフォンをいじっているが、彼らは重要ではない。

「『一部』というのは」とドゥーブ。「何兆かの、という意味です」

部屋は静まりかえっている。

「それは太陽系が形成された原始時代以降に地球が経験したことのない、無数の隕石による爆撃です。隕石が落ちてきて、その燃えさかる尾が見えたことがあり

ますね？　ああいうものが無数にあり、合体して火の玉になっては、ほかのものすべてを燃やしていくのです。地球上のすべてが不毛の地となります。氷河も煮え立つでしょう。生き残る唯一の方法は、大気圏から逃げ出すしかありません。地下にもぐるか、宇宙に出るか」

「もし本当だとすれば、最悪の知らせだわね」大統領が口を開いた。

一同は席についたまま、一分とも五分ともつかぬあいだ考えこんでいた。

「両方をやるべきだわ」と大統領。「宇宙と地下の両方へ行く。もちろん、地下のほうが行きやすいけれど」

「ええ」

「地下のシェルターは……」大統領は差別的な表現をしようとして踏みとどまった。「……避難する人たちのためにつくることになる」

ドゥーブは何も言わなかった。

統合参謀本部議長が口を開いた。「ハリス博士、私はずっと兵站をやってきた男でね。つまり、物資を扱ってきた。地下にもぐるなら、どのくらいの量の物資が必要かが問題となる。ひとりの居住者につき、ジャガイモは何袋、トイレットペーパーは何ロール必要になるのか。要するに私が聞きたいのは、その〈ハード・レイン〉が終わるまでにどのくらいの時間がかかるかだ」

「私の計算したところでは、今から五〇〇〇年後から一万年後のあいだのどこかです」

「この先、あなた方のうち誰も地上に降り立つことはできないし、愛する人に触れることも、地球の空気を吸うこともできなくなる」と大統領は言った。「ひどい運命だとは思うわ。それでも、今地球に閉じ込められている七〇億の人たちがたどる運命ほどでは、ない

かもしれない。地球に向けた最後の船は、もう出たあとね。今後、打ち上げ機が軌道まで上がることはあっても、一万年後まで戻ることはないわ」

〈バナナ〉にいる一二人の男女は、何も言わずに座っていた。月そのものが破壊されたことと同様、あまりにもスケールの大きな出来事であり、すぐに理解するのは不可能だった。また、人間の感情という面からしても、受け入れるには大きすぎる事態だった。ダイナは些細なことを気にしていた。たとえば、JBF、つまり大統領は、こういうことを言うのはうまいんだな、などと。

「ハリス博士」天文学者のコンラート・パルトが口を開いた。「失礼ながら大統領、ハリス博士にまた画面に出てもらえますでしょうか」

「もちろん」フラハティ大統領は、やや不本意ながら横にどいて、ドゥーブが大きく映るようにした。ダイナは、あの有名なテレビタレントの科学者にしては小さいなと感じた。縮んでしまったように見える。それから、数分前に彼が説明してくれたことを思い出し、その比較はむごいことだったと気づいた。地球の破滅が運命づけられていることを知る世界でひとりの男だったとき、いったいどんな気分だったのだろう。

「なんだね、コンラート」ドゥーブの声がした。

「ドゥーブ、私は君の計算結果に同意できないんだが、相互評価（ピア・レビュー）はしているんだろうね。基本的なエラーとか小数点の位置違いとかはありえないのかな?」

ドゥーブはコンラートの質問の途中で半分うなずきはじめていた。うれしいたぐいのうなずきではない。

「コンラート。私だけじゃないんだ」

「シギント（通信などの傍受による諜報活動）によって、中国がわれわれの一日前に計算を終えたことがわかっているわ」と大統領。「イギリス、インド、フランス、ドイツ、ロシア、それに日本のすべての科学者が、同じような結論に達している」

「ほんとに二年ですか？」ダイナがいきなり割り込んだ。割れた、耳障りな声だ。全員が彼女のほうを見た。

「〈ホワイト・スカイ〉まで」

「みんなその数字で一致しているようだ」とドゥーブ。

「二五プラスマイナス二カ月」

「あなた方全員にとって、ひどいショックだということはわかっている」と大統領。「でも私は、ISSの乗組員にいちばん先に知ってほしかったの。あなた方が必要だから。私たち合衆国の全国民、地球の全人類が、あなた方を必要としている」

「なんのためにですか？」とダイナ。彼女は、〈イズィ〉にいる一二人の乗組員のスポークスマンというわけでは、けっしてない。それはアイヴィの仕事だ。だが、ダイナにはわかっていた。アイヴィの顔をちらっと見ただけで、彼女がとても話せるような状態にないことを悟っていたのだ。

「私たちはこれから、宇宙開発をしているほかの国々の首脳に、〈箱舟(アーク)〉をつくることを提案します」と大統領。「地球にあるすべての遺伝的遺産を保管する場所よ。それをつくる期間は二年しかない。二年間で、軌道に打ち上げる人間と装置をできるだけ多く集める。その〈アーク〉の核になるのが、〈イズィ〉なの」

　ばかげたことだが、ダイナは大統領がISSの非公式な呼び名を許可なしに使った気がして、一瞬いらついた。ただ、理由はわかっていた。大統領が説明を受けるためにNASAの広報たちと長く過ごしていたせいだ。今の状況では、物事はより人間らしいものにして、キュートな名前を与えなければならない。自分たちは死ぬ運命にあると知って怯える地球上の子供たちには、死にゆく惑星の遺産を集めた〈イズィ〉が〈ハード・レイン〉を乗り切っていく、楽天的な映像を見せる必要がある。子供たちはクレヨンを手にして、〈イズィ〉の絵を描くことだろう。トーラス部分にかかる光輪、船尾にある巨大な岩、そしてズヴェズダ・

サービス・モジュールの側面に小さく描かれた、擬人化された笑顔。

長い沈黙を破って、アイヴィが口を開いた。ほんの二週間前、結婚が延期されたことで彼女は大きな失望感を抱いていた。ところが、たった今聞かされた話によれば、彼女のフィアンセであるキャル・ブランケンシップ海軍中佐は死んだも同然であり、アイヴィは彼と結婚できないばかりか、二度と彼に触れることも、映像を介する以外の方法で彼の顔を見ることもできないのだ。彼女の知るすべての人たちが当然そうなるわけだが。アイヴィの表情は夢心地のようで、声には抑揚がなかった。「大統領、ここに新たな人たちを受け入れるスペースがないことは、ご存じのはずです。その点は議論の余地があると思いますが」

「もちろんです。あなた方の仕事は――」

「失礼ですが大統領、私にお任せ願えますか?」と言ったのは、ドゥーブだった。ダイナは大統領の目がびくりと動いたことに気づいた。ショックの表情だ。アメリカ合衆国の大統領が、話をさえぎられるとは。しかも肩で押しのけられるようにして。自力で出世してきた女性として、彼女はそうしたことに対してある種敏感になっていたのだろう。

だが、今回はそうしたケースではなかった。今の彼女は、『私が女だから彼はさえぎったの?』と自問していない。そうしたことはすでに過去の行為だった。彼女が自問しているのは、『合衆国大統領はもう用なしだから彼はさえぎったの?』ということだ。

「リーナはそこにいるかな?」とドゥーブ。「カメラを動かしてくれ――ああ、そこにいたか。リーナ、私はカリブ海の魚の群泳行動に関する、君の論文を読んだよ。すばらしいものだ」

「あなたの興味の範囲が海中のものにまで広がっているとは、知らなかったわ」リーナ・フェレイラが答えた。「ありがとう」

CamScannerでスキャン

人間て面白い、とダイナは思った。こんなときにこんな話題でしゃべれるなんて。
「あれは驚くべき映像だった。きっちりした隊形で泳いでいて、捕食者が近づいてくると、いきなり群れ（スウォーム）に穴があき、捕食者は一匹もつかまえられずにその穴を通り過ぎてしまう。その一瞬あとには、またきっちりした隊形を組んで泳いでいく。まあ、まだ何も決めていないんだが――」
「〈アーク〉に群泳行動を応用したいの？」
「計画の名称は〈クラウド・アーク〉よ」大統領が割り込んだ。「そして、あなたの言うとおり。全部の卵をひとつのかごに入れておくより――（何かあっても被害が分散されるようにしろということわざ）」
「卵……そして精子か」ジブラーンがランカシャー訛りでつぶやいたが、かなり低い声だったのでダイナにしか聞こえなかった。
「私たちは、分散アーキテクチャーを採用する」大統領の言い方があまりにも慎重だったので、そのフレーズを一〇分前に習ったばかりのように聞こえた。「〈クラウド・アーク〉を構成するそれぞれの宇宙船は、ある程度自律性をもつ。宇宙船を量産して、できるだけ早く打ち上げるんだと聞いているわ。そして、それが〈イズィ〉の周辺を群泳する。安全なときはティンカートイ（米国の組み立て玩具）のようにドッキングしていて、お互いのあいだを自由に行き来できる。でも岩が近づいてきたら、ビュッ！」彼女は片手の指を広げた。紫に塗った爪がばらばらに離れる。
　でも〈イズィ〉はどうなるの？　ダイナはそう思ったが、今は聞かないほうがいいと考えなおした。
「その準備のために、あなた方全員に仕事があるのよ」と大統領。「そのために、長官にも加わってもらったわ」つまり、NASAの長官であるスコット・スポールディング、通称スパーキーがいるということだ。
「あとはスパーキーにまかせて、詳しいことを説明し

CamScannerでスキャン

てもらう。あなた方の想像どおり、私にはほかにも処理すべきことがいろいろあるから、ここでお別れしなくちゃならないわ」

〈バナナ〉にいる一二人は、小声で感謝の言葉を述べ、会議室かどうかはわからない通信先の会場から大統領を送り出した。誰かがカメラをねじり回すと、スコット・スポールディングの顔が映った。なんとかブレザー姿ではあるが、ネクタイはしていない。おそらく残りの人生でもずっとノータイで過ごすのだろうと思われた。若き宇宙飛行士だったころ、スパーキーはアポロ計画の候補者として選ばれていたが、予算の削減された一九七〇年代初期にミッションがキャンセルされてしまった。だが彼は教科課程から離れず、その後の有人宇宙飛行の空白時期に博士号を取得した。彼の不運は続き、スカイラブでのミッションも、機体が予定より早く大気圏に再突入したため、中止になった。そして一九八〇年代、スペースシャトル計画でようやく彼の忍耐が報われることになる。老練の宇宙飛行士となった彼は、ライナー・マリア・リルケの詩の一節を引用しながら、壊れたソーラーパネルを自宅の家電でも直すかのように修理してのけたのだ。その後二〇年間、技術系の新設企業でさまざまなレベルの成功を記録した彼は、NASAのミッションを別の目的のために再利用するという何やらはっきりしない計画の一環として、数年前に戻ってきたのだった。〈バナナ〉にいる者のほとんどは、いささか鈍感ではあるが好感のもてる人物として彼をとらえており、危機に際して支援してくれるだろうと感じていた。

目下の世界的窮地をあらわすのに、スパーキーがリルケのどの詩を考えていたか、それを予想するのは不可能だった。彼の顔をとらえたカメラがオートフォーカスでそのたるんでしわの寄った顔を映し出すと、何らかの詩が今にも口先から出てくるように思われた。だが、彼はただ青白い瞳でカメラのレンズを見つめた。

CamScannerでスキャン

「うまく言葉が出ない」と口を開く。「だから、仕事の話に集中しよう。アイヴィ、君は今の職務を続けてくれ。ほかに適任者はいない。君の任務は、そこでの作業をスムーズに進め、下にいるわれわれと連絡をとり、何が必要かを伝えることだ。すべての作業をこなしてまだフリーな時間が残っていたら、教えてくれ。何か暇つぶしを見つけてやる」と言って、ウインクした。

そのあと、スパーキーはリストを読み上げていった。カナダ人エレクトロニクス技術者のフランク・キャスパーとアメリカ人で通信の専門家であるスペンサー・グラインドスタッフ——彼は情報機関のために秘密の仕事をしていたことがある——の二人は、〈クラウド・アーク〉の活動をサポートするのに必要なネットワーク・インフラの確立に携わる。計測機器の専門家で、いつも問題があると駆り出されるジブラーンも、二人の作業に参加。

船外活動のベテランである白髪のフォードル・パンテレイモンと、彼に比べるとかなり若く、やはり船外活動の経験が多いアメリカ空軍パイロット、ズィーク・ピーターセンは、新たなモジュールを迎える準備をする。NASA仕様でない設計で性急につくられたモジュールが、早ければひと月以内に到着しはじめると、わかっているからだ。本来なら、世界中の資源が打ち上げられることになる——そのことを思い出したダイナは、時間の予測がばかげたほど楽天的であることに気づいた。

コンラート・バルトは、会議後もとどまって、ハリス博士と話をしてほしいとだけ言われた。当然ながら、宇宙ステーションにあるすべての天文学装置は、衝突してくる岩の観測に再利用されることになるのだ。これは誰も論じたくない話題ではある。どんなに小さな岩だろうと、それが〈イズィ〉にぶつかれば一巻の終わりとなるからだ。その意味では、議論の余地などな

いわけだが。
　ライフサイエンスの学者は、リーナ・フェレイラのほかに、マーガレット・コフランがいた。オーストラリア人女性で、宇宙飛行が人体に及ぼす影響を研究している。また、日本人生物物理学者のジュン・ウエダも、宇宙線が生体組織に及ぼす影響について実験を行なっている。このジャンルとしてはもうひとり、イタリア人エンジニアのマルコ・アルデブランディがいて、乗組員が生存していくための生命維持システムを稼働させるという、もっと実用的な問題を担当していた。
　この四人のうちリーナは、群泳に関する研究をしていたことで特別な地位にあった。宇宙ステーションに関して何かをしたことがあるというわけではないが、かつての研究に再び復帰し、それを今後一生の仕事にしなければならなくなったのだ。スパーキーは彼女に、しばらくどこか静かなところにこもってそのテーマに関する論文を頭に詰め込んだあと、できるだけ早く戻ってくるようにという、いわば白紙委任をした。マーガレットとジュンには、理論的な研究はとりあえず中止にして、マルコのもとで〈イズィ〉が人口の急増に備えるための仕事をするようにという指令が出された。
　これで、一二人のうち一一人。これまでスパーキーは、ダイナに対して何も言っていない。
　ダイナは会議が苦手だった。会議室に座っているといつも、自分が相手チームの本拠地でプレイしているような気になってくるのだ。そうした気持ちは、会議の妨げになるだけでなく、やがて本当のこととなる。いつもそうだ。世界が終わろうとしているのに、今回も同じだった。スパーキーがリストをチェックしていき、それぞれの乗組員にこれから何週間かの任務を与えているときに、自分の名前がまだ呼ばれないと思えば思うほど、逆に自分に焦点が当たっているように感じるのだった。そして、スパーキーがマーガレットとジュンとマルコの名を呼び上げ、自分は最後だったと

CamScannerでスキャン

はっきりしたとき、ダイナはようやく、それが何を意味するのかと考えた。最初に思いついたのは、彼女が非常に重要な存在なので、最後に残しておいたのかもということだった。しかし、スパーキーがやっと彼女の名を口にしたときには、別の理由によるという考えに到達していた。ダイナの心臓はすでにどきどきと高なり、小指がピリピリして、舌が喉に詰まりそうだった。

「ダイナ」とスパーキー。「君はかけがえのない存在だ」

会議の場合にこれがどういう意味をもつか、ダイナにはわかっていた。できればエアロックから放り出したいということだ。

「君は幅広い分野の能力をもっていて、態度もりっぱだ」

スパーキーが乗組員の態度について言及したことは、かつてなかった。

「君が専門家として熱心に行なってきた小惑星の採掘は、当然ながら長期の成果を見込むプロジェクトだ。だが、今のわれわれは短期モードにいる」

「当然です」

「君はアイヴィを手助けして、君の特異なスキルをほかの者たちの作業の支援に役立ててほしい。フォードとズィークも、そう長時間船外活動を行なうわけにはいかないだろう。君のロボットなら、彼らのできない活動もこなせるはずだ」

「鉄鉱石の中を切り開いて進むことにかけては、すごいんですけど」

「すばらしい」スパーキーの声に皮肉の色はなかった。

彼は心の中で、ハリス博士とコンラートとの打合せに移ることを想像した。

ダイナはもっと自分自身のことを真剣に考えていた。こういうときは、どうやったら自分なりの心がまえが

できるのだろうか、と。
なぜなら、自分の気持ちはよくわかっているはずだと思えたからだ。
スパーキーにさよならを言おうとした途中で、彼女は考えなおした。「ちょっと待ってください。あなたが短期モードについて言われたことは、尊重します。了解しました。でも、この〈クラウド・アーク〉計画がうまくいったら、そのあとはどうなるか、お考えですか？」
スパーキーは相手にする気がなかった。ただ、彼女の言葉にいらつくというより、困惑していた。「そのあと？」
「みんな、住むところが必要なはずです。地球の表面が燃えつきてしまうなら、住む場所をここにつくるしかありません。ここで手に入るもので。つまり小惑星です。〈エージェント〉のおかげで今ではもっと増えましたから」

スパーキーは両手で顔を覆って息を吐き出し、一分ほどじっと座っていた。手を顔からどけたとき、ダイナは彼が泣いていることに気づいた。「私はこの会議に来る前、半ダースほどの家族や親友に別れの手紙を書いてきた。このあと私は、リストにある残りの仕事を続けるだろう。さらに手紙を送りたい相手が〈ハード・レイン〉で死ぬまでに、全体の半分くらいは書けるかもしれない。問題は、自分がもう死んだも同然だという前提で物事を考えていたことだ。だが、それは間違いだった。君の考えているようなことを考えるべきだったんだ。君とわずかな人たちが、すべてがうまくいけば期待できるような未来を」
「あたしたちが未来に期待できると、本当に思われますか？」
スパーキーはウインクした。「そういう未来がすばらしいものになるかどうかはわからないが、少なくとも未来について考えることはできる、という意味だ」

その点で君の考えに反対はしない。しかし、これから私に何をしてほしいんだね？」

「あたしを援助してほしいんです」とダイナ。「アマルテアを捨てさせないでほしい。あたしのロボットたちがスペア・パーツのことで困らないようにしてほしい。しばらくほかのスタッフの手伝いをするということは、かまいません。でも空が白くなって〈ハード・レイン〉が始まったら、〈クラウド・アーク〉には生存に適した計画が必要です。小惑星でなんとかしなくては、何千年も生き残る方法はないんですから」

「私がついているよ、ダイナ」とスパーキー。「どれくらい役に立てるかは、わからないが」そして彼の視線は、大統領が出ていったドアのほうへそれていった。

A+0のとき、ISSの乗組員一二人にはロシア人がひとりしかいなかった。六回のミッションと一八回の船外活動をしてきた五五歳のベテランにしてロシア宇宙飛行士集団の陰の実力者、フョードル・アントノーヴィチ・パンテレイモン中佐。これは珍しいことだった。初期のころは、ISSの通常の乗組員である六人のうち少なくとも二人が、ロシア人宇宙飛行士だった。その後、アマルテア・プロジェクトやトーラスの追加で、ステーションの乗組員数は最大一四人となり、ロシア人乗組員の数は二人から五人というのが通常の状態になっていたのだ。

だから、アイヴィとコンラート、それにリーナが帰還して、二人のロシア人とひとりのイギリス人エンジニアと交替する予定になっていたのだが、その二週間前に月がばらばらになってしまった。

だが、ロケットも乗組員も準備ができていたため、ロスコスモス、つまりロシアの宇宙開発機関は、A+0・17にバイコヌール宇宙基地から打ち上げた。

ソユーズ宇宙船は、何ごともなく〈イズィ〉のハブ・モジュールにドッキングした。アメリカ人たちと違

CamScannerでスキャン

ってマニュアルで飛ぶのが好きなロシア人たちが、自動でドッキングを行なったのは、かなり以前のことだ。
　ソユーズ――もう何十年も有人宇宙飛行に使われてきた、もちのいい宇宙船――は、三つのモジュールからできている。いちばん後部にある機械セクションは、エンジンと推進剤のタンク、太陽電池パネル、それに大気を必要としない装置がついている。前部のセクションはほぼ球形で空気に満たされ、飛行士が作業と生活のできるスペースがある。そして真ん中のやや小さなベル型セクションには、宇宙服を着た乗組員が宇宙に打ち出され、ふたたび彗星の尾に包まれて地球へ帰還するときの座席シートが、三つある。この部分はきわめて狭苦しいが、打ち上げと再突入の短い時間にしか使用しないのだから、問題はない。飛行士たちは軌道モジュール、つまり前部の大きな球形部分でほとんどの時間を過ごすのだ。その鼻先の部分には、宇宙ステーションまたは同様の相手とドッキングするための装置がついている。
　二年前まで、ソユーズのカプセルはズヴェズダ・サービス・モジュールの最前部、ISSの"しっぽ"と呼ばれる部分にドッキングするのが普通だった。だが、最近になって"ハブ"と呼ばれる新しいモジュールがズヴェズダに接続され、ステーションの主軸を"後方へ"延長し、トーラスが回転する駆動軸を提供したのだった。しょっちゅう使われる年代物のソユーズと互換性を保つため、ハブにはソユーズ用のポートとハッチがある。
　ほかの一一人はスパーキーが与えた仕事で忙しかったため、ダイナは"船尾"に向かって〈イズィ〉の中をずっと漂っていった。彼女のショップが"船首"のはじにくっついているからだ。船尾に着いたダイナは、到着したソユーズの軌道モジュールの中で人間がぷかぷか浮かんでいる様子を思い浮かべながら、ドッキングハッチを開いた。ところが、そこに見えたのはひと

りの宇宙飛行士の頭と腕だった。どうやらマキシム・コシェレフらしい。ごちゃごちゃとしたいろいろな種類の〈ビタミン〉のかたまりと、一緒にいる。

〈ビタミン〉というのは、小さくて軽いが非常に大きな価値をもったものを意味する、宇宙飛行マニアたちの隠語だ。マイクロチップ、医薬品、スペア・パーツ、ウクレレ、生物試料、石鹸、食料などすべてが、ひっくるめて〈ビタミン〉と呼ばれる。もちろん人間は——すべての宇宙開発はロボットにさせるべきだと考えていないかぎり——最も重要な〈ビタミン〉だと言える。ダイナはこれまで、小惑星開発産業の仲間たちによる、費用のかかるロケットは〈ビタミン〉を運ぶことだけに使うべきだという議論の会議に、何度となく出たことがあった。金属や水といった、かさばるものは、地上から打ち上げるべきではない。そういうものは、すでに宇宙空間にごまんとある岩石から得るべきなのだ、と。

皮下注射器の密閉容器が浮かび出てくると、ダイナの額にぶつかってはね返った。さらには、真空パックされた水酸化リチウムの粒、モルヒネのボトル、リール状に巻かれた表面実装用コンデンサー、輪ゴムで束ねた、削っていないHBの鉛筆。そうしたものを払いのけてみると、状況がもっとよく呑み込めた。ソユーズの人ひとりくらいしかないトンネルに、これ以上無理と思えるくらい詰め込まれた〈ビタミン〉の中に、マキシムは詰め込まれているのだ。

チュラタム射場、つまりバイコヌール宇宙基地にいた誰かが気をきかせて、たたんだゴミ袋を何枚か載せていた。それに気づいたダイナは、一枚を開けて〈イズィ〉の中をふらふらと漂っていきそうなものをすべて詰め込んだ。その後、もっとないかと探してみる。中から逃れ出たものはけっこうあったが、そのほとんどを袋に入れることができた。ハブに移ったマキシムは、身体を伸ばしてリラックスしている。六時間もこ

の状態にあったのだ。彼よりも小柄なダイナが空いたスペースに入って〈ビタミン〉を投げ、マキシムはゴミ袋をかかげてそれをキャッチした。

一分後、ダイナは青いジャンプスーツを着た人間の腿を掘り当てた。続いて肩、そして腕。その腕が動いて、さらにいくつかの〈ビタミン〉を彼女に向かって押しやると、顔が目に入った。ダイナが三〇分前にウィキペディアで見た人物だ。ボロル＝エルデネ。身体が小さすぎて合う宇宙服がないという理由から、一度はロシアの宇宙飛行士プロジェクトからはずされた女性だった。明らかに間に合わせでつけたと思えるような座席シートについている。軌道モジュールの〝長椅子（ディヴァン）〟と呼ばれる部分に、貨物を押さえる網で即席につくられたもので、まだカザフスタンの道路のほこりにまみれている。ダイナは、このほこりは自分が目にする最後のものかもしれないと思ったが、それを頭から振り払おうとした。

つまりボロル＝エルデネとマキシムは軌道モジュールに乗ってきたわけで、これは先例のないことだった。ソユーズで人間が乗るのは軌道モジュールのうしろにある再突入用の帰還モジュールだけのはずだ。

軽率なことは言えないが、前部に乗ってきたこの二人は、自爆任務にも等しい片道飛行をしてきたということか。軌道モジュールは再突入時に投棄され、大気中で燃えつきることになっている。生きて帰れるのは、帰還モジュールに乗っている者だけなのだ。

ゴミ袋に〈ビタミン〉を入れる作業はハッチから帰還モジュールへと続き、さらに顔や腕が見えてくると、急速に進んだ。人間が乗っているはずの三つの座席シートには、予定されていたロシア人宇宙飛行士二人、ユーリとヴャチェスラフのほか、リースという名のイギリス人がいた。

ボロル＝エルデネとユーリとヴャチェスラフはすぐにベルトをはずし、軌道モジュールを通ってハブに進

んだ。リースはちょっと待ってほしいと言って、とどまっていた。

ダイナはハブに戻って残りの四人に挨拶をした。通常なら、この瞬間はやや儀式ばったものになり、ハッチを通り抜けてきた新たな乗組員は、ハグされるか、少なくともハイ・ファイブ（手を上げて互いに打ち合わせる挨拶）くらいはされて、写真におさまる。地球上のすべての者が死に瀕している今、いささか陰鬱な雰囲気に包まれていた。だがダイナは、ひとりひとりに何かしら言葉をかけなくてはならないと感じていた。

ボロル＝エルデネが、自分のことは〝ボー〟と呼んでくれとダイナに言った。明らかに極東地域の血統だが、瞳と頬骨は中国系に見えない。ダイナがウィキペディアから得た予備知識によれば、ボーはモンゴル人だった。

ユーリとマキシムは、ISSに来るのがそれぞれ三回目と四回目だ。ヴャチェスラフは、ISSに初めて搭乗する若いロシア人宇宙飛行士として、最終段階で入れ替わったものと思われる。だがヴャチェスラフは過去に二度、飛行をしていた。したがって、ボーを除くロシア人宇宙飛行士はすべて経験者であり、彼らはダイナと短い挨拶を交わすと、ハブ・モジュールの中をすべるように通り、ハッチを抜けて、わが家のようなズヴェズダ・モジュールへと移動した。彼らが早口で交わすロシア語を、ダイナは半分くらいしか理解できない。〈イズィ〉で働く者はみな、作業に使うロシア語くらいは最低限として知っていた。

リース・エイトケンは建築関係のエンジニアで、裕福な顧客に新奇の建物を設計する仕事をしてきていた。一七日前までの彼のミッションは、現在あるハブの後部に二つ目の、さらに大きなトーラスを宇宙旅行客用に建造するため、基礎的な作業をすることだった。これはNASAと彼の雇い主であるイギリスの億万長者

CamScannerでスキャン

の、官民提携事業の一環だった。その億万長者は、最初期に宇宙旅行産業へと乗り出した実業家のひとりだ。今のリースには新たなミッションがあったが、いずれにせよ、彼がそれに向いていることに変わりはない。

ダイナは軌道モジュールに戻り、ハッチ越しに中をのぞきこんだ。リースは座席シートの中でじっとしている。

「宇宙は初めて？」答えはわかっているが、聞いてみた。

「ここじゃグーグルは使えないのかね？」というのがリースの返事だった。これがアメリカ人の返事なら不快な物言いに思えるが、ダイナはイギリス人との経験も豊富だったから、そのまま受け取ったりはしない。

「新しい住みかを探険しようっていう気が、あまりないように見えたんで」

「住みかは広げてるさ。発見の過程ってやつだ。でも頭を動かさないようにって注意されていたもので」

「宇宙酔いの防止ね。正しいアドバイスだわ。でも、そろそろ動かなくちゃ」キリル文字の刷り込まれたキュウリの種のパックがひとつ、彼女の頭の横をふわふわ漂っていった。ゆっくりとそれを空中からおろしてから、充分近づいたことを確かめ、彼女は片手を差し出した。「ダイナよ」

「リースだ」彼も手を差し出したが、出発前の指示どおりに前方を見つめたままだった。だがそのあと、ほとんどの男が昔から伝統とする行為を彼も行なった。目を彼女のほうに向けてじっと見てから、さらに頭をそちらに向けて、品定めをするようにながめたのだ。

「後悔するわよ」とダイナ。

「う、参ったな！」

「胃の中のものを全部もどすまで、二、三分てとこよ。さあ、出て。ゲロ袋持って来てあげる」

このところ何日も眠れない〝夜〟を過ごしたダイナ

は、自分がトランジスターのことを心配しているせいだと気づいた。現代の半導体技術は、トランジスターを非常に小さくすることに成功した。だが、あまりにも小さいため、宇宙線の粒子がひとつ当たっても壊れてしまう。地上にあるときは危険性が低いのと大気のおかげで宇宙線のほとんどがブロックされるため問題はほとんどないが、電子部品がひとたび宇宙に出れば事情は異なる。そのため世界中の軍産複合体が、宇宙線の衝突に対する強度を増した耐放射線性（ラド・ハード）エレクトロニクス技術に、巨額の金と知力をつぎ込んできていた。その結果できあがったチップとプリント基板は、地上の顧客が期待するような、洗練された消費者向けエレクトロニクス製品に比べると、不格好なものになった。しかも、はるかに高価なものだ。だからダイナは、できるだけ自分のロボットには使わずにいた。安くて小さな既製品を使っていたから、毎週何台かのロボットが動かなくなるのはしかたないと思っていた。停止したロボットは、まだ機能しているロボットが、ダイナの作業場所（ショップ）とアマルテア表面のくぼみのあいだにある、小さなエアロックまで運ばせることができる。そうしたら彼女が、故障したプリント基板を新しいものと取り替えるのだ。保管スペースにあるあいだに宇宙線に当たって、未使用なのに壊れていることも、ときどきあった。だが、ＩＳＳへの補給ミッションによって届く〈ビタミン〉で、その点はつねに補充することができた。

宇宙線を遮断すること——それが唯一の問題だ。地球の大気のような分厚いものなら当然だが、硬くて重い物質なら、もっと薄くて防護壁になりうる。ダイナの場合は、アマルテア自体がその防護壁だった。アマルテアの表面に寄り添っている物体は、宇宙のほぼ半分から飛来する宇宙線——つまり小惑星にブロックされて見えない部分からの宇宙線を、さえぎってもらえる。同じ理由から、ＩＳＳはつねに地球によって、そ

ちらの方向から来る宇宙線から防護されている。したがって、地球のほうを向いているがアマルテアの巨体の〝下〟にあるダイナのショップの側には、宇宙線が狭い範囲でしか吹きかからない、最適打球点（スイートスポット）のような場所があった。宇宙線にやられる可能性を低くするため、ダイナはスペアのチップとプリント基板をこの地域に保管し、ロボットたちがアマルテアの深宇宙（ディープスペース）を向いた側を歩き回る時間を制限した。

　ダイナの窓からは、アマルテアの側面にくぼみがひとつ、はっきりと見える。おそらくは大昔に天体の衝突でできたクレイターで、スイカが一個入るくらいの大きさだ。

　第九日――ドゥーブが〈ハード・レイン〉のことを語り、彼らの帰還がかなわないことが大統領から知らされた、あの〈バナナ〉での会議からさかのぼること五日。ダイナは最も有能な切削ヘッドを備えたロボットたちに新たなプログラムを与え、例のくぼみを深く掘らせていた。彼女には、ある種の予感があったのかもしれない。あるいは、単に自分の仕事をこなしていたのか。掘削用ロボットは、岩石にトンネルを掘るような、きちんとプログラム化された作業をこなす能力が求められる。そういう作業を試す好機として始めたのかもしれない。

〈バナナ〉での会議のあと、自分の小さなショップに戻ったダイナは、ひと晩泣いたりエアロックから首を突き出したりせず、自分のロボットたちが従うプログラムをつくることに集中した。そして、彼らがトンネルを曲げて、緩やかにカーブしながら小惑星を深く掘り下げていくようにした。それまでロボットたちは、ダイナのもとからまっすぐに離れていき、彼女は石英ガラスの小さな窓からスイカ大のくぼみをのぞき込み、ロボットたちが切り開くトンネルを見おろしていた。ロボットたちはプラズマアークを使うので、紫外放射に目を焼かれないよう、ダイナはフィルターガラスを

CamScannerでスキャン

窓にくっつける必要があった。だが、新たに五人の乗組員が〈イズィ〉に到着したA＋0・17までに、ロボットたちは自分の掘ったトンネルの曲がった部分に消えていた。宇宙にいる誰も、彼らを見ることはできない。宇宙線は光と同様、まっすぐ進むから、曲がった部分を通り抜けることはできないのだ。

ダイナはロボットたちに、トンネルの側面にくぼみを掘らせた。保管用のすきまだ。彼女はスペアのチップやプリント基板をすべて、ひとつの包みにまとめていた。最近のチップがいかに小さくてパワフルなことか――その包みは片手で持てるほど小さなかたまりだった。通常なら、これはいい考えではない。ひとつ宇宙線が当たれば全体を貫いて、すべての基板がいっぺんでだめになってしまうからだ。ダイナはそれを八本脚のロボットに持たせ、エアロックから出してトンネルに下ろした。ロボットに装着したカメラで状況を見ながら、引っかけ鉤の付いた腕につながったデータグローブを操作しつつ、巧みに誘導してすきまにもぐらせた。そして腕を広げ、動かないようにしっかりと固定した。これで彼女の電子部品は安全だ。

その様子をリースがながめていた。〈イズィ〉に来て五時間になるが、まだ気分が悪く、じっと横になっているしかなかった。ダイナのショップは、配線用の結束バンドや締め具など実用的なもので満ちている。彼女は二本のパイプにスポンジ状の発泡体を当て、そのあいだにリースの頭を固定してやった。そして嘔吐用の袋を渡して、作業についていたのだった。

「あのタイプは何と呼んでるんだい？」とリース。

「〈グラブ〉よ」とダイナ。「〝欲張りなカニ（グラッビー・クラッブ）〟の略」

「いい呼び名だな」

「岩の上で足の踏み場を選んでゆっくり歩くためのボディタイプとして、典型的なものね。それぞれの足の先に電磁石が付いていて、ほとんどが鉄でできているアマルテアに、ぴったりくっつくことができる。足を

上げたければ、電磁石のスイッチをオフにすればいいわけ」

「当然考えてはいるんだろうが」リースは慎重な口ぶりで言った。「そのうち小惑星全体をくり抜いてしまうんじゃないか。遮蔽環境をつくるとか、空気で満たすとかも考えないと」

ダイナはうなずいたが、〈グラブ〉の操作で忙しかった。八本の脚をひとつずつ動かし、すきまの壁にすべてがぴったりくっついたかを確かめなければならない。彼女の〈ビタミン〉がすべて浮かんで消えてしまったりすれば、やっかいなことになるのだ。「そのことは議論したわ。あたしと、地上でこのプロジェクトに関わっている八〇〇〇人のエンジニアのあいだで」

「そうだろうね、単独の仕事とは思えない」

「制約があるとしたら、作動ガスね。プラズマカッターはとてもパワフルだけど、何らかの気体流動（ガスフロー）を必要とする。どんなガスでもいいんだけれど、工業用ガスはここじゃ稀少だし高い。それに、すぐに宇宙へ逃げ出すっていう厄介な癖があるし」

「でも、何かの表面で作業するんじゃなくて、中をくり抜くんなら——」

「そうよ。出口をふさいで、ガスを取り戻して、リサイクルすることができる」

「ということは、ぼくより君のほうが一歩進んでいるってことだな」

ダイナの顔の上半分はVR装置で隠れていたが、その下に笑みが広がった。「それが宇宙ってものね。あまりにもたくさんの優れた人が宇宙に関心を抱いているから、本当に新しいアイデアを思いつくのは難しい」

ダイナが別のロボットに制御を切り替え、トンネルの中を下ろすあいだ、会話がちょっと途切れた。

「まだほんの少ししか自主を動かせないんだけれど、

君のコレクション [illegible]

がある みたいだな」
「〈サイワイ〉は崩壊したビルの中を探るためにつくられたロボットが、もとよ。そもそもがヘビの動きを応用したものだけど」
「たぶん、〝サイドワインダー〟(ヨコバイガラガラヘビ)からとった名前だな」
「そう。〈サイワイ〉の身体には二重らせんのかたちで電磁石が付いてるから、それぞれをオン・オフにすることでくねくね回転して、最小限のエネルギー消費で表面を移動することができるの」
「バッキーボール(六〇個の炭素原子で構成される球状分子の構造。バックミンスター・フラーに敬意を表した名)に似たやつも、同じような原理を使っているようだな」
「名前を当てたわね。あれはまさに、〈バッキー〉って呼んでるの。専門用語で言うなら――」
「テンセグリティ(バックミンスター・フラーにより提唱された概念で、テンション(張力)+インテグリティ(統合)の造語)」

ダイナは自分が顔を赤らめていることに気づいた。
「そうか、あなたならこういうことをすべて知ってて当然ね。まあ、とにかく大きくてほぼ球形をしてることからついた名前よ。電磁石をうまく使って、支柱を長くも短くもできる。どの方向へも転がっていけるし、頭脳部分はあの中心部分にぶら下がってる細胞核みたいなパッケージに入っている」
「〈グラブ〉、〈サイワイ〉、それに〈バッキー〉か。あの小さいのは、なんて名だい?」
「〈ナッツ〉。群れ(スウォーム)をつくってみようって試み。それについてはリーナがこっそりやって(ムーンライティング)いたんだけど」
間(ま)の悪い単語を使ってしまったことに気づき、二人の会話が一瞬とぎれた。
「まだまだ実験段階だけど」ダイナが続けた。「アリが川を渡るとき集団でかたまりになるみたいに、必要なときはお互いにくっつくことができないだろうかっていうアイデアなの。変な発想だってことはわかって

る。普通のエンジニアリングじゃないし」
「ぼくだって普通のエンジニアじゃないさ。やってるのはバイオミメティクスだ。君のやっていることと多少は似てる。ぼくのほうは突っ立ったままのものをつくるんだけれどね」
「なるほど。それでわかったわ」ダイナは、〈グラブ〉の目を通して見るのに使っていた3Dゴーグルをはずした。〈グラブ〉の背後にいる二台目のロボット〈サイワイ〉は、コブラのように鎌首をもたげてトンネル内にライトをあて、ビデオを撮っている。ダイナはフラットパネルの画面を見ながら〈サイワイ〉を前後に移動させて、プリント基板がこぼれ落ちないように〈グラブ〉の位置を確認した。
「ああ、ぼくにもわかった」とリース。「君の仕事をどうこう言うわけじゃないが、ヤドカリがどういう行動をするかは、知ってるんだよな？」
一瞬ダイナは、自分の記憶をたどった。彼女は海岸での経験があまりない。「ほかのカニが捨てた殻をシェルターにするのよね」
「ほかのカニじゃなくて、貝類の殻だ。でもまあ、わかってるならいい」
ダイナはしばらく考え込んでから、リースのほうへ顔を向けた。相手はさっきよりやや生気がなく、汗をかいているように見える。「あなたの言いたいことがわかった気がする」
「もっと言うなら」とリース。「有孔虫について検討するといい」
「どんなもの？」
「単細胞の生命体としては最大級のものだ。南極の氷の下にいる。成長するとまわりの環境から砂粒を取り込んで結びつけ、硬い外殻をつくる」
「ベン・グリムみたいなもの？」
アメリカン・コミックスの『ファンタスティック・フォー』に出てくる岩石の身体をもつキャラクターを

CamScannerでスキャン

引き合いに出したのは、彼女なりのジョークだった。リースがそれに食いつくとは思っていなかったが、意外な反応が返ってきた。「宇宙線の犠牲者としての例を挙げるなら、そうだな。でも集団からの疎外とか自己憐憫とかはない」

「ザ・シング（ベン・グリムの別名）みたいな岩石の皮膚をもちたいって、いつも思ってたの」

「神様が君にくれた皮膚に比べれば、まるで似合わないよ。ただ、君のロボットたちが歩き回るのを宇宙線から守る方法としては――」

「あたし、あなたのこと好きかも」

リースは袋を口に当てて吐いた。

世界が滅びることを、いったいどうやってみんなに伝えたらいいのか？　自分がそれをする役目にならなくてよかったと、ドゥーブは思っていた。そのかわり、今の彼は合衆国大統領のうしろに立っているだけだ。

彼の仕事は――難しいことではないが――半円形に並んだ世界のリーダーたちのうしろでラシュモア山（四人のアメリカ大統領の顔が山腹に刻まれた山）をかたちづくる高名な科学者たちと一緒に、深刻な顔をしていることだった。ドゥーブはテレプロンプターに向いて説明するフラハティ大統領の背中を、じっと見ていた。彼女の両側には中国の国家主席とインドの大統領がいて、標準中国語とヒンディー語で同じ内容を同時にしゃべっている。扇形に広がった中にいるのは、日本とイギリスの首相、フランスの大統領、それに（自国だけでなくラテン・アメリカの国々の代表も兼ねた）スペインの首相、ドイツの首相、ナイジェリア、ロシア、エジプトの大統領、ローマ教皇、イスラム教主流派の指導者（イマーム）、ユダヤ教の指導者、それにチベットの主教（ラマ）。世界中の人が通訳を待たずにすぐ知らせを受けられるよう、発表は同時に行なわれた。

もしこの仕事をデュボア・ジェローム・ザヴィエル

・ハリス博士が任されていたら、こんなことを言っただろう。

――いいですか、すべての人が死ぬ運命にあるのです。今地球上に生きている七〇億の人間も、一〇〇年後にはほぼすべてが死んでしまいます。その多くはもっと早くに。誰もが死にたくないと思うでしょうが、いずれ起こることとして冷静に受け止めなくてはなりません。

これから二年後に起こる〈ハード・レイン〉で死ぬ人も、一七年後に自動車事故で死ぬ人も、死ぬことに変わりはないのです。

唯一の違いは、すべての人が、死のだいたいの時期と理由を知っていることです。

それを知っている私たちは、準備をすることができます。ある者は神に祈って心の平和を保つという、内的な準備をするでしょうし、ある者は自己の遺産を次の世代に渡そうとするでしょう。

そして、ここからが肝心です。なぜなら、従来のような遺産相続の方法では、〈ハード・レイン〉を切り抜けて遺すことはできないのですから。すべての所有物は人間とともに破壊され、残ったとしても継ぐ者がいないので、遺言書を書くことに意味はありません。

そうでなく、遺産とは〈クラウド・アーク〉にいる人々が来たる何世紀、何千年のあいだに行なうことすべてから、成り立ちます。〈クラウド・アーク〉だけが意味をもつことになるのです。

発表はオレゴン州のクレイター・レイク国立公園で行なわれた。国務省がクレイター湖を見下ろす火口のふちの高台に建つ田舎風のロッジを徴用し、政府高官たちのために使う一方、保安関係者やメディアや物流関係の連中は、近くのキャンプ場と駐車場に押し込められた。今このときも、ハイウェイでは観光客が海兵隊に足止めされ、公園は閉鎖されたと聞いてがっかりしている。そして、本当の理由を知りたければラジオ

CamScannerでスキャン

のスイッチを入れてニュースを聞くようにと言われる。休暇を中断されて怒るのでなく、今後のことを考えなさいと。

　空はきれいに晴れわたり、そのせいで気温が低かった。クレイターの下に見える湖は、ドゥープがこれまで見たことがないほどきれいな青色をしていた。頭上の空はそれより淡い青色に見える。発表のあいだ、彼を含む全員がその湖をバックにして立っていた。大統領のスタッフにいた、ある政治的天才が、人の抱くイメージがどのように作用するのか説明してくれたことがある。カメラは足場を組んだところに据えてあり、彼らを見おろすかたちになって、まばらに木が生えるウィザード島や雪の筋がついた山の周縁部といったクレイターのパノラマが、背景として見る者の目に鮮明に飛び込んでくるようになっていた。受け取りたい者は誰もが、そこにメッセージを読みとることができるのだ。六〇〇〇年前から八〇〇〇年前のいつかに、この地を想像もできないような大異変が襲った。生き残った人間は、空の神と地底の神のあいだでこの世の終わりとも言うべき戦いがあったという話を、代々伝えてきた。それが今は、これほどまでに美しい。アメリカ大統領とほかの国の指導者たちは、その話を彼らの発表に織り込んでいた。だがドゥープとそのまわりにいた科学者たち――世界中の著名大学から来た教授たちには、聞こえなかった。指導者たちはその言葉を世界中に向けて発しているが、その口から漏れる音は岩や木々のあいだを吹き抜ける風に呑み込まれてしまうのだ。アメリカ大統領から四メートルほどしか離れていないドゥープは、彼女の髪が風に乱れるのを見ていた。〈ゼロ〉より前の日々、ファッションや政治の世界のコメンテーターにとって、髪の毛ごときが重要に思えたころ、この髪がよく話題になったものだった。くすんだブロンドに銀色の筋が入っており、それを肩までの長さのストレートにしている。四一歳で大統領

になった彼女は、ケネディよりも一歳だけ若くして、歴代最年少の大統領となった人物だ。バークレーの学生時代に政治を面白半分に学んだあと、MBAへの道を選び、有力なビジネスコンサルタント会社にしばらくいたあと、独創的だが苦闘しているロサンジェルスのIT企業に入った。彼女のリーダーシップによって会社は業績を伸ばし、グーグルに買い取られるまでになることで、彼女は金持ちになった。そして、マリブで開かれたディナー・パーティーで出会った一〇歳年上の、元俳優の映画プロデューサーと結婚した。あからさまな政治ドキュメントや、政治的な意味を含むスリラーを多くつくってきたため、数々の政治的争いに首を突っ込んできた男だ。カストロの政治下で迫害されたラテン系一家の出で、名前はロベルト。リバタリアニズム（徹底的自由放任主義）とポピュリズムが混ざった主張で、ハードな過激派を除く両サイドの誰からも反発されずに取り込むという、いわば政治的カメレオンだった。だが、ハンサムでチャーミングで、学識はあるが常識がないために問題解決ができないと公言しているせいで、政治そのものからは距離をおいていた。

　そうして家庭生活に入ったものの、議論の末旧姓を使い続けることになったジュリア・ブリス・フラハティは、ふたたび政治の世界に目を向けた。だが、カリフォルニア州の上院議員選挙戦で惜敗したあと、その年の大統領選挙日が近づくころには、明らかに妊娠していた。まもなくダウン症の子供を産んだ彼女は、それ以降、羊水穿刺（羊水で染色体異常などを探ること）と優生保護的妊娠中絶をめぐるあらゆる種類の苦悩に対する、いわば人間ロールシャッハ・テストとなる。その手のテーマの議論をするトークショーに出まくった結果、両方の側の全国的政治運動から注目を浴びるようになり、次の大統領選挙戦のあいだには、彼女は両陣営から副大統領の候補に挙げられるという異常な立場に置かれることとなった。彼女はかたくなに中道を歩み、その政治

CamScannerでスキャン

的立場は、民主党の範囲を右に広げ、共和党の範囲を左に広げたような曖昧さをもっていた。誰も彼女が大統領執務室（オーバル・オフィス）まで行き着くとは想像していなかった。現代では、副大統領にそこまで期待するはずもない。ところが大統領が就任からたった一〇カ月でスキャンダルのため辞任したおかげで、フラハティが大統領に昇進、彼女のヘアスタイルはメディアが長々とした記事を書くうえで格好の的となったのだった。そのほとんどが、ちらちら光る銀髪についてだった。あれは自然の毛なのか、それとも偽物なのか？　もし本物なら、なぜ取り除かないのか？　技術はあるはずだ。もし人工のものなら、実際より老けて見せるため、落ち着いているように見せるための、卑劣な手なのではないか？　いずれにせよ、現代社会の女性は、まともに取りあってもらうためには外見を落ち着いた感じにしなければならないということなのか？

ドゥーブは、彼女が今日の発表をしたあと、そうした記事が書かれることは二度とないだろうと思っていた。同時に、まさにこの日、自分が彼女の髪について何らかの注目をしていたことについて、恥ずかしさを感じていた。

だが、人間の心とはそうしたものだ。人間の心は、世界の終わりについて四六時中考えていることなど、できない。ときには小休止が、とるに足らないことを通じた戯れが必要になるのだ。巨大なオークの木の根が究極的には小さな根からできているように、現実の中で心がつなぎ止められているのは、大統領の銀髪などといった些細なことなのだから。

すべての指導者による発表は同時に始まったが、ほかより長くかかるものもあったし、イマームとローマ教皇の発表は、最後が長々とした祈りになった。アメリカ大統領のほか、世俗の指導者たちは、話を終えたあと一、二分所在なげに立っていたが、やがて散り散りになり、それぞれの側近が差し出す大きなコートに

くるまった。だがクレイター湖と同様の背景にすぎなかったドゥーブとほかの科学者たちは、最後の祈りが終わるまでそこにとどまっていなければならなかった。
アメリアと一緒にここへ来て、何が起こるかを見るのはどうだろう、と彼は思った。ここなら〈ホワイト・スカイ〉と、その後の〈ハード・レイン〉の始まりを観察するのには格好の場所だ。発表が行なわれているあいだ、ドゥーブは彼らの南側の空をひとつの火球が駆け抜けるのを見た。その明るく光る白い尾は視界にゆっくりと青い縞模様を残したあと、二つにポンと割れ、さらに五つのかたまりになって、水平線の向こうに消えていった。もちろんかなりの遠さなので、その放射熱を顔に感じるようなことはなかったが、最近の体験談の中には、暖かさが感じられたという例もある。また、火球は極超音速で通り過ぎるため、ほんのつかの間のことでしかない。だが〈ハード・レイン〉が本格的に始まれば、火球は次々に押し寄せ、炎の尾が空を飛び交い、灼熱のかたまりに合体していくことだろう。運のいい人なら——という言い方が適切かどうかわからないが——岩石に直接ぶつからずにすむかもしれないものの、それでも何らかの遮蔽物の下にいる必要がある。金属のシートのような、熱を反射して火のつかないものの下に。しかし、それがある程度時間の余裕をつくってくれるにしても、すぐに空気そのものが熱くなり、息ができなくなるのだ。そうした事態の中でいつ自分は死ぬことになるのだろう、とドゥーブは考えた。
月がばらばらになってから三週間と一日、彼が〈ハード・レイン〉の到来に気づいてからまだ一二日しかたっていない。世界中の指導者たちがこれほど早く反応したことに、彼はある意味驚いていた。だが、彼らはうわさの広がりに影響を受けたところもある。世界中の天文学者によって同じ計算がなされたわけだが、彼らはもともとオープンな状態で研究し、アイデアを

メールで共有する習慣をもっている。本当に知りたい者なら誰でも、インターネットでつながっていさえすれば、一週間前から〈ハード・レイン〉について知ることができた。大統領はじめ各国の指導者たちは、〈クラウド・アーク〉の開発についてオープンにするためにも、早い対応を強いられたのだ。

また、世界中の人に〝エージェンシー〟を与える必要もあった。月を分裂させた〈エージェント〉と混同してはいけない。これは発表内容をつくった人たちによるいわば専門用語で、人々にオプションを――想像上のものであろうとなかろうと、何らかの結果を生むような行為をする余裕を、与えようということである。もちろん、〈ハード・レイン〉がくれば彼らができることなど何もないし、〈クラウド・アーク〉に関して技術レベルで貢献できる人も少ない。船外活動の資格があるとか、ロケットエンジンを組み立てられるといった人たちはごく限られていて、しかもすでに動員されていた。

だが、〈クラウド・アーク〉のミッション遂行を手助けして、宇宙にもっていく遺産の一部になるため、一般の人たちにできることはある。

発表と祈りが終わると、数分前までアメリカ大統領が話をしていた中央の演台に、三人の人間が進み出た。彼らは英語で話し出したが、可能なかぎり多くの言語について集められた通訳たちが、それをいっせいに訳しはじめた。最初に演台の前に来たのは、アメリカの内務長官であるメアリ・パリンスキーだった。六〇代にしては元気な女性で、根っからの登山好きであり、野生生物学の教育を受けている。二人目は、セラーニ・ムパングワ。大柄の南アフリカ人女性で、著名アーティストだ。最後のひとり、ケンブリッジ大学のノーベル賞受賞遺伝学者クラレンス・クラウチは、杖をつきながらゆっくりと進んだ。彼自身、遺伝子のいたずらで結腸ガンにかかっていたからだ。岩の多い地面を

移動するあいだ、彼のそばを片時も離れないポスドクのモイラ・クルーが身体を支えている。クラレンスの妻は一〇年前に自殺しており、今の彼はキングズ・カレッジでどうにか生活していた。

三人はいずれも数日前に事態を知らされていたので、ショックから立ち直ってテレビカメラの前に立てるようになるまでの時間があった。そしてできるだけ早くオレゴンに飛び、湖のロッジにある部屋で気を落ち着けた。一方、世界中から集まったドゥーブとほかの科学者たちは、階下の会議室に一種の作戦室を設け、メアリとセラーニとクラレンスがどんなことを言うべきか検討した。なぜなら、そこが発表の肝心な部分だったからだ。誰も、集団パニックや大混乱を本気で心配してはいなかった。もちろん、多少はあるだろう。だが何十億もの人たちが、自分は何をできるだろうかと知りたがるはずだ。そういう人たちのために、答えを準備しておかなければならない。

だから、自分に背を向けているメアリとセラーニとクラレンスが、冷たい風に向かってしゃべりはじめても、ドゥーブはその内容に興味がなかった。もう何百回も目を通して、知り尽くした内容なのだ。

メアリが話したのは、〈クラウド・アーク〉がどのようにして地球の生態系の遺伝情報の大部分をデジタルのかたちで保存するかということだった。キリンを宇宙に送ることはできないし、送ったとしても生かしておくことはできない。しかし生体組織のサンプルを保存することはできる。宇宙は非常に効率的な冷蔵庫だからだ。しかも、遺伝子配列はマシンにサンプルを入れることで記録できる。DNA鎖を塩基対ごとにばらばらにして、一連のデータとして保存すれば、簡単に保管・複製ができるのだ。そうしたデジタルレコードを保管しておき、ふたたび機能するDNAとして複製して生体細胞に組み込むような特製のマシンを、〈クラウド・アーク〉に送り込むことになる。そうす

れば いつの日か、おそらく数千年先の未来に、キリンもセコイアもクジラも、原材料から再構成することができるだろう。では、一般の人たちがどんな貢献をできるのか？　自分のいる環境で生物のサンプルを、特に珍しいもののサンプルを、集めることだ。スマートフォンで写真を撮り、GPS情報も記録して、サンプルとともにある住所へ送ってほしい。郵送料は無料。

ある意味、このメアリの仕事がいちばん難しいかもしれない。なぜなら、計画のこの部分はまったくの大嘘（BS）で、メアリ自身もそれを知っているはずだからだ。必要なサンプルはすべて、とうの昔に生物学者たちが集めてしまっている。役に立とうとして子供たちがこの住所に送ってくる花もアライグマの骨も鳥の羽も棒きれもカタツムリも、結局は捨てられる運命にあるのだ（「棒きれとカタツムリ」はマザー・グースの歌「男の子って何でできてる?」から）。遺伝子配列のマシンはすでに二四時間フル稼働しており、そうしたマシンをもっとつくり出すマシンさえ、稼働している。

にもかかわらず、彼女は納得させようとしていた。それとも、テレプロンプターに向かってしゃべっている彼女の肩のこわばり具合や頭の動きから、ドゥーブがそう思っただけなのか。

セラーニの担当は、文学的、芸術的、あるいは精神的な遺産が自分たちの死後も長く残っていくことに貢献できるのだと、世界中の人々に納得させることだった。世界中の本やウェブサイトの中身は、すでに保管されている。必要なのは、人々が物語や詩を書いたり絵を描いたり、あるいは単に自分の姿をカメラやビデオにおさめたりして、〈クラウド・アーク〉のパイオニアたちの遠い子孫が見られるようにすることだった。これは合理的かつシンプルな問題なので、納得してもらうのは難しくない。大量のデジタルファイルを保管して宇宙に送るという点に、ごまかしはないのだ。

最後のクラレンスが、説明のため演台についた。ドゥーブは彼の言うべきことを暗記していた。内容

についてさまざまな議論をしてきたが、クラレンスの気持ちは、自分にとってあくまでも自然である、高教会派の言い回しに引かれていた。

「聖書にあるように『クジを引く（キャスティング・ロッツ）』ときが、ついにやってきました」と彼は始めた。「神は地球を、多くの色と種類の人間を住まわせるに適した場所とみなされてきました。しかし今、かつてのノアと同じように、私たちにも重荷が課せられています。私たちも彼のように、生命の多様性を尊重しつつ箱舟を満たさねばなりません。世界の植物や動物、その他の生物について、いかに遺産を保存するかは、すでにメアリ・バリンスキーがお話ししました。私たちはノアがしたように、ひとつがいずつ箱舟に乗せることはできません。その場所がないだけでなく、生かしておく方法がないからです。そこで、植物や動物に関しては、別の方法をとることになりました。

しかし、人間に関しては、事情が異なります。箱舟は自動的なメカニズムではないので、人間が必要です。そして、創意工夫の能力と適応力が必要とされます。そこで生活をするのですから。まずは宇宙飛行士や軍人、科学者たちの能力が必要になるでしょう。しかし、そうした人はごく少数しかいませんし、世界の人たちの中の一部分でしかありません」

この問題――いったい何人が？　という問題が、彼らをずっと悩ませてきた。ロケット工場がフルタイムで働き、さらにわれわれが安全に関してとやかく言わなかったとして、二年間にいったい何人の人たちが宇宙に行けるのか？　見積もりは数百から数万まで、二桁の違いがあり、はっきりしない。しかも人を宇宙に送るのと、そこで生きていられるようにするのは、別問題だ。ドゥーブの知る最も信頼できる見積もりによれば、五〇〇から一〇〇〇のあいだということだった。だが彼らは、クラレンスのスピーチに特定の数字が入らないようにし、それをにおわせる言葉さえ除いた。

「私たちはあらゆる市町村や地域に対し、二人の若者、つまり少年少女を、ひとりずつ〝クジ引き〟で選んでくれるよう要請します。訓練を経て〈クラウド・アーク〉に搭乗するための候補者です。どのようにして選出されるか、そのルールや手続きについては、いっさい介入しません。私たちの目的は、人類の遺伝子的、文化的多様性をできうるかぎり保存することにあるのです。候補者たちがその選ばれたコミュニティの特性をそなえる典型的な例となってくれると、私たちは信じています」

彼の話には微妙に自己矛盾が含まれていた。ルールを押しつけることはいっさいしないと言ったが、その前に、選ぶのは少年少女ひとりずつだと決めているからだ。この点に関して問題を生ずる文化がけっこうあるだろうということを、彼らは承知していた。

「そうやって選ばれた少年少女たちは」とクラレンスは続けた。「ネットワークとなったキャンプとキャンパスに集められ、それぞれのミッションのために訓練を受け、しだい、〈クラウド・アーク〉に彼らの居住場所ができしだい、宇宙に送られます」

カメラアングルによっては自分が背景になっていることに気づいたドゥーブは、できるだけポーカーフェイスを維持した。クラレンスは完全に嘘をついているわけではない。しかし彼は、多くのことを省いてしまっている。何人の少年少女がそのキャンプで訓練を受けることになるのか？　宇宙の箱舟に送ることのできる、あるいは居住できる以上の人数ということはないのか。訓練の結果本当に役に立つようになるのは、どのくらいの人数になるのか？

現実には、クラレンスの言うニュアンスよりはるかに選別が厳しくなるだろう。〝クジ引き〟で選ばれたうちの、さらに一部が集められることになる。稀少な、あるいは典型的な特徴的な民族に属していれば、優位に立てるかもしれない。訓練センターに着いたとたん、

〈ハード・レイン〉が始まる前に全員が宇宙へ行けるわけでないと、理解しはじめる。そして競争が始まる。容赦のない競争が。ドゥーブはそのことを考えるのがいやだった。

この三週間、人間の心がいかに不思議なものかということを、彼は何度も繰り返し考えてきた。訓練キャンプの居心地が悪いかもしれないということは、まったく気にならなかった。ところが、若者たちが互いに醜い争いをすることになると思うと、ほとんどの人間が死ぬのだということ以上に、彼を苦しめるのだ。

ロッジの窓にちらりと何かが見え、それがアメリアだということにドゥーブは気づいた。腕組みをして、窓敷居にひじをのせて、二人がこの三日間一緒にいた部屋からこちらを見下ろしている。彼女は外に出ず、部屋にとどまっていた。発表のもようをテレビで見て、コメンテーターや学者たちがどんなふうに映ったかをドゥーブに教えようというのだ。ちょうど感謝祭の週で、学校も休みだった。彼女は水曜日にオレゴン州のユージーンまで飛び、レンタカーでロッジにやってきたのだった。

これから何が起こるのかをまだ知らない従業員たちは、木曜日の午後、感謝祭につきものの七面鳥料理を出してくれた。この世の終わりについて考えるために世界中からやってきた科学者や政治家、軍人たちは、この祝日の行事にユーモアをくみ取ろうとした。だがドゥーブは、ある意味本当に〝感謝〟していた。彼は、アメリアが彼と一緒に過ごすために来てくれたことを、感謝していた。誰かにいてほしいといちばん望むそのとき、彼女は自分の人生にあらわれてくれた。そのことを、ドゥーブは感謝していたのだ。

第七日、アメリアに出会ったとたん夢中になったドゥーブは、ばかげていると感じた。こんな反応をするなんて、自分の頭はどうなってしまったんだろうと思った。だが彼女は、小学校教師らしく諭すような、い

くぶん冷静な言い方で、自分も好意を抱いているのだと教えてくれた。彼女の学校はカルテクのキャンパスから一キロほどの距離にあったので、二人はよく一緒に早めの夕食をとった。アメリアはその後自宅に帰ってテストの採点をし、ドゥーブは研究室に戻って指数関数的な〈ホワイト・スカイ〉に関する計算を再三チェックするのだった。新しい恋に夢中になる一方、これからどんな事態になるのかが、どんどんはっきりしてくる――そのあいだのギャップは、彼の心が相手にするにはあまりにも大きかった。彼は毎朝、目覚めてからの瞬間を楽しんだが、そのあとすぐ懸案の問題に心が移ってしまうのを、抑えられなかった。

ビデオ会議でＩＳＳの乗組員たちに事態を説明し、キャンプ・デイヴィッドから戻ってきたドゥーブは、いったい何を悩んでいるのかとアメリアに聞かれた。彼は正直に答え、その晩初めてアメリアと夜をともにした。だが、四回夜をともにして、ようやく彼はセックスをすることができた。来たるべき破滅の日への不安がそうさせたわけではない。破滅自体はセクシーなものなのだから。それに彼は、愛する者の葬式に向かっている途中でも、性的な面では人生最高レベルの状態にあった。彼の心に重くのしかかり、インポテンツにしたのは、自分の知っていることをひとりひとりに伝えなければならないという考えからくる、ストレスと動揺なのだ。

その問題は解決した。今、すべての人が知ったのだ。

クラレンスは、聞く者を元気づけるような話でスピーチを締めくくった。〈クラウド・アーク〉の安全な場所に移った若い男女は、宇宙に新しい文明を築き、人類全体の遺伝子的遺産により、人口を増やしていく。凍結された精子と卵子、それに胎芽も宇宙に送られるから、地球に残って死を迎える人たちも、自分の子孫がやがて軌道上のスペースコロニーで成長し、デジタルデータとして保存された手紙や写真、ビデオを通じ

て、遠く離れた祖先と通じ合えるのだという希望を抱くことができるのだ、と。

ドゥーブにとって、この最後の部分は付け足しとしか思えなかった。かすかな希望を抱かせようとして、加えたものだと。だが同時に、今日の発表者なら誰が言ったほうがいい、重要なことであるとも、わかっていた。そこに至るまでの内容は驚くほど残酷なものであり、あまりのショックで、ほとんどの人が受け入れられないと思われたからだ。今回の発表を扱うニュースキャスターたちは、精神的に立ち直る時間を与えるために、秘密を誓ったうえで、きのうのうちに概略を知らされていた。発表は、人々がすがるための藁を与えて締めくくらなくてはならない。このガンに身体を侵されながらも思いやりのある古風なケンブリッジ大学教授は、欽定訳聖書を読むような調子で、死者の子供たちが住む天国の新世界について語った。彼らはその祖先たちのＪＰＥＧファイルやＧＩＦファイルを聖なるものとし、今日の人間にとって心を高揚させるメッセージと同じに扱うだろう、と。彼はそれを人々に納得させなければならず、実際やってのけたのだった。〈クラウド・アーク〉計画を推進していくドゥーブとその他すべての科学者たちは、世界中の軍人や政治家やビジネスリーダーたちとともに、その約束を守らねばならなくなった。

クラレンスのポスドクであるモイラ・クルーとメアリ・バリンスキーがそれぞれ片手を差し出すと、クラレンスの腕を一本ずつ支えて、クレイターのふちに向から階段を降りるのを助けた。その先では動揺したジャーナリストたちが質問のために待ちかまえている。だが、大部分の場所は静まりかえっていた。いつもの記者会見後の騒がしさが、まるでない。ほとんどのネットワークが、自分たちの本局へ画面を切り替えていた。

ドゥーブは窓のほうを見上げてみた。アメリアは髪

CamScannerでスキャン

を耳のうしろにまとめて、窓ガラスからうしろへ引っ込んでいる。彼は寒さで硬直した脚を動かし、のろのろとロッジへ向かった。頭は凍結された精子と卵子のことを考えていた。いつまでもつだろうか？　冷凍後二〇年間は、解凍して正常な子供を生むのに使えると聞いている。ただし、宇宙線が問題を複雑にするだろう。一個の宇宙線が人間の身体を貫くと数個の細胞がダメージを受けるが、人体の場合は代わりの細胞がたくさんある。しかし同じ宇宙線が精子または卵子の細胞を貫けば、完全に破壊してしまうかもしれないのだ。

　要するに地球上のすべての男性が試験管に射精し、すべての女性がそれより複雑なプロセスを経て卵子を採取し、何百万という単位で氷の上に乗せた胎芽が集められればいいわけだが、その場合は自分の子宮を提供して九カ月の妊娠期間を過ごしてくれる若くて健康的な女性がいなくては、意味がない。早晩、人口は増加するだろう。遠慮のない言い方をするなら、新たな世代の子宮は今後一四、五年で機能的になり、使えるようになる。それによる第二の世代が、三〇年後には生まれるだろう。だがそれまでに、地上の人たちが期待をかけた冷凍サンプルのほとんどが、期限切れとなってしまう。

〈クラウド・アーク〉の人口の多くが女性だという状態になっていく必要があるのだ。

　単に多くの子供をつくるためという以外にも、これには理由がある。長期の宇宙飛行が人体に及ぼす影響の研究から、女性は男性よりも放射線のダメージを受けにくいらしいという結果が出ている。また、一般的に女性は男性より小柄だし、スペースも食料も空気も比較的少なくてすむ。社会学的研究からも、長時間狭いところに閉じ込められることに関しても優れているということが指摘されている。先天性・後天性の問題や、性自認（ジェンダー・アイデンティティ）は社会的構成概念なのか遺伝的プログラムなのかという問題になると、議論はつきない

だろう。だが、男は野外を走り回って野生の動物に槍を投げるようにプログラムされているのだという、ダーウィン淘汰説をもし支持するなら――男の子を育てた親なら真剣に考えることだが――多くの男が金属の筒の中で一生を過ごすことを想像するのは、難しいだろう。

〝クジ引き〟で選ばれた若い人たちが訓練を受け選択されるキャンプは、男の子にとってはゴキブリ捕獲器のようなものになるだろう。入ることはできても、出てくることができないからだ。わずかな運のいい者たちを除いて。

ドゥーブはゆっくりとロッジに向かう二、三分のあいだ、何かをしなければならないという漠然とした思いにとらわれていた。

メディアに何か言うか？　そう、それだ。いつもならカメラクルーは彼を標的にして追いかけてくる。そして彼のほうは素早く身をかわそうとする。だが今日は違った。今日の彼は、身をかわしたりせず、ドク・デュボアとして、テレビの国にいる何十億という人たちに話がしたかった。なのに一台もカメラが寄ってこない。ほとんどの国のニュースキャスターは、テレプロンプターをじっと見つめながら、用意された原稿を厳かに読み上げている。もっと名の知れていないジャーナリスト――技術系のブロガーやフリーの評論家たちは、レポートを送っている。ドゥーブは駐車場の隅に知った顔を見つけた。〝タヴ〟ことタヴィストック・プラウズだ。三脚にタブレットを据え付けてカメラを自分に向け、ワイアレスマイクを着けてビデオブログ記事のたぐいを送っている。おそらく、ここ何年も彼を雇っている《チューリング》誌のウェブサイトだろう。ドゥーブとは二〇年来の知り合いだった。タヴはひどい顔をしていた。彼が姿を見せたのは、つい今朝のことだ。事前の通知を受ける資格も手だてもなかったはずだから、今回のニュースはすべて初めて聞く

ことばかりだったのだろう。ドゥーブはゆうべのうちに何度かツイッターとフェイスブックで彼を見つけ、今回の発表で不意打ちを食らわないように警告しようとしたのだが、むこうは返事をよこさなかったのだった。

タヴと即興のインタビューをするにはふさわしくないときのように思えたので、ドゥーブは見なかったふりをしてロッジに向かった。入り口にいるシークレット・サービスの警護官に身分証を見せたが、これはかたちだけのものだ。相手はドゥーブのことを知っていて、すでにドアを開けていた。

エレベーターの前を通り過ぎたドゥーブは、四肢に血液を行きわたらせるために階段をのぼって自分の部屋に戻った。アメリアがドアを半開きにしてある。彼は『ドント・ディスターブ』の札をかけてうしろ手に閉めたドアをロックし、椅子にへたり込んだ。アメリアはまだ窓ぎわにいて、素朴な幅広の窓敷居に背中をもたせかけている。ロッジのこちら側は太陽からかげになっているが、明るい空の光が彼女の顔を照らし、目の下と口のまわりに刻まれはじめているしわをくっきりと見せていた。アメリアはホンジュラス系アメリカ人の二世で、アフリカ系とインド系とスペイン系が混じった複雑な系統だった。大きな目とウェーブした髪、鳥を思わせる顔で、きびきびしているが、いちばん重要なのは、学校教師が必要とする前向きな性格をそなえていることだった。目下の状況下では、とても大切な特質だ。

「終わったのね」とアメリア。「これで心の重荷がおりたでしょう」

「これから二日間で一〇回のインタビューがあるんだ。なぜとか何のためにとかという、説明をしなくちゃならない。でも、君の言うとおりだな。最初に公表をするよりは簡単だ」

「数字の問題ね」

CamScannerでスキャン

「そう、数字の問題だ」
「そのあとはどうするの？」
「二日間のあとってことかい？」
「ええ。どう？」
「それはまったく考えてなかったな。でもデータを集めなくちゃ。予想をより正確にするために。〈ホワイト・スカイ〉がいつ起こるのか、その予測の精度が上がれば、打ち上げのスケジュールやほかのことが決めやすくなる」
「〝クジ引き〟も」
「そうだ」
「あなた、行くんでしょ、デュボア？」アメリアは彼をニックネームで呼んだことがない。
「なんだって？」
彼女の顔に、一瞬いらだちの表情が見えた。めったにないことだ。それからじっとドゥーブの顔を見つめ、しだいに面白がっているような表情になった。「わからないのね」
「何がわからないって、アメリア？」
「あなたが行くことは、はっきりしてるわ」
「どこへだい？」
「〈クラウド・アーク〉よ。あなたは必要とされてるわ。あっちで役に立つ、数少ないうちのひとりだから。生き残っていくために本当の助けとなる人物。リーダーになるのよ」
彼女に言われるまで、そんなことは考えもしなかった。だが今、それは本当のことかもしれないと思えた。
「そんな……ぼくはここで死ぬと思っている。君と一緒にね。ぼくらはここにいて、火口のふちでキャンプして、これから起こることを見とどけるものと思っていた。すごい見ものになるはずだから」
「ほんとの〝ホット・デート〟（一夜をともにする可能性の高い相手とのデート）ね。でも、その日は私、家族と過ごすつもりなの」
「それまでにぼくらは家族になれると思うけど」

CamScannerでスキャン

アメリアの目の下にできたたるみに、涙がきらりと光った。鼻の下を指でこする。「今までにないほどおかしなプロポーズだわね。とすると、私のだんなさんは軌道上へ行き、私はカリフォルニアへ行くってことになる」

「何か手だてを――」

彼女は首を振った。「三五歳の学校教師を〈クラウド・アーク〉に連れていくなんて、誰も、絶対に、同意しないわ」

彼女の言うことが正しいのは、わかっていた。

「でも、凍結させた胎芽なら――可能性があるかも」とアメリア。

「それこそ、これまでにないほどおかしな誘い文句（プロポジション）だよ」

「私たち、おかしな時代に生きてるのよ（ダグラス・アダムス著『ほとんど無害』からの引用）。私には繁殖の時期が来てるのがわかる。もうコンドームは必要ないわね、絶倫さん」

確かにそのとおりだった。三〇分前、ドゥーブはクラレンス・クラウチのスピーチをまったくの懐疑的な気持ちで聞き、甘言にすぎないと思った。何もかも奪われた何十億の人たちの気をそらすため、残った二年間でセックスにはげめと言っているのだと、頭の中で論理的にこき下ろしていた。その彼が今、アメリアと抱き合いながら、宇宙に運んで誰ともわからぬ女性の子宮で育てるための、胎芽をつくろうとはげんでいるのだ。

絶頂に達したときドゥーブの頭の中にあったのは、自分の子供に算数を教えるための、ビデオのことだった。

クレイター・レイク国立公園での発表のとき地球にいなくてよかった――そう思いながら、ダイナはワークショップにひとりで座っていた。窓の外には、アマルテアのごつごつした黒いシルエットが浮かび、その

CamScannerでスキャン

下に青く輝く地球の周縁部が見える。発表がいつ始まるかも、どのくらいの時間がかかるかも彼女は知っていた。ビデオ配信は見ないことに決めている。彼女にとっては、地球自体がまったく外見を変えていないのが不思議なことだった。下の世界では七〇億の人たちが、考えうるかぎり最悪のニュースを聞いている。人類がいまだかつて経験したことのない、共通の心的外傷（トラウマ）を経験することになるのだ。警察と軍隊が、〝秩序維持〟のために——それが何を意味するにせよ——公共のスペースに配置されている。だが、地球はいつもと同じに見えた。

無線機がピーッという音をたてた。まばたきをして涙を払うと、地球の北のはしに曲がって見えるアラスカに目を向けた。

おまえがそっちにいることはおれたちにとって誇りだ。

ダイナは父親のこぶしを——電信用のキーをたたくようすを——そして彼の匂いと声を感じることができた。そして、こう返信した。

もう一度会いたかった。

ベヴァリおばさんがジャガイモを植え付けている。こっちは大丈夫。

ダイナはしばらく声を上げて泣いた。

「QSL」とルーファスが送ってきた。Q符号では「受信証を送ることができるか？」だが、ここでは「まだつながっているか？」という意味だ。

ダイナはイエスの意味で、同じ「QSL」を返した。

Q符号を使う目的は通信を効率よくすることだと知っていたが、今彼女は、別の効果があることに気づい

CamScannerでスキャン

た。言葉にするのがとても難しいとき、わずかだが有用な情報を補うことができる。

もう仕事に戻ったほうがいいぞ。

そっちもキーを打ってないでおばさんを手伝ってあげて。

愛してる　QRT。（送信中止）

QRT。

「そいつを理解できるってことは、ぼくにとっちゃ驚きだよ」

振り返ってみると、ワークショップからSCRUMに続く昇降口（ハッチウェイ）にリース・エイトケンが浮かんでいた。SCRUMは宇宙商業資源ユーティリティ・モジュールの略で、〈イズィ〉の船首、つまりアマルテアのある部分につながっている、巨大な缶のかたちをした部分だ。その側面にそってドッキングポートがいくつかあり、ほかのモジュールを接続できるようになっている。プロジェクトの遅延や予算のカットにより、まだひとつのポートしか使われていないが、リースはその中に浮かんでいた。毛布でくるまれた包みを片手に抱えている。

ダイナは洟をすすって、失敗したと気づいた。

「いつからそこに？」

「そう長くはたっていないよ」

ダイナはリースに背を向けてタオルをつかむと、目と鼻をぬぐった。そのあいだ彼は、早口だが穏やかな口調で説明した。「あの発表が見ていられなくなったんで、何か意味のあることをしようと思ってね。そうしたらびっくりするようなものを見つけたよ。水は低きに流れる、だな。いや、わかってはいたんだ。円環（トーラス）

体には結露した水が集まる場所が甲板の下にある——これまでも気をつけてきた。メンテナンスの問題だ」

彼はちょっと言葉を切ってから、「そして、これを持って来た」と締めくくった。

ダイナは振り向いて、彼が抱えている包みを見た。

「一ダースのバラ？」

「そいつは来週ということで。今日はとりあえず——」リースは包みを差し出した。

受け取ってみると、ステーションの中のあらゆるものと同様に重さがなかったが、慣性の大きさによって、けっこうな重量があることがわかった。

毛布をはがすとカサカサ、パチパチという音がして、〈イズィ〉のいたるところで遮熱材として使われている金属化ポリエステルシートがあらわれた。その下には、何かでこぼこしたものがあり、しかも冷たい。シートを取り除くと、出てきたのは分厚い水のかたまりだった。レンズのような楕円形をしている。水たまりが凍ったもののようだ。

「すごい」

水滴がいくつかしたたり落ちて、ワークショップの小さな窓から差し込む太陽光で、ダイヤモンドのようにきらきら光った。ダイナは一瞬手を止め、みごとだわという表情でながめてから、顔を拭いたタオルで水滴を受け止めた。新しい星が集まってできた、小さな銀河のような水滴だ。

「君はショーン・プロブストからのわけのわからないメッセージについて、話してたね」

「彼からのメッセージはいつも、あんな調子よ。暗号解読をしたあとも同じ」ショーン・プロブストはダイナのボスで、アルジュナ・エクスペディションズの創立者兼会長だ。

「それはともかく、水のことだけれど」リースは続けた。

「ちょっと待って。これ以上解けないうちにエアロッ

クに入れたいわ」
「そうだな」リースはワークショップのはしへ向かって身体を動かした。カーブした壁に、直径五〇センチほどの丸いハッチが付いている。「グリーンの点滅ってことは、開けていいんだよね？」
「そうよ」
リースがレバーを操作してラッチ機構をはずし、ハッチを引っぱると、その向こうに小さなスペースが見えた。メンテナンスの必要なロボットをワークショップに入れたり、またアマルテアに戻したりするときにダイナが使っている、エアロックだ。人間用のエアロックはもっと大きく（かさばる宇宙服を着た人間ひとり分以上のスペースが要る）、安全上の理由から、あるいは政府のプログラムで設計されるせいで、複雑になり、費用がかかる。それに比べこのエアロックは、アルジュナ・エクスペディションズの少人数チームが、小さな装備品用に二、三週間で試作したものだ。大きめのゴミ収集缶くらいの容積しかない。モジュールの内部スペースを節約するため、その側面から宇宙空間に向かって突き出しており、ずんぐりした特大の消火栓といった感じだ。先端にはドーム型のハッチがあって、ジュール・ヴェルヌのSF小説から抜け出てきたような押し棒（プッシュロッド）とレバーのリンク機構を使って、開け閉めできるようになっていた。もちろん今はそのハッチが閉じて空気に満たされ、数分前まで太陽光が外側に当たっていなかったせいで、ひんやりとしていた。
ダイナは氷のかたまりをそっと押し、リースに向かって滑空させた。「アップ・アンド・アンダー！」と声を上げてリースがキャッチした。
「何のこと？」
「ラグビーさ（ボールを高く蹴り上げて、受け止めようとする相手めがけて殺到し、ボールを獲得して攻撃する戦法）」と言いながらリースは氷をエアロックの中に滑らせた。
「〈グラブ〉か何かに、こいつを探して持ってこさせたりはしたのかい？」

「そのうちね。目下のところは、あそこでがんばってるわ」
「なるほど」リースは内側ハッチを閉め、確認してから振り返ってダイナを見た。ダイナもまた彼を見て、しばらく互いに見合っていた。
「つまり結露があって、トーラスの一カ所に水たまりができてたってわけね」とダイナ。「デッキプレートでもめくってみたの？」
「ああ」
「で、凍ってたって？」
「まあ、普通は凍ってないね。環境制御システムをちょっといじって凍らせたってこともあるかも」
「やっぱり」
「エネルギーを節約しようとしただけさ」
ダイナはワークショップの反対のはし、SCRUMにつながるハッチの近くに浮いていた。まわりを見わたし、誰もいないことを確認する。トーラス部分での会議に出ているか、船外活動をしているかだ。
「でも厳密には……」
「厳密には正しくない」リースの言い方は、ぶっきらぼうながら自己認識をしている。そのことを彼女は気に入った。「なぜなら、外側ハッチを開けて、君のロボットが触れられるような空間に氷を宇宙に放り出したら、すぐに昇華してしまうからだ」
〝昇華〟は、固体が液体の状態を経ずに直接気体になることを指す。ここでは真空状態に置かれた固体がしだいに気化していき、やがて消えてしまうことを言っている。水の場合は、非常な低温に保っておかないかぎり、このプロセスが非常に速い。
「そして〈イズィ〉は水を失う」とダイナ。「乏しい、貴重な資源がね」
「なくなってしまうことはないさ」リースは無頓着に言った。「昔とは違う。あの発表があったからには、ロケットがここへどんどん来るだろう」

「それでも、ショーンはあたしにアルジュナ・エクスペディションズのプロジェクトをやらせようとしてる。ビジネスよ。プライベートな仕事。水は共有のものだっていうのに——」
「ダイナ」
「何よ」
「吹っ切ったほうがいい」
　長い沈黙ののち、ようやくダイナが大きなため息をついた。「わかったわ」リースは正しいのだ。今は事情がすべて変わっている。
「それで、彼の目的はなんなんだい？　氷がどう関わってくる？」
　彼の知りたがりに対してささやかないらだちをおぼえていたダイナだが、それも消えていった。たぶんリースは助けになるだろう。彼女は窓のほうを向き、数メートル向こうにあるアマルテアの見慣れた巨体を見て、うなずいた。「あたしもうちの一家もみんな、あれを専門にしてきた。鉱物相手の仕事。硬岩。金属鉱石。ロボットはすべて、大きな鉄のかたまりのまわりで動けるように最適化されている。磁石を使ってくっつくし、プラズマアークや研削砥石を使って作業をする。ショーンは今、そういうのをみんな棚上げにしろって言ってきてる。これからは氷だって。知りたいのは氷のことだけ。あたしに作業してもらいたいのもね」
「地球にはたくさんあるが」とリース。「君はそれを鉱物とは考えないんだろうね」
　ダイナはうなずいた。「邪魔にならないようにどいてろってのは、いらだつわ」
「地球にいる君の仲間も、やっぱり氷の仕事をしてるのかい？」
「メールのやりとりから察するに、これは全社的な指令ね。水をトラック単位で買って、研究所の床にぶちまけてビルごと凍らせる。幸いなことにシアトルは冬

だから、何度か温度を下げるだけですむわ。冷蔵庫の中でも働けるように、みんなREI（アメリカ最大級のアウトドア用品チェーン店）で長袖下着と長ズボン下を買ってる」
「ミスター・フリーズ（アメリカンコミック『バットマン』に登場する怪人）の下で働くってのは、どういう感じなんだろうな」
「あたしはペンギン（『バットマン』に登場する怪人）て言おうとしたんだけど。シアトルの人たちは傘なんか持たないわね」
「シルクハットだってかぶらないと思うがね。やっぱりミスター・フリーズのシナリオだな」
「それはともかく、きのう着いた〈ビタミン〉にはこんなものが入ってたわ」
ダイナはワークステーションの隣にある収納スペースを開けて、メタリックグレーのプラスチック製容器を取りだした。繊細な電子機器を静電気から守るバッグだ。NASAの名刺がテープで留めてある。
「上層部（ハイ・プレイス）に友だちがいるってのはうらやましいね」とリース。名刺にはNASA長官、スコット・"スパーキー"・スポールディングとある。
ダイナは笑みを浮かべた。「低いところ（ロー・プレイス）にいるとも言えるけどね」
つまらない冗談だった。リースは返事をしない。ダイナは顔がわずかにほてるのを感じた。一種の保身から出たジョークがすべったのだから、顔を赤くするほどのことではない。「二週間前スコットは、あたしを見捨てないと言ってくれた。自分がついてるって」
「具体的にはどういう意味なんだ？」
「ロボットの仕事は続ける。あたしには仕事がある。……信じちゃいないけど、彼はショーン・プロブストと話したと思うの。なぜなら、二日前にショーンがこれをフェデックスでスパーキーに送り、今ここにあるから」
ダイナはジップロックの口を開け、親指と人差し指を突っ込んで米粒のような大きさの装置をひとつ、つまみ出した。遠目には単なるシリコンの薄片で、太陽

電池のように見えたが、ごく小さな付属品が付いていた。
「そのぶら下がってるのは何だい？」
「移動システムよ」
「脚かな？」
「これはたまたま脚だけど、ほかのは無限軌道とか回転円筒とかスラマーとかが付いてる」
「スラマー？　専門用語かい？」
「採掘用のね。地上で重い装置を移動させる方法のことよ。あとで見せてあげる」
「どうやらこれからすべきなのは、ロボットたちが漂い去ったり行方不明になったりしないで氷の上を這い回れるようなさまざまな方法を、評価することのようだね」
「そう。シアトルの地上では、どれもある程度役に立ったのよ。宇宙での動作を評価してみたいわ」
「それだ！　君は運がいいじゃないか。だって——」
「自分だけの氷のかたまりを持ってるからね。ええ、ありがとう」
「禁じられたものなら、よりいっそう楽しいってことかな？」リースは眉を上げてみせた。
二重の意味が込められているのは、はっきりしている。「一ダースのバラほどじゃないけれどね」
「さらに」とリース。「男が一ダースのバラで言いたいのは、何か。ただ君のことを思っている、ということだ」
〈イズィ〉に来て間もないころ、ダイナはショップのハッチの開口部にカーテンを付けた。カーテンと言ってもただの毛布だが、ショップの中で居眠りをしたいときの目隠しになってくれたし、邪魔をされたくないとき、少なくともノックをしてほしいというメッセージになった。彼女は今、昇降口に移動してそのカーテンを引いた。リースのほうを振り向くと、こちらを熱く見つめ、その気であることがわかった。

「宇宙酔いはどう？　もうだいぶ、えーと、元気みたいね」

「絶好調さ。あらゆる体液がコントロールできてる」

「じゃあ、あたしが試してあげる」

NASAが「功罪相半ばする結果」と呼び、ロスコスモスが「許容範囲の死亡率」と表現した大量の飛行によってロシア人の侵略が始まったのは、それから一週間後だった。

遠方から見ると、〈イズィ〉はほとんどが太陽電池パネルでできている。最小限の重さで最大の表面積を得ようという目的においては、ある意味、鳥の身体にとっての翼のようなものだ。

重量や強さ、頭脳の役目のほとんどは、〝翼〟に比べればちっぽけな〝身体〟の部分――翼のあいだの中心部にある、缶のような形のモジュールの集まり――にある。どの方向からながめても、それをちゃんと見ることはできない。遠くから認識できるくらいの大きさをもつ唯一の部分は、近年になって追加されたパーツで、一端にアマルテア、もう一端に円環体がある。

太陽電池パネルは、ほかのものと同様、廃熱を宇宙空間に放出できる構造をしており、統合トラス・アセンブリに接続している。トラスというのは、構造工学で言う電波塔や鋼橋のような構造のものだが、支柱が格子状に組み合わさり、最小限の重さで最大限の剛性を生み出す構造物だ。〈イズィ〉のうち、ある部分ではこうした支柱が目に見えるが、多くの部分ではパネルによって覆われ、実際より硬そうに見える。そのパネルのうしろには、不可解なほど複雑なケーブル類や配管設備、バッテリー、センサー、そして太陽電池パネルを展開し回転させるメカニズムが収められている。わずかな例外を除いて、統合トラス・アセンブリは与圧されていない。空気を満たして人間が居住することを想定していないのだ。そこでの作業は超高層ビルの

屋上でやる機械仕事のようなもので、風雨にさらされるが人間はめったに訪れない。配線を直したり、作動不良の部分の修理が必要な場合は船外活動としてそこへ行くが、〈イズィ〉の乗組員のほとんどは、ステーションの〝身体〟を構成するもっと小さな缶のかたまりの中で、ミッションの全期間を過ごすことになる。

　だが、それが変わらなければならないときが来た。〈イズィ〉そのもののスペースを広げるには、限界がある。缶をたくさんつなげられないとか、トーラスを増やせないとかいう問題ではない。単に、それ以上詰め込むのが無理だという話だ。ステーションでは、そのほぼすべてのものに電力を必要とする。そして、電気を使えば必ず廃熱が出る。ステーション内で発生した熱は、冷却システムで集めてラジエーターに送り、赤外線として宇宙空間へ排出しなければ、中の人間は焼けてしまう。宇宙ステーションの中心部に、より多くの人間と機械を詰め込むには、さらなる太陽電池パネルとバッテリー、ラジエーター、そしてそれをつなげる配管設備とケーブル類が必要になるのだ。しかもこれは、人的要因を計算に入れていない。人間に必要な食糧や水、呼吸のできる清浄な空気をどう供給するか、炭酸ガスと汚物をどうリサイクルするかという問題もあるのだ。

　これに対し〈クラウド・アーク〉のための専門家グループ――政府宇宙機関の経験者と商業宇宙開発の起業家たちによる臨時作業部会――は、実現可能性があると思われる唯一の方策を選択し、その戦略は世界中に分散・供給された。〈クラウド・アーク〉の構成要素である宇宙船は〈アークレット〉と呼ばれたが、これを適度に小型のものにして、重量物打ち上げロケットの先端に付けて軌道上へ送る。それぞれの〈アークレット〉は、太陽電池パネルでなく放射性同位体を燃料とする原子力電池から熱を得るので、何十年かのあいだ電力を維持することができる。このタイプの電源

は、ソヴィエト連邦時代のロシアが人里離れた灯台に設置したし、太陽電池の使用できない遠方まで何十年もかけて行く探査機に搭載された。

各〈アークレット〉には、ごく少数の人間しか乗れない。設計の種類により人数は変わるが、五人から一二人のいずれかであり、膨張性構造物の量産がすぐに実現可能であるとわかるかどうかにかかっていた。それが可能なら、皮の分厚い風船とでもいうようなものにより、居住スペースを広げることができるのだ。しかし、長期間内部の気圧に耐えることができ、太陽放射線や極端な温度差、流星塵といったものにもちこたえることができる風船をつくるとなると、簡単なことではない。

あまり言われずにきたことだが、長い目で見れば〈クラウド・アーク〉は、食糧生産の面で自給自足をしなくてはならなくなる。水は当然リサイクルしなくてはならない。そして、人間の吐く二酸化炭素を植物の生育に使い、その植物は人間が呼吸するための酸素をつくり、同時に食糧とならなければならない。いずれもSF小説の中に書かれてきたし、何十年ものあいだ実際に試されてきたことだ。そうした実験はよい結果も悪い結果ももたらしたが、今、この分野についてダイナよりもはるかに深く理解している人たちに注目されている。だがダイナは、ローカロリーのベジタリアン食とか酸素不足の事態などには、自分のほうが慣れていると思った。

孤立した〈アークレット〉は、長くもたないだろう。どんなに内部の生態系がよくても、関係ない。何かしら問題は起こるものだ。病気になることもあろうし、必需品や栄養素が不足することもある。同じ相手と一緒にずっと閉じ込められていれば、それだけで人間はおかしくなるものだ。

〈アークレット〉と〈クラウド・アーク〉システム全体の設計は、どんどん変化していった。たとえば、あ

CamScannerでスキャン

るときまでの設計では〝完全分散型〟だった。つまり、長期的には中央貯蔵所である〈イズィ〉がなくなり、〈アークレット〉間のすべての物資および〝人的資源〟の交換は、〝任意ドッキング〟によって行なわれる。二つの〈アークレット〉が互いに同意したら、向かい合わせでドッキングし、食糧や水、〈ビタミン〉、あるいは人間を交換するのだ。いわば市場主導型の、中央からの指令も制御メカニズムもないかたちとして、計画された。

それが次の日には、〈イズィ〉にある指令センターが全体の調整を行なうという指示が出された。宇宙ステーションはまた、貯蔵可能なすべてのものの中央貯蔵所として機能する。そしてトーラスは――リースが二つ目を建造しようとしていたが――休息とレクリエーションの場所ともなる。〈アークレット〉の住人は、缶詰の中にずっと閉じ込められていることで気が変になるだろうし、微小重力のもとにいれば骨密度が低くなることもあろう。その彼らに重力を与え、息抜きができるようにするのだ。

〈アーキテクト〉たち（ダイナとアイヴィは地上の連中のことをそう呼ぶようになっていた）の考えは、これら二つの極端な説のあいだを行ったり来たりしており、少なくとも二つの派閥が存在することを示していた。中央集権派は、長期にわたるゼロGの危険性を指摘し、人間を回転させるトーラスの必要性を主張した。一方、分権派はその二日後、〈ボロ〉計画と呼ばれる構想をもとに反論した。二つの〈アークレット〉を長いケーブルでつなぎ、共通重心のまわりで回転させれば、トーラスの中で得られるよりも強くて良好な重力を発生させるというものだ。だが、さらにその二日後、中央集権派は動画シミュレーションを公表して、二つの〈ボロ〉が互いに回転するとケーブルがからまることを明らかにした。そこにはスラップスティック・コメディのホラー映画を見ているような、滑稽な恐怖感

CamScannerでスキャン

があった。

こうしたことは、短期的には問題にならなかった。狂乱状態とも言えるような加速されたスケジュールの中で、一台の〈アークレット〉を設計・製造するのでさえ、何週間もかかるのだ。それを宇宙に打ち上げる巨大なロケットの生産ラインを増強させるには、もっと長い期間が必要だった。この間に〈イズィ〉の乗組員たちは、既存の宇宙船が――ほとんどはソユーズ・カプセルなどの寄せ集めが、残っているロケットで打ち上げられる光景を見ることになる。それに乗る者たちは〈パイオニア〉と呼ばれ、〈イズィ〉の統合トラス・アセンブリに新たな部分を加えるのが仕事だ。たくさんの〈アークレット〉を一度にドッキングさせるため、物資を貯蔵するため、そしてそれらすべてを機能させるためのパーツ。〈パイオニア〉たちは多くの時間、宇宙服に身を包み船外活動（EVA）をして過ごすことになるが、その人数は合計で一〇〇人ほどになると思われた。目下彼らの訓練が行なわれ、宇宙服が大急ぎで生産されつつあった。

とはいえ、現在の〈イズィ〉が一〇〇人もの人間を新たに収容することは、不可能だ。宇宙船が到着した際に係留するためのドッキングポートさえ足りない。そこで、数週間後に到着しはじめる〈パイオニア〉たちの受け入れのために、〈アーキテクト〉はまず〈スカウト〉を送り込んだ。〈スカウト〉になるためには、驚異的な身体持久力をそなえ、生死に関わる危険を完全に無視できて、宇宙服を着た状態で生き残るすべを身につけていなくてはならない。その結果、すべてがロシア人ということになった。

宇宙ステーションに、彼らの乗るスペースはない。物理的には入れるスペースが充分あるのだが、そこには生命維持システムがないのだ。二酸化炭素除去装置が、それほど大量の人数に対応していない。トイレも宇宙ステーション全体で三つしかないし、うちひとつ

は二〇年ほど前の代物だった。
　したがって、〈スカウト〉たちはほぼすべての時間を宇宙服姿で過ごすことになり、目下のところ、それが道理にかなっている。毎日疲れ果てるまで働くことが、彼らのミッションであり、一日に一六時間宇宙服の中にいるということは、その一六時間、〈スカウト〉が〈イズィ〉の生命維持システムに直接の負担をかけないということなのだ。
　〈ゼロ〉当時、船外活動用として機能する宇宙服の数は世界中で一ダースほどしかなかった。それ以降、製造数は増加したが、今でも乏しい資源のひとつでしかない。最も一般的なタイプであるロシアのオーラン宇宙服は、単独使用で七時間までしか機能しないが、いずれにせよ普通の人間はそのくらいの時間で疲れ果ててしまうので、問題はなかった。それ以上の時間がたつと、宇宙服内部の酸素や電力を使い切ってしまう。
　そこで〈スカウト〉たちは、ほとんどの時間、救命索を付けて作業をすることになる。彼らの宇宙服は外部の生命維持システムにケーブルとパイプの束でつながれ、空気と動力を供給される一方、余分な熱を取り除いてもらうのだ。
　休憩の許される数時間、〈スカウト〉たちは宇宙服を脱いでくつろぐ場所を必要とする。
　そこで、ロスコスモスで管理をする誰かが、緊急時の乗組員救助装置という古いアイデアを引っ張り出してきて、現実のものにしはじめた。呼び名は〈ラック〉。ロシア語ではタマネギを意味し〝ルーク〟と発音する単語だが、英語読みで〝ラック〟と言われるようになった。
　ロシア的なテクノロジーの伝統にしたがって、〈ラック〉は非常に単純な方法をとる。宇宙飛行士をつかまえ、空気を詰めた大きなプラスチックバッグに入れるだけだ。
　もちろん、普通の素材でできた袋なら、飛行士が窒

息するか、内部の気圧に耐えるほど丈夫でない袋が破裂してしまう。そこで、袋には破裂しないだけの空気を——一気圧の何分の一かの空気を——入れ、その中にもうひとつ別の袋を入れる。その袋は、ひとつ目よりもわずかに高い気圧の空気で膨らませる。それではまだ宇宙飛行士を生かすのには足りないので、二つ目の中に三つ目の袋を入れ、さらに高い気圧で膨らませる。これをロシアのマトリョーシカのように繰り返していき、いちばん内側の袋の気圧が人間の生存に充分なものになったところで、それに宇宙飛行士を入れるのだ。これら半透明のプラスチックの層が、タマネギを連想させるのだった。

この構想には、いくつもの利点がある。安価で単純で、しかも軽量なのだ。そのうえ、空気を抜いて縮ませた〈ラック〉は、たたんで丸めることでバックパック・サイズの容器に保管することができる。

当然ながら、いちばん内側の袋の空気は、呼気に含まれる二酸化炭素で汚染される。だがこれは、宇宙船や潜水艦で通常行なわれているように、水酸化リチウムに通して二酸化炭素を吸収させることで解決できる。わずかな酸素を入れて古い空気と入れ替えることで、中の人間は快適になるだろう。

ただ、中の人間の身体から出た熱が袋の中で上昇し、暑苦しくなるので、何らかの冷却システムは必要となる。

難しいのは、〈ラック〉への出入りをどうするかという問題だった。ロシアではどういうわけか、誰でもが——少なくとも宇宙飛行士プログラムの身体的規格に合う者は誰でも——直径四〇センチの穴をくぐり抜けることができると決めていた。その結果、〈ラック〉にはつばが——外縁部に沿ってボルト穴のある直径四〇センチのグラスファイバー製リングが——付くことになった。プラスチックのすべての層がそれに向かって収束するので、タマネギのイメージがさらに強

くなる。ここがタマネギを切断したときの軸にあたるのだ。この直径四〇センチの穴から空気が勢いよく抜けるのを避けるため、もっと分厚いプラスチックの強力なダイヤフラム（圧力の作用に応じて変位を生じる仕切り膜）を付けて、宇宙飛行士が中に入ったら閉じるようになっている。

というわけで、〈ラック〉の一般的な使用手順は、まず袋を広げてつばの部分を見つけ、頭からかぶる。身をよじって肩や骨盤まで通り抜け、最後に足を中へ入れたら、ダイヤフラムを見つけてロックすれば、中に閉じこもることができるというわけだ。この時点での〈ラック〉はまだ、寝袋のようにして宇宙飛行士を入れた、しわの寄った巨大なプラスチックのかたまりにすぎない。

〈ラック〉は真空の宇宙に出されると、その多数の層に空気を流し込むバルブを開けられるようになる。いったん空気が入ると、それはトレーラーハウスくらいの大きさにまで膨らみ、救助艇につかまえられるまで当てもなく漂っていく。

救助艇の外部ハッチは、〈ラック〉のつばにある穴に合ったボルトパターンのアダプターを備えていなくてはならない。〈ラック〉と救命艇のあいだで気密が保たれた状態の接続が完了すると、ハッチが開けられ、ダイヤフラムのロックもはずされて、宇宙飛行士は孤立状態（ブリング・イン・フロム・コールド）から救い出される。あるいは、宇宙の過剰な熱エネルギーを取り除く困難から、つまり熱（フロム・ヒート）から救い出される。

オーラン宇宙服は上部胴体（ハード・アッパー・トルソ）（HUT）を中心につくられている。HUTは、着る者の胴体およびそれと腕や脚、ヘルメットとの接合部を包み込む外殻だ。背中の部分はドアのようになっていて、ふちに沿って付いたガスケット（気体が漏れないよう、継ぎ目に用いる固定用シール材）が気密性を保っている。服を着るには、そのドアを開け、両脚の部分に足をねじ込み、手を腕の部分にそって手袋までぐいっと突っ込んだあと、ヘルメットに頭を入れる。

CamScannerでスキャン

その後、背中のドアが閉まると、そこからはこの服がひとつの独立したシステムとなるのだ。

　ロスコスモスは、〝ヴェスティビュール〟と呼ぶモジュールをたくさん建設していた。既存のパーツをつぎはぎして二週間程度でつくったもので、〈ラック〉とオーラン宇宙服のあいだをつなぐ、間に合わせの装置だ。

　ヴェスティビュールは、あおむけになった人が入れるくらいの大きさしかない。片方のはしの出っ張った部分（フランジ）が、〈ラック〉の直径四〇センチのリングに結合できるようになっている。宇宙飛行士は足を先にして〈ラック〉からヴェスティビュールへずるずる移動し、スペースに多少の余裕ができると、もう片方のはしに接続したオーラン宇宙服のドアを開けたまま、服の両脚部に向けて足を突っ込む。ただし、その前にダイヤフラムを手動で閉じて、ラチェット・レンチでボルトを締める必要がある。オーラン宇宙服を身につけると、ヴェスティビュールに組み込まれたメカニズムを起動し、宇宙服の背中のドアを閉じることができる。ヴェスティビュールに残っていたわずかな空気が宇宙空間に漏れていき、宇宙飛行士は自由に動けるようになる。一日の仕事が終わったら、今の手順と逆のことをするわけだ。郊外に住む通勤者が、車をガレージに入れて乱平面造りの住宅（段差のある階層構造の家）で眠るように、宇宙飛行士はヴェスティビュールのはしに宇宙服を接続して、〈ラック〉が許すかぎりのスペースに浮かびながら、数時間の憩いを楽しむのだ。

　しかし、これにはいくつかの問題点があった。

・〈ラック〉とヴェスティビュール、それに宇宙服は、いわゆる閉鎖系（クローズド・システム）を形成している。そのシステムの外に出るには、うまく宇宙服を身につけて、ドアを閉め、エアロックに向かって宇宙遊泳

をしなければならない。もし何かまずいことが起きて、宇宙服に入ってドアを閉めることができなくなると、救出は不可能、あるいははなはだしく困難となる。おそらく流星塵のせいと思われる、〈ラック〉に穴があいた事故で、〈スカウト〉プログラムの二日目に死者が出たことがあった。それ以降、〈ラック〉／ヴェスティビュール・システムは、アマルテアの陰に集められるようになった。小惑星が飛んでくる岩をすべて防げるわけではないが、かなりのものを阻止することができるのだ。

・このクローズド・システムに出入りする実際の方法はないので、〈スカウト〉はあらかじめ宇宙服を着てヴェスティビュールと〈ラック〉につながった状態で、バイコヌール宇宙基地から打ち上げられなければならない。いずれにせよ、この装置を通常の宇宙カプセルに搭載することができないという事実により、これは必須事項となる。〈スカウト〉たちは、人間の輸送用でない、生命維持装置のない貨物輸送船に、一度に六人が詰め込まれて打ち上げられるのだ。彼らは打ち上げ直前からISS到着まで宇宙服の酸素と動力だけで生き延びることになるが、飛行は七時間以上かかるので、途中で補給が必要となる。この点に関するシステムの不備により、最初の乗組員六人のうち二人、二回目の乗組員のうちひとりが、死亡した。

・こうした新たなミッション・パラメーターにより、宇宙服の能力はかなり無理を強いられるし、当然ながら〈ラック〉自身には生命維持装置などないので、すべてはこの新案装置とザヴォート・モジュールをつなぐ救命索にかかっている。〝ザヴォート〟はロシア語で工場を意味するが、これまた、既存のパーツを二週間でつぎはぎしてつくった装置である。ザヴォートが動力と水と消耗品を供給

してくれるかぎり、空気から二酸化炭素を除去し、排泄物を集め、身体からの熱を排出し、宇宙飛行士の生命を維持することができる。熱は真空にさらされている表面の氷で取り除かれ、宇宙空間に昇華される。このザヴォートの問題により、初期に打ち上げられた三回のうち四人が死亡した。うち二人はソフトウェアのバグによるもので、その後、地上からの送信によりパッチをあてることで解決した。もうひとりはホースの欠陥によるもの。残りのひとりは原因が説明されていないが、死亡時のようすは〈イズィ〉の乗組員によって目撃されていた。船窓とビデオ映像を通じて見たかぎり、異常高熱によるもののようだったという。冷却システムが故障して飛行士は意識を失い、熱中症になったらしい。それ以来、〈ラック〉に備えたずさんな冷却システムの使用をやめ、ジッパー付きの袋に氷を詰めて毎日供給するようになった。

以上のことには、〈スカウト〉たちが実際に作業をしているときの不運な出来事は、含まれていない。たとえばA+0・35、救命索の破損で〈スカウト〉のひとりが危うく命を落としかけた。勇敢にも彼は、ザヴォートから自分を切り離し、いちばん近いエアロックに向かった。ステーション内部に迎え入れられたとき、酸素の量は残り一分以下だったという。

その二日後、別の〈スカウト〉が原因不明のまま姿を消した。流星塵のせいか、あるいは自殺によるのではないかと考えられている。

つまり、最初の乗組員であった六人の〈スカウト〉のうち、二人が到着時には死んでおり、ひとりが翌日の〈ラック〉の不備で死んだ。二回目の乗組員のうち、ひとりが到着時に死んでいた。そして、三回目の乗組員は六人全員が〈イズィ〉で生存している。生き残った一四人のうち、さらに四人がザヴォートの不備によ

CamScannerでスキャン

って死亡し、ひとりが行方不明となり、ひとりが装備の問題で〈スカウト〉から"リタイア"せざるをえなくなり、しかたなく〈イズィ〉の中にいるという状況なのである。

ステーションの組織図のトップにいるアイヴィは、ほかの誰もがどうすべきかを知らない、あるいは扱いたがらない問題に対して下される、おかしな決定や尋常でない決定のすべてについて責任を負っていた。中でも、死亡した者をどう扱うかということに関する決定が、彼女にとっての問題になっていた。

もちろん、手順はある。NASAはあらゆることに関して手順を決めているのだから。彼らはずいぶん前から、宇宙飛行士がミッションのあいだに心臓発作など何らかの不運により死ぬかもしれないと予測していた。人が生活し仕事をする宇宙ステーションの中に、腐敗の進む九〇キロの肉のかたまりを置くわけにはいかないので、宇宙空間でフリーズドライ状態にしたあと、次の地球行きソユーズ宇宙船に乗せてしまうという、大まかな方針は、あったのだった。ソユーズは真ん中のセクション、つまり帰還モジュールだけが地球に戻る。その上に乗っている回転楕円体の軌道モジュールは、再突入の前に切り離され、地球の大気によってしだいに燃えていく。そこで、慣例的な手順では、この軌道モジュールにゴミを詰めて一緒に燃やすことになっていた。

もちろん、死体はゴミではないが、大気圏再突入の際に燃やしてしまうのは、処理するのに都合のいい方法と考えられた――ヴァイキングの葬儀の宇宙版といったところだ。

打ち上げと再突入という通常の往復サイクルは、当然ながら停止されている。地球から上がってくることはあっても、下りることはないのだ。したがって、軌道モジュールはそのまま、居住区または倉庫として使われることになる。そして、大気圏で燃やすはずだっ

た〝ゴミ〟は選り分けられ、再利用される。糞便も、水栽培農場の肥料となるのだ。

アイヴィは、こうした新たなポリシーに対処するため、独断的な決定を下した。死者は、トラス・モジュールにドッキングした空（から）の軌道モジュールに移動する。これは宇宙空間に向けて開いた状態にしてあるので、見えない場所、気にならない場所で、死体をフリーズドライ状態にすることができる。死体でいっぱいになったら、何らかの儀式を行なってから、軌道からはずす。すると、みんなが黙ったまま見守る中を、白い光の筋を描きながら大気圏に落ちていくというわけだ。

だが、まだいっぱいにまではならなかった。

八人の〈スカウト〉が生き残っていた段階で、次の重量物打ち上げロケットの準備ができ、新たに六人が打ち上げられた。彼らは三時間ごとのフェーズを繰り返して、一五時間、時には一八時間連続で働いた。ひとつのフェーズでは、二時間の実働のあとに一時間、もとの場所（インスィチュー）で、つまり宇宙服（イン・スーツ）のまま休憩する。ラテン語のSITUとスーツのSUITがアナグラムになっているのだ。

ロボット・ワークショップで働くダイナが、彼らの働く様子を直接見ることはなかった。彼女の窓は〈スカウト〉たちが全時間を過ごすトラスとは反対方向に向いているからだ。その気になればビデオ映像で見ることもできるが、ほかにすることがたくさんあった。

流星塵による〈ラック〉の事故のあと、ダイナはロボット集団に〈ラック〉を集めさせることで、ささやかな勝利を得た。アマルテアは〈イズィ〉の先端に接続しており、軌道の方向を向いていることから、宇宙ゴミの影響に最も多くさらされている。実際、この小惑星はそれよりもうしろにあるすべてのものを宇宙ゴミとの衝突から守る、破城槌のような役割で接続しているわけだ。その背後には、いくつもの〈ラック〉が身をひそめるに充分なスペースがあり、彼らの長時間

CamScannerでスキャン

生存確率を高めるとともに、宇宙線被曝を減少させることが可能になっていた。

ダイナのクルーである鉄鉱掘削ロボットたちは、彼女の雇い主が凍結水に軸足を移したことで、当面、時代遅れとなってしまった。そこでダイナは、小型のロボットを氷の厚板の上でちょこまかと走らせていないとき、古いロボットたちを使ってアマルテアの後方に穴を掘って、主にアイボルト（頭部が輪状のボルト）による接続ポイントをつくり、〈ラック〉をケーブルでつないだ。これは厳重な係留システムではなかったので、最初は漂流したり風船の紐のようにふらふらとぶつかったりした。しかし二日もたつと安定した状態となり、ダイナの窓からの視界をさえぎるようになった。今の彼女に見えるのは、プラスチックバッグばかり。だが、彼女は気にしなかった。〈スカウト〉たちのこうむるリスクを知ったあとでは、何も気にならなくなっていたのだ。

〈ラック〉の各層はほぼ透明だが、あまりにも多くの層が重なっているため、中はかすんで見える。ダイナの窓から見える隣人も、身体の輪郭はわかるが、顔ははっきりと見えない。ただ、女性であることは確かだった。

〈スカウト〉のシフトは二四時間のあいだで互いに重なっている。窓の外にいる女性は、いつもダイナにとって一日の午前中にあたる時間に、シフトから戻ってくる。ダイナが見ていると、彼女はアマルテアの地表を、係留ポイントを使ってケーブルと救命索を避けながら、苦労して一歩ずつはいのぼっていく。言葉であらわせないほど疲れ果てているに違いない。ダイナはかつて、宇宙服を着て二時間仕事をしたことがあるが、その日は丸一日へとへとになってしまった。彼女が必要なようだったら、〈グラブ〉か〈サイワイ〉を手伝いに提供してやろう。きっと、こちらを振り向いてヘルメット越しに見つめ、目をぱちくりさせることだろ

う。それがお礼の意味だ。そして彼女は、ヴェスティビュールの開いた出入り口にたどり着き、中に入る。すると（ダイナからは見えないが）自動のメカニズムが作動し、宇宙服をソケットにロックし、気圧を均一にして、ドアを開け、頭を、腕を、そして胴体を出せるようにする。彼女はプラスチックの結束バンドにつながって浮かぶラチェット・レンチを見つけ、頭の〝上〟へ手を伸ばすと、〈ラック〉のダイヤフラムをフランジに締めつけている二四個のボルトをはずし、あたりを漂わないように注意しながらそれぞれの穴にふたたび取りつけると、ようやく直径四〇センチの出入り口に身体を通して、多少は余裕のある〈ラック〉の環境に入るのだ。この途中で彼女は、各人がシフトで出ているあいだにヴェスティビュールに届けられた〈メール〉を受け取る。これには食料と飲み物のほか、アメニティ・グッズとでも言うべきものが入っている。シンプルな温度調節の役に立つ氷が入った袋、排泄物処理用の袋がいくつか、それに、彼女の場合は生理用タンポン。

　遠回しのマナーと急ごしらえのやり方ですべての物事が処理されている今、ダイナが彼女と直接交流する方法はないし、彼女の名前を知る方法すらない。ばかげたことに思えるが、かつて9・11同時テロの際に消防士と警察官の会話を不可能にしたのと同じ現象が、起きていたのだった。〈スカウト〉たちは別の無線で別の周波数を使っているため、ダイナが交信することはできないのだ。

　NASAのウェブサイトで人物データをチェックして、消去法を使った結果、隣人はテクラ・アレクセイエヴナ・イリューシナという女性であることが特定できた。テストパイロットだ。前回のオリンピックに出場して、七種競技で銅メダルをとっている。旧ソヴィエト時代だったら、その輝かしいキャリアで政治宣伝のアイドルになっていたことだろう。だが、保守的な

傾向の強い現代ロシアのカルチャーは、男性支配の職業である軍隊と宇宙開発の世界に女性が割り込む余地を、ほとんど残さなかった。その結果、彼女の職業経験のほとんどが、国外にある民間の航空宇宙会社でのものとなった。数年前にロシアへ戻った彼女は、現在二人しかいない現役女性宇宙飛行士の、ひとりである。その背景にある政治を、ダイナは皮肉な目でながめていた。ロスコスモスがNASAや欧州宇宙機関と良好な関係を保つためには、宇宙に行ける能力のある女性を少なくともひとりか二人、確保しなくてはならないのだ。

テクラは三一歳。宇宙飛行士としての公式写真で、彼女には似合わない、こわばった時代遅れのダイアナ妃的髪型をしていたときもあった。先のオリンピック開催中には、クリックベイト・サイト（ユーザーの目を惹きつけ、クリックさせるためのタイトルのあるウェブサイト）で最もホットな女性アスリート五〇人に選ばれたが、ランキングのうしろのほうに埋もれてしまった。頬骨が高く、緑の瞳でブロンドの髪、その他スラブ系の超人的な女性を思わせるあらゆる要素をそなえた彼女を、ダイナは魅力的だと思った。だが、そのテクラがなぜ五〇人中の四八位だったのかは、理解できた。冷ややかな印象を与える強そうなあごのせいで、サイトのつくり手がカメラアングルの選り好みをして、フォトショップで変更を加えたのだろう。この手のサイトを見る男たちは、はっきりとはわからない理由でテクラに反感を抱くのだろう。居並ぶ写真の中にピンと張った彼女の三角筋を見て、おじけづくのだ。ダイナはコメントのスレッドを読まないようにした。なんと書いてあるかはとっくに予想できたからだ。

テクラはおそらく、ここへ送り込まれたからには、死を覚悟しているのだろう。

毎回シフトを終えたあと、彼女はフランジを通り抜けてミルク色の風船のような〈ラック〉の中に浮かぶと、終日ぴったりと肌についていた水冷式冷却ベスト

を脱ぎ捨てる。伸縮性のある青いメッシュの素材の層に、プラスチックのチューブが編み込まれたものだ。ポンプに接続されて冷水がチューブを循環することで、初めて機能する。一六時間ずっと身につけているのがいやになるらしく、テクラはまず最初にこれを脱ぐのだった。それから、下着をひざまで下ろし、作業中にずっと装着していた尿道用の膀胱留置バルーン・カテーテルを収縮させてはずす。〈メール〉の中に入っているウェットタイプのペーパータオルで身体を拭き、廃棄物袋に捨てる。地球を発つ前に頭をスポーツ刈りにしたらしく、髪の毛にわずらわされることがなかった。それからようやく、非常食のパックを開けて食事を始める。そのあとに便意をもよおすこともよくあるが、プラスチックバッグとウェット・ペーパータオルを使って、いささか不作法に行なうしかない。それらはすべて廃棄物袋に入れるが、それはヴェスティビュールに置いておくと次のシフトのあいだに収集されるようになっている。そして、〈ラック〉に付いている唯一の照明であるLEDストリップライトを消すのだが、アイマスクをして眠りにつく前に、タブレットPCをしばらく見つめていることもあった。

〈イズィ〉は九三分で地球を一周する。そのたびに完全な昼の部分と夜の部分を通過するので、テクラが眠っているあいだの半分の時間、ダイナは羊水に浮かぶ胎児のように裸で〈ラック〉の中にいる彼女を、窓からながめることができた。

そんな調子でほぼ一週間テクラを見つづけたころ、ダイナはこれがかなり気を散らされることであると気づいた。彼女はアイヴィを、次にリースを自分のワークショップに連れて来て、眠っているテクラを窓からのぞかせた。彼らはテクラのことを話題にし、ネットで集めた彼女の画像をメールしあった。

「あそこにいるのは、あんたかあたしだったかもしれないね」ダイナがアイヴィに言った。

CamScannerでスキャン

「まさに私たちよ」とアイヴィ。「程度の問題にすぎない」

「あたしたちも最後はあんなふうになると思う?」

アイヴィはちょっと考えてから、首を振った。「だって、あの生活のしかたはずっと維持できるもんじゃないし」

「自殺行為の任務だって思う?」

「強制収容所だと思う。あなたの窓の外にある、小さな強制収容所」

「彼女、何か困ってることがあるかな」

「私たちはみんな、何らかの問題を抱えてるのよ」

「そうね、忘れてた(アイ・フォーゴット)」

「彼女はラッキーなほうよ。そうでしょ?」テクラは少なくとも地球を離れることができたからだ。

「あんまりラッキーには見えないけどな。あんなに寂しそうな人は見たことがない。あのタブレットで誰かと話ができるのかな。それともサーフィンしてるだけ?」

「気になるならスペンサーに聞けるわよ。彼ならすべてのパケットのログを記録してるはずだし」

アイヴィの言葉が冗談にすぎないことはわかっていたが、ダイナはあえて答えた。「いや、彼女だってプライバシーは尊重されるべきだわ」

一方、リースの反応は、性的に興奮することだった。あからさまには示さなかったが、彼がテクラを見てからダイナとセックスするまで、多く見積もっても三〇分ほどしかかからなかった。彼がその気になるのには、まったく手間がかからなかったし、ダイナにしても同じことだった。自分がすぐその気になれるのだということを、ダイナはつねに感じている。

それは彼の匂い――少なくともリースの具合が悪くないときの、匂いのせいだった。だが時と場所が違ったら、匂いだけでは充分でなかったろう。まずはデートか何かから始めるが、その時点での人間関係や相い

れないライフスタイル、性的関係に関するポリシーの相違をなんとかするというめんどうな作業が必要になるのだ。ところが、ここではごく自然に物事が運んだのだった。しかもすばらしいものだった。

地上のインターネットから聞こえてくる情報によって察するに、このことは万人に共通らしかった。人類は滅びようとしているのかもしれないが、その前の二年間でセックスを楽しもうという、狂乱状態にあるのだ。

ただ、実際に二人で一緒に寝るというのは別問題だった。リースは特にそのあたりを気にしていないようだったが、設備的には難しい。宇宙飛行士は通常、意識のないときにどこかへ浮かんでいかないよう、寝袋の中で眠る。それはひとり用にデザインされた寝袋であり、NASAは二人用の寝袋を製造するところまで手が回らなかった。だから二人が行為のあと眠くなったら、何かくるむものを見つけて一緒にうろうろすることはできるが、せいぜい数分しかもたない。彼は自分の職務に戻り、彼女のほうは居眠りがしたければワークショップに備え付けた寝袋にもぐりこみ、時おり窓からテクラの姿を見て罪悪感をおぼえながら、眠るというわけだ。

ある日、テクラがシフトに出たあと、ダイナは地球から持ってきたチョコバーをひとつ取りだし、包み紙に自分のメールアドレスを書いて〈グラブ〉に持たせると、エアロックから送りだした。〈グラブ〉に指示を与え、アマルテアの地表を移動してテクラのヴェスティビュールがつながれている係留ポイントまで行かせた。ケーブルに沿ってのぼらせると（そのためのアルゴリズムがあるから簡単だ）、〈グラブ〉はヴェスティビュールに這いのぼって入り、そこに落ち着くと、自由なほうのかぎ爪を使ってチョコバーを掲げた。

シフトから戻ったテクラが包み紙を破いてチョコバーを食べたのを見て、ダイナは満足した。テクラは片

CamScannerでスキャン

手を上げてプラスチック越しに振ってみせたが、その表情まではわからなかった。

〈グラブ〉はまだヴェスティビュールの中にいて、テクラが次に出かけるときまで出てくることはできない。テクラの浮かぶ姿をながめたあと、ダイナはコンピューターに向かい、〈グラブ〉からのビデオ映像を映し出す。画面にはっきりと浮かび出たテクラの顔を見て、思わず引き込まれた。

ひどい顔には見えない。ダイナは強制収容所の生き残りのたぐいを想像していたが、充分な食事をとっているような顔つきだった。

もちろん、テクラのほうからダイナを見ることはできない。音声の接続もない。真空では音が伝わらないから、宇宙で働くロボットはマイクやスピーカーのたぐいを備えていないのだ。

テクラは、ただ無表情で〈グラブ〉を見つめている。自分を見ることができるのかと思っているのだろう。

ダイナはデータグローブに手を突っ込むと、〈グラブ〉の自由なほうのかぎ爪に接続して、振ってみた。それを見たテクラの緑の瞳がさっと下に動いたが、まだ無表情だ。

ダイナはちょっといらついた。〈グラブ〉の機械仕掛けの動きが、かわいくないというの？　手を振られたら楽しくない？

テクラはチョコバーの包み紙を掲げた。そこにはダイナのメールアドレスが見えるが、テクラのアドレスは書かれていない。

どういう意味だろう？　メールアドレスをもっていないということ？　彼女のタブレットじゃ受け取れないの？

それとも、交信はしたくないと言っているの？

〈グラブ〉はハイパワーのLEDヘッドライトを付けていて、ダイナがキーボードのキーを打てばスイッチが入るようになっている。彼女はライトをつけて、テ

クラの顔のほてりを、その目のレンズに宿る輝きを見ようとした。
ロシア人もアメリカ人と同じモールス信号を使うのだろうか？
テクラは知っているはずだ。パイロットだったのだから。
ダイナはヘッドライトでドットとダッシュをつくり、MORSE（モールス）と打ってみた。
テクラがうなずき、その口が「ダー（イエス）」というかたちになるのを、ダイナは見逃さなかった。
ダイナは信号を送った。

何か必要なものはある？

テクラの唇のはしにかすかな笑みが浮かんだ。温かな笑いというわけではなく、むしろとまどった微笑だ。
彼女はチョコバーの残りを持ちあげ、指さした。
ダイナが返信する。

あした

テクラはうなずくと、向きを変えた。ブロンドのスポーツ刈りがLEDライトにきらめき、彼女はオニオンの真ん中に漂っていった。

「五パーセント」というのが、翌日の〈バナナ〉における会議でアイヴィが最初に口にした言葉だった。
席はいっぱいだ。〈イズィ〉のオリジナルメンバーである一二人と、A＋0・17にソユーズで到着した五人、それに宇宙服の事故を生き延びた〈スカウト〉のイゴール。彼とマルコとジブラーンが準備をして、即席の送風機によりこのセクションに空気が通るようにしたため、二酸化炭素が充満するのを避けることができた。これを知ったダイナが、会議を長引かせないた

めにいつも密閉した部屋でやればいいとジョークを言ったが、おそらくリースを除く誰もが、面白いとも思わなかった。それはともかく、換気の音がいつもよりもかなり大きかったので、アイヴィも声を高め、彼女なりの〝ビッグ・ボスの声〟を出さざるをえなかった。

「今日は第三七日です」アイヴィは続けた。「一年の一〇パーセント。もし〈ゼロ〉から〈ハード・レイン〉までが二年間だというのが本当なら、地球から何らかの援助を期待できる期間の五パーセントをすでに使ったことになります。この施設を無期限に持続可能な組織および生態系へ変換するのに、五パーセントの時間が必要でした」

アイヴィは大型スクリーンに背を向けて立っていたので、ビデオリンクの向こうの会議室にいる〈アーキテクト〉たちの反応はわからなかった。向こう側で今日の会議に出ているのは、三人。まだNASAの長官をしているスコット・〝スパーキー〟・スポールディングと、大統領の科学顧問ピート・スターリング博士、それに最近まで新設の民間宇宙開発企業でプロジェクト・マネージャーをしていた、スウェーデン人女性のウルリカ・エク。彼女は今回の出来事で職を変え、現在は〈クラウド・アーク〉のために業務を行なう複数の宇宙機関と民間企業の調整役をしている。一見したところ、彼女が〈アーキテクト〉のチーフだと思われる。

「一見したところ」というのは、重要なポイントだった。ダイナが地上とコンタクトをとると、向こうで何が起きているのかをいかに知らないか、いつも思い知らされるからだ。あるレベルで見れば、彼女は人類でいちばんラッキーな部類のひとりと言える。この先も生きていられるからだ。その一方、彼女とその仲間たちは、地球の情報をほんのわずかしかえられず、まぜこぜの手がかりをつなぎ合わせて理解するしかない。

ダイナは地上に関する自分の記録をアイヴィのもの

と比べてみたが、アイヴィ自身、何が起きているのかよくわからないし、自分が耳にすることはしょっちゅう矛盾していると言った。

冷戦時代の"クレムリン学"のようなものなのだ。ソヴィエト連邦の全盛期、その内部で起こっていることを西側諸国が探る手がかりは、メイデイのパレードでレーニン廟に並ぶ高官の並び順や、誰が誰と握手をしたかということしかなかった。今ダイナは、画面に映る三人の顔から、同じことをしているのだ。スパーキーは役に立たない。あまりにも長い時間を宇宙で過ごした彼は、実戦を経験した兵士の虚ろな目と同様、一千光年の彼方を見つめるような目つきをしている。物事の政治的な面を気に留めない人物としても有名だった。

その意味で彼と正反対のタイプが、ピート・スターリングだ。ピートの仕事は、科学に関する説明を大統領にすることにある。この三七日間、それをいやというほどしてきたはずだ。彼は大学で大規模な科学プログラムを運営してきた人物で、ミネソタ州立大学からジョージア州立工科大学、コロンビア大学、そしてハーヴァード大学という階段をわずか一〇年で上がってきた。なぜ彼がこの会議にいるのか？　寄与できることなどたいしてないはずだ。大統領（JBF）の目と耳としてここにいるに違いない。

しかし、なぜJBFが気にするのだろう？　ここでは何も決定されない。単なる手続きとして、状況報告がされるだけだ。

アイヴィの話が終わると、ピートが口をへの字に曲げて、ウルリカ・エクを見た。彼女は四〇代後半とおぼしき落ち着いた女性で、リースによるときわめて有能な人物らしい。ハイビジョンのビデオ画像を見ているダイナには、ピートの顔がこちらを向くのに気づいた彼女の目がほんの少しゆがんだように見えたが、はっきりとはわからなかった。

ウルリカは明らかにピートを嫌っている。だが、プロジェクト・マネージャーとして高く評価される理由はあった。「アイヴィ」ウルリカが口を開く。「確認したいだけなんだけれど、〝この施設〟というのは、かなり柔軟性のある表現ね。必要にかられて使っているということかしら」
アイヴィはスクリーンに向き直った。「〝施設〟というのは適切な言葉ではないかもしれません。ここにはなんの施設もないのですから」
ピート・スターリングが割り込んだ。「ウルリカが言おうとしているのは、〈クラウド・アーク〉は流動的なコンセプトであり、タイムラインの残り九五パーセントでわれわれが適応を継続していくあいだに、認識を超えたパラダイムシフトがあるかもしれない、ということだと思う」
アイヴィは眉間にしわを寄せた。何かが、何か政治的なもめごとが地上で起きているに違いない。ピートのような人間にとって重要なことが。
「こいつは効率的な時間の使い方じゃないな」フォードルが言った。「私は〈パイオニア〉たちを受け入れるトラスを拡張する仕事の最中なんだが」フォードルの英語は流ちょうなのだが、いらつくと冠詞を落とす癖があった。「外に八人、中に五人、合計一三という、縁起でもない数の服（スーツ）がいるんでね」
すでに共通認識になっていたのだが、〝スーツ〟という単語は、「まだ使える宇宙服を着て船外活動をする資格のある人」という意味の代喩である。
「〈パイオニア〉たちは二週間以内に到着するということで、間違いないな？　だったらもっとたくさんの〈スカウト〉が大至急必要だ」
六カ月前〈イズィ〉に来たとき、フォードルはロスコスモスの長官になる前の最後のミッションだと思っていた。彼が今の自分の任務を真剣にとらえていないということではなく、つねに先を見るタイプだからだ。

自分の引退までをスムーズに過ごしたいという、将来の官僚の目つきから、アイヴィはそれに気づいていた。当然ながら、そのすべては〈ゼロ〉により変わってしまった。その後の〝ロシア人の侵略〟により、事情はさらに変わった。新たな階級や肩書きがフョードルに授けられることはなかった。彼には必要ないのだ。すべてのロシア人宇宙飛行士が、暗黙のうちに、なんの疑問ももたずに彼を受け入れ、リーダーとして認めた。彼の態度も、それにつれて変化していった。彼はきちょうめんにアイヴィの権威を尊重したが、宇宙服に関するあらゆることについては、彼が主導権を握っていた。そうした権威が彼を肉体的にも大きく堂々として見せ、しわの寄った顔はよりタフに感じられ、声は断固としたものに聞こえた。

　スパーキーが口を開いた。「フョードル、燃料ポンプはもう安定した。センサーの問題だったんだ。だから打ち上げはスケジュールどおり……」彼は腕時計を見て暗算をした。「あと一四時間で行なわれる。その六時間後には〝スーツ〟が到着する」

「それにザヴォートもヴェスティビュールも——私が指摘した問題がある」

「すでに二四時間態勢で対応する援助エンジニアのチームがいるはずだが」

「私が今いちばん心配しているのは、ドアの開閉メカニズムだ」

　会議の残りの時間は、〈パイオニア〉たちのことに終始した。二週間後から到着しはじめて、さしあたりは〈ラック〉より融通のきく、固定された居住区に住むことになる。それには、倉庫に見られるような巨大な渦巻き形換気ダクトと原理的にほとんど違わない与圧チューブが設置され、トラスの接合部から枝分かれして延びていく。そうしたことに関係のないダイナの目は、ノートパソコンの上を漂っていた。自分には、

CamScannerでスキャン

ほかに何かできることがあるはずだ。アイヴィが引き合いに出した五パーセントのことを考えると、長ったらしい会議でぼんやりもの思いにふけっていることはできない。

このところの彼女の仕事は、ほとんどが氷を求めてロボットたちを這い回らせることだった。さらに最近は、氷を求めてトンネルを掘ることだ。だが、鉱物採掘用ロボットの改良をやめるつもりはなかった。たとえ一日に一五分間であっても、作業を止めてしまうよりはましだ。もし止めたら、プロジェクト全体が消え去ってしまう心配があった。

そう考えて、ダイナは画面の左下隅にウィンドウをひとつ開き、アマルテアからの映像を流していた。作業をしているロボットたちの視線によるビデオだ。メールをするときもスケジュール用のスプレッドシートやガントチャートを見るときも、この映像は彼女の視野の隅にあった。

そのうち、何かおかしいことがあると気づいた。二、三分後、彼女はもう一度それに気づき、ほかの仕事を止めた。隅っこのウィンドウを拡大して、映像を送っているロボットをコントロールできるようにした。カメラを回転させ、気になるもののほうへ向けてみる。

それは〈ラック〉の中に浮かぶテクラだった。明るい青色に見えるので、冷却ベストが機能しているとわかる。これは通常のことだ。シフトに出る準備として、まず装着するのだから。次のステップは、身をよじらせて足から先に〈ラック〉のフランジを抜け、ヴェスティビュールに入ることだ。だが、彼女はそうしていない。ヴェスティビュールと〈ラック〉のあいだを行きつ戻りつしているのだ。フランジを頭から先に抜けようとして（これは異常なことだ）、一分ほどもがき、また〈ラック〉に戻ってしまい、しばらくタブレットを親指で操作している。

今日の彼女は、遅刻している。ほかの日はいつも、

宇宙服に身を包み時間どおりにトラスへ行くのに。

ノートパソコンをながめているのは、ダイナだけではなかった。フォードルも――いつもはメールを含めた最近の気晴らしに興味を示さないのに――自分のマシンの画面を見ていて、同様に気を紛らせているマキシムと時おり視線を交わしていた。マキシムはずっと、ないはずの髭を引っぱるようなしぐさをしている。

何かがおかしかった。

フォードルはなんと言っていたっけ？『私が今いちばん心配しているのは、ドアの開閉メカニズムだ』だった。

彼は漠然と言っていたわけではない。特定のケースを示していたのだ。テクラのことを。

テクラは〈ラック〉から這い出てヴェスティビュールを通り、宇宙服を着ることができるが、背後のドアを閉めることができない。そのメカニズムが機能しなければならない。もし機能しなければ、宇宙服を密閉することができない。密閉できなければ、彼女はＯＶＬ（オーラン宇宙服とヴェスティビュールと〈ラック〉のセットを彼らはこう呼んでいた）の内部に閉じ込められてしまうのだ。

厳密な意味の緊急事態ではないが、まずい状況ではあった。〈メール〉を受け取るためにはヴェスティビュールから宇宙服を分離して開けておき、留守中に届けてもらう必要がある。〈メール〉には食糧と水と氷、それに二酸化炭素吸着装置の缶が入っているのだ。〈メール〉なしでテクラがどのくらい生きていられるのか、それはダイナにはわからなかったが、一日以上は無理なのではないかと思った。先に熱でやられるだろう。

テクラを〈イズィ〉の中へ入れる手だてを、考えなくてはならない。ＯＶＬは応急装備なのだから、通常の宇宙船のようにドッキングポートを備えていない。ハッチもなく、エアロックと接続する方法がないのだ。

会議はその後三〇分続いたが、ダイナはその間ずっとフォードルの顔を観察していて、あることに気づきはじめた。彼はテクラを犠牲にする準備ができているのだ。その事実に対して心を固めているという意味での〝準備〟が。

テクラがメールを使っていないことの理由が、今ダイナにはわかった。〈スカウト〉になることは、生き残れないかもしれないということを意味する。自分が犠牲になりそうだと知ったとして、〈スカウト〉のメルアドリストに助けを求めたりお別れを言ったりするメールを送っても、しかたがない。テクラはフォードルと――彼だけと交信ができるのであり、それには理由があるのだ。レニングラードやスターリングラード、そしてモスクワの擁護者たちが理解し、完全に受け入れている理由が。だが現代的精神にとっては、いささかそぐわないものだと言える。

訂正。〝月がひとつだった時代〟に存在した現代的精神、ということだ。

今現在の事情から言えば、完全に調和したものと言える。

とはいえ、ダイナの心の一部は、フォードルに訴えてドラマチックかつヒロイックな救出劇を演じてほしいと思っていた。それを実現する手だてはあるはずだ。彼らはみんな映画の『アポロ13』を見ていて、いつでもそのセリフを引用できる。

しかし、答えはわかっていた。二週間のうちに〈パイオニア〉たちが、大挙してやってくる。準備が完全にできていなければ、彼らはみな到着時に死ぬことになるだろう。余分なことに時間を使っている暇はない。テクラの代わりになる〈スカウト〉がこれから来るのだから。

今回だけは、会議が長引いてよかったとダイナは思った。スパーキーの話が議題からそれ、ピートがそれを利用して専門用語で長々とまくしたてるのも、よか

ったと。その間に頭の中で少しずつアイデアがかたちを成してきたからだ。アイヴィとリース、それにおそらくマルコの協力で実行できるだろう。マージー・コフランにも——いちばん医者に近い人物なので——支援してほしかった。だが、フォードルやほかのスーツ組の助けなどはいらない。

フォードルは人差し指で何やら入力をしている。ダイナはその顔をじっと見つめ、タイピングが終わるまで目を離さなかった。相手はそれに気づいたらしく、顔を上げてダイナの目をまっすぐに見たが、ポーカーフェイスはくずさなかった。

ダイナも相手を見返した。

何かを意識して、フォードルの表情が変わった。ダイナが問題に気づいたということを意識したのだろう。フォードルは誰よりも〈イズィ〉のレイアウトに詳しい。ダイナがどこで過ごしているかを知っており、彼女なら窓の外を見れば事情を察するだろうということも、知っている。そうしたことを彼が頭の中で結びつけているのが、ダイナにはわかった。

彼は、ダイナが何か感情的なアピールをすると思っているだろう。だから、ここは冷静に対処するのが肝心だ。泣いたりすれば失望されるし、完全に興味をなくされてしまう。

「フォードル」ダイナはやっと口を開いた。「あたしにまかせて」

彼は目をぱちくりさせた。それから、ためらいがちに小さくうなずいた。

「何をまかせるって？」ピート・スターリングがビデオリンクの向こうから聞いた。「何か聞き逃したことがあるかな」

「いえ」とダイナ。「われわれのコアな能力を活用するために、継続して適応しようとしているだけです」

『五〇人のホットなオリンピック選手』というウェブ

CamScannerでスキャン

サイトの資料によれば、アイヴィの体型はテクラとほぼ同じはずだった。テクラのほうがたくましいが、アイヴィのほうが二、三センチ身長が高い。そこで、まず最初にしたのは、ダイナがロボット用に使っている小さなエアロックにアイヴィを押し込めることだった。頭とひざを抱えて丸くなると、なんとか入り込めた。ダイナはその写真を撮ると、メールに添えて細かな指示を書き込んだ。

若いころCIAの仕事を受託して他国政府のメール・システムにハッキングしたことのあるスペンサー・グラインドスタッフが、フォードルから来たメールになりすますエンベロープ（送信元と送信先の情報）を使って、テクラのタブレットにメールを送った。

ダイナが注目する中、テクラはそのメールを読んだ。タブレットから顔を上げてダイナの窓のほうを見たあと、目を転じてエアロックを見つめた。彼女がそれまで何時間も動いていなかったので、気を失っているのではないかとダイナは心配していたが、大丈夫だった。できるだけ動かないことで、酸素を節約するとともに熱発生をおさえていたのだろう。

ダイナは、高性能のLEDライトをエアロックの内側ハッチに結束バンドで付けてから、閉めた。それからバルブを開いて空気を宇宙空間に放出し、〝真空で満たす〟と、レバーを――機械的なリンク機構を――作動させて外側ハッチを開けた。LEDの白っぽい光が、数メートル先にあるテクラの〈ラック〉に反射しているのが見える。光に反応して、テクラの頭がこちらを向いた。

次には、いくつかのロボットを同時にそれぞれ動かし、〈ラック〉の袋をエアロックに接触するまで移動させなければならない。膨らませた風船を針の付いたペンチでつかもうとするような、かなりいらいらさせられるプロセスだ。ダイナは〈サイワイ〉、つまりヨコバイガラガラヘビ（サイドワインダー）型ロボットで、これをやろうとし

ていた。〈サイワイ〉は今一二台稼働しているが、互いの頭としっぽをつないで二倍の長さになることができる。それを繰り返せば、高度に機器化された触手ができあがる。まず一台の〈サイワイ〉のしっぽをアマルテアに埋め込み、固定した二台の〈グラブ〉につなげることで支えを増強する。そして別の〈サイワイ〉を最初の〈サイワイ〉の上につたわせて頭につなぎ、宇宙空間に突き出させる。三台目の〈サイワイ〉がその二台の上をよじのぼり、自分を接続する。それを何度も繰り返していくと、小惑星の地表から突き出た植物の茎のようなものができる。そして、テクラが閉じ込められた袋にそって曲げることができるはずだ。

ここまでは順調に見えた。だが、ロボットの鎖が延びていくと、その動きにまずいことが起きてきた。〈サイワイ〉は、キャタピラーのようなものでできている。フレキシブルに動く継ぎ手によって、同じ体節がたくさんつながっているのだ。この継ぎ手部分はモーターで動き、モーターはダイナの書くコードに埋め込まれた命令に従う。すべてが予測可能の動きをするようになっているのだ。問題は、それぞれの継ぎ手が動きに柔軟性をもっているのだが、ダイナにしてみればそれはエラーなのだった。鎖が長くなるにつれて、このエラーが積み重なっていき、三台の〈サイワイ〉をつないだところで、コントロールが難しいのはもちろん、鎖の先端の位置がどうなるかもわからなくなっていた。しかも、膨らんでつるつるした〈ラック〉に沿って鎖を曲げようとして力を加えると、事態はもっと悪くなった。

リースは二、三時間前に姿をあらわして、このプロジェクトを見守っていた。ずっと黙っていてから、いきなりおかしな質問を口にしたが、この問題をずっと考えていたことはわかった。

「モーターを全部切って、全部を脱力させたらどうだろう？」

「あなた、トーラスをつくりに来たんじゃないの？」ダイナは詰問するように言うと、振り向いてなんとか最高の表情をつくろうとした。

「まずはこの問題をかたづけなくちゃね」リースの声は穏やかだ。

ダイナはもっと言おうかと思ったが、黙っていた。リースはまたネックレスをいじっている。彼にはアクセサリーのチェーンを首にかける習慣があった――凝ったデザインでも大きなものでもない、単にステンレススチールの鎖がつながったようなもので、USBメモリなど重要だが小さなものが漂い去っていかないようにするために使っているのだ。だが今は、着けていたものをすべてはずし、チェーンだけにして、首のまわりで回していた。それは無重力の中で大きな楕円のかたちをつくり、波状にうねって、彼の首にも襟にも触れず、首のまわりを自由に回転している。ダイナは、前にも彼がそうするのを見たことがあった。特に、会議に飽きたときなどだ。リースはそれにストローで息を吹きかけたり、指の爪ではじいたりして、回転の速度を上げ、あるいはさまざまなかたちに変える方法を会得していた。普通考えるような、完全な円にはならない。回転する鎖はおよそどんなかたちにも変化し、次に干渉するまで同じかたちを保っているのだ。振り向いたとき彼がまた同じことをしているのに気づいたダイナは、目をむいて『お願いだから、もっと役立つことに頭を使ってちょうだい』というたぐいのことを言おうとしたが、リースの顔に何か意図するようなものがうかがえたので、言葉をのみ込んだ。

チェーンは競技場のトラックのような細長い楕円を描き、一回転するたびにリースの首に触れそうになった。だが彼が直線の部分をはじくと、広がって円形に近くなり、首から離れて空中を回転した。「ご先祖さまの叡智とチャネリングしているのさ。別に言う必要もないことだけど」

CamScannerでスキャン

「無重力世界に先祖がいるの？」
「残念ながら、そうじゃない。ぼくのひいひいひいひいおじいさんの兄弟であるジョン・エイトケンは変わり者の気象学者で、趣味はさらに変わっていた。運動するチェーンの力学を研究することだったんだ。彼にとって不幸だったのは、スコットランドのフォルカークにある客間で研究しなくちゃならないことだった。つまり、重力のあるところでね。彼はこいつの動きに近づけるために――リースは回転するチェーンに向かってうなずいた――とんでもなく巧妙なマシンをつくらなければならなかった」
「じゃあ、彼はすごく賢い人だったわけね」
「そういえば、王立協会のフェローで、ケルヴィン卿の友人だった。なんの話をしてたんだっけ？」
「一分前、あなたは〈サイワイ〉トレインのすべてのモーターを切ってみたらっていう、すごい助言をくれた。もしやってみたら全部がぐったりして、単なる長い鎖になっちゃうところよ」
「ああ」リースはゆっくり言うと、チェーンの進路に人差し指を突き出した。チェーンは彼の指関節にとらえられ、止まったかと思うと、その手を包むようにからみついた。
「それが自信のもとかしら」
「まあ待ってくれ。実は、ジョンおじさんはある種の発見をしていたんだ。その後別の人物、ベルリンのクハルスキーという男が、この問題の研究を続けた」リースはチェーンをほどいて、留め金を探していた。見つけてそれをはずし、チェーンをまっすぐに伸ばすと、腕の長さほどになった。「不幸なことに、ベルリンにも重力があった。そこで彼は、テーブルの上でこういうことをしなければならなかった。そこをつかんでくれるかい？」リースに言われてダイナがチェーンの中ほどを指でつまむと、それは空中に固定された。リースはその両端を自分のほうに引きよせ、細長いUの字

CamScannerでスキャン

にした。「じゃあ、ゆっくり放してくれるかな」
ダイナはチェーンから手を放し、うしろにどいた。リースのしぐさに、これから演技をするマジシャンのような雰囲気があったからだ。彼は片方のはしを親指と人差し指でつかんだまま、もう一方を放した。「ぼくが引っぱったら、どうなると思う?」とリース。「予測がつくかな?」
「全部があなたのほうに向かって戻るんじゃないかな」
「やってみよう。そこで指を上に向けていてくれ」
ダイナが〝上〟に指を立てると、リースは空いているほうの手で彼女の腕をやさしくつかみ、立てた指がチェーンのUの字の頂点から一〇センチほどのところへくるようにした。「さあ、どうなりますか」と言うと、リースはチェーンを自分に向かって——ダイナから遠ざかる方向へ——引いた。ダイナの予想とは反対に曲がった部分はリースから離れてダイナに向かい、つかんでいなかった先端が鞭のようにはねて彼女の指にぶつかってからみつき、指をすばやく何周かしてとり囲んだ。「つかまえた」と言ってリースがダイナを引き寄せた。
「牛追い鞭みたいね」と言いながらダイナは指からチェーンをほどいたが、すでに近づきすぎていた。リースとの触れあいが心地よい。
「彼とまったく同じ理論によるものだ。クハルスキーはこれを——Uの字形の動く曲線を——〝グニックシュテレ〟と呼んでいた。『よじれた場所』というような意味だ」
「チェーンに鞭に、今度はよじれか。あなたのヴィクトリア時代のご先祖には、いろいろ教えられるわね」
「たぶん、単なる気晴らしだと思ってたんだろうけど……」
「いや、言いたいことはわかるわ。触手を動かすとか筋肉を締めるみたいに〈サイワイ〉をコントロールし

ようとするんじゃなくて、リラックスさせてこのチェーンみたいに〈ラック〉をからみとれってことでしょ」

この一九世紀物理学へのちょっとした脱線は結局、『一歩下がって五歩進む』たぐいの結果を生んだ。このあと数分をかけてさらに四台の〈サイワイ〉を既存のチェーンに連結させると、Uの字形をつくるためのものを除いてすべてのモーターを停止した。片方のはしに張力を与えると、〝グニックシュテレ〟はリースの実験と同じように動き、チェーンの一端が〈ラック〉の周囲全体にのろのろと巻き付いた。チェーンの先端にある引っかけ鉤が遠くの握り部分をつかめるまで何度かやる必要があったが、ほどなくして〈ラック〉はチェーンにしっかりと抱きかかえられた。〈グラブ〉たちがケーブルのはしを持って走り、アマルテアの、つまりは〈イズィ〉の別の部分にしっかりつなぎとめる。こうして〈ラック〉は、ダイナがかつて固定されるのをいやがったハードウェア網に取り込まれ、ダイナのショップを含むモジュールに寄り添うことができた。近づいてくると、エアロックのLEDが〈ラック〉に投げかける白っぽい光が反射してできたほのかな光輪は細く鋭くなったが、巨大な風船がエアロック室の突出部を覆いかくすにつれ、消えていった。エアロックは今、風船を突く指のようにして、入れ子になった〈ラック〉の層に突き刺さっている。

鞭打ち作戦が成功したあとも、一日近くかかった。リースはいつものように昼寝をするため、去っていった。モンゴル人宇宙飛行士のボーがダイナのショップに滑り込んでくると、二時間ほど黙って見ていたが、自分なりに役立つことを見つけようとした。彼女はダイナの動きを見ただけでデータグローブの使い方やマウスとキーボードのインターフェースを習得し、その日の終わりには熟練者のように〈グラブ〉を動かし〈サイワイ〉を操っていた。

マージー・コフランは、最終段階の準備を見にやってきた。彼女はオーストラリア人生理学者で、宇宙飛行が人の健康に与える影響について研究するため、数カ月前に〈イズィ〉へやってきたのだった。ダイナはずっと、無愛想な女性だという印象を抱いていたが、おそらくそれは、単にオーストラリア的なものなのだろう。マージーは医療用品の箱と手術用機器を持ってきていた。ＩＳＳにいる宇宙飛行士は全員、医療研修を受けている。ダイナとアイヴィはヒューストンの救急処置室で働き、患者の外傷を縫ったり骨折した骨を固定したりしたことがあった。だが、マージーのほうが適材だ。

「あなた本来の仕事じゃないんだけど……」とダイナ。

「今は私たちみんな、本来の仕事をしてるわけじゃないわ」とマージーは反論した。

「たぶんテクラを除いてね」別の声がした。アイヴィだ。彼女はダイナのショップにはいなかった。ダイナとボーとマージーで満員だったからだ。彼女がいたのは、ショップに隣接したＳＣＲＵＭだった。

「アイヴィ、新しい〝記録(レコード)〟を達成する準備はいい？」とダイナ。

「準備オーケーよ」とアイヴィ。

これは宇宙ステーションにいる女性の数をあらわすＱ符号だ。古い記録は、二〇一〇年に達成された四だった。数カ月前にマージーとリーナが来てアイヴィとダイナに合流したとき、同じ数になった。三週間前にボーがソユーズで打ち上げられたとき、その数字が破られた。テクラがエアロックを通ることができれば、六になる。

あるいはうまくいかず、もとの数字のままになるか。

「ボー、協力ありがとう。もうアイヴィのほうへ行ったほうがいいわ」

「グッドラック」ボーはエアロックの内側ハッチを蹴って離れると、ダイナのショップを抜け、ＳＣＲＵＭ

に向かうハッチを通り抜けた。そこではアイヴィが浮かびながら待っている。
「うしろは全部密閉した？」ダイナは何にも増して神経をとがらせていた。アイヴィが間違えることはありえない。月の崩壊以後、彼らはとにかく事故に対する予防措置を増強させ、ひとつのモジュールが爆発で穴が開いても全体の破壊につながらないよう、可能なかぎりさまざまなモジュールを気密性のハッチで区切っていた。
アイヴィからは返事がない。
「とんでもないことになったらハッチをどうするか、わかってるわよね？」ダイナは続けた。
「あなた、緊張すると口数が多くなるのよね」とアイヴィ。
「同感」とマージーが言った。「やるの、やらないの？　彼女、窒息しちゃうわよ」
「わかった。彼女に合図を送る」とダイナ。
ダイナはまだ小さいころ、南アフリカの奥地にある掘っ立て小屋の天井に『宇宙飛行士スヌーピー』のポスターを貼ったり、西オーストラリアの衛星テレビで宇宙ステーションのライブ映像を見たりしながら、宇宙での仕事を夢見たものだった。そうした宇宙開発計画では、マイクを通した簡潔な音声か、キーボード入力によるメッセージで合図をしていた。ところが実際に彼女がしたのは、ショップの小さな窓まで漂っていき、ミルク色をした一四層の透明プラスチックを通してテクラをのぞき込み、手を伸ばせばほとんど触れそうな相手に向かって親指を上げて見せることだった。
テクラはうなずくと、頭のそばにある小さな物体を持ちあげた。それはベルトクリップの付いた折りたたみナイフで、ストラップをしっかり腕に巻き付けている。親指をちょっと使えばギザギザの歯がパチンと飛び出すのだ。
ダイナもうなずいた。

CamScannerでスキャン

テクラはうなずき返し、視界から消えた。エアロックに向かったのだ。

「来るわよ」とダイナ。

彼女はマージーが力のある女性だと評価していた。ずんぐりした体格だが、たるんでいるわけではなく、パワフルな感じだった。

ダイナは、エアロックの外側ハッチを閉めるための機械的リンク機構の取っ手に手をかけた。「行くぞ」

心配なのはプラスチックだった。破片がきっと、ハッチのデリケートな部分に入りこむだろう。

段取りは単純なものだ。彼女はもう一〇〇回は頭の中で繰り返していた。テクラが〈ラック〉のいちばん内側の層に一〇センチほどの切れ目を入れる。それと次の層、つまり低圧の層とのあいだのスペースに空気が吹きだす。その切れ目にテクラが頭と肩を入れれば、シャンパンボトルのコルクのような状態になって、圧力により外へ押しだされるだろう。彼女がその外側の層を切り、さらに外側の層を切るというように続けていけば、圧力の波が彼女のうしろに生じ、スイカの種のように押しだしてくれる。エアロックの内側ハッチに付けた白いLEDを目指していけば、エアロックに向かって放出されるというわけだ。

この時点で彼女は裸であり、真空へ向かって爆発的に流れる空気の中で守るものは何もない。そして、その時点で——

シューッという音が聞こえ、ズシンという衝撃が感じられた。

「やった！　たぶんそうだわ」とマージー。

「出たわよ」ボーの声がした。彼女は隣のコンパートメントにいて、タブレットでいちばん近くにいる〈グラブ〉からの映像を見ている。「エアロックに入った」

ダイナが取っ手をぐいっと回して外側ハッチを閉じた。ニュートン力学の第三法則によって彼女の身体は

反対方向へ動き、力が相殺されそうになったが、マージーの両腕が彼女を力強く抱きしめて押し戻した。マージー自身も足を踏ん張っている。

　ボーが喘ぐように言う。「彼女の足をつぶしてる！」

「まずいな」

「足が出てるのよ！」

「ダイナ」アイヴィの声がした。「ハッチをちょっと開けて。彼女の足がはさまってる」

　ダイナは腕の力を弱めた。テクラが意識を失っていたら？　あの写真で説明したような手足を丸めた体勢になれなかったとしたらどうなる？

　ボーとアイヴィの声の調子が変わったので、そうでないことがわかった。「入った！」アイヴィが声を上げた。

「ハッチを閉めて！　閉めて！」ボーも叫ぶ。

　ダイナは取っ手を目いっぱい回してロックの位置でパチンと止めた。完全に大丈夫とは思えなかったが、少なくとも閉まったはずだ。

　一方、マージーがエアロックを空気で満たすバルブを作動させた。これは徐々に行なうプロセスのはずだったが、いきなりやったため、突然の空気の動きで気圧が変わり、横隔膜が引っ張られるとともに耳がポンと鳴った。

「血が出てる」ボーが沈んだ声で言った。「ハッチから外へ漏れてるわ」

「くそ！」とダイナ。これは二つのまずいことを意味する。外側ハッチがきちんと閉じていないことと、テクラが傷ついていることだ。

「開けよう」とマージーが言った。

　結局、四人総がかりとなった。ダイナ、マージー、ボー、そしてアイヴィが残らずその空間にぎゅう詰めになり、ハッチの縁に下から指をかけて、両脚や背中を全力で壁につっぱりながら、密閉された扉をこじ開

CamScannerでスキャン

けた。コンパートメントから空気がシューッと抜けていったかと思うと、真空パックの密閉瓶のふたがはずれるように、ハッチがポンと開いた。

テクラがそこにいた。指示どおり胎児の姿勢をとった、赤いかたまりとなっている。

一瞬、全員が声もなくそれを見つめた。

彼女の頭が動いた。顔を上げてみんなのほうを向くと、片目があるはずの場所一面が赤くべとべとしたしみになっている。

ダイナが幼女のように泣き叫ばずにいられたのは、胃の中のものが喉にこみあげてきたからというだけのことだった。ボーは長々と息を吸い込むと、何やらぶつぶつとつぶやいた。

テクラの両手が開き、エアロック室の縁をつかんだ。ナイフをつるしていたストラップがまだ右手首に巻きついている。その先にナイフの柄が続く。ダイナは刃が折れてはずれたのだろうと思ってから、はっと気づいた。全体がテクラの前腕にすっぽりと埋まっているのだ。

テクラは身体を数センチ起こしたが、そこで止まってしまった。頭はもうショップの部屋に突き出している。

片目が開いた。血まみれの顔に、血走った目。それでもちゃんとはたらいている。

ダイナの耳もふたたび機能しはじめたらしく、シューッという大きな音がしているのに気がついた。ISSの空気が、大きな穴からではなく、エアロックの外側の細い隙間から漏れているのだ。空気がテクラの身体の向こうへ流れ出て、彼女の背後に真空が生まれている。部屋の中へ向かうためにはその真空と闘わなくてはならない。

ダイナは客をきちんと迎えるのを忘れた主人のようにまごついていたが、はっと手を伸ばしてテクラの片手をつかんだ。マージーがもう一方の手を取る。ビチ

ャビチャという押しつぶすような音をたてて、二人は血でぬめぬめするテクラをエアロック室からステーション内へ引きずり込んだ。
ダイナはエアロックの内側ハッチを閉めかけにしておいた。昔の宇宙飛行士がでかい掃除機（ビッグ・フーバー）と呼んだ宇宙の真空が、あとを引き受けて、ものすごい勢いでピシャリと閉じてくれる。
このモジュールの空気は、かなり失われてしまったようだ。酸素欠乏になるほどではないが、〈イズィ〉全体、さらにははるばるヒューストンまで警報が響きわたるのに充分なほどだった。
マージーが大量に出血しているテクラの腕を手当てする一方、青手袋を着用したアイヴィとポーはウェット・ペーパータオルで顔の血をぬぐった。事態がしだいにはっきりしてきた。基本的なアイデアはうまくいったのだ。テクラのナイフさばきは確かなもので、ねらいを過たず、思っていた以上の効力を発揮したらしい。〈ラック〉のいちばん外側の層から吐き出されたあと、激しい勢いでエアロック室に飛び込んだ彼女は、金属部分に顔からぶち当たって目の上下に大きな裂傷を負い、そこからおびただしく出血した。同時にナイフの刃が何かにひっかかって逆向きとなり、前腕にめり込んだ。片足が開いたハッチの外にぶらさがった状態で、一瞬気が遠くなったところへ、ダイナがハッチを閉めようとした。だが、彼女が計画どおり引っぱり上げてくれた。その間しばらく真空にさらされていたのは出血する傷口によくなかったが、空気がどっと流れ込んで気圧が均一化されたので、取り返しのつかないダメージは受けずにすんだのだった。
ダイナが心配したとおり、プラスチックのかけらが外側ハッチのガスケットにはさまって、シューシュー音をたてて空気が漏れる原因になっていた。だが、あとでもう一度ハッチを開けると、かけらの大半は宇宙空間に漂い出ていったし、テクラのフリーズドライ血

液でガスケットに貼り付いたままの破片は、プログラミングした〈ナッツ〉の群れを使ってきれいにはがせる。彼女はその仕事の仕上げを、練習としてボーに任せることにした。ボーはロボット学習曲線をめざましいスピードでよじのぼっている。

ダイナは〈イズィ〉をずっと漂ってハブ・モジュールまで行くと、そこからトーラスへ出た。そこではマージーが、ヒューストンにいる外傷外科医たちにアドバイスしてもらいながら、テクラの腕を治療している。わずかに重力のあるトーラスでやれば、血のしずくがあたりに漂ったりしないので、ずっと楽なのだ。やはり生命科学者であるリーナ・フェレイラとジュン・ウエダの二人が、助手を務めている。

アイヴィは自分のオフィスで、ヒューストンから猛烈な嵐のように押し寄せる怒号に対応していた。

局部麻酔下での手術だったので、テクラには意識があった。身ぎれいにしてもらい、眼窩(がんか)周辺の裂傷はバタフライ形接着テープと瞬間接着剤(クレージー・グルー)でふさがれた。頭皮を覆っている刈り込んだ銀白まじりのブロンドが、傷を負った側の生え際にそって、凝固した血で黒ずんでいる。白目の部分が赤く濁り、顔じゅう小さな赤斑だらけだ。そうなるだろうとダイナは注意されていた。点状出血といって、真空にさらされたのがもとで皮膚のすぐ下の毛細血管が破れたのだ。ただ、眼窩の中の目の動きや、見るものへの焦点の合わせ方から、ダイナには基本的に彼女の視力が損なわれていないことがわかった。

「必要なかったのに」テクラが彼女に言った。

「そうね」とダイナ。

「私、きっとめんどうなことになる」

「あたしたち、もうそうなってるわよ」ダイナはアイヴィのオフィスのほうへ頭を振ってみせた。「みんながめんどうなことになってる……死んだも同然の連中を相手に」

テクラはほとんど反応を見せなかったが、マージー、リーナ、ジュンの三人はそろって息をのみ、処置の手が一瞬止まった。
「マージー」地上からテキサスなまりの声がした。「こちら、死んだも同然の外科医だがね、また出血しはじめる前に小動脈をしっかり締めておいてほしい」
「これからも生きていくのは私たちよ」とダイナ。「私たち自身の考えに応じて生きていくようにしなくちゃ」

〈パイオニア〉と試掘者（プロスペクター）

『氷人（アイスマン）来たる』（ユージン・オニールの戯曲）」
「うーん」リースはため息をついた。「ぼくらのどっちが先に行くんだろうと思ってたところだよ」リースはダイナから自身を抜き、漂いながら離れると、コンドームをはずして口を結んだ。その手際のよさは、ダイナの胸に暗い嫉妬が渦巻くほどだった。しかし少なくともリースは、ダイナのショップにばらまいてしまうようなことはしない。
「これがあなたの最後の配達（デリバリー）になるのかも」とダイナ。
「つまり、氷のね」
「冷凍庫は持ってる？」
「クールー（ギアナ宇宙センターのある町）からの明日の便で来るわ」

「マティーニ用のシェイカーも一緒に詰めてくれてないかな?」
「ビニール袋でいいじゃない」
「まあ、ぼくのデリバリーが――氷のってことだけど――君のやっていることに貢献できるよう祈るよ」
「確認しましょ」ダイナはすでに毛布にくるまっていたが、爪先で壁を蹴り、ワークステーションのそばまで漂っていった。何度かマウスをクリックし、動画を立ち上げた。最初に映ったのは殺風景な場面だった。暗い空間にある角氷が、明るいが冷たくもあるLEDの光に照らされている。
「アルジュナの本部かい?」リースはまだ裸のままダイナのうしろにやってきて、片腕をダイナの胴に回した。愛情表現だと思いたかった。それもないわけではないだろう。だが、無重力で長く生活してきたダイナには、動画を見るあいだはふらふら漂流したくないものだということがわかっていた。

「そうよ」
あごひげを生やしたストロベリーブロンドの男が、しわの寄った厚紙――ピザの箱のふた――を持ったまま映像にあらわれた。
「ラルス・フードマーカーね――あたしがよく一緒に働いてた人間のひとり」
ラルスはピザ箱のふたをカメラに向けて少し傾けた。ふたの大半は、虹色にきらめく、爪ぐらいの大きさの、シリコンの甲虫のようなものに埋められていた。何百個もある。
「ずいぶんたくさんの〈ナッツ〉だな」
「まあ……重要なポイントは群れ(スウォーム)をつくることだからら」
「なるほど。でも、生産増の方法は見つかったみたいだね」
ラルスがボール紙を斜めに折り、樋のようにして、氷のかたまりの上に傾けた。〈ナッツ〉が雪崩を打っ

て転がり落ち、氷の上で山をつくった。氷から落ちて床に転がったものもたくさんある。ラルスの姿がしばらく映像から消えたと思うと、キャスターつきの椅子を押して戻ってきた。氷のかたまりの向こうに椅子を置き、それからまたいなくなり、今度はオフィスの壁から下ろしたらしき時計を持ってまたあらわれた。それを椅子のシートに置き、背もたれの太い支柱に寄りかからせて、きちんとフレーム内に映るようにすると、立ち去った。

まもなく、ライトがもっと明るくなった。「太陽放射のシミュレーションよ」とダイナ。「〈ナッツ〉は太陽エネルギーを使うから、それを試すには、太陽と同じぐらい明るい光源を使うしかない」

時計の長針がスピードを上げて動きだした。「低速度撮影？」

「そう。見てのとおりよ、時間がかかるの」

床に散らばった〈ナッツ〉は、しばらくあてどなく動きまわっていたが、やがて氷のかたまりを見つけ、その側面をよじのぼりだした。「すごい粘着力よね」とダイナ。

そのあいだに、氷の上の〈ナッツ〉の山はパンケーキの上で柔らかくなるバターのかたまりのように広がり、いくぶん大ざっぱではあるが、ほぼ平らな層を氷のかたまりの上につくりはじめた。いくつかは氷の中に沈んでいくようにも見えた。「解けながら入っていくのか？」

「違うわ。それじゃエネルギーを使いすぎる――それに無重力ではうまくいかない。機械的にトンネルを掘っている感じよ。層ができていくのがわかる？」ダイナは氷のかたまりの上を指さした。白い小山がトンネルの出口の周囲に形成されている。「〈ナッツ〉がトンネルを掘るあいだに、掘り出されて排出されてるのがあれよ」

「無重力でも山はつくれないよ」

「ひとつずつ解決してるの！」ダイナはリースをひじでつついた。「それはほかの人たちが取り組んでる問題よ、見える？」ダイナは表面に沿って進む別の〈ナッツ〉にカーソルを向けた。山から生じた小さな氷の粒が、氷のかたまりのはしに向かって後退していく。
「なんであんなふうに動くんだ？」
「濡れた手を冷凍庫に入れて氷をつかむと、皮膚にくっつくでしょ？　それと同じことよ」ダイナは言った。「落ちないで氷の上を這いまわるのも、同じ方法でやってる」
　時計の長針はさらに速く動き、短針の動きも目に見えてわかるようになってきた。氷のかたまりの表面には穴がぽつぽつとあき、素材が取りのぞかれるにつれ氷が下に沈みはじめた。しかしそれと同時に、かたまりの片側に生じた隆起が、鉄床の突起部分のように一方に伸びた。
「あれは何ができてるんだ？」
「たいしたものじゃないわ。コンセプトが証明されたっていうだけ」
　突起の伸びが止まり、時計の針の動きも通常のスピードに落ち、別のエンジニアが入ってきて、成果の写真を何枚か撮った。そのあとビデオは途切れ、画面が暗くなった。
「面白い！」とリース。
　ダイナはリースが離れていってしまう前に手をつかんだ。「待って。超高速のバージョンもあるわ」
　まもなくその動画が始まった。同じ映像が一〇倍速になっているものだ。ほんの二、三秒で終わった。動きが速すぎて〈ナッツ〉も見えなかった——ぴくぴくする灰色の霧のようなものが、しみのように行き来しただけだった。見る側の視線は氷のかたまりに惹きつけられた。この速度で見せられると、透明な四角いかたまりというよりはアメーバに似ている。片側を沈ませながら、原生動物をなめらかに宇宙空間へ発射して

いるかのようだ。

「人によっては」とリース。「ショーン・プロブストが氷に注目して手を尽くしているには、わけがあると思うだろうな」

「そうね。ただ、あたしにはその理由を教えてくれなかった」

「〈ナッツ〉のはじとはじをつなげる方法はあるのかい?」

「チェーン状にってこと?」

「そう。〈サイワイ〉は重宝だけど、必要以上に複雑でもある」

「あなた、チェーンのことで頭がいっぱいなのね。まあ、方法はあるわ。それと、並べてつないで、シート状にすることもできる」

「ジョンおじさんが墓から呼んでるんだ。自分の趣味を生かして何かつくれってね」

「だったら、あたしに気に入られてたほうがいいわね。それにあたしなら、多少は楽しませてあげられるし」

第五六日

A+0・56現在、回転するトーラスの中心にあるハブ・モジュールは、もう〈イズィ〉の最後尾ではなかった。今はH1と呼ばれるようになった。それより大きなハブ、H2がケープ・カナヴェラルから重量物打ち上げロケットで打ち上げられ、H1と対をなしている。

もともとH2は、大々的な宇宙観光事業の基盤になるものとして計画されていた。リースの当初のミッションはその実施で、そのために彼は二年にわたって計画を立て、訓練を受けていた。もちろん今のH2には新たな目的があるが、機能としては同じようなものだ。巨大な中心モジュールであるH2のまわりには、さらに大規模な新しいトーラスが回転している。この新しいトーラスは当然ながらT2と呼ばれているが、固定

CamScannerでスキャン

の部品や膨張性の部品のキットによって宇宙で組み立てられるもので、一部はH2の内部に詰めて運ばれ、残りはその後の打ち上げで持ってくることになっている。さしあたり、H2の四本の太いスポークは外に伸び、輪のリムを形成するほかの部品のところで切れているが、いずれあとから増築されるはずだった。

　そのころまでに〈スカウト〉は、基本のミッションを達成していた。直径約五〇センチで、およそ一〇メートルごとに幅広の部分がある、木の枝のように張りめぐらされた空洞のパイプの支柱に採用された、統合トラス・アセンブリだ。それなりに健康で、閉所恐怖症でもなく、ポケットに物をたくさん詰め込んだりしていない人間なら、ハムスターがかごの中に取りつけたプラスチックのトンネルを走りまわるように、この五〇センチのチューブをすばやく移動していくことができる。幅広の部分は、反対方向から来た二人の人間がすれ違うための場所だ。接合部や分岐点として、球体のモジュールが使われている。チューブはドッキング用の場所につながっていて、さまざまなタイプの宇宙船がそこでステーションに固定され、安定した密閉状態を確立させる。

　ピート・スターリングの言いまわしを借りれば、ドッキングサイトは〝ほとんど資源がなく〟、〝長いポール〟と〝重要な通路〟がある場所になるということは、最初からわかっていた。ロケットや宇宙船を建設したり、宇宙服を製造したりすることは簡単でないが、少なくとも地上であれば、途方もない資源を投げ込んで生産を増やすことができる。だが、軌道に飛び込んでくる宇宙カプセルの集団は、どこかにドッキングできなければ行き場がなくなってしまう。そのドッキングサイトの建設には、厄介なやり方が必要とされる。つまり現場で、軌道上でやらなければならないのだ。

　ドッキングは簡単なことでないし、特殊な技術も必要だが、徹底して研究され、何度も行なわれてきた。

CamScannerでスキャン

中国の宇宙計画は、ロシアと同じシステムで標準化されているため、中国の宇宙船はロシアと同じようにISSにドッキングすることができる。それについては問題ない。だが、軌道に打ち上げられた有人飛行の宇宙船は、二、三日のうち、つまり空気や食料や水を使い切らないうちに、特定の目的地に到達する必要があるという事実は変わらない。このため〈スカウト〉の仕事は、できるだけ迅速で、コストがかからないやり方でのドッキングサイトを、大幅に増やしていくことだ。ドッキングは近接した場所ではできないため、そのあいだの距離はいわゆるハムスター・チューブがつなぐ。チューブの外側表面には取り付け金具(フラケット)がついており、今も増員されている〈スカウト〉の手によって、配管や配線、構造補強材が近くのトラスにつながれている。

最初のチューブツリーは、A+0・29からA+0・50ぐらいの時期に、テクラと第一陣の〈スカウト〉たちによってつくられたもので、六つのドッキングサイトを備えている。これらはすぐに、いわゆる〈パイオニア〉の第一波打ち上げのときに使われた——ソユーズ宇宙船が三台、神舟が二台、そして米国の宇宙観光カプセルだ。

ボーやリースを乗せた宇宙船の打ち上げ成功に励まされたロシアは、五人から六人ずつを詰め込んだソユーズを送りだすようになった。

中国の宇宙船、神舟は、ソユーズの設計を基礎としているが、もっと大型で、さまざまな点でアップデートされている。本来はソユーズ同様三人乗りの宇宙船だが、これはその三人が生きて地球に戻ることを前提とした場合だ。片道飛行向けに改良された神舟は六人運べる。そして、アメリカの観光カプセルの定員は七人だ。

つまり、〈パイオニア〉の第一波では四〇人近い人間が〈イズイン〉に送り込まれたわけで、これはもとの

人口の倍以上だった。彼らはトイレや二酸化炭素浄化装置、熱排出システムを備えた、自分たちの宇宙カプセルで暮らすよう義務づけられている。だいぶ混み合った環境だが、それでも〈ラック〉からは格段の進歩だ。

　A+0・56、H2モジュールが巨大なファルコン・ヘヴィロケットで運ばれてきたとき、テクラや生き残ったほかの〈スカウト〉たちは、丸一日かけてその中に詰め込まれたものをすべて引っぱりだし、H2を一時的にモジュールの外に固定した。それからH2の中へ移動して、そこを〈スカウト〉の宿舎にし、だいぶおんぼろになってきた〈ラック〉に別れを告げた。潰れたり継ぎ当てされたり折れ曲がったりした〈ラック〉は、緊急事態用に保管された。

〈パイオニア〉の三分の二は、船外活動(EVA)の経験がある、もしくはここ何週間かで急いでその訓練を受けてきた人たちだった。船外活動のための宇宙服は数が足りないが――地上で大急ぎでつくられている最中だ――すでにあるものを共有することはできる。作業のシフトは一五時間から一二時間に短縮され、さらに八時間になり、交代要員が着る宇宙服は日に二度も三度も使われることになった。船外活動者は、T2、つまり第二トーラスの組み立てと、チューブツリーの拡張とに自分の時間を振り分け、次の打ち上げの波が来たときに使うドッキングスペースを準備しようとした。

　船外活動のできない〈パイオニア〉たちは、宇宙ステーションの与圧区画でほかの活動にいそしんだ。ダイナには二人のアシスタントができた。自分でその仕事を希望したらしいボー、そしてラルス・フードマーカー――映像に映っていた男性――だ。ラルスは若いオランダ人で、デルフト工科大学の大学院でロボット工学を専攻しているとき、アルジュナ・エクスペディションズに採用された。ダイナが知るラルスは、まめにメールを書き、つねにダイナの質問にきちんと答え、

短期間でバグ修正パッチを提供することに努める男だった。何らかの連絡ミスのせいでダイナは知らずにいたが、ラルスは第五二日（このところ〝A＋〟の表示がなくなり、ただ数字だけで日数があらわされるようになっている）に到着した、アメリカの観光カプセルの乗客だった。

大柄でストロベリーブロンドのラルスは、突然ダイナの仕事場にあらわれ、彼女にハグしようとした。普通のことではない。控えめに言っても、国際宇宙ステーションがサプライズ訪問の場になったことは、これまでまったくなかった。

ラルスは、チョコレートバーを片手にたくさんつかみ、もう片方の手にカメラを持ち、作業服のポケットからあらゆる物をのぞかせていた。ガラス瓶入りのモルヒネ、抗生剤、紙テープにマイクロチップを埋め込んだリール、使い捨てコンタクトレンズ、コンドーム、インスタントコーヒーのパッケージ、風変わりな潤滑剤のチューブ、シャープペンシルの芯、結束バンドの束。どうやら最近の方針で、宇宙船に乗る人々は一緒に大量の〈ビタミン〉を積み込まれるため、まずほとんど動くこともできそうにない。

ラルスは楽しい男で、彼が〈イズィ〉にやってきた初日は、一年ものあいだ同僚と対面での会話をしてこなかったダイナにとっては、純粋に面白い一日だった。ダイナはラルスにありのままの仕事場を見せてやり、アマルテアの表面にいるロボットを自由に操作させ、〝ベン・グリム化〟により外殻を強化した彼女のロボットを運び込ませて、ラルスがじっくり見られるようにした。ちょうどダイナは、数週間前のリースの発言に触発され、時間を無駄にしがちのロボットにほかのロボットのための装甲板をつくらせようとしていたところだった。順序立てた方法でやれば、小惑星のかけらをダイナの小さな無重力溶解炉に持ち帰り、純粋なスチールのかたまりを生産することも、それを〈グラ

ブンのフレームに密接することもできるかもしれない。だが、それでは複雑になってしまう。アマルテアは最初から完全に安定した物質でできている。構造的に質の高いスチールではないかもしれないが、放射線のシールドとして使える程度には良質だ。だからダイナは、もとの粗野な形は残しながらそれをスライスし、スチールプレートをかぶせて〈グラブ〉を装甲してきた。今の〈グラブ〉はまるで歩く小惑星のようだ。

「アートの世界だな」ラルスは言った。一瞬ダイナは侮辱されたのかと思った。芸術と工学を組み合わせることなどまったく考えないエンジニアは、たくさんいる。だがラルスの表情は楽しそうで、まるで悪意がなく、ほめ言葉なのは明らかだった。

　ラルスの態度に慣れてきたダイナは、ここ数週間考えてきた問題を切りだしてみた。なぜ氷なのか？　巨大な鉄のかたまりならすぐ手に入るのに、アルジュナはなぜ、〈イズィ〉に存在しない原料を実用目的で使おうとしているのか？

「すべて説明されているわけじゃないけど」ラルスは言った。「彗星の核を手に入れようという話が、しばらく出てたのは知ってるよね」

「もちろん」ダイナは言った。「そのことは話し合ったわ。でも、ああいうのは巨大よ。二、三ギガトンもの水で何をしようっていうの？」

　ラルスはまばたきして、わずかに居心地の悪そうな顔をした。

「あんな大きなものを動かすなんて、ものすごく時間がかかるじゃない！　一〇年とか二〇年のプロジェクトよ！　そんなに時間はないわ」

「かつての状況なら、そのとおり」

「かつての状況ってどういうこと？」

「昔は――〈エージェント〉以前は――彗星を動かすというのは大きな鏡を宇宙に持っていくことを意味した。彗星の核に太陽光を集中させ、いくらか水を蒸発

させて、新しい軌道にじわじわと押し込む。そう。長い時間がかかる。ボウリングのボールを羽根で押すようなものだ」

「今は何が変わったっていうの？」とダイナ。「物理学は物理学のままよ」

「そう。そして物理学の中には、原子物理学という分野もある」

「核を使うっていうの？　そんな――冗談でしょう。私、思っても……」

「地上でどれぐらい状況が変化しているか、君は考えてもいないと思う」

「そんなはずない！」

「〈アーキテクト〉たちはこう言いはじめてる。『太陽光電池で動かすのは無理だ。そんなにたくさん、そんなに速く、何千もの〈アークレット〉のための電池はつくれない。大きくて手のかかるものなんだ』って」

「それは私も思ってた」

「核を使うべきだと言われはじめてる」

「RTGを？」

RTG、放射性同位体熱電気転換器は、多くの宇宙探査機に使われている動力ユニットだ。それぞれの中心に放射性の強い同位体のパックがあり、何十年も熱を保っていられる。さまざまな方法で、この熱からエネルギーを抽出することができる。

「あれでは充分に強力とは言えないんだけどね」ラルスは言った。

ラルスは暗号化されたメールで地上から連絡を受けた。五つのグループに分かれた大文字の列は、まるで第二次世界大戦中の暗号機エニグマのメッセージそのままだ。ラルスがブリーフケースがわりに使っている大きなナイロン製財布の中に、紙片の束が入っている。それぞれに異なる任意の大文字が並ぶ、文字盤が印刷されたものだ。三〇分ほどの紙と鉛筆による面倒な作

業ののち、メッセージは解読された。ダイナは自分の目が信じられなかった。当然のことながら、人はつねに暗号化されたメールを送っていて、アルジュナ・エクスペディションズのメールがすべて暗号化されているのも通常の手順にすぎない。だが、どうやらショーン・プロブストにとっては、充分と言えないらしい。ラルスがこの紙片を片手に四苦八苦する姿は、ダイナも見慣れつつあった。ラルスはPythonで簡単なプログラムをつくってこの作業を楽にしてはいたが、それでもメッセージは依然として手で書いていた。

ラルスが来てから二週間ばかりたったある日、メッセージを解読したラルスが驚くべきニュースを伝えてきた。ボスがやってくる。アルジュナ・エクスペディションズの創設者でCEOの、ショーン・プロブストがやってくるというのだ。

「そんなことできるわけないわよ」ダイナは言った。「来ようと思ったって〈イズィ〉に来られるわけじゃない。打ち上げるべき乗り物もいる。宇宙船はどうするの？　ドッキングする場所は？　第一、許可は出てるの!?」

こうした疑問も、修辞的なものにすぎなかった。ショーンはインターネット企業で七〇億ドルの収入を得て、その後小惑星の採鉱に尽力しはじめた。これにともなって民間の宇宙関連企業にも一〇億ドルか二〇億ドル出資している。

「ひとりで来るそうだよ」とラルス。「ドロップ・トップに乗って」

ダイナは一瞬考えてから、すばやくグーグル検索して記憶を呼び起こした。〝コンバーチブル〟とも呼ばれるドロップ・トップは、最近の宇宙観光のクリエイティブなアプローチのひとつだ。観光客は地球を、星を、そして（なくなってしまう前までは）月を自分の目で見たいものだという考えが、基礎になっている。伝統的な宇宙カプセルには、ちっぽけな窓しかついて

CamScannerでスキャン

いない。だったら、透明な球体に頭を入れ、四方がはっきりと見えるようにしたらどうだろう。要するに、宇宙服を着て、宇宙で自由に浮遊すればいいのだ。ドロップ・トップは小型のシンプルなカプセルで、透明な球状のヘルメットつきのカスタムメイド宇宙服を着た四人の宇宙飛行士を乗せることができる。大気圏を上昇しているあいだと再突入のあいだは、小型制御ロケットのついた頑丈な防護殻に守られる。が、地球の周囲を回っているあいだは、コンバーチブル車の屋根のように防護殻をたたんで、完全に宇宙と接することができ、その気になれば宇宙遊泳もできる。

「ドロップ・トップがこの高さの軌道に来られるとは思えないけど?」

「ショーンはひとりで来る。ひとり乗りの特別モデルみたいなやつでね――あまったスペースを推進剤に充てることができるのさ」

「それで? エアロックにやってきて、ドアをノックするってわけ?」

「基本的には、そうだ。ここの連中が何をするって言いたいんだ? 帰れなんて言えると思うかい?」

第六八日

「すべてがナンセンスだな」ショーン・プロブストは、ヘルメットを取るなりそう言った。

ダイナは微笑んだ。ナンセンスと言われてうれしかったのではない。人類と地球の遺伝的遺産を破壊から守るためには、わずかなナンセンスでも悪影響だ。それでもダイナは、ある種の救いを感じた。彼女もひそかに心の底では、何週間にもわたってナンセンスを数え上げてきた。ここにいる人間は、誰もナンセンスなどとは言わないし、その多くはダイナよりも賢くて学識があると思える人たちだ。

ショーン・プロブストについてダイナが知っていることといえば、その名声、ダイナの給与明細に書かれ

ている署名、そして、彼を乗せているプライベート・ジェットがどこのタイムゾーンにいようとも、必ず午前三時にダイナにメールを送ってくるということぐらいだった。宇宙関連のあらゆる知識において、ショーンは誰にも負けない。ショーンが宇宙ステーションにやってきてナンセンスだと言いだせば、事態は面白くなるだろう。

ショーンの魅力的な点のひとつは、自分の個性に問題があると自覚しているところだ。〝なんとしてもやりとげる〟という古典的なスタイルで、コーチを雇い、あまり愚劣な人間に見えないように努力してきた。そのことがショーンの表情にあらわれているのは、ダイナにもわかる。

「君の仕事のことじゃない——君の仕事はすばらしい」ショーンはそう認めた。

「もしそうでなければ、もっと早くそう言うだろうと思っていました」

ショーンはうなずいた。以上。

ショーンが宇宙ステーションにやってきたのは異例のことで、しかもこれは往復旅行だった。ドロップ・トップが使えるドッキング・ステーションはない。ドロップ・トップには舷窓もエアロックもないので、そもそもドッキングできないのだ。だから〈イズィ〉に固定する方法もない。ショーンは、乗ってきた小さな〝コンバーチブル〟を手動制御し、制御エンジン(スラスター)を一度ずつ使って消費済み推進剤を宇宙に吐きだして、一分、五分、あるいは一〇分静止して状況を見た。ショーンはいわゆる宇宙オタクなので、軌道力学が地上の物理法則に従わないことは熟知している。彼には充分な謙虚さと、速度を落とせるだけの充分な酸素があった。最終的には、アマルテアのそばに漂いながら近づいていき、三台の〈サイワイ〉の行列の頭についた〈グラブ〉が、ドロップ・トップのコクピットに腕を伸ばしてはしの部品をつかんだ。そこでショーンはド

CamScannerでスキャン

ロップ・トップを脱出し、宇宙を浮遊してちょっとした視察ツアーを行ない、ときどきダイナに自分がどこにいるかを知らせるメッセージを送ってきた。直接の無線接続ができないため、メッセージはシアトルのサーバー経由で送られた。

ショーンは〝チューブスーツ〟を着ていた。観光客向けの製品で、ロシアや米国の宇宙飛行士が使う政府支給の宇宙服と比べ、劣った点も優れた点もある。宇宙では脚は役に立たないため、脚の部分がない。両腕と、てっぺんに泡みたいな半球がついた、試験管（テストチューブ）のようだ。腕の部分には肩とひじの関節があるが、手はない。宇宙服の中でいちばん厄介なのが手袋の部分だ。チューブスーツの場合、手袋のかわりとして、腕の先に丸みをもたせた部分がある。ここから親指とほかの三本指の形をしたものが突きだしていて、手の内部の気密部品に通してあるスチールケーブルで動かせるようになっている。着用者が自分の手を手袋部分に入れ、金属製の腱をはめた指を動かすと、外側の指も動き、物をつかんだり、単純作業をしたりできる。一八九〇年の発明家の研究室で不器用な職人がつくったような代物ではないし、ましてや一六九〇年につくられたようなものでもない。使ってみた人々は、びっくりするほどきちんと動くと言っている。柔軟さがなく手が疲れる伝統的な宇宙服の手袋よりも、部分的には優れていると言ってもいい。

手袋部分の内側の空間にはだいぶ余裕があるので、かぎ爪のような手を使っているとき以外は、自分の指を内側の手袋から離し、内部のタッチパッドやジョイスティックに載せておき、思いついたことを打ち込んだりもできる。スーツには小さな推進エンジンがついていて、それで〝飛びまわる〟こともできる。ショーンはしばらくそれを使って〈イズィ〉の外をうろつき、ロボットの仕事を観察したり、トラスの改築部分を見たり、その他さまざまに好奇心を満たしていた。

CamScannerでスキャン

ようやくH2最後尾のエアロックにショーンがやってきたので、ダイナが中に入れてやった。そしてそこで、ショーンが意見をまくしたてたというわけだ。

ショーンは、大学院の物理学セミナーかSFコンベンションにいそうな、なんの特徴もない三八歳のオタクの風貌をしている。薄くなった鈍い茶色の髪が汗で頭に張りつき、二、三日分の無精ひげが濃くなっている。公式写真ではコンタクトレンズをしているが、今日は分厚いレンズのメガネをかけている。まず片腕、次にもう一方の腕をスーツから抜き、そしてさっきまで半球形のヘルメットがついていた首の部分から抜けだして、スーツを脱ぎ捨てた。

「長期的な耐久力という観点から見ると、難しいところはありますよね」ダイナはそう認めた。ぶら下がっている餌には飛びつかないようにして。

「そう思う（ヤ・シンク）だろう!?」ショーンは叫んだ。「この〈クラウド・アーク〉のコンセプトについて、基本的な質量均衡の計算さえ誰もやってないのか?」ニュージャージーのアクセントだ。

ダイナは相手の言う意味をつかみきれず、時間稼ぎを試みた。「みんなすごく気が散ってるんです。あたしはいちばんに情報をもらう人間じゃないですし」

「君に情報を伝えたりするものか!」ショーンは大声で言った。「君ならすぐさま、こんなのはナンセンスだと見抜くだろうからな!」

「なんなの?」アイヴィが好奇心をあらわにして二人のほうへと浮遊してきた。「そこにいるのは誰?」

ショーンが自己紹介をする前に、身長一八〇センチ以上でスキンヘッド、顔に傷があるたくましい女が、大砲から発射されたかのようにH2を突っ切ってショーンに向かってきて、彼の注意はそちらにそれた。テクラの肩がショーンの胴にぶつかり、隔壁に叩きつける。テクラはそのまま彼を押さえ込んだ。ショーンが伸ばした腕をつかみ、逃げられないように関節技をか

CamScannerでスキャン

けた。
　テクラが旧ソヴィエトの格闘技サンボと、それに類するジュウジュツの達人だということは、ダイナももう知っていた。軽い好奇心で、サンボの技のユーチューブ動画をいくつか見たこともある。が、無重力状態でもその技が使えるとは、そのときまで思ってもいなかった。
　H2最後部にはさまざまな用途のエアロックやドッキングポートがあるため、ショーンはそこからH2に入った。ただ、ショーンは知らなかったが、H2は生き残ったスカウトの宿舎にもなっている。ショーンが到着したことで、シフトを終えて寝袋で眠っていたテクラが目覚めたのだった。
　ダイナはこの遭遇を、テクラの立場から想像してみた。ショーンの訪問は非公式だ。ダイナ自身も到着日時ははっきり知らなかったし、ドロップ・トップが来るのが小さな窓の外に見えてくるまでは、本当に来るのかさえわからなかった。つまりテクラの視点から見れば、この男は侵入者だ。アイヴィが「そこにいるのは誰？」と叫ぶまでは、ダイナもショーンが無許可でここにいるということを忘れていた。
「ああ、しまった」ダイナは言った。
「タップ！　タップ！」ショーンが叫んでいた。つかまれていないほうの手でテクラの脚を叩き、降参の意志を示している。
「司令官、この男を拘束しますか？」とテクラ。「指示をください」
「危険人物ではないわ」ダイナは言った。
「放してやって、テクラ」アイヴィが言った。
　テクラはしぶしぶ手をゆるめ、ショーンを放した。
　ショーンはふわっとテクラから離れ、困惑した目でテクラを値踏みした。
「ショーン」ダイナが言った。「テクラのことは、もう紹介の必要はないですね。こちらはアイヴィ・シャ

CamScannerでスキャン

ォ、この施設の司令官です。アイヴィ、こちらはショーン・プロブスト」
「こんにちは、ショーン・プロブストさん」アイヴィはそう挨拶してからダイナに向きなおった。「来ることは知ってたの？」
「うわさでは聞いてたけど」ダイナは言った。「はっきりしないうわさだったから、わざわざ話して気を遣わせるのもどうかと思ったのよ。ごめんなさい」
アイヴィにじっと見つめられ、ショーンは居心地悪そうな顔をした。テクラがまだ近くで浮遊しているせいか、ダイナがアイヴィから感じた敵意はますます強く感じられた。
「私のここでの法的な立場は、船長のようなものです」アイヴィが言った。「船に乗ろうとするときのエチケットはご存じですよね、ショーン」
ショーンは状況を吟味していた。
「シャオ司令官。お願いします、あなたの船に乗るための許可をいただけませんでしょうか」
「許可します」アイヴィは言った。「ようこそいらっしゃいました」
「感謝します」
「でも……」
「はい？」
「もし誰かに聞かれたら、ちょっと嘘をついてもらえると助かります。まず許可を要請し、それから船に乗ったと」
「喜んでそう話します」
「のちのち慣習法のようなものができると思います。こうした事態に関する法律が」
「実際、もう着手しているようにも思えますが」
「それならよかった。でも、今は何もないので、私たちも気をつける必要があるんです」
「よくわかりました」
「ところで」とアイヴィ。「先ほど、ナンセンスがど

うとかおっしゃっていませんでした?」

「シャオ司令官」とショーン。「あなたのこれまでの業績と、なさってきたお仕事に対しては、限りない尊敬の念を抱いています」

「でも、とおっしゃりたいのかしら?」と言うとアイヴィはダイナに顔を向けた。「でも、って聞こえた気がするのだけど」

ショーンは口をつぐんだ。

「続けてください」とアイヴィ。結局のところ、話を続けることはショーンの望むところだったし、この件はみんなでかたづけたほうがよさそうだった。

〈バナナ〉にあるホワイトボードで、ショーンは最初の原理から取り組んでいった。ツィオルコフスキーの公式や単純な指数関数から始めて、いくつかの単純な推定値を出し、ショーンが〈クラウド・アーク〉をナンセンスと思った理由の強固な証明を導きだしていった。

いや、少なくともショーン・プロブストがあらわれて、見つけた問題に取り組むまではナンセンスだった、と言うべきかもしれない。問題は、ショーンが個人的にしか対処できないものだった。

ダイナはふと、ショーンはいまだに裕福なのだろうか、と思った。

今どきの金持ちは、もう財産を金で保有したりはしない。ショーンの財産は株だ——多くは自分の会社の株だ。クレイター・レイク声明以降、ダイナも株式市場を追ったりしてはいなかったが、聞いたところでは、株式市場は破綻したどころか、ほとんど存在しないも同然の状態だという。株を価値の蓄えと考えたところで、株保有という概念そのものが意味をもたなくなっている。

それでも、法体系、警察、政府機関などは今も存在し、法の執行も行なわれている。アルジュナ・エクス

ペディションズの過半数株主であるショーンは、会社を支配する権限を今でも法的には維持できている。ほかの宇宙事業家とのつながりを生かして、自分が〈イズィ〉まで飛ぶための手配ぐらいはできているわけで、それもまたある種の財産だ。

　そこで考えが落ちつくと、ダイナはふたたびショーンの話に耳を傾けた。

「分散された群れ(スウォーム)としての〈クラウド・アーク〉。けっこう。それはわかる。私も協力したい。全部の卵をひとつのかごに入れるより、そのほうがずっと安全だ。なぜ安全か？　飛んでくる岩石から〈アークレット〉が逃れやすくなる。ほかに利点は？　ペアで〈ボロ〉をつくり、たがいの周囲を回ることで、疑似重力を生みだすことができる。人々は、より健康に、より快適にすごせる。それにはどうすればいいか？　互いに向かい合って飛んでいき、テザーをつかめばいい。では〈ボロ〉を解除して単体(ソロ)になりたくなったら？　エンジンを使って求心運動を止める場合を除き、単にテザーをはずして互いに反対方向へ飛べばいい。こうした動きのすべてに共通することはなんだと思う？」

　ひんぱんに問いかけてはそれに自分で答えるショーンのスタイルに慣れてしまっていたため、彼が本当に質問を投げかけてくると、全員が不意を衝かれた。

　ダイナとアイヴィのほかに、天文学者のコンラート・バルト、それにラルス・フードマーカー、ズィーク・ピーターセンがその場にいた。ピーターセンがようやく問いに答えた。

「制御エンジン(スラスター)を使うことかな」

　ショーンはうなずいた。「スラスターを使うとどうなる？」

　この点はダイナに有利だった。ショーンが質量均衡について懸念していることを、ダイナは知っていたからだ。「質量を捨てることになります。使用した推進剤というかたちで」

「質量を捨てる」ショーンはうなずいた。「推進剤が尽きれば、〈クラウド・アーク〉は長期的な生き残りを実現できる構造物としての能力を失う。単なる図体のでかい、座りこんだアヒル（無防備でねらわれやすい標的の意味）になってしまうんだ」

　ショーンは全員がこれについて頭をめぐらすのを待ってから、話を続けた。「ここでは、そのほかのほぼすべてのことが、質量均衡への影響を最小限にとどめるようにして行なわれている。尿をリサイクルして飲料水にしたり、大便から肥料をつくったりしている。質量を宇宙に解放し、そのまま取り戻せないようなことになる活動はごくわずかだ。しかし推進剤は例外だ。〈クラウド・アーク〉というアイデアが発表されて以来、私はこのことを声高に訴え、語りつづけてきた。しかし今のところ、権力者からの返答は、曖昧でのらりくらりとしたものしか得られていない」

　アイヴィとダイナは、おたがいの目を見合わせた。ミーティングのあとは一対一のテキーラ・セッションになりそうだ。

　つまり、とダイナは思った。つまりアイヴィも、ずっとこの件について、心の奥底で考えていたわけか。心配していたのだ。地上とテレビ会議をしているあいだも、茶葉をながめて未来を占おうとしていたのだ。

　ピート・スターリングと何か関係がありそうだ、と、ここに来てダイナも気づいた。つまりはJBFとも何らかの関係がある。

　通常は楽観的なチームプレイヤー・タイプのズィークは、軍の下級士官によくあるような無邪気な顔で言った。「それはある意味で明白ですよね。彼らが考えていないはずがないということは」要するに、〝われわれよりも給料をもらっている人間が全部対処することじゃないのか〟という、ズィーク流の物言いだ。

「そのとおり」ショーンはうなずいた。

　コンラートはもぞもぞと椅子の上で体を動かし、あ

ごひげの生えた顔を片手で覆った。ズィークとは違い、問題について明るい解釈を提示できないタイプだ。

「世界が科学者やエンジニアによって動かされているのなら」とショーンは言った。「話は簡単だ。もっと質量を手に入れればいい。備蓄しておいて、使い果たさないようにする」

「だったら水です。彗星の核のことを言ってるんですね」ダイナは言った。

「そう、水だ」とショーン。「ニッケルからロケットの燃料はつくれない。だが、水があれば過酸化水素がつくれる——良質の推進剤だ——あるいは、水素と酸素に分解して大型エンジンを動かすこともできる」

「今おっしゃったことが気になっているんですけど」アイヴィは小声で言ってから、もう少しはっきりした口調になった。「そうはいっても、世界は科学者やエンジニアが動かしているわけではない——それがあなたの言わんとするところですか?」

ショーンは両の手のひらを広げ、大げさに肩をすくめた。「私は社交的な人間じゃない。人からもずっとそう言われている。その件については、社交的な人間が考えるべきかもしれない」

「人々の視点で?」コンラートが言いなおした。

「そうだ。七〇億の人々の視点で。七〇億の人間に、幸福でいてもらい、最後まで従順でいてもらわなければならない。だったらどうすればいい? 怯える子供たちを落ちつかせ、眠ってもらう最善策は何か? 物語を聞かせることだ。キリストの話でもなんでもいい」

ズィークは眉をひそめた。コンラートは目をぐるりと回し、天井を見上げ、何も聞かなかったような顔をした。

ショーンがこねくりまわしているのは、ある種の非道な、ほとんどとんでもない考えだ。つまり、彼らが宇宙でやっていることはすべて、地上にいる七〇億人

への子守歌にしかすぎない。実際には機能しない仕事の、準備を整えているというふり。〈クラウド・アーク〉の人々は、地上に残された人々よりも、わずか二、三週間長く生きるだけだということ。

アイヴィもダイナも、コンラートもズィークも、この点に関して激しい衝撃を受けてもおかしくなかった。だが、誰ひとり――ズィークでさえ――あまり反応しなかった。

「みんな考えたことはあるはずだ」ショーンは言った。「私のように人の気持ちに鈍感な男でも、顔を見ればそれはわかる」

「確かに、考えたことはあるかもしれません」ダイナは認めた。「考えずになんていられないです。でも、ショーン、地上にいるとわからないかもしれませんが、ここの人間たちはこれを成功させようと真剣にやっているんです。これがただの見せかけの代物なら、ほかのものに目を向けないと」

ショーンはダイナをなだめるように両手を広げた。

「地上でもさまざまな意見がある、わかってもらえるかな？　〈クラウド・アーク〉の主要な機能が大衆向けの鎮静剤だと考えている人間、おそらくは地位の高い人間がいるということもだ。車のDVDプレイヤーに入れるメディアと同じだと思ってるんだよ、長いドライブのあいだ子供をおとなしくさせるためのね」

「そういった人々は、私たちが必要とする資源を手に入れるうえで、私たちとなんの関係もありません」アイヴィが言った。

「彼らの戦略はつねにどこかおかしくて、少しピントがずれているんだな。不明瞭でね。じれったいんだ」

どうやら明らかにピート・スターリングの話のようだ。

ショーンは言葉を続けた。「そういう人たちが、ある程度まで発射場や政策をコントロールすると、こちらも問題を抱えることになる。幸い、彼らはすべてを

コントロールできるわけではない」
そこからの話題は、ショーン・プロブストと、彼とゆるいつながりをもち、ロケットのつくり方を知っている億万長者の友人たちのことに移った。
「この〈クラウド・アーク〉について、私や仲間がまだ知らないことがたくさんある。完璧に知るまで黙って待つわけにもいかない。わかっている問題に対処するための長い準備期間を、今すぐ始めるべきだ。そして、われわれにわかっているのは、〈クラウド・アーク〉に水を運ぶ必要があるということだ。物理的にも政治的にも、地上から水を運ぶのは難しい。幸い、私は小惑星採鉱企業をもっている。すでにいくつか、接触しやすい軌道をもつ彗星の核を見つけてある。リストを絞ろう。そして探検隊を準備しよう」
コンラートはこうしたミッションの時間配分についてよく知っていた。「期間は、ショーン?」
「二年だ」ショーンは言った。
「そう」アイヴィが言った。「取りかかったほうがよさそうね。私たちは何をすれば?」
「すべてのロボットが欲しい」ショーンはそう言うと、ダイナのほうに向きなおった。
「ナンセンスの狩猟解禁を宣言したところで……」自分の仕事場でショーン・プロブストと二人きりになると、ダイナはすぐそう切りだした。
ショーンはFBIに降参した逃亡者のように両手を挙げた。「どこから始めたいんだ?」
「いくつか彗星を見つけてあると言いましたよね。これからリストを絞ると。嘘です。なんの計画もなしにここへ来るはずがない」
「グレッグの骸骨(スケルトン)を追っているんだ」
「なんですって?」
「すまない、グリッグ・シェレルップ彗星だよ。誰かの子供(オフスプリング)が〝グレッグの骸骨〟って呼びはじめたら、

その名が定着してしまって」ショーンは子供のことを〝子孫(オフスプリング)〟と呼びたがる。

ダイナも聞いたことはあった。「どのぐらいの大きさなんですか？」

「二キロ半か三キロ」

「大量の〈アークレット〉燃料になりますね」

ショーンはうなずいた。両腕を身体の前で組み、仕事場を見まわした。

「そんなに大きなものを動かすのは大変ですよね」

ショーンはまだ黙っている。

「核でも突っ込んでロケットにするつもりですか？」

ショーンは一瞬眉を上げた。そんなに大きなものを動かす妥当な方法はほかにないので、わざわざ返事をする意味はないとでも思っているらしい。

「本当にラッキーなタイミングだよ」ショーンは言った。

「こんな大混乱のときに、〝デススター〟ぐらいでかい放射性の氷の球を、ここへ飛ばそうっていうんですね――それで？」

「ダイナ、ここだけの話をしたいんだが」

「ええ、待ってましたと言うべきなんでしょうね」

第七三日

ドゥーブは一〇年ほど前、もう少しで宇宙に行くところだった。ヘッジファンドで大もうけした知人が、二五〇〇万ドルを投じ、ソユーズ・カプセルに乗って国際宇宙ステーションに行く一二日間の旅に出ようとしたときのことだ。旅客となる人間は、交換要員、つまり旅客が何らかの病気や災難に見舞われたとき、代わりに行く人間を指定するのが慣習になっていた。打ち上げ直前でも代役がすぐ交替できるよう、どちらもずっと旅客として同じ訓練を受けなければならない。知人のヘッジファンド富豪にとっては、実はそこが重要な点だった。彼は内気な男だったため、世間との接

点になってくれる人間、どんなときも魅力的な顔でいてくれる人間を必要としていた。ドク・デュボアが代役に選ばれたのはそのためだ。二人はウェブサイトとブログを立ち上げ、訓練プログラム全般にわたってドゥーブの進捗状況を追うためのカメラマンを雇い、ときどき写真の背景にヘッジファンド富豪自身が映り込むようにした。ドゥーブは世間の目を惹きつけた。誰も文句は言わなかった。ドゥーブも楽しくてしょうがなかった。訓練は面白かったし、ヘッジファンド富豪はウェブサイトに惜しみなく出資してくれたので、ドゥーブはためになる宇宙飛行知識の動画を数多くプロデュースした。

　そればかりか、自分が宇宙に行けるチャンスも、小さいながらあった。打ち上げ予定の一週間前、ドゥーブは妻と子供たちを連れ、撮影クルーも引きつれて、バイコヌール宇宙基地に向かった。船尾が扇形をした打ち上げロケットのソユーズFGが、特別列車に水平に乗せられ、煙を吐く機関車に引っぱられて、ロシアの大草原(ステップ)を横断して発射場に運ばれるのを、彼らは大いに驚嘆してながめていた。発射場は、月面のようなカザフスタンのステップをコンクリートで覆った、ヘリの離着陸場より少しましという程度の場所で、その周囲にロケットを列車から持ち上げる装置や、燃料注入装置などがあった。NASAのやり方とはあまりに対照的で、笑いそうになったほどだ。ドゥーブの末の息子で当時一一歳だったヘンリーは、発射地点から一〇〇メートルばかり離れたところで交尾している野良犬に気を取られ、巨大なロケットが垂直に立ち上がるところを見逃した。発射場の燃料庫はびっくりするほど発射台に近く、その前には小さな野菜畑があって、技術者たちがそこでキュウリやトマトを育てていた。昼間のあいだにコンクリートの壁が太陽光を吸収するので、夜になっても野菜畑の暖かさを保っていられるのだそうだ。

打ち上げの三日前、発射台の脱出手順のリハーサル中だったヘッジファンド富豪が野良犬に嚙まれ、民兵たちは車で、地元民は馬か攻撃ヘリで、ステップを逃げまどう犬を追いかけたため、すべては大混乱に陥った。ようやくとらえられた犬は獣医学ラボに送られ、狂犬病にかかっていないか調べられた。打ち上げのわずか三時間前になり、狂犬病はなかったという連絡がようやく来た。ドゥーブの名前は旅客名簿から消され、ヘッジファンド・マネージャーの名前になった。安堵と落胆の両方を味わいながら、ドゥーブは発射台のごく近くの地上に立っていた。例のタヴィストック・プラウズも打ち上げの取材に来ていた。当時はかっこいいと思われていた、ありとあらゆる電子機器で装備を固めていた。タヴはドゥーブとロケットのほうを向いてステップに立ち、巨大なロケットがエンジンに点火し空へと飛んでいくあいだ、ビデオカメラをドゥーブに向けイグニッションを入れた。

その映像があったからこそ、ドゥーブはドクター・ハリスからドク・デュボアになり、キャリアを築いたのだった。また、それから何日かのうちに、妻が離婚の手続きを開始したのも、この映像のせいだった。妻は夫としてのドゥーブにずっと不満を言っており、その多くは長年にわたるもので、妻もきちんと説明できないようなことだった。それでも、こうした不満がひとまとまりになって明確化したのは、ドゥーブが夫やとしての責任を無視し、ロシアでの打ち上げのために何週間も訓練を受けたせいだ。打ち上げの実際の瞬間を見届けるために、安全な場所で子供たちと一緒にいることもなく、何百万人のフォロワーのために面白おかしいコメントを言うだけの友人のタヴと一緒に、危険なロケットの近くに行っていたせいだ。

どちらにしても、ドゥーブはそれ以来、その代償を払ってきた。自分の罪に対する罰に甘んじるというう しろ向きな感覚もあるが、子供たちとできるだけ一緒

にすごそうという前向きな感覚もあった。だが、子供たちが学校を卒業して世の中に出ていくにつれ、それも難しくなっていった。地球の全員が死刑宣告を受けた今、ドゥーブは特別な努力をしようとしていた。

A＋0・73、ドゥーブはシアトルに飛び、SUVをレンタルし、ワシントン大学のキャンパスに向かった。その途中でアウトドア・グッズの店に寄り、キャンプ用品を買った。今はだいぶ値が上がっている。文明の崩壊を予期した人々が、こうした品を買いあさりはじめたせいだ。ただ、そういう人々は少数派だ。多くの人は、〈ハード・レイン〉が始まれば、逃げ隠れしてもほとんど意味はないとわかっている。フリーズドライの食べ物や、携帯用のこんろは入手が難しくなっているが、ダウン入りの寝袋やしゃれたテントの在庫はまだある。

ヘンリーは今、コンピューター工学科の三年生で、キャンパスの近くの貸家に友人たちと住んでいる。シアトルによくあるみすぼらしいクラフツマン・バンガロー（低い傾斜の屋根をもつ平屋の住宅）で、半分ぐらいがブラックベリーとツタに呑み込まれているところだ。

どの学生が学位課程のどの段階まで進んだかなど、今ではもうなんの意味もない。それでも人々は、助からない病気と診断された人間が毎朝起きて仕事に行くように、これまでの考え方を続け、さほど習慣を変えずにいる。破滅が迫っていると知ったせいで、アイデンティティを主張したいと感じているのだ。

ドゥーブはSUVを違法駐車しようという誘惑にかられた。世界が終わろうという今、警官に見とがめられて違反チケットの料金を払わされるようなことはないだろうと思ったからだ。だがシアトルの大半の人々が今もルールに従っているようなので、ドゥーブも同じようにした。

ヘンリーは、四人の同居人たちやほかの学生五人とともに、バンガローの一階に集まっていて、自分たち

CamScannerでスキャン

の体温と、ごちゃごちゃと置かれたデスクトップPCやノートPCやルーターの熱で、一月の寒さをしのごうとしていた。空になったピザの箱の数を見るかぎり、夜どおし何かをしていたようだ。

「あした、車の中で説明するよ」というのが、前夜ドゥーブが電話し、何をするつもりなのかと尋ねたときのヘンリーの返答だった。その朝、ヘンリーはレイジーボーイ（アメリカのパーソナルチェア・メーカー）のリクライニングチェアから起き上がり、父親を抱きしめて「愛してる」と言い、それ以上多くは言わなかった。

ティーンエージャーの子をもつ親はみな、こうしたことに慣れているものだ。子供たちは人生のある時点において、特定の物事をママやパパにわざわざ説明する必要はないと決める。親はすべての些細な物事まで知ることはできないし、その必要もない。親はそれをただ受け入れ、子供が自分の力で学び、次に進めるようになったことに満足すべきなのだ。もちろんヘンリーも、何年か前にそうしたヴェールを通り抜け、その向こうへ行った。ドゥーブは自分の自尊心を抑え、すべての親と同じようにそのことを受け入れた。これも成長の一部だ。とはいえ、ヘンリーの秘密は、かつては基本的に退屈なものでもあった。マジック・ザ・ギャザリング（アメリカのトレーディングカード・ゲーム）のカード・コレクション、アメフトのコーチから与えられたウェイトリフティングのプログラム、学校の友だちの恋愛事情。そうしたことに無関心を装うのは、ドゥーブには簡単なことだった。

部屋にいる学生たちの肩の向こうにドゥーブが見たものは、もっとずっと面白そうなことらしかった。その意味では、ドゥーブはいくらか傷ついた。

彼らは全員、ヘンリーが有名なドク・デュボアの息子だということを当然知っている。涼しげな顔を装いながら、みんながドゥーブと握手して挨拶するチャンスをうかがっていた。彼らと雑談しながらも、ドゥー

ソはつい、ブルーのテープでバンガローの壁に貼ってあるものに目を走らせた。CADの設計図、スケジュール表、ガントチャート、地図。工学プロジェクトらしきものが進行していることは明らかだが、なんなのかはわからなかった。キッチンテーブルの上では、メーカーボット社の3Dプリンターがプラスチックの小さな部品をつくっていて、若い女の子がそれを熱心に見守りつつ、携帯電話で英語と中国語を取り混ぜてしゃべっていた。

会話の途中で、車がバックするときのビー、ビー、ビーというアラーム音が割って入り、しだいに音が大きくなった。誰かが玄関のドアをあけると、湿っぽく涼しい太平洋の空気が入ってきて、ライダー社のレンタル・トラックが芝生の上をバックしながら、玄関口にまっすぐ向かってくるのが見えた。頭の中でつい本能が目覚めたドゥーブは、芝生についた泥の溝に非難がましく目をやり、芝をだめにする無責任な若者にチッ、チッと舌打ちをした。この芝生も今後二年のうちに、固く生気のない粘土質の地面の上で、炭素の微粒子でまっ黒に染まるだろう。直撃を受けなくても、岩石が溶けてガラスのようになった巨大なクレイターの一部になるのだ。

箱型トラックはすぐには停まらず、玄関ステップの木の手すりを破壊した。

みんな笑った。妙な声音の笑いだった。子供じみた喜びに、どこか暗い、もっと悪いことを期待するような響きが混じっていた。

若者たちはドゥーブよりも状況に順応できている。

何が始まるのかは彼にもよくわからなかったが、彼らは箱型トラックの後部にすべてを詰め込もうとしているようだった。何を積み込むのか、何を置いていくのかもわからず、ドゥーブはポケットに手を入れてしばらくそのそばに立っていた。だが、ソファまで積み込まれたのを見るかぎり、どうやらこの家を捨てるつ

CamScannerでスキャン

もりらしい。ドゥーブも手伝いはじめた。少しすると、箱型トラックはいっぱいになった。すると彼らはふたたび荷物をおろし、もっときちんと積みはじめた。ドゥーブはようやく本腰を入れて熟練の年長者の役割を演じ、見事な梱包技術を披露して、より効率的なスペースの使い方を指示してやった。

最終的には、誰かがもう一台トラックを借りに行くことになった。レンタカー業者はもう自由に車を使わせているようだ。通りを歩いてきた住宅改築センターの日雇い労働者たちが、荷造りを手伝ってくれた。住宅改築市場も破綻してしまっている。彼らの顔つきはどことなくアメリアに似たところがあり、この人たちがあのニュースを聞いたときはどんな様子だったのだろう、とドゥーブは考えた。

若者のうちの六人が、自分のコンピューターと衣服、それに所有もしくは借用している道具を、ドゥーブが空港でレンタルしたSUVにできるだけ詰め込み、自分たちも乗り込んだ。自転車二台とキャンプ用品は、荷台にロープで縛りつけた。彼らがどこへ行くのか、なんのために行くのかはドゥーブにはわからないが、どうやらブルーの防水シートと結束バンドで新しい文明を構築する気でいるらしい。

最終的には全部で二〇台の大行列が、午後二時ごろに町を出て東へ向かった。一年のこの時期、緯度が高いシアトル周辺地域は、あと二時間ばかりのうちに暗くなってしまう。

若者たちの大半はすぐに眠り込んだ。助手席のヘンリーは起きていようといじらしく努力していたが、やがて居眠りを始めた。ヘンリーは優しい息子だから、目を覚ましたらきっと謝るだろう。だが、親になったことのないヘンリーには、親にとって自分の子供の寝顔を見ることほど満ち足りた時間はないということなど、きっと理解できないに違いない。

そんなふうにして、こんなときでも感じられるかぎ

りの満足を覚えつつ、ドゥーブは眠っている乗客でいっぱいのSUVを、暗くなっていく山へと走らせた。車の行列は、交通の流れの中でしだいにばらばらになっていった。ほかの乗用車の多くは、標高が本格的に高くなる前に、郊外に続く出口をおりていった。いつも思うことだが、彼らはいったい何をして生きているのだろう。最後の日までの毎日を埋めるためだけに、仕事や学校に行きつづけているのか？　とはいえ、ドゥーブには関係のないことだった。

イサクアを越えてもまだ州間高速道（インターステート）を走っている車は、どうやらみな山の東側の高地にある、寒冷砂漠に向かっているようだった。まだスキーに興味がある人たちもいるらしい――スキーときたものだ！――が、そういう車はたやすく見分けがつく。それ以外の多くの車は、大学から来た車の群れと似たような車両だった。つまり、荷物を満杯に積んだ箱型トラックやSUV、食料やキャンプの装備を載せたピックアップ・トラックだ。

放浪農民（オーキー）になったみたいだな、とドゥーブは思った。ただ、本当の放浪農民は、少なくとも自分の行き先を知っている。

長々と降りつづくシアトルの霧雨は、交互に霧になったり冷たい雨になったりしはじめ、ドゥーブは片手で忙しくワイパーを切り替えた。高い場所に来るほどに雨粒に氷が混じり、やがて雪になった。道路にはまだ積もっていないが、路肩は半解けの雪で見えなくなりつつあり、車線がだんだん浸食されている。車のスピードが五〇キロ、四〇キロ、三〇キロと落ちていき、低いところにおりてきた鉄灰色の雲が残りわずかな日中の光を押さえつけ、前方の道路はまるでテールライトの混濁液が凍りついているかのようだった。

二、三台のセミトレーラーが、動きの遅いレーンで進入追い越しを試みている。何を積んでいるのかわからない普通の箱型のトラックもあったが、あまり見な

いタイプの産業車両が、尋常ではないくらい多く走っているのがわかる。低温液体を運ぶタンカー、パイプや構造用鋼を運ぶ平台型のトレーラー。

不意に雲が明るく光り、後部座席で眠っていた学生たちもびくんとして身体を動かした。いつもの習慣で、ドゥーブは秒を数えはじめた。ゼロ・ミシシッピ、一ミシシッピ、二ミシシッピ……。カウントが九か一〇まで来たとき、轟音が聞こえてきた。昔、子供だったころなら、稲妻の仕業だと思ったところだ。月の破片が飛んできたのだろう。ここからおよそ三キロ圏内を通過したことになる。たいていの破片は大気圏内に入ってくると砕け散るが、数秒して二度目の轟音が聞こえたということは、地上に到達したのだ。つまり比較的大きな破片だったということだ。

教え子の大学院生が、観測された火球の数を自分たちの予測モデルと比較しているサイトを、ドゥーブは一日か二日前に見ていた。それほどまめにチェックしているわけではないが、最初の二、三週間は不安定だったものが、その後モデルに改良が重ねられ、妥当な統計範囲内で実際の観測値を追随するようになっていたのは知っている。もちろんこれは、モデルにとってはいいことだが、人類にとっては悪いニュースであり、追随できているということは、二一ないし二二カ月のうちに〈ホワイト・スカイ〉が起きて〈ハード・レイン〉が始まることを意味する。自分の記憶が確かなら、さっきのような破片は、世界中で一日に二〇ぐらい落ちていると見られる。近くでそれが起きたというのはやや珍しいことだが、わざわざ知らせるほどのものでもないだろう。

何分かして、前方の車がブレーキをかけはじめ、いくつものテールライトが赤く輝いた。車の列は少しのあいだのろのろと動いていたが、やがてどれも完全に停まった。学生たちの何人かが目を覚まし、眠そうな声でこの状況を話し合った。一〇分しても動きはなく、

ヘンリーが車を降りてSUVのステップの上に乗り、屋根に縛りつけていた自転車のロープをほどきはじめた。

ドゥーブは暖かく安全な運転席に座ったまま、停まった車が並ぶレーンの隙間を自転車で縫うように進む息子の姿を見守った。息子が初めてひとりでパサディナの通りを自転車でこぎ出していったときと同じように、ある種物悲しい気持ちを感じながら。

ヘンリーは三分ほどして戻ってきた。「山道をのぼりきる直前のところで、トレーラーが折れ曲がって動かなくなってる。荷が大きすぎたんだ。ガントリーを積んでたんだと思う」

ガントリー。ドゥーブの脳の奥深くにある記憶が、その言葉でよみがえった。アポロ時代にウォルター・クロンカイトやフランク・レノルズのようなニコチン依存を抜けたアンカーマンのみが、発射台の話題にのみ使った言葉だ。

車の列は動く気配がない。彼らはSUVの後部から冬用のコートを引っぱりだして着込み、道路を歩いて様子を見にいった。同じことをしている人間がたくさんいる。珍しいことだとドゥーブは思った。普通は車の中で待ち、スマホをいじったり、オーディオブックを聴いたりして、関係機関がやってきて対処してくれるのを待つものだ。

問題のトレーラーは、八〇〇メートルほど行ったところで見つかった。派手な横滑りを起こしたらしい。ガントリー――列車の架台部分に似た、溶接されたスチールのトラス――のとんでもない重量が、トレーラーの最後部を前や横へと振りまわし、すべての車線を横切って横転し、ガードレールを一〇〇メートルほど破壊してようやく停まったと見える。そのうしろで何台かの車がブレーキを踏んでスピンアウトしていて、うしろを軽くぶつけた車の後始末をしている人はいたが、ひどい怪我人などはいないようだった。

CamScannerでスキャン

事故現場のほうへ向かう人の数はかなりたくさんいたが、事故をただ見ているとか、好奇心で見物しているような人間はほとんどいなかった。みんなどこへ行くのだろうか？　ドゥーブとヘンリー、そしてほかの学生たちが近づいていくと、事故現場を照らすために方向転換してヘッドライトを向ける車が何台か見え、そのあと、車と車の隙間を通ったり、トラクターとトレーラーのあいだの空間をよじのぼったりして、反対側へ行こうとしている人の流れが目に入ってきた。安全監督者をみずから買って出た人たちが、LEDの懐中電灯を持って立ち、つまずきやすい場所を警告する看板や、つかまれる場所に光を当てている。ドゥーブやほかの人間たちも、そうした隙間を通り、事故現場の反対側へと抜けた。そこでのながめは、一見の価値があるものだった。雨に濡れたインターステートはまったくの空っぽで、そこから先へと延びている。右手の山腹には、夜間照明に照らされたスキー場が広がっている。さらに二〇キロか三〇キロほど離れた、雪と霧のヴェールの向こうの山腹には、やわらかいオレンジ色をした筋状の光が見えていた。火球が落ちた場所だ。ドゥーブにも、ようやく何が起きたのかがわかった。隕石は自分たちの頭上を通過していったのだ。ドゥーブには雲の上の閃光しかわからなかったが、そのころ山道の頂上に達していた人たちには、隕石が光の筋を描きながら地面に落ちてきて、森を二キロ近くなぎたおすところまで見えたはずだ。たじろぎ、車線を飛び出した車がたくさんいたに違いない。トレーラーの運転手はブレーキを踏むほかなく、ぬかるんだ舗道でタイヤがスリップしたのだろう。

事故現場の反対側に来た人の数は、間違いなく一〇〇を超えていた。

二〇分もたつころには、横転したトレーラーを起こせるだけの人数が集まっていた。巨大な石を動かそうとするエジプトの奴隷のように、パーカーとマイクロ

ジャンパー姿や手袋とスノーパンツを身につけた人々が、全員でトレーラーの下に入って持ちあげようとした。道具箱から持ってきた牽引ベルトがトレーラーの反対側に取りつけられていて、トレーラーの連結器と、現場に来た数台の4WDピックアップ・トラックのバンパーとをつないでいる。人間が押すあいだに牽引ベルトが引っぱると、驚くほどたやすく車体が起きあがり、片側の車輪だけで一瞬バランスを取った――聞こえる音は、ピックアップ・トラックが急発進しようとするときに響くタイヤの横滑りの音だけだ。そして、もう片方の車輪が地面に落ちてきた。全員が安堵するとともに、「うぉーっ！」と歓喜の叫びをあげた。ドゥーブも手袋をした手で、さっきまで会ったこともなかった、今後も二度と会うことはないだろう二〇人ばかりの人たちに向かってこぶしをぶつけ合ったり、ハイ・ファイブをしたりした。

トレーラーをまた正しい方向に向かせ、インターステートへ戻すには、さらに二時間ばかりかかる退屈な作業が必要と見られた。が、短い時間内で少なくとも一車線はあけることができた。そのころにはすでに、中央分離帯を横切ってインターステートの反対車線を占拠し、ドップラー効果満点の長々としたクラクションを鳴らしつづけながら方向転換していた4WD車も、だいぶまばらになっていた。

ふたたび車が動かなくなったのは、さらに一時間ほどしたころだった。ハイウェイに羽のような分厚い煙が低く漂っていて、その中へと入っていくと、ほとんど視界がきかなくなった。暗闇から赤や青の銀河のような光がまたたいてあらわれ、そして遠ざかっていく。さっきの隕石落下で、緊急車両が消火活動に群がったり、地元民を救助したりしている場所の明かりだった。ある場所では、道路作業用の発煙筒の陽気な光と一緒に、道路のまん中に車ぐらいの大きさの岩が居座っていた。それが舗道に落ちてきて地面を陥没させたせい

で、分厚いアスファルトの破片と折れた鉄筋が周囲にせり上がっている。岩は隕石そのものではなく、いわばその排出物だ。隕石の落下地点から飛ばされた破片だ。

さらにもうひとつの渋滞は、ヴァンテージという町から一キロ半ほどの川幅のコロンビア川を渡るインターステートで起きていて、こちらはただ見とれてしまうようなながめのせいだった。橋の下、川の東岸で何かが起きている。大きな荷船が橋の下を通れるよう、支柱から支柱までのあいだで水際から離れるように傾斜がつけてある場所だ。目も眩むような光が支柱の下から照らして昼間のように斑に見え、その中で何か巨大な円筒形のものがウインチで巻き上げられ、荷船から降ろされている。

こうしたことすべてが重なり合った結果、一行がモーゼズ・レイクの町に着き、インターステートをはずれ、その後いっせいにグラント郡国際空港へ向かおうとする車の流れを追いかけはじめたときには、とっくに真夜中を回っていた。

この空港の正式名称は、確かにそのとおりだ。だが翌朝目覚め、ヘンリーと共有していたテントから這いだして、立ち上がってあたりを見まわしたとたん、ドゥーブはここをニュー・バイコヌールという名で呼ぶことにした。バイコヌールと同じ緯度にあり、同じような大草原(ステップ)の僻地にあるからだ。

かつてのステップと同じように、ここには放浪生活の民が住んでいる。いわば〝宇宙の放浪農民(スペース・オーキー)〟だ。少なくとも一万人はいるだろう。

秩序はあるように見えた。乾いた湖底に、アメフトのフィールドのラインを引くときと同じ道具を使って、まっすぐな長い線が引かれている。線引きされた道や大通りは、新たにやってきて住みついた人々にもおおかた尊重されているようだ。仮設トイレがきちんと間隔を取って置いてあるが、ドゥーブの鼻が感知するか

まり、アトシ残ったかけの食券を使っている者も、ただ寝袋の上で小便をしている者もいるようだった。
到着前の最後の一、二時間で、ヘンリーが少し説明してくれた。ここはかつて空軍の基地だった場所で、アメリカが共産主義の攻撃から身を守る必要が生じた場合、北の前線となるはずだった防衛基地の一部だという。およそ四〇〇〇メートルの滑走路を見るかぎり、攻撃目的もあったのかもしれない。スペースシャトルの代替着陸場でもあったが、一度も使われたことはない。なんにせよ、モーゼズ・レイクの町と比べるとばかばかしいほど大規模な空港で、ここ何十年かは航空宇宙産業関連のさまざまな訓練や実験目的で使われることが多かった。二〇〇五年にはブルー・オリジン社が、垂直離着陸機（VTOL）の試験に使用した。今ニュー・バイコヌールがあり、ドゥーブがベーコンを焼く匂いの出どころを探して歩きまわっている、空港西の空っぽの湖底に、VTOLの操作のためのトレーラーが置かれ

たようだ。
窓のない巨大な航空機が、その胴体部から車輪を出しながら頭上を飛んでいき、四〇〇〇メートルの滑走路をめいっぱい使って、時間をかけながらゆるやかに着陸した。貨物機だ。
ドゥーブは、宿営地の中央にまっすぐ向かう広い大通りにやってきた。中央がどこで、そこに何があるのかは、見まがいようもなかった。中央と見られる場所から上がるさまざまな種類のクレーンが、コンクリート製の発射台に向かい、一区画ずつ作業をしている。ロケットを組み立てているのだ。
巨大なロケットを。
多かれ少なかれ、すべては理にかなっている。コロンビア川の荷船ならどんな大きな貨物も運べるし、そのあとはトラックに積んで、モーゼズ・レイクまでの最後の二、三キロを運べばいいだけだ。あの滑走路があればどんな飛行機も使える。シアトル地域にある航

空宇宙産業の機械工場で、つくれないものはない。それに、バイコヌールと同じ緯度のこの場所からは、手垢がつくほど使われてきた飛行計画で、〈イズィ〉への貨物を飛ばすことができる。

そのわずか四日後、ドゥーブは、さまざまな宇宙業界の無骨者たちとともに錆びついたピックアップ・トラックの荷台に立ち、発射台から飛び立つロケットと張り合うかのように、ビールのボトルを空高く上げていた。優雅に弧を描いて予定どおりの軌道に沿い、アイダホ州ボイシの方角へと飛んでいくロケットを、全員がはやしたて、叫び声をあげながら見送った。そして翌朝、全員がしらふに戻ると、また新たなロケットの建設で忙しくなった。

第八〇日

「われわれは軌道にスタッフを送り込むにあたって、そこがフィラデルフィアかどこかであるのと同じようにしゃべっていますが、実際のところ宇宙にはさまざまな場所があり、状況もさまざまに異なるのです。宇宙にある二つの物体はどれも、理論的にはお互いのまわりで軌道を描くことができます。

われわれにとって重要な軌道の多くは、巨大な何かのまわりをちっぽけなものが回るというかたちをとっています。地球のまわりを回る衛星、あるいは太陽のまわりを回る地球もそうです。このため、軌道に名称をつけたり分類したりする手近な方法として、われわれはこう考えます。『中心にある巨大なものは何か?』

中心にある巨大なものが地球なら、軌道は地球周回軌道と呼ばれます。中心に太陽があれば、太陽周回軌道です。だいたいそういう感じです。われわれは、月が分裂して以来、地球周回軌道に関心を向けてきました。月があったころ、月もそうした軌道、つまり地球を中心とする軌道を回っていました。月の破片の多く

はいまだに地球周回軌道を回っています。少数ながら地球の大気圏に入ってきたものもあります。隕石の落下はそうやって起きます。

軌道の基礎についてはもういいでしょう。ただ、軌道にはさまざまな水準があるのだということに留意してください。さて、かつての地球＝月の軌道システムは、そのシステム全体が太陽周回軌道を回っていました。ここからズームアウトして銀河系全体を見てみると、太陽系全体が、ブラックホールを中心にして、銀河周回軌道に沿って非常にゆっくり回っているのが見えるはずなのです」

しゃべっているのは、著名な天文学者で科学普及の貢献者、ドク・デュボアだ。太陽系に近づいたり遠ざかったりするアニメーションが添えられている。ダイナがそのアニメを目にしたのは、最近〈イズィ〉にやってきたばかりで、〝伝統的宇宙飛行士らしくない〟コンテストがあれば容易に優勝できそうな、ルイーザ・ソーターの肩越しだった。ニューヨーク・シティ生まれで、チリの政治弾圧を逃れてきた両親をもつルイーザは、ハーレムで数カ国の人間が集まるボヘミアンな家庭に育ち、毎日セントラル・パークを徒歩で縦断して西六三丁目のエシカル・カルチャー・スクールに通った。その後UCLA、シカゴ大学、バルセロナ大学で、心理学とソーシャルワークの学位を立て続けに取った。おんぼろの釣り船でヨーロッパに入ろうとする経済難民を助ける仕事を何年かやったあと、マッカーサー・フェローの〝天才助成金〟を得て、ほかの経済移民をリサーチするため、数年にわたって自由な世界旅行をした。

ルイーザは二週間前、フルブライト奨学金で学んでいたスコットランドのセント・アンドルーズ大学から引き抜かれ、宇宙で暮らすための基礎的な訓練を受けると、ロケットにくくりつけられた観光カプセルでここへ打ち上げられた。

CamScannerでスキャン

ほかのみんなと同じようにダイナも、ルイーザの仕事は宇宙での精神分析医とソーシャルワーカーなのだろうと普通に考えていた。人の密集度合いとストレスが高まるにつれて起きている相互作用から判断するに、ルイーザはたくさんの仕事を抱えることになりそうだ。ここでの状況は、縦揺れする、舵のない釣り船に必死で群れをなして乗り込む人々のものと、不愉快なほど似通っている。

ルイーザはおだやかな自信を備えた女性で、軌道力学などの話題にはまったく無知だということを潔く認めていた。だが、単にそれだけではなかった。ルイーザは、自分の無知を利用して、会話を円滑に運ぶコツを知っていた。〈イズィ〉には、社会的な活動領域においてアスペルガー症候群寄りと言える人間が山ほどいるので、技術的な質問をするのは会話を始める最良の方法なのだ。

とはいえ、ほかのみんなが忙しいときのルイーザは、グーグルを使って地球に自分の疑問の解答を求めたり、ユーチューブの動画を探してきたりもしている。今ちょうど彼女がそうしているように。

ダイナがルイーザのうしろで浮遊しながら見ていると、アニメーションが切り替わり、ドク・デュボアとずんぐりしたスキンヘッドの白人のライブ中継映像になった。二人は灰褐色の平鍋のような地面に並んで立っていて、ダイナにはそこがモーゼズ・レイクの宇宙船基地（スペースポート）だとわかった。彼らの後方の発射台では、もつれるように脇に並ぶクレーン、ガントリー、ケーブルなどによって、ロケットが一段一段重ねられている。

ドク・デュボアの相手の男には、漠然と見覚えがあった。よくテレビやユーチューブで見かける、テクノロジー評論家だ。その男がカメラのほうを向いてしゃべりだした。「ここワシントン州グラント郡の世界最新の宇宙センターから、タヴィストック・プラウズがお送りしています。ドク・デュボアについてはご紹介

CamScannerでスキャン

[illegible]
アルジェナ・エクスペディションズのおもな仕事について話しすることもできると思います。おもな仕事の多くは、われわれのアイデアをしろうとに見える間に合わせの発表演説で始まったものです。アルジェナが、こうしたすべてに関する説明のアニメーションをつくりました。どうぞポップコーンを用意してお座りください」

映像は地球を映し、ズームバックし、垂直に、そして水平にパンしながら、地球が太陽を回っている軌道を提示した。わかりやすいように、細い赤の曲線が軌道をたどっていく。アニメーションはふたたびパンした。金星、水星、そして火星と木星が見えてきた。

「伝統的に」ドク・デュボアが口を開いた。「小惑星帯と言うときは、普通は火星と木星のあいだにある小惑星帯のことを指します」

二、三の大きめのかたまりを含む塵の輪が、火星と木星の軌道のあいだにある広い空間に広がっている。

「ここには[illegible]富がたくさんありますが、現在の宇宙船ではそう簡単には行けない遠い場所です」

つまりドク・デュボアは、時代錯誤をもちつづけるという彼の名声を維持し、この言葉を受け入れることにしたようだ。突然に流行語やハッシュタグとして世間をにぎわせだした〝われわれの遺産〟というフレーズ、つまり、〝《クラウド・アーク》に乗ることができた人々の子孫によって遠い将来に達成されるもの〟、あるいはもっと率直な物言いをすれば、〝あと二二カ月生きつづけるための唯一の理由〟という意味のこの言葉を。

アニメーションは引きのアングルになり、地球の軌道の先には何も見えなくなった。「ただ、天文学者には昔から周知のことですが、火星の向こうにあるものだけが小惑星のすべてではありません。もっと小さい、とはいえ充分に意味のある大きさの太陽周回軌道の小

CamScannerでスキャン

惑星の中には、地球とそう離れていない軌道を描いているものがあるのです」

画面は、地球の軌道をあらわす赤いラインの周囲でぼんやりとした光輪をつくっている、細かくてまばらな塵のひとつに寄った。

「アマルテアもそのひとつということですね、ドク?」

「そうです。火星と木星のあいだの小惑星帯からこれだけ大きな金属のかたまりを運んでくるとなると、途方もない時間がかかってしまいます。そういったものが地球と同じような軌道にあることがわかれば、話はいくらか簡単になります」

「地球と同じような軌道とはどういうことですか?」

「こうした岩はみな、地球と同じように太陽の周囲を回っているのです。地球の軌道よりも少し内側のものも、少し外側のものもありますし、太陽のまわりを一度回るたびに、地球の軌道を二回横切るものもあります。以前はそうしたものは心配の種でした」

「今となれば無用の心配でしたね」タヴが口を挟んだ。

ドクは口をつぐみ、今の冗談に何か言おうとしたようだったが、やめた。「以前は心配していたので、そういうものを見つけて正確な軌道を突きとめようとしていたのです――軌道のパラメーターを」

カメラがドクとタヴに戻ると、二人は踏み固められたスペースポートの地面を横切って歩いているところだった。その背景に、アルジュナ・エクスペディションズのロゴ入りの大型トラックが映っている。

「ここ何年か、アルジュナ・エクスペディションズのような企業が小惑星の採鉱を考え、その天体図をたくさんつくってきました。そしてここ何週間か、アルジュナや連携したほかの民間宇宙企業により、協調的な努力がなされています」

「ショーン・プロブストは、本当のところ何を考えているのでしょうか、ドク?」

「彼は何も明かしていません。ただ、軌道力学には、想像にお任せしますという余地はないのです。この動画の第二部では、宇宙で軌道を周回する天体が踊るダンスについて、そして、小惑星が正しい時間に正しい場所へあらわれるための精密な振り付けについて説明したいと思います」

ルイーザの指が次の動画の再生リンクの上を漂ったが、クリックする前に振り返ってダイナの顔を見た。

「あなたがたが、どんなことをして生計を立てているのか知りたくて」ルイーザは世界中の言語のアクセントでしゃべれるが、やはりニューヨーク訛りが強い。「あなたもアルジュナで仕事をしていたんでしょ？」

「しーっ！」ダイナは冗談めかして言った。「私、ロシア人とはまだ友だちでいたいのよ」

「なんのこと？」とルイーザ。

ダイナがほのめかしたのは、ここ最近続いているぴりぴりした雰囲気のミーティングのことだ。ときには、ロシア人――フョードル・アントノーヴィチ・パンテレイモンのリーダーシップのもと、いまだに〝ブロック〟として考え行動している連中――と、自分たちが〝破壊的〟なことを実は誇りとしているアルジュナ代表団とのあいだに、完全な対立が生じることもあった。〝破壊的〟というのは陳腐なビジネス用語にすぎない。だが、〝破壊的〟なのがなぜいいことなのかをベテランのロシア人宇宙飛行士に説明するのは、そう簡単ではない。

ダイナは「文化的な話よ」などと言おうと思ったが、そんなカクテルパーティーの席みたいな冗談を、ルイーザのような実績をもつ人間に使うのは気がひけた。

「つまりね、宇宙での不意打ちって、ほとんどの場合悪いことなの」ダイナは言った。「昔から、どんなミッションでも、数えきれないほどの段階まで計画し尽くされてきたし、どんな不測の事態にも対処する計画ができてる。即興はなしよ。即興ではやれないの、即

興をやるためのものが何もないから」
「映画の『アポロ13』ではダクトテープを使ってたじゃない」
「ええ、あれはまれな例外ね」とダイナ。「何十年たっても語りぐさよ。だからロシア人たちにとっては、誰かが予告もなしにあらわれたり、私たちの資源を要求したりするというのは――」
「資源って？」
「彼らは私たちの空気を吸ってる」とダイナ。「スペースを占有してる。帯域幅を使ってる。いろいろあるわ。ラルスが便乗してここに来たのは、〈イズィ〉に滞在して働くためだと思ってた――なのにショーンと一緒に行くことになった。それにあの人たち、私のロボットをほとんど全部持っていくのよ」
「でも、もっと送ってくるんでしょ？」
「もちろんよ。ねえ、私が言ってるのは、これが不意打ちだってこと。それに、ショーンとラルスがここを出ていってしまえば、フォードルが二人の首を絞める可能性も減るわ」
「彼らはどこへ行くの？」
「別の軌道」
「太陽周回軌道？ それとも地球周回軌道？」ルイーザは無表情にそう言い、それからダイナに片目をつむってみせた。
「まず地球周回軌道。それから太陽周回軌道」ダイナは少しにやりとして答えた。
「でも、私たちはすでに地球周回軌道にいるんでしょう」
「ショーンにとっては違う軌道なのよ。〈イズィ〉の軌道は赤道に対して傾いている。だからバイコヌールから打ち上げができるようになってるわけ――バイコヌールはシアトルと同じぐらい北に位置してる。でも、惑星間で何かするとき、つまり、ショーンが考えているのもそういうことなんだけど――要するに、低い地

CamScannerでスキャン

地球軌道から出たいってことね——そのときは、赤道に近い軌道にいる必要があるの。なぜかって、太陽系の残りがそこにあるから——ショーンが持ってきたいと思ってる、大きな氷のかたまりもね」

「〈イミール〉ね」ルイーザの発音はショーンから聞いたそのままで、"イーミーア"と聞こえなくもなかった。古代北欧神話に出てくる、原始の氷の巨人の名前だ。自分のプロジェクトが発見し、持って帰ってこようとしている氷のかたまりに、ショーンがつけたコードネームだ。

「そう。でも正式名じゃない。ショーンはあまりその話をしてくれないの」

「片方の軌道からもう片方へ、どうやって行くの?」とルイーザ。「地球周回軌道から——私たちがいるのはそっちよね?」

「ええ」

「そこから太陽周回軌道へどうやって?」

「まずは軌道面の変更をしなきゃいけない——今私たちがいる、傾いている〈イズィ〉の軌道から、赤道に近い軌道へと。そこでショーンは残りの装備とランデヴーする」

「どうして全部の荷物をここへ送ってしまわなかったの?」

「軌道面変更の操作には経費がかかるのよ。軌道面を変更するのが、ショーンとラルスとドロップ・トップだけならいいんだけど、探検用のすべての荷物をここへ送ってしまって、あとから軌道面の変更をするのは、ものすごく無駄なやり方なの」ダイナはもうひとつの理由には言及しなかった。ショーンの荷物の重要な部分を占めているものは、とんでもなく放射性が高いため、〈イズィ〉の近くに持ってくることができないのだ。

「なるほど。でも、まだ地球周回軌道は出てないわよね?」

ね」
「じゃあ、ランデヴー地点から太陽周回軌道へはどうやって行くの？」
「いろいろなやり方があるわ。私が思うに、ショーンならL1ゲートウェイを通るはずよ」
「それってなんなの？」ルイーザはついにクスクスと笑いをこぼした。「自分のまわりの人たちがそういう話をしてるのを聞いてると、なんだかまた、自分がSF映画の中に放り込まれたような気分になってくるわ」
「ドク・デュボアがその動画で説明してると思うけど」ダイナはルイーザのタブレットにうなずいてみせた。「要点はとても簡単なのよ」ダイナはあたりを見まわし、服を詰めてあるメッシュの袋を見つけた。それを壁のくぼみから引っぱり出し、船室の中央に浮遊させた。「これが太陽」と言ってから、自分で自分の身体をあちこち叩き、薬の入った小さなプラスチックボトルをポケットから取り出した。新しく来た人のために取ってきておいた嘔吐抑制剤だ。ダイナはボトルをあけ、その口に詰めてある綿玉を取ると、今度はそれを、少しルイーザに近い空中に漂わせた。「これが太陽周回軌道を描いている地球よ」気分が悪い乗組員には二、三分待ってもらうことにして、ダイナは注意深くボトルを振って錠剤を三個出し、それも浮遊させておいて、ボトルをポケットに戻した。そのあと、すでに〝太陽〟と〝地球〟で構成された宇宙の中に錠剤を並べはじめた。
「小惑星？」ルイーザが言った。
「もっと抽象的な、数学的なポイントよ」ダイナは言った。「ラグランジュ点とか、秤動点とか呼ばれてるもので、どんな二つの天体システムの周囲にもこの点が五つあるの。つねに同じ基本的な幾何学。そのうち二つはL4とL5って呼ばれてて、両脇にある。スペ

ーヌがないからそれは容認するわ。ほかの三つは、太陽と地球を結んだ線上にある」ダイナは〝太陽〟の向こう側へ回るように進み、〝地球〟のある場所の反対側に、錠剤のひとつを静止させた。「これがL3だけど、とても遠いし、太陽がいつもこちら側にあるから私たちには見えないし、あまり役には立たないわ」

漂っている綿玉の方向へと戻ると、ダイナは隔壁で身体を支えて止まり、二つ目の錠剤をその向こうに配置した。「これがL2、地球の軌道の外側」そして最後に、〝太陽〟と〝地球〟のあいだのかなり地球寄りの位置に、三つ目の錠剤を置いた。「そしてこれが——

——」

「消去法で行けばL1ね」ルイーザはそっけなく言い、そして笑った。「宇宙専門家のみなさんはカウントダウンが好きよ。それは知ってる」

「ここは太陽と地球の重力の均衡が取れる場所ね」とダイナ。「ゲートウェイって呼ばれることもある。地球周回軌道と太陽周回軌道のあいだでの切り替えがやりやすい場所だからよ。時には自然に起こることもある。太陽周回軌道を回っている小惑星が、L1近くを漂流していて、地球の重力に引き込まれたりするの。逆に、地球を周回していたアポロの上段部分がL1の近くを通過したとき、太陽周回軌道に出ていってしまって、何年もそのままになっていたこともあった。あとになって同じゲートウェイから戻ってきたけどね——

——またそこから吐き出されたのよ」

ルイーザはうなずいた。「ニューヨークで言えば、コロンバス・サークル駅でDトレインからAトレインに乗り換えるような感じね」

「そうね、操車場や駅をたとえに使う人は多い」

「つまり、ショーンや彼のクルーもそうするだろうってことなのね」

「あの人たちが、いったんクソ——」ダイナは口をつぐんだ。

「クソったれ装備を手に入れたら、そうするってことね」ルイーザが言葉を続けた。
「ありがと、そういうこと」ダイナはにやりとした。
「彼らがL1にたどりつくためには、今私たちがいるよりも高い軌道に行く必要がある。そのためにはエンジンを噴射して、ほんの数分で大量の燃料を使い、そのあと二、三週間は惰性で移動するのよ。ヴァン・アレン帯を通過しなければならないから、大量の放射線を浴びることにもなる。残念ながらそれは避けられないわ。L1までの距離は月までの四倍」
「もと月があった場所までってことね」ルイーザが小声で言った。
「そう。つまりショーンとほかの乗組員は、二、三日のうちに、これまでの誰よりも地球から遠く離れた人間になる。L1に到達したら――それまで五週間はかかる――そうしたら、もう一度エンジンを噴射して、いよいよDトレインからAトレインへ乗り換える――太陽周回軌道に入るってわけ。そこからなら、彗星までどんなルートでも取ることができる」
ルイーザは、ダイナの言葉の最初の部分にまだ気を取られていた。「これまでの誰よりも地球から遠く離れる、か」ルイーザは繰り返した。「フォードルの反応には、嫉妬の感情みたいなものがはたらいているんじゃないかしら。彼が宇宙で過ごしてきた長い時間を思うと――」
「金持ちのくだらない人物がやってきて、フォードルの偉業を小さなものに見せてしまおうとしてる」ダイナはうなずいた。「それはあるかもね。フォードルってロシア人らしい石みたいな顔してるけど、何を思ってるかはわからないし」
「とにかく」とルイーザ。「ショーンたちは大きな氷のかたまりを取ってきて、そのあとはこれまでの道のりをたどって、〈クラウド・アーク〉のいる地点に戻ってくるということね」

「そうでもないわ」ダイナは言った。「そこからが面白くなるところなのよ」
「えっ？　ここまででも充分面白いけど！」
ダイナが話せる部分にも限りはあった。「宇宙船を操作して——宇宙船はそのために設計され計画されてるわけだけど——それで太陽系を回ることはできるわ。巨大でろくでもない氷の球を動かすということは、また別の話なのよ」
「長い時間がかかりそうね」ルイーザはうなずいた。
「失敗の可能性もある」
「ええ。それでね、私、ロボットをつくったの」
「この旅に使うための？」
「そう。ショーンたちがケーブルを固定して網を張るには、彗星の地表面に立つ必要がある。巨大な氷のかたまりよ。壊れやすいわ。推進エンジンに点火したとき、乾いた雪玉みたいにぼろぼろに壊したりはしたくないの」
「乾いた雪玉？」ルイーザは言った。「何それ、あなたどこの生まれ？」
「ブルックス山脈よ。そう。雪玉をつくるにはとんでもない土地」
「あなたがひとりだけ年下の女の子で」ルイーザは言った。「みんながあなたに向かって雪玉をぶつけてくるんでなければ、ね？」
「ノーコメント」
「セントラル・パークでは」ルイーザは言った。「雪玉は湿ったものだし、それに固いのよ」

第九〇日

アイヴィが第三七日のミーティングの冒頭で「五パーセント」と言ったとき、ダイナほか多くのメンバーはあたりを見まわし、自分たちをわずらわせている問題が改善されてないことに気づいた。もちろん、アイヴィはずっとそれを強調してきた。その日の時点で宇

CamScannerでスキャン

宙にいた人間は二六人で、うち八人は〈ラック〉の一時的シェルターでかろうじて生きているという状態だった。〈バナナ〉は少し混み合いつつも、全員入りきれていた。

第七三日、アイヴィが〈バナナ〉でまたミーティングを開き、その冒頭で「一〇〇パーセント」と言ったとき、状況はすでに変わっていた。〈バナナ〉に〈イズィ〉の全メンバーを入れることは無理で、大半はビデオ・フィードによってミーティングを見ていた。ショーン・プロブストとアルジュナ・エクスペディションズの連中がモーゼズ・レイクからやってきたせいで、地球外にいる人間の厳密な総数はわからなくなっていた。数を追跡しているスプレッドシートがグーグル・ドキュメントにあるはずだと言われていたが、そのありかも諸説分かれるありさまだった。少なくとも一週間前までには、総数は間違いなく三桁に突入していた。モーゼズ・レイクの即席スペースポートが稼働を開始してから最初の二週間で、三台のロケットが打ち上げられた。一台はワラワラの近くにある高級ブドウ園に突っ込み、地球の時計が熟成時間を充分与えてくれたら最高のワインになるはずだったブドウを、数エーカー分だめにした。あとの二台は〈イズィ〉に到達した。

とはいえ、アルジュナの大きな積み荷の大半は、モーゼズ・レイクではなく、もっと赤道に近い場所から打ち上げられ、黄道面に近い軌道に乗れるようにしていた。一台はケープ・カナヴェラルから、一台はクールーから、少なくとも二台の重量物打ち上げロケットが打ち上げられ、地球の回帰線上の低い軌道でランデヴーとドッキングに成功した。ほかのロケットも計画進行中だと言われている。だが、このプロジェクトの内容については、ほとんど知られていなかった。コミュニケーションはショーン・プロブストの得意とするところでないし、民間事業でキャリアを築いてきたこ

CamScannerでスキャン

ともあり、自分の手の内を明かさない習慣にもなじんでいる。ショーンはこの点に関して、機密情報へのアクセス許可を与えられて〈イズィ〉に乗り込んだスペンサー・グラインドスタッフやズィーク・ピーターセンなど少数の仲間と、心をひとつにしているようだった。ダイナとアイヴィは意見を交換し、情況証拠の断片を共有しあって、今何が起きているかという漠然とした仮説を立てていた。表向き、ショーン・プロブストはワイルドカードだ。しかし、アルジュナは〈ナッツ〉をスパーキーに何週間も送りつづけていて、スパーキーはそれを〈イズィ〉へ打ち上げることを最優先していた。このため、ダイナの成果報告――ダイナがアルジュナに送った、どの〈ナッツ〉が宇宙で機能し、どれが機能しないかというフィードバック――は、大いにNASAの関心を引いた。それに、ショーンの積み荷の最低でもひとつがケープ・カナヴェラル――NASAの最重要打ち上げ施設――から打ち上げられたことも、意味深長だった。ましてや、ヴァンデンバーグ空軍基地からの打ち上げもあり、それがしだいに大きくなっていくアルジュナ複合体（コンプレックス）にモジュールを追加するためだったとなれば、なおさらだ。使われたロケットのサイズから、モジュールが小さなものなのはわかる。また地上の警戒態勢の様子から、トップ・シークレットに違いないこともわかった。軍の長い護衛隊のせいで一〇一号線の車が路肩に停めさせられたり、発射台に望遠レンズを向けたら防水シートや偽装ネットでさえぎられてしまったりしたという、普通の市民からの報告があったのだ。

　モーゼズ・レイクから発射された次のロケットは、〈イズィ〉まで無事に旅してきた。ロケットの上段にはドッキングのための場所がなく、ISSの〝船尾〟およそ一キロほどで、編隊を組むようなかたちになった。フォードルは悪意に満ちた目で窓からそれをにらみ、ロケットの積み荷は没収すべきだと何度も繰り返

した。積み荷目録は通常の中身とまるで違っていた。

・予備の推進剤とその他の消耗品。ショーンのドロップ・トップが、軌道面を変更し、赤道面上の軌道で〈イミール〉とのランデヴーを行なえるようにするためのもの（〈イミール〉という言葉は現在では、ショーンが組み立てた宇宙船と、それが目指す遠い目的地の両方を意味するようになっていた）。
・氷
・パイクリートと呼ばれる高強度の複合材料をつくるために氷と混ぜるための、繊維素材
・数千台の〈アイスナッツ〉——氷を這いまわるように最適化されたロボット

ウォードルも、そしておそらくはほかの人たちも、水や推進剤を欲しがっていた。地上ではピート・スターリングが、モーゼズ・レイク基地の閉鎖をちらつかせて法的に脅しにかかった——が、逆にショーンの側が、よく言っても想像力なしにつくられた万能薬でしかない〈クラウド・アーク〉計画を、ユーチューブ動画で暴露してやると脅したため、ひと晩で引き下がるしかなかった。こうしたあからさまな対立が政府の左右両陣営のあいだに存在することは、控えめに言っても妙なことだったが、世界はとうに妙な場所になっていた。食事や仕事のあとの一杯を挟んでそんな話をしながら、ダイナとアイヴィとルイーザは、地上の大統領執務室、軍、アルジュナ・エクスペディションズ、そして〈アーキテクト〉たちのあいだで起きているののしり合いについて、ただ憶測をめぐらせるしかなかった。

たいていの時間、ダイナはおとなしく仕事をし、ショーンが探検（エクスペディション）に向かうときに持っていくロボットのプログラミングをした。彗星の核は、一個の固い

氷のかたまりでなく、まして破片の凝集物でもなく、ただ自身の重力でゆるく密集しているだけの存在だ。つまり、非常に脆い。ただささわっただけでも、ばらばらになりかねない。アルジュナ・エクスペディションズは何年も前からそのことを知っていて、こうした厄介な物体をとらえるためのテクノロジーに、何百万ドルも投資してきた。網をかぶせ、その口を紐で締めるという、石器時代の狩猟生活者でも知っているような技術を〝テクノロジー〟と呼ぶのは、いささか大げさかもしれないが。

実際に宇宙でこの偉業を行なうことは、ショーンに言わせれば〝非対称的(アシンメトリカル)な問題〟だった。これはプログラマー用語で、たくさんの不測の事態や詳細な問題が存在するため、〝ひとつの大きな解決策〟でどうにかできるものではないという意味だ。おそらくロボットは、グリッグ・シェレルップ彗星の表面全体に群がり、網をつかんで引きおろし、氷が解けて弱くなっている部分を補強して、木と繊維をミックスし、再凍結させてパイクリートにすることになる。ダイナはその手助けをすることになっていて、今からわくわくしていたが、それもショーンがいくつかの気まずい事実を指摘し、彼女を現実に引き戻すまでの話だった。〈イズィ〉と〈イミール〉の通信は、彼らの無線ひとつに制限されることとなった。ビデオは送れない。待ち時間も長くなりそうだった。無線信号は地球と太陽のあいだぐらいの距離を飛んでいくので、旅の大半にわたって数分の遅れが生じることになるだろう。そんなわけで、彗星の表面に送るロボットをプログラミングすることは、窓の外に見えるアマルテアの表面に送るロボットをプログラミングするのとは、まるで違う話になってしまった。ダイナがやるべき仕事は、今すべてやってしまうしかない。

ともかく、ショーンとラルスがドロップ・トップに乗ってA＋0・82に旅立つと、〈イズィ〉の人口は二

人減り、緊張感やドラマも急激に減った。軌道面変更操作により、彼らは赤道上で〈イミール〉とランデヴーを行なった。さらに一週間にわたっていくつかのランデヴーを実施し、ケープ・カナヴェラルからと、ニューメキシコおよびテキサス西部にある民間スペースポートから打ち上げられた積み荷をさらに受け入れたのち、〈イミール〉は長時間メインエンジンを噴射して、L1に向かう軌道へと移動した。それから二、三日後には、地球からの飛行距離において、ついにアポロの記録を破った。

ダイナのショップにやってきたコンラート・バルトが、カーテンが引いてあったのを見て礼儀正しくノックをした。ダイナとリースがときどきその奥でセックスしていることは、みんな知っていたのだ。入ってきたコンラートは、神経質そうにあたりを見まわしてから、〈イミール〉がどういうことになるのか何か知っているかと尋ねてきた。ダイナが何か言う前にコンラートは彼女から離れ、タブレットを取りだしてパスワードを打ち込んだ。それから振り返り、ダイナに画像をひとつ見せた。

ダイナが何を見ているのか理解するまで、少し時間がかかった。それが宇宙にある人工物の画像なのは明らかだった。よく撮れた写真だが、画素をいじって大幅に画質を向上させたものであることがわかる。コンラートはその写真を、〈イズィ〉の光学望遠鏡のひとつを使って撮ったと説明した。いつもはかつて月の中心があった場所、つまり破片の集まりがうねっているあたりに向いている望遠鏡を、彼がこの人工物体に向けたのだ。物体はかなり大きくて複雑なもので、〈イズィ〉を除けば、人類が宇宙で組み立てた最大のものかもしれない。この写真は非常に長い距離を隔てて撮ったもので、〈イズィ〉もこの物体も互いに動いているため、コンラートは画像処理ソフトを使い、苦心してぼやけた部分を減らしたのだった。この物体が〈イ

ズィ〉と同じように、別のロケットの最上段に乗せて打ち上げられたたくさんのモジュールで構成されていることは、ダイナの目にもはっきりわかった。物体の後尾には大きなベル型ノズルがついているが、これがメインの推進ユニットだろう。いくつかのモジュールは推進剤タンクにも見える。ほかは居住区画らしい。だが、この物体の何よりも目立つ奇妙な特徴は、先端から伸びている長くとがった釘か探針のようなもので、物体そのものの一〇倍近い長さがある。これはどうやらトラスで、〈イズィ〉の新しいトラスと同じようなつくりになっていた。

「あらら」ダイナはおどけて言った。「無線タワーを備えた宇宙ステーションね！」

コンラートは弱々しく笑った。「〝無線タワー〟の〝頂上〟を見てみろよ」と言ってタブレットの上で二本の指を広げ、先端部のぼんやりした画素が固まっている場所を拡大した。矢じりに見えなくもないかたちの小さな黒っぽい先端が、分厚い白の基底の上に載っていて、さらに基底の下には黒っぽい底板がある。

コンラートは、それが何かダイナが気づくのを期待しているかのように——あるいは、君は最初からこの秘密を知っていたんだろうと言いたげに、ダイナの顔を見ていた。

確かにそのとおりだった。だが、表情に出すわけにはいかなかった。

「あたしは原子物理学者じゃないわ」とダイナ。「でも、これ以上ないぐらいはっきりわかるのは、これは有人宇宙船——これは〈イミール〉でしょう、違う？」

「もちろんそうだ」

「この船に乗っている人たちは、この先端にあるのがなんであれ、できるだけそれを遠くに置きたくて、長い棒を組み立ててその先端に取りつけたということね」

「大量の中性子をつくるためのものだろう」
「どうしてわかるの？」
「こいつは——」コンラートは、スモア（焼いたマシュマロをグラハム・クラッカーで挟んだ菓子）のマシュマロみたいにサンドイッチされている、分厚い白の層を指さした。「——おそらくポリエチレンかパラフィンで、中性子をよく吸収する。その過程でガンマ線が生じるのかもしれないし、そうしたらこの底板は——」コンラートはマシュマロの下の黒っぽいグラハム・クラッカー部分を指した。「——きっと鉛だ」
ダイナは、それがなんなのかを最初から知っていた。四ギガワットの熱出力が見積もれる巨大な原子力発電装置の中心部で、この目的のために急いで設計しなおされたものだ。とはいえ、秘密厳守を約束した手前、ダイナにできることは、コンラートが知りえた情報を自分でつなぎあわせるのを見守ることだけだった。「まあ、どのみち自殺的ミッションとなりそうなものに対する予防措置としては、見事なものね」
「彼らは死ぬ気はないし、目的地にたどりつければ何かできる力もある」
「地球でも、誰かがこういう写真を撮ってると思う？」ダイナは尋ねた。「マスメディアでは見たことがないけど」
「移動のため点火するまで、フェアリング（ロケットの先端にあって搭載物などを守る部分）に隠してあったのさ」コンラートは言った。「こいつは二、三時間前に撮ったんだ。鮮明に撮れた唯一の写真だよ」
〈イミール〉は、かつての月の軌道を一気に横切るため、破片の群れの多くが地球の反対側に行って衝突の可能性が最低限になるときまで、噴射のタイミングを計っていた。
にもかかわらず、そこを通過し、人類史上最長距離を移動した旅人になってから何日かして、〈イミー

CamScannerでスキャン

ル〉からの通信は途絶えた。

それまで〈イミール〉は、強力なXバンドの無線を使い、深宇宙通信情報網（ディープスペース・ネットワーク）――長距離宇宙探査機と交信するために長年にわたって使われてきた、スペイン、オーストラリア、カリフォルニアにある受信アンテナ施設――を通じて交信していた。それが完全に沈黙してしまったのだ。いなくなったわけではない――コンラートの望遠鏡でも、白い点として見える〈イミール〉の姿は見つかっている。三七日間はエンジン噴射もせず、ただ慣性飛行をするので、乗組員が生存しているのかどうか知る方法はなかった。完璧にまともな形をした〈イミール〉であろうと、ぐしゃぐしゃに潰れ宇宙がれきのかたまりとなった〈イミール〉であろうと、同じようにしか見えないし、同じ動きをしているはずだった。

何も連絡がないということは、望みがあるということだと、彼らは解釈した。〈イミール〉は人の介入なしでも、自動システムが連絡をしてくるようになっている。人間からの通信がなくなってもシステムがまだ機能しているのなら、乗組員が全員死亡したか、何もできない状態になったことを意味する。だが人間からもロボットからも信号が来なくなったということは、無線自体の問題だということだ――Xバンド・アンテナ、もしくは送信機そのもののトラブルかもしれない。

その後〈イミール〉は位置がわかりにくくなり、L1に近づいていくと見えなくなった。地球と太陽のあいだに入ったからだ。その地点に到達するのは第一二六日の予定だった。そこで再度の点火を行ない、太陽周回軌道に入るはずだ。その楕円軌道は一年ちょっとあと――A+1・175前後、つまり〈ゼロ〉から一年と一七五日後に――〝グレッグズ・スケルトン〟の軌道と交差することになる。〈イミール〉がいったん視界から消え、太陽の炎の中に入ってしまったら、観測可能な場所にたどりついてくれるまで待つしかない。も

し〈イミール〉が災難に見舞われ、漂流する宇宙のがれきになっても、おそらく同じ軌道をぐるりと回って、地球の近くを通過するはずだ。だが、軌道力学という観点から見ればL1は不安定な場所であり、〈イミール〉が太陽周回軌道にたやすく流されてしまうことは考えられるし、岩と衝突して軌道をそれてしまったら、その可能性も高まることになる。

カレンダーが第一三〇日から第一四〇日へと向かっても――〈イミール〉がL1を通ったはずの日から二週間がたっても――〈イミール〉が戻ってくる様子はなかった。偶然か制御された噴射によるものかはともかく、太陽周回軌道に入ったことは間違いなさそうだ。噴射だとすると、ショーンやそれ以外の数人の乗組員には、むこう一年間、無重力で漂いながらただ待つほかない。旅のスピードを上げる方法もなく、すべては二つの軌道の接触にかかっているのだ。

こうした出来事は、何カ月か前であれば世界の歴史に残る偉業と見えたかもしれないが、かつては〝月下の世界〟だった地球上で今起きているすべてのことと比べれば、画面をスクロールしないと出てこない些末なニュースとしか見られなかった。

ショーンとアルジュナ、モーゼズ・レイクのスペースポート、そして〈イミール〉の旅を取り巻く当初の騒ぎや興奮は、NASAや欧州宇宙機関、ロスコスモス、中国国家航天局、そして日本やインドの宇宙機関が行なってきた、忠実で骨の折れる日常業務による進展から目をそらさせることになった。こうした組織では、アポロやソユーズが華やかだった時代に計算尺を振りかざしていた専門バカと、文化的にたいして変わらないような、保守的で伝統派のエンジニアたちが働いていた。実際、彼らの一部はまさにそうした専門バカだったが、もっと年老いて、もっと無愛想だった。彼らは何人かの成り上がりのIT富豪が世界の注目を集め、無分別で軽率なミッションを好き勝手に計画し、

[illegible]いるという安堵さに、困惑、いや、驚倒していた。だが、ショーンとラルスが〈イズィン〉から旅立つと、彼らは大きな安堵のため息をつき、日々不変で想像力もいらない自分たちの得意仕事に戻っていったのだった。

そしてA+0・144、スプレッドシートやフローチャートに示された途方もない詳細を見た人々は誰しも、その彼らの仕事の価値を認めた。その日〈バナナ〉で開かれたミーティングの冒頭で、アイヴィは「二〇パーセント」と宣告した。ドクター・デュボアのカルテクにある天体物理学研究所の最新の予測、そして同じ計算を行なった世界中のほかの大学の予測によれば、〈ホワイト・スカイ〉はA+1・354ごろ、つまり月が壊れてから一年と三五四日ごろに起きると見られていた。五分の一の時間がすぎたということだ。

〈スカウト〉、つまりテクラのような、実質的には自殺行為のような仕事を行なう、第二九日に到着しはじめた[illegible]の第一波の目的は、〈ハムスター・チューブ〉やドッキングポートのネットワークを[illegible]でつくり、〈パイオニア〉と呼ばれるもっと大人数の人々が〈イズィ〉にやってこられるようにすることだ。〈スカウト〉と〈パイオニア〉の基本的な違いは、〈スカウト〉はドッキングのための場所がないことを知りながら宇宙に出るが、〈パイオニア〉は、少なくとも理論上では、自分たちの宇宙船がドッキングできる場所、そしてその向こうに与圧された空気のある場所が存在するはずだという認識でいるということだろう。その保証が満たされなかったケースもあり、ソユーズに詰め込まれた〈パイオニア〉の六人は静かに窒息死した。急造のドッキング装置に欠陥があったことが原因だった。三人の中国人宇宙飛行士(タイコノート)がハムスター・チューブを移動中、流星塵がチューブを貫通し、与圧が失われて命を落としたこともある。それでも〈パイオニア〉は、第五六日ごろから、一日に五人ないし一二人ぐら

いの割合でやってくるようになった。ドッキングポートがすべて埋まって一度は小休止したが、宇宙船がほかの宇宙船とドッキングするようになり、ハムスター・チューブのネットワークが増築され、膨張性の構造物が採用されてからは、雪だるま式に人数が増えていった。

こうなる前からすでに複雑で理解しにくい構造物だった〈イズィ〉は、モジュール、ハムスター・チューブ、トラス、そしてルイーザが「厄介な三次元ドミノゲームみたい」と評した、宇宙船にドッキングした宇宙船にさらにドッキングした宇宙船といったものによって、今やまったく不可解な迷宮となっていた。〈イズィ〉の見取り図を見ながら方角を知る唯一の方法は、アマルテアのゴツゴツした非対称形を一方に見て、二つのトーラスをもう一方に見ることだ。このそれぞれが〝前部〟と〝後部〟で、そのあいだの軸線が〝左舷〟と〝右舷〟という伝統的な船の方向を決める基本となり、さらに宇宙用語では基本的に「地球から見て上」である〝天頂〟と、「地球から見て下」である〝天底〟も決まる。背後をトーラスに、顔をアマルテアに向けると、左が左舷、右が右舷となり、頭は天頂に、足は天底に向き、その四〇〇キロ下が地球の地表面ということになる。

とはいえこれは、宇宙服を着て外に出た人間だけに許された特権的な眺めだ。〈イズィ〉の内部は依然として三次元ドミノゲームで、たやすく迷子になる。フェルトペンは地球でもつねに不足しているが、ここではハムスター・チューブや居住モジュールの壁に方向を書くために使う重要なアイテムになっている。

「私がここにいるのは、まったくの時系列的な偶然にすぎないんだわ」アイヴィが感慨を込めて言った。ダイナとアイヴィが一緒に飲むのは、だんだんまれな機会になりつつあった。当初から隠してあったアルコー

CamScannerでスキャン

ルはすべて飲み尽くしていたが、新たにやってきた親切な連中が、ときどきそっとボトルを差し入れてくれることがあった。
「そうは思わない」ダイナは言った。気の利いた返事というほどではなかったが、アイヴィが急に守りを解いたことに、彼女は不意を衝かれていた。
「月が壊れるのが二週間遅かったら、ひねくれたロシア人の誰かがここの指揮を執って、私は地上にいて結婚して妊娠してたはずよ」とアイヴィ。
「そしてほかのみんなと同じように、死刑宣告を受けていた」
「ああ、まあ、それはそうよね」
　ダイナはボトルに手を伸ばし、ショットグラスにおかわりをつぎながら、話を引きのばそうとした。アイヴィの心を開かせるのは至難の業だ。〈ゼロ〉以前の幸せなころでさえ、そうだった。
「ねえアイヴィ、あんたが〈イズィ〉の指揮を執ることになったのは、偶然じゃないわよ。この仕事を任されるだけの理由はあったんだわ。あんたは世界で――宇宙も含めた世界でいちばん、インポスター症候群（自分の成功を肯定できず、自分は詐欺師（インポスター）だと思い込んでしまう心理状態）に苦しんだりすべきじゃない人よ」
　アイヴィは面白がっているような顔で、黙ったままダイナを見つめていたが、ようやく「続けて」と言った。「あなたの言ってるインポスター症候群ってどういうもの？」この話は前にも二人でしたことがあった。しかし、自分は詐欺師だと思いたがるのは、いつもダイナのほうだった。
「話をそらさないでよ。何があったの？」
　アイヴィは天井を見上げた。ロシア人から借用したある種の視覚信号で、誰が聞いてるかわからないわよと知らせるためのしぐさだ。それからアイヴィはダイナの目を見た。だがほんの一瞬だった。アイヴィはもともとシャイで、胸中を明かすときも自分の靴を見つ

CamScannerでスキャン

めていたいたちなのだ。
「あなたとショーン・プロブストは、強力なスパーリング・パートナーよね」とアイヴィ。
「あいつほんとに、やなやつよ！　あいつには誰かが――」ダイナはそう言いかけたが、アイヴィがなんだか悲しげに顔をゆがめ、片手を挙げてダイナを制したため、口をつぐんだ。
「ほんとよね！　ええ。よくやってくれてありがとう」とアイヴィ。「あの人には誰か、あなたみたいな人がそばに必要だったのよ。あなたたち二人って、ほとんどコメディ役者みたいに見えることもあったわ。それに、あの人に対するロシア人たちの反応――もちろん、まず最初はテクラだったけど、そのあとフォードルも、アルジュナの人間を全員逮捕して、彼らが運んできたものをすべて没収すべきだって言い出したりして――たいしたドラマだったわよ。地球では、大量のタブロイド記事とネットのスレッドで騒がれた。でもそれはかろうじて生きのびたわ」
「かろうじて生きのびたって、どういうこと？」
「バイコヌールやヒューストンとやった会議の中身を聞かせても、あなたは信じないと思うわ。あそこの人たち、私に強硬路線をとらせたがったの。フォードルの望むとおりにさせようとしたのよ」
「でも、そうしなかったのね」
アイヴィはまたダイナの目を見た。少しの間があって、アイヴィは小さくうなずいた。
「じゃあ、あんたの勝ちじゃない」ダイナは言った。
「割に合わない勝利よ」とアイヴィ。「私はもう少し穏やかな解決策にしてほしいって交渉したの。それで〈イミール〉エクスペディションは、あからさまな厳しい感情を抜きにして続けられることになった」
「それの何が割に合わないの？」
「私の問題であなたをわずらわせたくはないわ」
「じゃあ誰ならいいの？」

「誰もいないかも」そう言ったアイヴィの顔を、怒りのようなものがかすめた。「それがリーダーってものなのかもね、ダイナ。自分の問題をほかの人間と共有できない――共有すべきじゃない人間なのよ。古くさい考えかもしれない。でも、人類にはそういう人間が必要なんだわ」

ダイナはアイヴィをじっと見た。ようやくアイヴィの表情がやわらぎ、ほとんど感情のない口調でしゃべりだした。「宇宙ステーションのトップという私の地位は、厳しい試練にさらされたわ。少し前から、地上ではどんなふうに政治が動いていたのかを知ることになった――でも、本当にそれが見えてきたのは、ショーン・プロプスト論争が浮上してきてからよ。あれ以来、私の権限は地上の人間にどんどん奪われてる。マスコミにうわさをばらまかれたり、ミーティングであれこれ言われたり」

「ピート・スターリングね」

「ノーコメント。とにかく、私はもうすぐ交替させられると思う」

アイヴィの目がかすかに赤くなっている。その目がもう一度天井を見たが、誰が聞いていようとかまわないという表情だった。それからアイヴィはダイナに目をやり、微笑んだ。「最近はどうなの、あなたは？」その声は弱々しかった。

「あたしはいたって順調よ」とダイナ。

「そう？　それは快い響きね」

「ボーやラルスやいろんな人たちがあたしの仲間として働いてくれてるし、あたしがやってきたことにも敬意を払ってくれてる」

「それは、あなたがテクラのためにしてやったことのおかげだと思う」

「あら、そうなの？　あたしの天性の有能さのおかげじゃなくて？」

「地上には、あなたの言うような意味の有能な人がた

CamScannerでスキャン

くさんいるわ。そして、今後何週間かで、そういうたくさんの人たちとここで出会うことになる。本当よ。私、履歴書を読んでるから」

「でしょうね」

「でも、純粋な能力のほかに、別の資格が必要になってくるってことを、今みんなが感じはじめてるのよ。だから人はあなたに従うの」

また気まずい沈黙が流れた。アイヴィは、もはやそうした敬意を自分が与えられることはないと言いたがっているように見えた。

「そういうものと、あなたの有能さとにね」アイヴィはそう言い足した。

強化（コンソリデーション）

地球の大気は、ある場所でいきなりなくなるわけではない。しだいに薄くなっていき、ほとんどの計測機器で真空との区別ができなくなるくらいまでになる。高度約一六〇キロより下はまだ空気が濃く、軌道にあるものを地球へ向けて引きずりおろそうとするので、このあたりの高度は、初期の宇宙カプセルのような、短期的な衛星のために使われていた。高度が上がるにつれて空気は薄くなり、軌道も減衰していく。

〈イズィ〉の高度は四〇〇キロある。巨大な太陽光パネルや放熱器があるため、その小さい重量のわりに動きは非常に鈍かった。しかしそれも、アマルテアが突然〈イズィ〉に追加されて、さらに重量を増すまでの

CamScannerでスキャン

ことだった。
一般人には矛盾したことのようにも思えるが、アマルテアの分の重量が増えたせいで、〈イズィ〉はより高さを保っていられる。アマルテアが来る以前、〈イズィ〉は一カ月あたり二キロ高度が下がるので、最後部のロケットエンジンを点火して再上昇させなければならなかった。最初のころは、ズヴェズダ・モジュールに組み込まれていたエンジンを使っていた。しかしその後は、〈イズィ〉の最後部モジュールにたまたまドッキングした宇宙船のエンジンを使うことが多くなった。
このころの〈イズィ〉は言わば凧のようで、その表面エリアにはまったく質量がなかった。技術的な言い方をすれば、弾道係数が低いということだ。つまり、わずかな大気にも強い影響を受ける。だがアマルテアと結合されてからの〈イズィ〉は、大きな岩を縛りつけた凧のようになり、弾道係数が高くなった。岩のもつ運動量で薄い大気を押し進み、軌道減衰を遅らせる。しかし一方で、〈イズィ〉の高度を再上昇させる場合、この鉄とニッケルのかたまりも持ち上げるので、より長い噴射とより大量の推進剤が必要になる。
〈スカウト〉や〈パイオニア〉が〈イズィ〉に少しずつ重量を加えはじめて以来、弾道係数はふたたび下がり、上昇噴射ももっと頻繁に行なわれるようになった。〈イズィ〉の高度を修正するため、ときどき推進エンジンを噴射するのがつねとなったのだ。そして、〈イズィ〉の基本構造に加えられるものが増えるにつれ、問題も増えていった。そもそも〈イズィ〉は、さまざまな新しいものが加えられる以前から、扱いにくい構造をしていた。部分的な推進を行なうと、その負荷はほかのモジュールにも、トラスやその他の構造物のさまざまな部分にもかかり、波及していく。単純な表現をするなら、〈イズィ〉にくっついている物が増えれば増えるほど、〈イズィ〉はばたつき（フロッピー）やすくなり、高

CamScannerでスキャン

度を上昇させたり、空間を〝飛行〟したりするために、ちょっと角度を変えることも難しくなる。やってくる〈パイオニア〉の数がピークの時期は、軌道減衰が放置されて一六キロ以上も下がったが、今では再上昇が日常的な作業として必須になっている。そして、H2の底にあるエンジンを噴射するたびに構造的な弱点があらわになり、ときには文字どおり、結束バンドやダクトテープで応急処置が行なわれることもあった。

A＋0・144から250までの時期の合い言葉は〝強化（コンソリデーション）〟で、すぐに〝コンソル〟と短縮された。要するに、最初の狂乱の何カ月かのあいだに追加されたハムスター・チューブなど、広がりゆく構造物の周囲に取りつけられたトラスを、新しいものに交換するという意味だ。ほかの問題にも同時に対処することになり、特に重要だったのは、宇宙に無駄な熱を捨てるための放熱器を増やすことだった。放熱器は間隔をあけないと機能しない。お互いに熱を放射しあうからだ。このため排熱施設は途方もなく巨大になり、全体に後部方向へと尾翼のように伸びていった——矢のはしについた羽根のように。これは単なる言葉のあやではない。矢の先端の重い矢じりと、広がっていく羽根の部分は、どちらもまっすぐに前方を指しており、前部先端の巨大なアマルテアと、後部へと伸びていく放熱器の組み合わせが、〈イズィ〉が正しい方向を維持し、いくらか推進エンジンの噴射を減らす助けになっている。また、アマルテアは放熱器を流星塵から守っている。理論的には、岩石はどの方向からでもやってきてステーションにぶつかる可能性があるが、いちばん当たりやすいのは前部の先端なので、〈イズィ〉モジュールの前方を向いた表面には、全体にシールドが備わっている。もちろんその中でもいちばん大きくて有益なシールドはアマルテアだ。

太陽光パネルも、旧式のやり方なら広がっていったかもしれない。だが、〈クラウド・アーク〉計画のか

CamScannerでスキャン

なり早い時期から、太陽光発電装置が有益な付属物になるかもしれないということがはっきりしていたものの、すべてを動かしつづける唯一の確実な方法は、原子力電池であるRTG、つまり放射性同位体熱電気転換器を使うことだった。この装置が要不要にかかわらずつねに熱を生み出すため、放熱器の需要はさらに高まった。

放熱器は無重力下での配管を行なうことで、本質的に大きな役割を果たした。余分な熱は生みだされた場所で集め（〈イズィ〉の場合、大半は居住空間と与圧部分）、放出することができる場所（後部で大きくなっている"尾翼"）まで運ばなければならない。これを実現する唯一のまっとうなやり方は、ループ状の管に注入した液体を使い、片方のはしを温め、もう片方のはしを冷却することだ。熱い側のはしで熱交換器とコールド・プレート（冷却水が流れる板）を使い、問題のある場所からの熱を吸い上げる。冷たい側のはしでは、フラットパネルに挟まれたイモムシのような細い管のネットワークを通って、液体が広がっていく。フラットパネルの目的はただひとつ、わずかに温かくなって、赤外光を深宇宙へ送ることで、そうやってはるか彼方の銀河を温めることで〈イズィ〉を冷やすのだ。ループ状の管の熱いはしと冷たいはしをつなぐことで、ポンプとパイプのシステムは毎日大きくなっていき、地上で混乱する配管と同じような問題を生む傾向があった。複雑さを倍増しているのはループ状の管の一部分は無水アンモニアを使い、ほかの部分は使用済みの水を使っていることだった。アンモニアのほうが機能性はいいが、危険であり、宇宙ではたやすく手に入らない。〈クラウド・アーク〉が生き延びるとすれば、水を効率的に使用することで生き延びることになるだろう。今から一〇〇〇年後、宇宙のすべてのものは水循環システムによって冷やされることになる。だが、今のところは、アンモニアを基盤とした装置も一緒に動かす必

要があった。

さらに輪をかけて複雑なのは、このシステムが対故障性（フォールト・トレラント）、つまり一部に故障が起きても動作に支障がないシステムでなければならないということだ。月の破片が衝突したことにより一部が損傷を受けた場合、貴重な水やアンモニアが宇宙に大量に漏れ出す前に、システムのほかの部分から隔離する必要がある。このためシステム全体に、逆止め弁（チェック・バルブ）、クロスオーバー・スイッチ、そして、いつもなら細かいことを果てしなく処理していくアイヴィの脳さえ飽和させるような冗長性（リダンダンシー）という、膨大なヒエラルキーが生じることになった。アイヴィはすべての冷却関連問題を、四分の三がロシア人、四分の一がアメリカ人という作業グループに委任しなければならなくなった。船外活動の大部分は冷却システムの拡張とメンテナンスに関わる仕事となり、アイヴィは、彼女らしくないことではあるが、一日に一回報告を受けるだけで満足していた。

すべての配管、すべての放熱器は、ほかのものと同じように、〈イズィ〉の構造に支えられる必要があった——特に配管や放熱器は、再上昇させるにはばたばたしすぎる（フロッピー）という全般的な傾向のせいで問題を起こした。このため、問題解決のモードを進めるうえで、アイヴィと地上のエンジニアたちは、ステーション全体の構造の〝コンソル〟、もしくはアイヴィが個人的に呼ぶところの〝脱ばたばた化〟の計画について舵取りをしなければならなくなった。そして、すでに〈スカウト〉や〈パイオニア〉たちが配置したものをはずすのは問題外なので、その周囲に外部の足場となるものを構築することになった。もし一キロほど離れた場所から見たら、大切にされてきた古い建物が改築されているような印象をもつだろう。見ばえは悪いが実用的な格子型の足場が、その下の本体に食い込むことなく、包み込んで強化していくのだ。

最初のうち、トラスの部分は地上で組み立ててその

まま打ち上げ、船外活動チームが正しい位置に設置することで、経費はかかっても迅速に、構造的な完全さを保ちつつ作業をはかどらせるようにしていた。だが、このアプローチはまもなく、収穫逓減の法則（ある生産要素を増加させると生産量は全体として増加するが、その増加分は次第に小さくなるという法則）の餌食になった。〈アーカー〉と呼ばれるようになった〈クラウド・アーク〉の人々が、いつまでも地上のエンジニアによるカスタム建設物に頼ることができないのは明らかだった。

もはや地上のエンジニアたちにも、〈イズィ〉がどんな状況なのかよくわからなくなっていた。彼らのCADモデルはすでに古いものになりつつある。ダイナがそれに気づいたのは、いらだつエンジニアたちから、これこれの場所にロボットを送り、これこれのモジュールにカメラを向けさせ、そこに実際何があるのか見せてほしいという要請メッセージが、突然押し寄せるようになったからだった。

〈アーカー〉たちが所定の位置に自力で構造物を建設するには、道具と素材が必要だった。これらは第二二〇日ごろに届きはじめた。形態も一定でない材料や装置が、ときには互いに無関係のような複数の供給元からやってくるようになり、地上の状況が大きく変化してしまっていることが感じられた。かつては、提案したシステムに三文字の略語がつけられ、異なる機関や請負業者のあいだで一五年ばかりあれこれ検討され、それから宇宙に打ち上げられたものだった。

最も有益な構造建設用マシンは、旧式だがよくできたアイデアを、荒削りに、しかし目的にかなうように実施することで生まれた。もとになったのは、雨樋や配水管の設置業者がトラックの荷台に積んでいる、セットした金属シートのロールを雨樋のかたちに成型し、好きな長さにして押しだしてくる機械だ。新たなマシンも似たようなことをするのだが、こちらはリボン状の金属シートを三角柱型の梁（はり）にして、完全に溶接することができる。だいぶ昔に西側で発明され、試作品も

つくられたが、〈ゼロ〉後の二〇〇日ばかりのあいだに中国の宇宙機関が完成させ、その使い方を知っている人間とともにロケットに乗せて打ち上げはじめた。電気とアルミニウムシートのロールが提供されるかぎり、永遠にでも梁をつくりつづけることができるのだ。だが、トラスや足場といった複雑な構造物に梁の部分を接続するのは、やや難しい作業になる。宇宙での溶接は不可能ではないが、面倒であり、充分な道具もない。そこで、これも中国で大量生産されている、組み立て玩具に使うパーツのようなコネクターに三角柱の梁のはしを挿入し、ねじで締めつけるようになった。当初、こうしたものの多くは地上から大量に運ばれてきたが、A+0・247になると、もっとたくさんコネクターをつくれるように最適化され、挿入される梁に合わせて角度を変えることもできる、3Dプリンターが送られてきた。おかげで、その場でトラスの設計や建設ができるという、大量生産コネクターでは不可能だったことが可能になった。そして最後の手段として、フョードルが無重力や真空の場所でも使える電子ビーム溶接機を手に入れた。歴史上最も高価な溶接機なのは間違いない、ロシア人の驚くべき発明品である。フョードルはその使い方をヴャチェスラフに覚えさせた。ヴャチェスラフはテクラのほか二人の船外活動要員にそれを教え、彼らがジョブキューを設定し、徐々に複雑化する〈イズィ〉の構造物の周囲を交替で回り、あちこちを溶接した。こうして、中国人とロシア人が大半を構築した足場は、拡大し補強された。再上昇の噴射のとき、警告通知や警告音が出たり、軋む音がして騒ぐこともなくなった。ハムスター・チューブは、しだいに補強部分やシールドの内側に消えていった。新しいドッキングポートが、木々に芽吹くつぼみのように〈イズィ〉の末端にあらわれはじめ、次の段階、すなわち、最初の〈アークレット〉の到着に向けて準備を始めた。

地上は、最後から二番目となるはずの八月を迎えていた。新規もしくは改修された、いくつかのスペースポートが稼働しはじめ、世界中の八カ所から〈イズィ〉に向けて重量物打ち上げロケットが発射されるようになった。こうした発射台の周囲で、ロケットの段と、三つの異なるスタイルの〈アークレット〉が、射撃練習場にある大量の弾薬のように積み上げられていった。

第二六〇日

「そろそろね、ハリス博士」とジュリア・ブリス・フラハティが言った。

大統領と定期的に会っているという事実があまりに奇妙で、ドゥーブはときどき混乱することがあった。月が分裂し、人類が滅亡の瀬戸際にあるという事実と比べれば、物事の大きな枠組の中ではその奇妙さもたいしたことではない。だが、こうした不可解なものがない世界で生まれ育ったドゥーブの心は、たとえば大統領執務室で大統領と話をするというような、小さなことにまごついているほうが楽だった。大統領執務室。一方の脇には大統領の科学顧問であるピート・スターリング、もう一方の脇にはホワイトハウス広報部長がいる。そして、クリスタルのタンブラーにアイスウォーターを注ぐ執事。

執事がいれば役に立つということは、ドゥーブにもわかる。だが、広報部長がここにいる理由は？　マーガレット・スローンは有能だし、その身だしなみの完璧さにはつねに驚かされるが、『宇宙からやってくる大きな岩石は危険だ』という以上の、技術的な議論まては理解できないはずだ。

全員が、答えを期待するようにドゥーブを見た。

大統領は今、なんと言った？　『そろそろね』だ。

それはつまり、クビという意味だろうか？　若くて、もっとネットのことをよく知っている、タヴ・プラウ

ズのような誰かと交替ということか？
　気詰まりな沈黙の中で、マーガレット・スローンが説明を始めた。「あなたのスキルや存在感は、落ちつきをもたらす大きな力を与えてくださっています。合衆国の、地球の人々全体を〝われわれの遺産〟というコンセプトで導き、希望を抱けるようにしてくれました。仕事に取り組み、モーゼズ・レイクやバイコヌールやロケット工場などに行くあなたの意志の力――そのすべてに感謝しています。ですが、私たちが思うに、そろそろ――」
「新しい誰かと交替してほしいということですね、わかりました」とドゥーブ。「実を言うと、ありがたいです。私も子供たちや結婚したばかりの妻と過ごしたいので。タヴならきっとすばらしい仕事をしてくれます」
　大統領は面食らったようだった。マーガレットのほうを見て、まばたきした。
「いや、そういうことではありません」とマーガレット。「私たちはあなたに――世界中の人々があなたに――次の一歩を踏み出してもらいたいと思っているのです――より高いレベルに進むために」
「つまりお願いしたいのは」大統領はドゥーブの鈍さと、マーガレットが細い声で回りくどい説明をすることに、いらだちを感じたらしい。「第三六〇日ごろに宇宙へ飛んで、〈クラウド・アーク〉に加わってほしいということなの」
「私は行きたくありません！」ドゥーブは思わず叫んだ。こんなふうに自制心を失うのは珍しいことで、ドゥーブはその愚かさに自分でも驚き、一瞬沈黙した。
「ハリス博士」少したってから、大統領が口を開いた。「あなたも高校の公民で習ったと思うけれど、私が今座っている場所に座れる人間には、さまざまな権力があるわ。そのうちのひとつが、有罪判決を受けた犯罪者に、執行猶予や恩赦を与えるというもの。テキサス

CamScannerでスキャン

で死刑執行室に入る囚人は、私がその人に恩赦を与えない、あるいは減刑しないという決断を下すからこそ、その運命をたどることになるというわけね。私はまだ、死刑囚にその権力を行使したことはない。それを今こそ、あなたに行使しようと思うの」

大統領はそこで間を置いた。ドゥーブは、こちらが注意を向けるのを彼女は待っているのだと感じた。

ドゥーブは目の前のテーブルの上にある、フラワー・アレンジメントを見つめていた。〈クラウド・アーク〉で花を育てられるようになるまで、どのぐらいかかるのだろう。タンブラーに手を伸ばし、水をひと口飲んだ。

こういうときのJBFは、ドゥーブをいらだたせる。花から目を離し、顔を上げるには、意識的で慎重な意志による動きを必要とした。まばたきせず大きく見開いた二人の目が、ドゥーブを見つめていた。

「この惑星の地表にいるせいで、あなたは死刑宣告を受けているのと同じよ」大統領がふたたび口を開いた。「あなたに恩赦を与えます。あなたは宇宙に行って生きることができる。私にはできない。わかるわね、ハリス博士？　国家指導者とその家族はその資格がないと定めた、クレイター・レイク合意に違反でもしないかぎり、私は自分自身にさえ恩赦を与えることができない。で、あなたにとっては何が問題なの？」

正直に返事をするとすれば、あまりにも思慮のない返答になるだろう。つまり、『〈クラウド・アーク〉計画が成功するとは思えないからです。私はただ、人々をハッピーにするために、世間に向けて演じているだけです。私は自分の愛する人間とともに、地上で即座に死にたい。宇宙で、ゆっくりと、ひとりぼっちで死ぬよりも』と。

「私よりもふさわしい人間は、ほかにもいますよ」ドゥーブは返事をしながら、へたなことを言った自分に悪態をついた。これではたやすく論破される。結局の

ところ、ドゥーブは〈クラウド・アーク〉の名簿に加えるにふさわしい人間なのだ。

「とてもそうは思えないがね！」ピート・スターリングが神経質な含み笑いをしながら声を上げた。「ドゥーブ、君は宇宙で役に立てる人間だし、休む暇などないと思うよ。君には、ベン図にすれば最小限の複数核になるような適性がある。天体物理学の問題に取り組むのはストップして、若い〈アーカー〉たちに教え、地上の人々にポッドキャストするという仕事をスムーズにこなせるはずだ」

ドゥーブはピート・スターリングがしゃべるのを聞きながら彼と目を合わせ、相手が嘘を言っていることに気づき、冷水に飛び込んだような衝撃を受けた。

ドゥーブの能力についての嘘ではない。それについては相手は正直だ。ピートはもっと、根源的なところで嘘をついている。

彼はドゥーブと同じように、〈クラウド・アーク〉が成功するとは思っていないのだ。

ピートには、ドク・デュボアを宇宙に行かせ、嘘をついてもらう必要があるのだ。

ドゥーブは人生の何十年にもわたり、科学者としての修練、つまり、真実を求め真実を語るために自分を鍛えるということをやってきた。ハードサイエンス系の科学者、つまり無遠慮さで悪名高い人々のあいだでさえ、歯に衣着せぬ物言いをするという評判を得てきた。誰かの気分を害そうが、結果として誰かのキャリアが傷つこうが、決して気にしなかった。それはカメラを通じても伝わっているらしい。ドゥーブがテレビでしゃべるとき、多くの人々が信頼を寄せるのは、彼が正直で、有力者を不快にさせることも言い、物事をかきまわし、あげく本人は気にしないからなのだ。

そうした場面のいくつかは、ユーチューブ動画やレディット（英語圏のソーシャル・ニュースサイト）のミームとして殿堂入りしている。進化論を信じない共和党の上院議員を罵倒し

たこと、気候変動の否定論者との突発的な論争で相手を論破したこと、『トゥデイ』（米NBCの朝の情報・ニュース番組）の放送中に幼少期の予防接種に反対する女優をこきおろし、何千人もの子供が死んだのはあなた個人の責任だと非難して、相手を泣かせてしまったこと。

だからこそ、ドゥーブの頭には、同時に二つの疑問が浮かんだ。自分に嘘をつく気があるのか？　自分に嘘がつけるのか？

第一の疑問については、つまりこうだ。何十億もの人々が少しでも幸せに死に向かえるのであれば、嘘をついてもいいと思えるだろうか？

第二の疑問は、人々に悟られないか？　ということだ。カメラの前に立って嘘八百を並べているあいだに、口調や表情の変化を感じ取られたりはしないだろうか？

これこそまさに疑問だった。自分にやれるのか？　もしできないのなら——説得力のある嘘を言えないのなら——試す意味もない。

自分にはできないということが、ドゥーブにはわかっていた。

彼のタンブラーに入っている氷のひとつが、急熱による熱破壊を起こしたように、パキッという小さな音をたてた。

ドゥーブはショーン・プロブストのことを思い浮かべた。彼が巨大な氷を取りに出かけてから、半年がたつ。もうそんなに時間がたったということが信じられなかった。

人はなんにでも慣れてしまうものだ。慣れて、そして時間は飛ぶようにすぎ、気づかないうちに時間切れになってしまう。

ショーンがL1ゲートウェイに出発する前後の時期、人々に答えにくい質問を受けたことを思い出した。あの頭のおかしい億万長者はいったい何をするつもりなのか？　確かに、公式の計画には含まれていないこと

だった。公式の計画は、巨大な氷のかたまりの必要性を認めていないようだった。だが、ショーン・プロブストはこの問題を重要なものと信じ、個人で宇宙に行って解決すべきだと考えた。途中で死ぬかもしれないし、放射線や長期の無重力にさらされたせいで、回復できないぐらい衰弱して戻ることになるかもしれない。だから人々も、ショーンが何を考えているのかドゥーブに尋ねたのだ。そして、当時まだその件を検討していなかったドゥーブは、曖昧に、水を手に入れることは宇宙ではつねに大事なことだと回答した。飲む、穀物を育てる、放射線シールドに使う、水素と酸素に分解してロケットの燃料にする、ホースに通すことで余熱を宇宙に放散する、といった使い道がある。それはすべて真実だが、論点を避けるための返事でもあった。

そうしたことをNASAもすでに考えていたはずなのは、どう見ても明らかだった。NASAが気づかなかった、あるいは気づかないふりをしていた、しかしショーン・プロブストが気づいた水の必要性とは、いったいなんだったのか？

あとになってドゥーブは、アルジュナ関係者との非公式の会話や、〈クラウド・アーク〉の計画に取り組んでいる友人から流れてきた内部情報によって、その答えにたどりついた。推進剤のためだ。〈クラウド・アーク〉は推進剤を大量に燃焼させなければならない。ショーンは、まだ足りないと思ったのだ。

だから宇宙に行き、どうにかしようと考えた。

だからこそ、ショーンは口先だけの人間ではない。行動の人だ。ドゥーブが今悩んでいるように悩む必要がない。自分の公のスタンスがどうなるかについても。どんな立場に置かれ、どう見られることになるかも。

「一〇〇日後ということですね」ドゥーブは口を開いた。

ドゥーブがあまりに長いこと黙り込んでいたので、

大統領執務室にいたほかの人間たちは、びくっとした。JBFは机の上のタブレットに視線を泳がせていたし、ピート・スターリングは窓の外を見ていた。

「なんですって、ハリス博士？」大統領はドゥーブに目を戻して言った。だが、ドゥーブはもうその視線にたじろいだりはしなかった。自分はこれから、大統領が二度と彼の顔を見ることができない場所へ行くのだから。

「今日は第二六〇日です。さっき、第三六〇日ごろに宇宙へ行けとおっしゃいましたので」

「そう」マーガレット・スローンは気が楽になったと見え、まるで違う姿勢になった。「第一波ではありません――それはもっと探査的な、予行練習的なものになると思うので――〈アーカー〉が宇宙へ行く本当の最初の波に乗せて、あなたを送り出すことを考えています。あなたも彼らの体験を共有し、〈アーカー〉の毎日の生活がどんなふうなのかを地球の人々に伝えてほしいんです。持続感を与えるために――

まいったな、とドゥーブは思った。博士号取得のために七年をすごし、ヨーロッパの主要な研究機関二カ所で博士課程修了研究者となり、カルテクで終身的な地位を得てノーベル賞の候補者リストにも載った自分が、人類の運命が危険にさらされているときに『持続感を与える』ためのレポーターとして宇宙に送られるのか。

「やりましょう」ドゥーブは言った。そして、自分が宇宙にいるかぎりは、ほかのこともやりますよ。

ほかのこともしたら、彼らはどうするのだろう。自分を地球に引き戻すだろうか？

最悪のケースは、ドゥーブのレポートの放送が打ち切られるときだが、それは別にかまわなかった。カメラに向かって話すよりもっと役に立てることは、宇宙にもあるはずだ。それをやればいい。ショーン・プロブストは〈クラウド・アーク〉の問題をひとつ見つけ、

CamScannerでスキャン

解決するために行動を起こした。一〇〇日のあいだに、役立つかもしれないことを見つけることができるだろうか？　宇宙へ行ったら、成功の確率を上げるためにどんな行動を起こせるだろうか？

「一〇〇日」ドゥーブは言った。「三カ月あれば、妻や子供、それに受精卵ともすごせますから」

「受精卵？」わけがわからんという顔でピート・スターリングが聞き返した。

　三人の子供の母親であるマーガレット・スローンは、すぐに察知して、温かく微笑んだ。「アメリアが妊娠したの？」こうしたおめでたい出来事に対する、〈ゼロ〉以前の時代における、まともな反応だった。もちろん、人々の反応は、今はもっと複雑だ。とはいえ、昔からの習慣はなかなか捨てられない。

「今は違います」とドゥーブ。「受精卵は冷凍しました。私からお願いしたい条件は、それを宇宙に連れていかせてほしいということです」

「わかったわ」大統領は、ミーティングが終わったことを知らせるような口調と目つきでそう言った。

第二八七日

「ジャガイモ関連の面白ばなしはないの？」アイヴィが尋ねてきた。「だってもう……息抜きの笑いぐらいほしいわ」

　ダイナは、自分の不運な家族のことをアイヴィがときどき笑いの種にしようとすることについて、どう思うべきかよくわからなかった。だが、あと四三日ばかりで世界の終わりがやってくると思えば、その笑いに対して怒る意味があるとも思えなかった。

　現在の状況は、地上に残っている人々に対して、ある種の荒っぽい扱いを生んでいた。七〇億人のすべての人間に、それぞれふさわしい同情を与えようとしても、人間的見地から言ってそれは不可能だ。ダイナはラジオでよくブラックユーモアを耳にしていたし、多

少はそれを面白がっている自分がいることにも気づいていた。
ブラックユーモアを言うのは〈アーカー〉に限った話ではなく、ダイナの家族もそれを実証している。家族は知的な人々だ——彼らのしていることを思えばそれも当然。しかし彼らは、鉱山キャンプ的なユーモアのたぐいを好むところがあり、役員会議室や大学教授のラウンジでは絶対見ないような悪ふざけや、珍妙なアイテムが大好きだった。いったん面白いものを見つけると、なかなか手放そうとしない。クレイター・レイク声明の発表直後に父親のルーファスから送られてきた、ジャガイモ植え付けについての冗談っぽいモールス信号メッセージは、やがて、マコーリー一家が〈ハード・レイン〉に向けて整えている準備についてのジョークというサブジャンルに成長した。ときどき届く地上からの差し入れの荷物の中に、まだ本物の土がついたちっぽけなジャガイモや、ミスター・ポテトヘッドとミセス・ポテトヘッドのプラスチック人形が入っているのを見るのも、ダイナはもう慣れっこだった。ルーファスが送ってくれた、『ポテトで有名』というスローガン入りの錆びついたアイダホ州のナンバープレートを、仕事場の壁にダクトテープで貼ったりもしている。ルーファスはそれを、銀が豊かなアイダホの細長い土地に住む、鉱山業者仲間からもらったらしい。
「ないの?」アイヴィが尋ねた。
「ああ、ポテトの面白い話ならそこらじゅうにあるわよ。ただ、あれがほんとに冗談なのか、あたしにももうわからなくて」
「どういうこと?」
「最初のうちは、『厄介なことになってるのはわかってる、そのことで泣いたってしょうがない、最後まで笑いつづけよう』って気持ちのあらわれだと思ってた。でも、だんだん、みんな何をやってるんだろうって気

CamScannerでスキャン

になってきて。つまりね、うちの家族はあらゆる装備を揃えて、ブルックス山脈で暮らしてるの。行こうと思えばいつでもフェアバンクスまで車で行けるし、そこから世界のどこへでも行ける。ピラミッドを見てきたっていい。『モナリザ』を見に行ったっていい。昔の友だちや家族に会ってきたっていい。なのに、ほかのどこよりも神に見捨てられたようなあの土地に居残って、それで何をしてるんだろ」

「プレッピング（災害や社会秩序の混乱に備えて計画的な備蓄などを行なうこと）とか？」

「そうとしか思えないのよ」ダイナは言った。「五〇〇〇年から一万年生き延びるためのプレッピング」

「あなたの家族だけじゃないわ」

その言葉の意味をダイナが理解するのに、何秒かかかった。が、アイヴィの表情は明白だった。「冗談でしょ？　キャルも？」

アイヴィは目だけで、かすかにうなずいた。「フィアンセとの会話じゃないようなことなんだけど――まあ、あなたには関係ない話かな――でも、そういうこと以外にも彼、二酸化炭素除去には水酸化リチウムと水酸化ナトリウムとどちらがいいのか、みたいなことを聞いてくるの。長期間狭い場所に閉じ込められた人間の社会学について、ルイーザがつくったPDFファイルも欲しいって言われたし」

「あんたが気づかないとでも思ってるのかしら」

「そうよ。空気を読めばわかるのに」

「何を考えてるんだと思う？」

「そうね。あの人は、世界的な水爆戦争を乗り切るために設計された、巨大潜水艦に対して権限をもってる唯一の人間よ。アメリカ合衆国が存在しなくなったら、指揮系統の観点からは、彼の上に立つ人間はいなくなる。指揮官は何をするものかしらね？」

「でも、そんなことできる？」

「重要なのは」とアイヴィ。「海が干上がるかどうかだと思う。私がキャルなら、マリアナ海溝に行って、

あとは祈るしかない」
「それじゃ、宇宙で生き残る以上に大変じゃない」
アイヴィは、面白がるような醒めた目つきで友人をながめた。
「何よ!?」ダイナは叫んだ。
「宇宙で生き残るのは、わけないことのはずでしょ、忘れたの?」
「ああ、ええ、ごめん。忘れてた（アイ・フォーゴット）……」メイクアップを忘れてた。「かなり楽しいチャレンジになるでしょうね」ダイナはせいいっぱいのNASA広報担当者風の口調で言いなおした。
「私たちがやってることと、似たようなものよ」とアイヴィ。「問題を細かく分解して、ひとつずつ解決する。でないと圧倒されてしまう」
「それが私たちのやってること?」
「そうよ」アイヴィは、あきれたというふうに目をむいた。
「つまり何?息抜きの笑いが欲しいってことのほかに、何を考えてるわけ?」
「あなたのことよ。あなたの調子はどうか。健康状態はどうか」
「なんだっていうの、これはミーティング?公式の仕事の話?」
アイヴィはダイナを無視した。「あなた、T2であまり過ごしてないみたいだけど」
T2——リースが建設責任者を務めた第二トーラス——は、第一四〇日に回転を始めていた。T2の人工重力は地球の正常な重力の八分の一で、第一トーラスよりも少し大きい程度だ。もう少し居心地よくするために、リースはT2をもっと大きく、よりゆっくりと回るようにした。ただそこにいるだけでも、長期間の宇宙滞在によりこうむる悪影響に対し、多少の中和作用になる。重力のない場所で生活していると、人はしだいに骨密度や筋肉量を失う。眼球のかたちがおかし

CamScannerでスキャン

くなり、視力も落ちる。宇宙ステーションのメンバーは、骨に圧力をかけるトレーニングマシンを使って対処しようとしてきたが、何カ月かしか宇宙にいない人間のための、一時しのぎにすぎない。最初から〈イズイ〉にいるダイナやアイヴィ、その他一〇人のメンバーは、もう一年近くもここで生活している。〈ゼロ〉後の二、三カ月は、誰も長期的な健康問題のことなど気にしていなかった。誰もが死ぬ運命にあったし、〈スカウト〉たちも死体となって到着した。つねに何もかもが緊急事態だった。だが、ハムスター・チューブの建設や構造物の強化を行なった何カ月かのあいだも、生命科学者たちはずっと静かに意見を言いつづけていた。T2の人工重力場で過ごしていないことを、ここ何週間かのあいだにダイナが人から注意されたのは、これが初めてというわけではなかった。

「重力と無重力のあいだを行ったり来たりするのって、きついのよ」ダイナは言った。「吐き気がしてくるの。それに、T2には私の仕事道具はないし」アイヴィも知っているとおり、ダイナは自分の仕事場（ショップ）でロボットづくりの作業をしている。

「でも、だいたいは遠隔での作業でしょ？　プログラムを書くのって」

「うん、だけど、窓の外にロボットたちが見えるところで仕事したいのよ」

「小さなカメラもついてるわよね？」

ダイナは返事に詰まった。

「ここで何をやってるにしても」アイヴィは続けた。「それはあなたの骨を強くするための重力が存在するT2のキャビンでもできることでしょう？」

「リースのこともあるの」ダイナはしぶしぶ認めた。「ちょっと彼とうまくいってなくて、だからあまり——」

「リースはT2に来てもいないわよ」アイヴィは言った。「膨張性構造物チームの人たちと一緒にやってる

から」
「わかった」とダイナ。「仕事のできる場所を千マにくれたら——」
「もうひとつあるの」アイヴィは〝例のため息〟をつきながら言った。〝例のため息〟とは、当局がアイヴィに何かばかげたことをさせようとしているときアイヴィが漏らす、ため息のことだ。ミーティングの記録にあらわれることはないが、それがすべてを一変させる。
「楽しい話じゃなさそうね」
「私たちはみんな、テレビのリアリティ番組（台本のない現実の状況に素人出演者が直面するようすをドラマのように楽しむ番組）の登場人物になったも同然なのよ」とアイヴィ。「あなたは気づいてないかもしれないけど」
「全然。私あまりテレビ見ないし」
「でもね、地上の人たちはみんな、テレビを見るしかないの。経済が破綻しつつあるから、みんな豆でも食べながら、ただテレビ画面をながめて楽しんでるってわけ」
「なるほど」
「もっとメッセージをかたちづくることに気を配ってほしいって頼まれたの」
「メッセージをかたちづくる？　どういうこと？」
アイヴィは〝例のため息〟を漏らした。
「わかった、もういい」とダイナ。
「みんな、〝平凡なナマの田舎もん〟がどうなったかを知りたがってるの」
「ほんと？」
「ええ」アイヴィは言った。「わたしが口にすれば、みんなのお気に入りってわけ。あなたがテッフのポケットをあさったことも覚えてる。それに、テッフのボディ・ランゲージをやってたーんになってる」
「やめて、聞きたくない」
「とにかくみんなが、あの勇敢なロボット・ガールの命

女の機械パートはどうしてるのかって、知りたがってるのよ」
「だから変なメールが来てたのね」
「知らない人から？」
「違う、あたしの家族からよ！　知らない人からのメールなんて読んでないわ。あんたはどうなの？　あんたはこのリアリティ番組でどんな役柄なの、アイヴィ？」
アイヴィは冷静な表情でダイナを見た。「いつも神経をピリピリさせてる、喧しい女」
「うわ」
「アメリカ人視聴者の目には、私は完全なアメリカ人じゃない。そして中国人の視聴者の目には、白人の真似した東洋人にしか見えない」
「気の毒に、アイヴィ」
「悪い知らせは以上よ」
「そう。で、いい知らせは？」
「ネット上で私の悪口を言っている人間は、あと四三三日のうちに死ぬってこと」アイヴィは無表情に言った。
オーケー。これぞブラックユーモアというやつだ。
「そのあとは、すべてどうでもよくなる——私が〝われわれの遺産〟に捧げる能力以外のことは」
「わかったわ、アイヴィ。それで、あたしはどうすればいいの？　あんたと私で自撮りでもして、〝生意気なチビの田舎もん〟のブログに写真をアップする？」
「あなたと私は、史上初の操作可能な〈ボロ〉に乗ることになった。一Gの重力がどんな感じか、あなたも思い出すことになるわよ」

CamScannerでスキャン

“グジ引き”

月が分裂したあとの何日か、ドゥーブは何時間もかけて〈ポテトヘッド〉と〈ミスター・スピニー〉、〈エイコーン〉、〈ピーチ・ピット〉、〈スクープ〉、〈ビッグ・ボーイ〉、〈キドニー・ビーン〉をながめた。かつての月と同じで、これらの破片は昼間でも見えたし、パサディナではめったにない曇りの日や家から出られない日は、ライブ動画フィードをコンピューター画面に表示して見た。

破片が地球上の人類すべてを殺すことになるだろうとわかってから、観察への興味はだいぶ失われた。しだいに広がっていく破片の群れを、何週間も見上げなかった時期もあった。暗い駐車場を歩いているときや、車でハイ[illegible]のかけらを目にすることがあっても、わざと目をそらした。見ていると恐怖感に襲われ、かつてはこうしたものすべてに科学の魅力を感じていた自分を、恥ずかしくさえ思った。そのことを思い出したくなかった。

そのかわり、月の破片がゆっくりと分散していくさまを、大学院の教え子と同僚が提供してくれる、スプレッドシートや図を使って追跡した。現状のすべてを二つの数値に変換するため、できるかぎりのことをした。数値のひとつはBFR、つまり火球分裂比率（ボライド・フラグメンテーション・レート）で、大きな岩石が小さな岩石になる頻度の尺度だ。もうひとつはとても単純な数値、〈ホワイト・スカイ〉が起きるまでの残り日数だ。

第七日、ドゥーブとアメリアが出会ってまもなく、二人は〈キドニー・ビーン〉が二つの大きな破片になるところを目撃したが、それらはのちにKB1、KB2と名づけられた（独自の可愛らしい名前をつけよう

という試みもあったが実現しなかった）。三週間後、〈スクープ〉が〈ビッグ・ボーイ〉と衝突して砕け、SC1、SC2、SC3の三つの破片になった。〈ビッグ・ボーイ〉は今、相変わらず際立って大きなBB1と、小さなかけらだったものが細かくなって群れ（スウォーム）を形成するBB2とに、分かれている。BB2の破片にはコードナンバーがついていて、たとえばBB2‐1‐3は、〈ビッグ・ボーイ〉の小さかったほうの破片が割れて、その中のいちばん大きなものがさらに砕けてできた破片のうち、三番目に大きいものという意味だ。それ以上細かい破片となると、すべてを追跡しつづけるのは難しいし、無意味でもある。〈ミスター・スピニー〉は、最終的に二つに砕けるまでに、たいそうな混乱を引き起こした。MS1とMS2という〈ミスター・スピニー〉の気まぐれな子供たちは、それぞれ反対方向へと飛んでいき、破片の群れと重心を共有しながら楕円軌道を描き、ときおり遠くから弧を描いてやってきて、ゆっくり動いている破片とぶつかったりした。ドゥーブが大統領執務室で大統領と話した忘れがたい日の三日前には、MS2が〈エイコーン〉を三つに粉砕した。そのうちのひとつ、石油タンカーほどの大きさのかたまりが、ドゥーブがロサンジェルスへ飛んでいるあいだにインド洋に飛び込んで津波を巻き起こし、インドの西海岸で四万人もの犠牲者が出た。

　ワシントンDCから戻ったドゥーブは、アメリアを連れて、パサディナにあるランガム・ホテルのスイートルームにチェックインした。彼が世界を駆けまわる旅へ出発する前に、豪華ホテルで何日かを一緒に過ごそうという計画だ。テラスでのロマンチックなディナーのあいだも、ドゥーブは月のかけらを見ないように最善の努力をした。食事を終えるとスイートに戻り、愛し合った。愛の営みのあとで二〇分ほど寄り添っているうち、アメリアは寝返りを打ち、背中に抱きつけるように横向きになったまま眠りに落ちた。だがドゥ

ーブはリラックスできず、タブレットを膝に置いて読書用メガネをかけ、ネットを見ながら時間をつぶした。バルコニーに続くフランス窓があいていて、風が入ってきはじめた。アメリアが毛布の下でさらに身体を寄せてきたので、ドゥーブは窓を閉めようとベッドを出ていった。もとの月の直径の四倍ほどの範囲に広がっている破片の群れが、すぐ目の前で、ロサンジェルスの街明かりの上に浮かんでいる。まともに見たのが久しぶりだったせいもあってか、その光景に心を奪われたドゥーブは、しばらく突っ立ったまま空を見ていた。〈ピーチ・ピット〉はまだ大きなかけらのままだが、元々の〈セブン・シスターズ〉だったそれ以外の破片は、もはや識別できなくなっている。

ふと好奇心が湧き、〈イズィ〉がいつ通過するのかをアプリで調べてみると、あと一〇分ほどだとわかった。そこに立って待つあいだも、彼の気持ちは何度となく月の破片に向かった。あれはこの先どうなるのだろう？ いずれ数えきれない粉々の破片になり、〈ホワイト・スカイ〉になり、そして〈ハード・レイン〉となることはわかっている。だが、大きさの分布は最終的にはどうなるのか？ 大きなもの、小さなもの、それぞれどのぐらいの数になるのだろう？ 月のかけらがどれもだいたい同じ大きさになるという、単純な想定にもとづいたモデルはあるものの、本当にそうなることはまずありえない。

もとの破片について解析を行なった結果、〈ピーチ・ピット〉が崩壊せずにいるのは、もとの月の内部にあった中心核の部分だからだということがわかった。このことは、〈ピーチ・ピット〉の質量分析によっても確かめられた。〈ピーチ・ピット〉はほかの破片と比べると高密度で、大半が岩ではなく鉄分で構成されていると見られている。月にあった鉄の中心核は、全体の大きさとの比較で考えると、地球の中心核よりもずっと小さい。月の大半は、冷たく硬い石だ。

CamScannerでスキャン

それでも月の中心核と呼べるものは確かにあって、固体の鉄球でできていると見られ、その周囲を、いくぶん高温の溶融鉄とさまざまな物質が混ざったものが包んでいる。このすべてが〈エージェント〉によってはぎとられ、宇宙空間に露出した。最初の何時間か、〈ピーチ・ピット〉は放射熱で文字どおり輝いていた。というより、しばらくは地殻の激変で舞い上がったほこりに包まれ、〈ピーチ・ピット〉の様子はよく見えなかったため、そう推測されているにすぎないが。中心核を包んでいた溶融鉄の一部が吹き飛ばされ、すぐに冷えて硬くなり、その破片やかたまりや飛沫が瓦礫の群れとなった。こうしたことは、火球となって地球に降ってきた、金属がたっぷり含まれた破片を解析してわかったことだ。舞い上がったほこりが落ちつき、〈ピーチ・ピット〉やほかの破片がはっきり見えるようになったときには、〈ピーチ・ピット〉が熱を放射しているそばから冷えて固まっていった、溶融鉄の外皮がすでにできあがっていた。温度の低下はそれからも続いた。その後一年ばかりかかったが、〈ピーチ・ピット〉、つまり現在ＰＰ１と呼ばれる破片は、ほかの月のかけらよりもいまだに温度が高く、崩壊に対する大きな耐性を示している。ほかの破片は、ＰＰ１のきらめく表面にぶつかったり突っ込んだりして、ばらばらになっていった。ＰＰ２やＰＰ３などの比較的大きな破片は、まだ〈ピーチ・ピット〉がやわらかかった初期のころに分裂したもので、今は千数百メートルの厚さの固化した鉄のよろいをまとい、第二の〈エージェント〉以外のどんな災難に対しても、それなりの耐性をもっている。

　そんな考えに気を取られていたため、すんでのところで〈イズィ〉の横断を見逃すところだった。瓦礫の群れを直接横切っていく〈イズィ〉は、さまよう巨大な瓦礫のあいだを縫っていくようにも見えるが、もちろんそう見えるだけにすぎない。人類が宇宙空間につ

くった物体の中でも、〈イズィ〉がいちばんきらきらと輝くものであるのは、もうずっと以前からのことで、その後もさまざまなものが加えられ、さらにきらきらと輝くものになっている。その努力は見事なものであり、感動的でさえある。ただ、〈イズィ〉の向こうに存在する災難の大きさと比べてしまうと、そんなことになんの意味があるのかという気持ちにもなる。〈クラウド・アーク〉の長期計画はどうなっていくのか？　スウォームという概念はよくできたアーキテクチャーだし、〝ひとつの大きな船〟に頼るよりもずっと長く生き残れそうだが、それはいったいどこへ向かうのだろう？

　誰もその話はしない。理由はわかっている。生き残りが最優先だからだ。長期的な戦略はそのあとの話だ。

　PP1の鉄は、実用目的として無限に使えるだけの量がある。あれだけの金属を人間が使い尽くすには、何千年もかかるだろう。

　だが、PP1は宇宙にある。たやすく手が届かないところに。

　それでも手を伸ばさなければならない。

　ショーン・プロブストが熱狂していたアルジュナ群の小惑星よりは近いし、手も伸ばしやすい。

　月の奥深くで凍っている鉄の中心核についてのアイデアが、頭の中でかたちになっていくのを感じながらも、ドゥーブはそれを保留し、強いて手近な問題に注意を向けた。二、三日前の大統領執務室で、彼はみずから宇宙へ行き、そこで物事を進めていこうと決意した。それはいい。ただ、彼には地上での時間が三カ月残されている。地上での責任をおろそかにすることはできない。中でも最重要なものは、子供たち、アメリア、そして二人の冷凍受精卵に対する責任だ。とはいえ、ほかにも与えられている仕事はある。真夜中のホテルのバルコニーに突っ立って、PP1の鉄がどのぐらいあるのかを考えていたせいで仕事をしくじったり

すれば、自分の〈クラウド・アーク〉行きも消えかねない。もともと行きたかったわけではないが、いったん行くことに同意すると、なんとしても行きたいという気持ちが芽生えてきて、今はチャンスを奪われることのほうが怖かった。もしその恐れを感じ取られたら、それを利用してドゥーブを支配下に置こうとする輩も出てくるかもしれない。ここはひとつ、やりすぎなまでに任務を遂行し、期待を上回り、いかにもたやすいことだという顔をしておいたほうがいい。

　それから七二時間後、ドゥーブは米国海軍のヘリの窓から、霧のかかったヒマラヤの渓谷をながめていた。ヘリは機体を傾けながら飛び、ブータンの滑走路に向かって最後のアプローチを試みていた。正しくは、ブータンのあの滑走路と呼ぶべきかもしれないが。

　ブータンの人口はおよそ七五万人で、〈クラウド・アーク〉の候補者を二人選べる権利をもっている。ただ、この数字はいささかいいかげんなものだ。もしこれと同じ比率を世界の国々に適用したら、全体で二万人の候補者が選出されることになってしまう。そうなると、ひとつの〈アークレット〉が五人を収容できるとして、スウォームには四〇〇〇の〈アークレット〉が必要になる。さらに、〈アークレット〉を軌道に乗せるためには、それぞれに重量物打ち上げロケットが必要で、〈イズィ〉に到達したら組み立てや準備作業もしなければならない。

　そんなことができるのか？　全世界の工業力を、ロケットと〈アークレット〉と、宇宙服、そのほか必要な物品の生産につぎ込んだらどうだ？　不可能ではない。だが、おそらくは無理だろう。ドゥーブが内々に聞いているかぎり、最近の見積もりによる数値は、その四分の一ほどだ。

　そもそも、〈アークレット〉に五人を収容することが本当にできるのか？　五人の人間が内部で動きまわ

るのに充分な空間は確かにあるが、食料生産を自給自足できるかどうかは、はっきりしていない。鉄道のタンク車ほどのサイズの円筒の中で持続可能な生態系を構築するのは、たやすい作業ではない。アリゾナの砂漠で行なわれた有名な実験、〈バイオスフィア2〉では、アメフトのフィールド二つ分の広さに生態系をつくり、それで八人の人間をサポートしようとしたが、長期的に機能させることはできなかった。ただしこの実験のミッションは、政治的な対立や、おかしなえせスピリチュアリズム的要因に邪魔されたところもあった。一方、ソ連が行なったもっと現実的なプロジェクトでは、人ひとりを生かすのに必要な酸素を供給するためには、八平方メートルの藻類——卓球台二面分ほどの池に浮いた藻——が必要だということがわかった。〈アークレット〉の硬質な内殻と、膨らませた外殻とのあいだには、充分すぎるぐらいの空間がある。だが、〈アークレット〉が食料も生産しなければならないとなると、ただの住宅以上のものが必要となる。

そして、こうしたことをいくら計算しても、何千という人間が実際に宇宙で長年にわたって生きていくことの複雑さに、対処することはできないのだ。ただ窒息や餓死を避ければいいというわけではない。人間には、薬や微量栄養素、レクリエーション、それに刺激が必要だ。生態系が機能しなくなれば、農薬、抗生物質、そのほか生産の難しい化学製品による修復も必要になる。〈アークレット〉をトラブルから守る推進エンジンにも燃料補給をしなければならないし、メンテナンスや修理を要する事態もありうる。完全に分散化した

〈クラウド・アーク〉という考えは、妄想でしかない。母船と支給品の集積場、修理場なしでは、維持は不可能だ。これに見合う最も妥当な候補は〈イズィ〉だろう。しかし〈イズィ〉は、そうした目的で設計されたものではない。〈ビタミン〉を詰め込んでなんとかしようとしてはいるが、宇宙では生産しようのない物品

が全部尽き、人間が一斉に死にはじめるまでの、時間稼ぎにすぎないのだ。

これについて気まずくなるような質問を受けたことが一度もないという事実から、〈アーキテクト〉たちもこのことはわかっており、取り組む気はあるが、世間の疑念や論議を引き起こしても助けにはならないので何も言わないだけだろう、とドゥーブは推測していた。すべてうまくいっているという素振りを演じるのが、ドゥーブの仕事だということも明らかだった。だからこそ今日も、ヒマラヤの王国ブータンから、二人の若い人間を連れて帰るのだ。

これから自分がやろうとしているささやかなパフォーマンスは、世界からやってくる二万人の人々が〈クラウド・アーク〉で幸せに暮らすための、助けになるだろうか？　頭の中の小さな"レインマン"がささやく声――「ドゥーブのDは疑い（ドゥビアス）のD」という声を閉め出し、そのことは考えないようにした（映画『レインマン』のような特殊能力を誰もが潜在的にもつという説がある）。

今乗っているヘリコプターは、二時間前、ベンガル湾に停泊している空母〈ジョージ・H・W・ブッシュ〉から飛び立った。ドゥーブの目に映る空母は、あと何カ月かのうちに自分が乗るはずの、軌道を描いて飛ぶ船と同じようなものに見えた。まるで完全に人工的な島のようで、何千人もの人間がひしめく、純粋なテクノロジーのかたまりだった。空母を動かす乗組員のプロフェッショナリズムや効率のよさは、驚くべきものだ。"クジ引き"で全世界から選ばれ、キャンプでたった一年の訓練を受けた人々が、宇宙で同じことを実現できるのだろうか？

あと三〇分もすればもう少し答えが見えてくるだろう、とドゥーブは思った。

海軍のヘリは、山々のあいだの霧がたちこめる谷に飛び込んでいき、蒸気やかすみを切り裂きながらしばらく進んだ。空港にある唯一の滑走路が、ぎょっとす

るほど近くに見えてきた。ヘリはターミナルビルの近くにぴったりと着陸するため、機首を上げげた。ドゥーブは歯を食いしばっている自分に気づき、リラックスしようとした。この場所をグーグルで検索した結果、五五〇〇メートル級の山々に囲まれていることや、ここに着陸する資格をもつパイロットは世界でもたった八人しかいないこと、そのパイロットたちでさえ、滑走路が陽の光に照らされていないときは着陸を避けるということを知ってしまったのは、失敗だった。海軍のヘリを操縦するパイロットはまた別の規範に従っているはずだが、それでもドゥーブにとっては、手に汗握るアプローチに違いない。こんなことでは、起爆性化学剤を満たした間に合わせのチューブのてっぺんに乗せられて宇宙へと放りだされたら、どう反応するだろうと考えずにはいられなかった。

シートの上で身体をずらすと、分厚いマニラ封筒がひざから落ちてバサッという音を立てたので、もう少しでタヴィストック・ナデウスを起こすところだった。タヴは飛行中ずっとドゥーブの向かいに座っていて、ここ三〇分ばかりは時差に屈して眠り込んでいた。特に背は高くないが、プロレスラーのようなたくましい体型をしている。後頭部のはげは、大学時代からすでにうっすらとあったもので、その後容赦なく広がっている。弾丸のようなかたちをしたその後頭部の周囲を短い髪が取り巻いていて、修道士が房縁のように残す髪に、似ていなくもない。そこから注意をそらすためか、大きな黒縁のメガネをかけている。一時は真剣にウェイトリフティングをやっていたが、ここ一〇年はぜい肉がついて太り、特に〈ゼロ〉以降はそれが加速している。いつも動きまわっているタイプなので、意識がない状態を見るのは妙な感じがした。

ドゥーブには、そのわけがわかっていた。タヴは選ばれたがっているのだ。勤勉に働き、ニュースを次々に供給し、ツイッターのフォロワーを増やしておけば、

ひょっとしたら大物の誰かが、〈クラウド・アーク〉にもプロのコミュニケーターが必要と考えるかもしれない――とにかくジャーナリストが必要だと。ドゥーブには見込み薄に思えた。タヴの前には、博士号をもった人々のみならず、ノーベル賞受賞者までが順番を待っているのだ。とはいえ、この先何があるかはわからない。それに、努力している人間を責めることはできないだろう。

　ドゥーブは身を屈めて封筒を拾った。一センチほどの厚みがある。きちんとしたブロック体の文字で『ブータン、パロ渓谷』と書かれたラベルが貼ってある。封は切っていない。本当なら、この何時間かのフライトのあいだに中身を読み、自分の任務についてよく知っておくべきだった。だが彼は、窓の外の霧深い緑の大地や、組紐のように絡み合いながらゆったりと流れるバングラデシュの川を見て過ごしていた。

　ヘリのドアが開くまでの二、三分で少しでも目を通そうと思い、拾い上げた封筒の封を切って書類の束を引き出した。今度はタヴも目を覚ましたが、動こうとはしない。ドゥーブが書類を読む様子を、じっとながめていた。

「もし赤、黄色、あるいは両方の色を着てるのがいたら、ラマだ」とタヴ。「お辞儀しとけよ」

「ラマって、南米のラクダじゃなくて？」

「Lがひとつだけのスペルだ。聖人だよ。手のひらを合わせて、小さく頭を下げるんだ」

「別に信者じゃないし――」

「お辞儀したからって死ぬわけじゃないさ。大判の黄色のスカーフを左肩にたらしてるのが国王だ。国王には深いお辞儀をしなくちゃいけない」

「わかった、ありがとう。ほかには？」

　ドゥーブの隣には、カメラマンのマリオが座っていた。三〇代で、短く濃い口ひげにニューヨーク訛り。どうあっても〈クラウド・アーク〉に行く見込みはな

さそうな男だ。ヘリが飛んでいるあいだ、ドゥーブと同じ書類のコピーを読み、あとはスマートフォンのゲームをやっていた。ドゥーブやタヴ以上にこの任務の場数を踏んでいる。そのマリオがスマートフォンをポケットに入れ、自分から話に割り込んできた。「向こうは何か物をくれます。みすぼらしくて古い、変な匂いがするものだったりもしますがね。彼らにはとても大事な物らしいです。本当に大事なんですよ」

「だったらなぜ――」

「あなたがそれを宇宙に持っていき、そこで保存してくれると思ってるんです」

「なるほど」

「誰かが何かくれたら、それがなんなのかまるでわからなくても、感銘を受けたふりをして、お辞儀をして、ていねいに受け取り、よくながめて、それからヘルパーの子供に渡せばいいんです」

「ヘルパーの子供?」

「あなたのあとをついていきますから、あなたがもらった数の貴重な宝物を運ぶのを手伝う人間です。あなたに贈られた物を管理し、このヘリまで持ってきます。あなたが国王やほかの人々にお辞儀をしたり握手をしたりするのに、手ぶらのままでいられるようにね。空母に戻ったら、もらったものは水中に捨てます」

「だいぶ経験を積んだようだね」

「これで七三回目の〝誘拐飛行〟ですよ。行きましょう」マリオは立ち上がると、カメラやバッグを振り、中身の位置を正すように叩いた。タヴとドゥーブはシートベルトをはずし、マリオの合図を待った。マリオがドアに向かって二歩進んだとき、パイロットがドアを開けた。松と石炭の煙の匂いがする、冷たく湿った空気が流れ込んできた。

　マリオが突然立ち止まったので、ドゥーブはぶつかりそうになった。振り返ったマリオは、ドゥーブの目を見た。「もうひとつ」

「なんだ？」

「これからひどく悲しいものを見ることになります。あなたが見たこともないような悲しいことかもしれない。気を強くもってください」

　マリオはドゥーブをじっと見つめていた。ドゥーブはうなずいた。「ありがとう」マリオは前を向き、ヘリを降りるハリス博士のいい写真を撮るため、すばやくドアに向かった。

　当のハリス博士は、開いている昇降口で立ち止まった。目の前に広がっていたのは、少なくとも二〇人以上の赤や黄色をまとった人々が、挨拶をしようと整列している光景だった。

　ドゥーブは胸の前で手のひらを合わせ、お辞儀をした。彼の前でマリオのカメラのシャッターがパシャパシャと音を立て出した。ドゥーブのうしろでは、実況ツイートをするタヴのスマートフォンが、小さな電子音を吐き出している。

　国王が個人所有のランドローヴァーを運転して山の上へ向かい、ドゥーブはその左側の助手席に同乗した――ブータンでは、車は左側通行だ。マリオは後部座席から両者が撮影できる位置に座り、タヴはマリオの隣でスマートフォンに向かって音声メモをつぶやいていた。天気がよければ周囲の高い山々のながめはすばらしいものだったはずで、国王は今日のぱっとしない天候を詫びた。

「ですが、もっと大きな計画のことを思えば、それも些細なことだと思います」国王はそう言った。

　車はパロの町の交差点で停まり、三人の少年がサッカーボールを蹴りながら目の前の道路を横断するのを待った。国王の車のうしろでは、ラマが多数乗り込んだトヨタ車が、小さな行列をつくってひしめいている。

「みな、あのシンプルな球技が大好きなのです」国王は考えにふけりながら言った。「もちろん彼らは知っ

CamScannerでスキャン

ています。災難がやってこようとしていることを、みんなが知っています。それについて考えるとき、人々は悲しみを覚えます。しかしそれ以外のときは、今ご覧になったとおり——忘れます」

少年たちは道路を渡りきり、国王はまた車をゆっくり進ませた。町は驚くほどにアルプス風で、風雨にさらされた濃茶色の木造建築が、石の土台の上に建っている。

「二、三日前までは」国王は言葉を続けた。「みな、自分が選ばれるかもしれないと考え、自分を慰めていたようです」

「〝クジ引き〟ですね」ドゥーブは言った。

「そうです」国王は鋭い視線をドゥーブに向けた。「あなたはご存じと思いますが、選出は私の責任で行ないました」それからタヴに目をやった。「これはオフレコでお願いします」

「いいえ、陛下、存じませんでした」ドゥーブは言った。

ーガイドラインでしたか、そんな名前の書類は受け取っています。これは文字どおりの抽選ではないとありました。偶然に任せるのではない選択がベストだと——最も優れた候補者を送らなければならないと。ブータンに割り当てられた〈クラウド・アーク〉の場所は二つだけです。国民の代表になれないような人間を送り、それを無駄にするのは、ばかげています。ですからこれは、選択的なプロセスなのです」

「たいていの人間は同じ結論にたどりつきますね」ドゥーブは言った。「見込みのある候補者を集め、そこから任意のプロセスによる選出を行なう——そうすれば、誰も全責任を負う必要がなくなります」

「国王であれば、好むと好まざるとにかかわらず、ときにはそうした責任を負わなければなりません。ただし今回の場合、一部のラマたちにも関与させています。こうした選出手順の前例として、転生ラマを決める方法があります——壺からクジを引くというやり方を用

いることがあるのです」
　タヴが思わず後部座席から質問してきた。「転生の教義においては、現在の人類が直面している状況はどう考えられているのですか？」
　国王は微笑んだ。「ミスター・プラウズ、この車で移動するのは、ほんの一〇キロばかりの距離です。これでもゆっくり運転していますが、もし一万キロばかりの旅をするというのなら――それも楽しそうだが――われわれにとっての転生というものが何を意味するのか、充分な情報をお伝えできますし、知的な会話が楽しめるでしょう」
「なるほど。すみません」タヴは国王が言葉を切って黙ったのを感じ取り、見ていたスマートフォンから目を上げた。「ご理解いただきたいのですが、私の仕事はオタクたちと交流することでして。彼らは数学が好きなんです。だから、ちょっと想像してみようと思いまして――」
「七〇億人が死に、生き残るのがわずか何千人ということになったら、七〇億の魂はどこへ行くのかとおっしゃりたいのですね？」
「そうです」
　車は主要道路と思われる道路をそれ、くねくねとした細い道に入ると、川の上流の樹木に囲まれた村落にやってきた。頭上数千メートルの高地にある氷河から緑と乳白色の岩粉を運んで流れる川に橋が架かっていて、そこから冷たそうな急流を渡ることができる。あと一年ちょっとでその氷河もなくなり、その下の岩が何百万年ぶりに露出するというのに、その記録を取ることができる科学者がひとりもいない――ドゥーブはいまだにその現実を受け入れられずにいた。
「私たちは、単純な輪廻転生――つまり、個人の魂がひとつの肉体から別の肉体に移動するといったことを、信じているわけではないのです。われわれの言う転生とは、そういうものではありません」

「それは、あなたが探しているものとはちがう」ドゥーブは黙った。タクは興味を失い、スマートフォンを指で叩いている。

「もっとうまくたとえるなら、新しいキャンドルに火を灯すために使う、燃え尽きそうな古いキャンドルといったところでしょうか。でも、これだという答えを教えることは私にもできませんね、ハリス博士。教義は難解なのです――未熟な者が誤った解釈をしないよう、あえてわかりにくくしてあるのです。正しい知識をもったラマが、七〇億人の魂の問題についてどう考えるかは、あなたがご自分の研究で学んでいる量子重力理論と同じくらい、私の理解を超えたことなのですよ」

今いる川岸は、地表がほとんど垂直に切り立っている。山の岩壁にはジグザグに遠ざかっていく険しい谷の裂け目が刻まれている。道路はまるで飛び込んでいくようにしてその中を進み、裂け目の中のわずかな隙間に生えた頑強な常緑樹が縁取る[illegible]の斜面を、スイッチバックしながらのぼっていく。岩壁を覆う霧が破れたヴェールのようにうねり、頭上高くに見える絶壁の上の白い塔を、ときおり垣間見せる。『われわれは世界との隔絶をここまで達成できる』と訴えんがために建てられた、ギリシャやスペインの修道院を思わせる建物だ。

長く続く緑の高台のあいだを上がっていき、これ以上は険しすぎて車では進めないというところまで来ると、国王はランドローヴァーを停めた。「心臓は丈夫ですか？」

「万全というほどではないですが」とドゥーブ。「心疾患などは特にありません」

「ここは標高およそ三〇〇〇メートルです。選ばれた人間たちを車の中で待っていてくださってもかまいませんし――」

「歩けます、ご心配なく」ドゥーブはそう言って、同

行者も目をやった。マリオは哲学的な身ぶりで肩をすくめ、タヴィストック・プラウズはいなくなったことに[illegible]ようだった。
　道を歩いているあいだ、側近のラマ、子供、カメラマン、ブータン軍の士官などが、敬意をもった距離を保ちながらついてきた。国王の話では、これから行くのは〝虎の巣穴(タクツァン)〟と呼ばれる場所で、ブータンの宗教上最も神聖な場所のひとつであり、第二の仏陀とされるグル・リンポチェが、虎の背に乗って八世紀にチベットから飛んできたとされる場所でもあるという。のちに、パドマサンバヴァ(グル・リンポチェのもうひとつの名前であるらしい)が長きにわたって瞑想した洞穴を囲むようにして、僧院の建物が建てられた。
　ドゥーブは、虎が空を飛べないことを指摘したりはしなかった。息を切らしていたせいだけではない。自分たちが歩いている場所があまりにも美しかったので、物語の整合性など、どうでもよくなったのだ。人里離れた地獄のような場所で宗教的なたわごとを聞いたところで、そこを観光地として推奨するかどうかは別の話だ。しかし、国王とともに地上の楽園(シャングリラ)を何時間か歩くためには、どんなおとぎ話や空想物語も黙って聞くべきだろう。
　何分か歩くごとに、霧の中から小さな僧院や祈禱所があらわれた。一行は途中で休憩を入れ、〝虎の巣穴〟が一望に見わたせる小さなカフェでお茶を飲んだ。タツは体力の限界に達し、これ以上は行けないと言い出した。ドゥーブとマリオ、そして国王は、僧院の門までのあやうい道を進んでいった。国王が前もって言っていたとおり、僧院は本来は立入禁止で、儀式の場としては見ばえも悪く、いくぶん窮屈で暗く、迷路のような古びた建物だった。岩場で暮らす隠遁者の僧たちは、壮大な儀式の中庭にあまり入ってこようとしない。
　かわりに、白い僧院の入り口前の岩棚には、いくら

CamScannerでスキャン

か広い空間があった。そこで待っていたのは、伝統的な衣装に身を包んだ、若い男女二人の〈アーカー〉だった。どちらも二〇代前半で、男性のローブはひざまでしかなく、大判の白いスカーフが肩から腰にかかっている。女性のほうは、カラフルな布をウエストに巻いた円筒形のスカートが足首まで届き、その上に黄色の絹の上着を着ていて、トルコ石やその他の色とりどりの石でできたネックレスが、首から何重にもたれさがっている。

もしアメリアがここにいたら、布の織り、刺繍、ジュエリー、たれさがっている布、配色など、さまざまな細かいことにひと目で気づいたことだろう。彼女なら、国王からサフラン色のスカーフをたやすく手に入れられるかもしれない。パロの町でランドローヴァーから降りて、サッカー少年たちと友だちになったかもしれない。ドゥーブではなくアメリアこそ、こうした仕事をやりとげるべき人間だ。

だが、〈クラウド・アーク〉に行くのはアメリアではなく、ドゥーブなのだ。

若い男女――名はドルジとジグミ――のうしろに、もっと簡素だが二人と似た服装の、革のような肌をした年配の人間たちがついていて、それがどうやら二人の家族らしく、そのほかに数名のラマがいた。マニ車（中にお経が入っていて、回転させると徳を積めるとされる仏具）が回り、僧院の中では鐘が鳴っていて、僧がお経を唱えている。

全員が泣いていた。

みな、国王にお辞儀をした。

タヴがここに来なくてよかった、とドゥーブは思った。

現地語によるやりとりのようなものが行なわれた。ドゥーブには言語の種類さえわからなかった。マリオはこの場面の感情的な意味合いに気づかず、走り回って写真を撮っている。ひざまずいたり、ときには地面に腹ばいになったりして、山の峰や寺院の屋根を背景

にしようと苦心していた。

何が行なわれているのかよくわからないドゥーブは、年長者たちの顔から目を離せなかった。彼らは、君主の前で落ちつきを保とうとしつつも、ひどい心の痛みにさいなまれながら、ドルジとジグミに永遠の別れを告げようとしている。自分の子が死ぬのを見るよりもつらいだろう、とドゥーブは思った。やがて結末が訪れ、確かなおしまいのときがやってきた。二人が霧の中へと姿を消すときが。ヘリコプターのプロペラの轟音が二人の出発のときを告げ、ドルジとジグミの家族は、彼らがブータンの文化遺産を存続させるために宇宙へ向かうのだという、曖昧な保証だけを手にすることになる。そんな保証が原則的にはいいかげんなものだということを、ドゥーブは強く確信していた。家族は一五カ月にわたり、そのことを信じて自分を慰めながら死に向かうことになる。

今やドゥーブは、自分の仕事をさらに明確に理解した。不運な地球の人間たちは、なぜ逆上もしないでいるのか？　確かに、市民暴動のたぐいは多少起きているが、人々が総じて驚くほど冷静に現実を受け止めているのは、なぜなのか？

今日のような催しが、二、三〇万以上の人口をかかえるあらゆる都市や地方で行なわれ、このシステムが機能しているということを人々が信じるよう、充分なお膳立てがなされているからだ。

子供のころ、ギリシャ神話の英雄テセウスと怪物ミノタウロスの話を読んだことがある。アテナイの人々は、何年かに一度クジ引きで七人ずつの少女と少年を選び、怪物の食物としてクレタ島に送らなければならなかった。よくできた物語だが、ひとつ弱点がある、とドゥーブはいつも思っていた。そんなことをする者がいるか？　自分たちの子供をクジ引きで選び、そんな運命のもとに送り出すような人間がいるものだろうか？

CamScannerでスキャン

だが、ブータンの人々はそうした。シアトルでも、ウルグアイ南部のカネロネス地区でも、ルクセンブルク大公国でも、ニュージーランドの南島でも。今後二週間のあいだに訪れる予定のどこでも、少女と少年がクジ引きで集められ、ドゥーブが連れ帰る。それで彼らを守れると信じられれば、人々はそうするのだ。

マリオが言ったとおり、ドゥーブはひどく古びた工芸品を、同じくらい古びた僧から贈られた。僧は泣き濡れた顔でドゥーブに微笑み、彼がマニ車と経典(スートラ)と彫像を受け取るのを確かめ、一歩下がってお辞儀をした。

国王はドルジとジグミの手を引き、嘆いている、あるいは幸運を祈っている人々に背を向け、ドゥーブに向かって『あなたの番ですよ』と言うようにうなずいた。

ドゥーブは最後にもう一度お辞儀をし、それから背を向け、彼らの先に立って山を下りはじめた。

第三〇六日

第二八五日に打ち上げられた〈アークレット1〉は、制御用エンジンに初期的な問題がいくつかあることがわかったため、〈クラウド・アーク〉史上最初の〈ボロ〉カップリングは、〈アークレット2〉と〈アークレット3〉で行なわれることとなった。〈アークレット2〉は第二九六日、〈アークレット3〉は第三〇〇日に打ち上げられたものだ。これら最初の三台の〈アークレット〉は、設計も競い合いとなり、どれも少しずつ異なるものとなっていた。だが問題はない。どれも別の工場に送り込まれ、別のスペースポートから別のタイプの重量物打ち上げロケットで発射される予定が組まれていたため、スタイルの小さな違いはあらかじめ見込まれていた。全般的には同じ形状で、どれも両端にドーム型のエンドキャップがついた円筒形をしている。人間を生きていられる状態にするという基本機能を実行するには、〈アークレット〉を与圧する必

要があり、圧力はどのみちすべてを円形にするため、必然的に形状もそうなるのだ。ダイナにはこの耐圧殻が、自分が育った田舎の採鉱キャンプの小屋やトレーラー住宅のそばにあった、大きなLPガスタンクに似ているように見えた。ほかの部分は鉄道のタンク車や、ずんぐりしたホットドッグを思わせた。

〈アークレット〉そのものは、巨大なアルミ缶にドーム型のエンドキャップを溶接したものにすぎない。缶の壁面はおよそ一ミリ程度の厚さだが、ドーム部分はもう少し頑丈にできている。いちばん厚く頑丈なのは、ドームが缶の両端とつながっている部分だ。炭酸のペットボトルと同じで、ふたがあいているときなら薄い壁面を片手で潰すこともできるが、加圧されていると驚くべき堅さと強靱さを発揮する。少なくとも、真空の宇宙と一ミリの壁を隔てた場所での生活に不安を覚える人々に、NASAはそう説明していた。

これら最初の三台の〈アークレット〉は、なめらかな"裸の"状態で打ち上げられたが、あとに続いた何百もの〈アークレット〉は透明繊維のジャケットを身にまとうようになった。大気圏を通過する際、ひだやしわで、その下のグラスファイバー製フェアリングを守る役目を果たすものだ。宇宙空間に出ると、このジャケットが膨らみ、内殻よりいくらか大きく柔軟な外殻を形成する。この透明繊維を通して拡散させた太陽光を使い、殻間のスペースで食物を育てる。ただ、各〈アークレット〉で自給自足の食料生産ができるかどうかは、まだはっきりしていない――おそらく無理だろう――が、何も育てないよりは少しでも育てたほうがいい。植物があるだけでも二酸化炭素除去装置の分の荷が減らせるし、人間と宇宙空間のあいだに水があれば、宇宙線の入射を防ぐ助けにはなる。

片側のエンドキャップにはドッキングポートがついていて、NASAの広報担当者が決めた〈フロントドア〉というおざなりな名称で呼ばれている。たったひ

とう存在するドアなのだから、適切とは言えない呼び名だ。いったん耐圧殻の内部に入った人間は、〈アークレット〉を空気のある何かにドッキングさせ、この〈フロントドア〉を通ることでしか、外に出ることはできない。

〈フロントドア〉の反対側のはじは〈ボイラー室〉と呼ばれていて、その外に据え付けたゴミバケツ・サイズの原子力発電機が、〈アークレット〉に動力を供給する。その周囲には配管ラインや電力の本線、冷却装置などを接続するためのさまざまな部品がついているが、多くの〈アークレット〉がドッキングして半永久的な集団になる場合以外、使われることはない。

ドーム型部分と〈アークレット〉本体をつなげている頑丈で分厚い複数のリングは、本体に対して大きな影響を与えるあらゆる種類の力との、接続ポイントの役割を果たしている。それぞれのリングからは八本の短く太い放射状のスポークが出て、光輪のような外側のリングに伸びており、そこに推進エンジンと、引っかけフックに似た器具がついている。これらの部分は、最初〈アークレット〉に積んで運ばれ、宇宙空間に出たら船外活動の担当者がドッキングポートと通じて抜き取り、無重力空間で固定する。光輪のようなリングは、〈アークレット〉の膨らんだ外殻を固く安定させるためのものでもあるが、最初の三台の試験ユニットでは、小型推進エンジンの噴射口にとめつけられ、配管のあいだを縫うようにして、自転車のリムのようにただ宇宙空間に広がっていた。

〈フロントドア〉の光輪と〈ボイラー室〉の光輪のあいだをつないでいるのは、細長くてきゃしゃなアームのようなもので、〝フロント〟つまり前端に蝶番で固定され、〈アークレット〉の横へおよそ一〇メートルまで伸ばすことができる。アームの先端にはカメラとターゲットと電気機械的な装置である引っかけフックがついており、まとめて〈かぎ爪〉と呼ばれている。

〈かぎ爪〉からアーム、そしてドッキングポート近くのリールへと、ケーブルが走っていて、リールは糸を巻くように二五〇メートルのケーブルを巻き取ることができる。アーム、〈かぎ爪〉、ケーブル、そしてリールは、これまで試したことのない、あるオペレーションを行なうために存在する。NASAの公式技術書には『〈ボロ〉カップリング・オペレーション』と書かれているが、一般には〈ハイ・ファイブ〉と呼ばれるオペレーションだ。

第三〇六日、〈アークレット2〉と〈アークレット3〉の組み立ておよびチェックが終わると、初めての〈ボロ〉カップリング・オペレーションが始まった。実施されたのは、〈イズィ〉から数キロ離れた場所でのことだ。失敗した場合に備え、静かに、ひそかに行なわれたものの、成功したときのためのビデオ画像も大量に撮られた。このオペレーションには、技術用語で言うところの潜在的な失敗モードが無数にあり、あまりにさまざまな可能性がありすぎてすべてを考慮するのは不可能だった。そのため、二台の〈アークレット〉には優れたパイロットが必要となった——軌道力学や宇宙船の推進について熟知し、不安定な〈アークレット〉を手動制御できるような人間が。そんな人間は数少ないし、そのうち〈イズィ〉にいるのは、たったの四人だった。地上では〝クジ引き〟で選ばれたたくさんの若者たちが、ビデオゲームのシミュレーションによってバーチャルに〈アークレット〉操縦術を学んでいるが、準備の整っている者も、軌道上に上がってきた者もいない。このため、アイヴィが〈アークレット2〉を操縦し、ダイナが同乗してアシスタントを務めることになった。〈アークレット3〉のパイロットは、最近到着した、元スイス空軍パイロットの宇宙飛行士マルクス・ロイカーで、ISSのミッションをこれまでに二度こなしたベテランだ。アルプスの渓谷で戦闘機乗りとして高度なパフォーマンスをこなして

CamScannerでスキャン

きた実績からも、この仕事には適任と見られた。マルクスのアシスタントは、二、三カ月前の〈パイオニア〉期に〈イズィ〉にやってきた最初の中国人宇宙飛行士のひとり、ワン・フーファだった。

よく眠り、軽い朝食をとったあと、四人のオペレーション要員は〈バナナ〉で顔を合わせ、地上のエンジニアたちともう一度詳細を確認した。それからスポークのひとつをのぼってH1の無重力環境に入っていき、〈スタック〉——宇宙ステーションの中心軸——へと滑空して上がり、作業区画や支給品一時置き場をくねくねと通り過ぎ、ドッキングノードにやってきた。そこを何度か曲がれば、ハムスター・チューブに入れる。四人は順にその中を這い進んでいった。ダイナはマルクスのあとの三番目だったが、そのあとをついていくのに苦労した。彼の足の裏がどんどん遠ざかっていく。

「ダウベンホルンにのぼるようなものさ」マルクスは途中でそう言った。「違いは重力にわずらわされないってことだけだ」

「ダウベンホルンって、山？」とダイナ。長いハムスター・チューブの中でむかむかしてくる胃をなだめるには、軽い会話が役に立ちそうだと思ったからだ。

「そう。ぼくは有名なクレッターシュタイクがある場所で育ったんだ——君もいつか来て試してみるといいよ」

最近〈イズィ〉に来たばかりの人間がおかしがちなエチケット違反のひとつに、またいずれ帰れるという口ぶりで地球の話をする、ということがある。これまでと同様、今回も一時的なミッションでここに来ているだけなのだと言わんばかりに。ダイナは黙っていた。マルクスもすぐに気づくだろうと思った。

「ああ、ええと」マルクスは気づいたようだ。

「クレッターシュタイクって？」ダイナは話を続けようとした。

「ワイヤーや梯子が設置された登攀ルートのことさ」

CamScannerでスキャン

「のぼりやすくするための？」
「いや、違う。簡単じゃないんだ。登山が不可能な山を、困難という程度にするための方法さ」
「なるほど」とダイナ。「あたしたちがやろうとしていることと似てるかもね」
「ああ、そうさ！」マルクスは陽気に言った。
四人はハムスター・チューブの合流点にやってきた。以前ここを通った誰かが壁に残していったフェルトペンのメモをしっかり確認したあと、四人はそれぞれの通路に向かった。ダイナはアイヴィの先に立って右へ進み、フーファアとマルクスはまっすぐ進んだ。ダイナとアイヴィは、すでに占有されている三つのドッキングポートを通過しながら、その向こう側のカプセルに住む人々とおざなりな挨拶を交わし、ハムスター・チューブの終わりにたどり着くと、そこのドッキングポートを通り抜けた。
直径四メートル、長さ一二メートル、LEDの青みがかった冷たい光に照らされた管状の空間に、二人はふんわりと入っていった。壁は円筒形をしたなめらかなアルミニウムで、バーコードが入っており、これを生産した工場のバッチ番号がホチキスでとめてある。長くまっすぐな溶接部分がはしからはしまで続いていて、その奥に平らなグラスファイバー製の格子――胆汁のような緑色をした、キャットウォーク（作業用の狭い通路）用の素材による円盤――があった。そのはるか向こうに、たくさんの配管や電気回路が挿入された〈ボイラー室〉のドームの曲面が見える。同じ素材の梯子が、そこから〝上〟の〈フロントドア〉に伸びていて、ダイナが、そしてアイヴィも、そこへ入っていった。ダイナの頭に、さっきマルクスが教えてくれたクレッターシュタイクのことが浮かんだ。重力、もしくは人工的に再現された重力がない場所では、梯子は必要ない。〈アークレット〉の奥にある格子が、最終的には床になるはずだ。

いや、床のひとつと言うべきだろうか――最下層階の床と、〈アークレット〉は最低でも五階層に分割されていて、それぞれの境界に格子の円盤がある。それを固定するくさび形の留め具が、一定の距離を置いて壁についているが、まだ格子はそこに入っていない。

ダイナは梯子のいちばん上の横木を押しやりながら、勢いをつけて〈ボイラー室〉の格子に向かって〝飛びおり〟、一回転して足を格子につけると、頭が〈フロントドア〉のある〝上〟に向くようにした。壁に据えつけられた数台のフラットパネル・ディスプレイが、ダイナの目の高さに来た。これらのディスプレイが、ドームの外側についた装置の状況を知らせ、コントロールパネルの役割を果たす。今重要なのは、小型原子炉の状態だけだ。それ自体もディスプレイを備えている。ダイナが指でディスプレイをタップすると、画面がスリープ状態から復旧した。ディスプレイは自動的にグラフィック表示を更新し、炉心にあるプルトニウム・ペレットの温度、現在の出力レベル、毎分の回転数と、熱を電力に転換するスターリング・エンジンの健全性指標、そして、バッテリーの充電レベルと、必要でないときにエネルギーを蓄え必要なときに解放する、電気二重層コンデンサーの変化レベルを表示した。すべて正常なようだ。これらがまずい状態になることは、まずない。新品なのだから。

ダイナは別のディスプレイのほうを向き、すぐ外の光輪に備え付けられた推進エンジンの情報を調べた。〈アークレット〉には窓が少ない。外が見える唯一の箇所は〈アークレット〉の前端で、二つの小さな舷窓から、ドッキング設備に隣接するドームが見えている。

片方の舷窓のすぐ下にあるのは、エンジニアたちが〝長椅子（カウチ）〟と呼んでいるものだが、むしろ、芝生の庭でなく宇宙にまぎれ込んだ高価なローンチェアと言ったほうがよさそうだ。アイヴィはすでにシートベルトでそれに自分を固定し、居並ぶフラットパネル・ディ

スプレイをスリープモードから目覚めさせている。コントロールパネルになっているプラスチックボックスのひとつに差し込んだヘッドセットのマイクに向かって、小声で何か言っており、それがダイナにも聞こえてきた。地上の管制センターとともにチェックリストを確認し、すでに〈アークレット3〉の制御室でシートベルトをつけているはずのマルクスと、会話をしているのだろう。

あたりを見まわしたダイナは、〈アークレット〉の中ほどの壁にあるちっぽけなプラスチック・ポッドにはめ込まれた、カラスの眼ぐらいの大きさしかないカメラのレンズが光るのを見た。

そのとたん、ダイナは理由もなく泣き出した。

これまで、涙を流す機会は少なかった。ルーファスからのモールス信号メッセージは、いつも涙腺の決壊を招いたし、アイヴィと一緒にいて誰もまわりにいないときは、お互いが涙を流すことを許していた。最近ではルイーザなどもその仲間に加わっている。とはいえ、やるべきことや対処すべき緊急事態はつねにあったし、いつも誰かがまわりで見ていた。プライバシーはなかったのだ。だからこの無人の〈アークレット〉は、ダイナが一年半前にバイコヌールでソユーズのカプセルに乗り込んだとき以来初めての、誰にもじゃまされない広い無人空間だった。ダイナには広大な場所に見えたし、ここでは自分ひとりだけなのだと思うと、我慢ができなくなった。カメラがあることも、アークイヴ用のデジタルビデオに記録されていることも、わかっていた。ヒューストンの心理学者が、今この瞬間にもダイナの任務適応度を調べているかもしれない。それもどうでもよかった。ヒューストンの人間からどう思われるかなど、ずいぶん前から気にしなくなっている。いったん泣き出すと止まらなくなり、しばらく泣きつづけた。自分の家族や現在の状況から、このアルミ缶のような〈アークレット〉の中で生活し死んで

いく〈アーカー〉たちのことまで、あてどなく考えをめぐらせた。これがだめなら――もし〈クラウド・アーク〉というアイデアが、一部の人々が言うようにただの使えない万能薬でしかなかったら――人の魂に刻まれる最後の考えや気持ちは、こことまったく同じような場所で生まれるのかもしれない。そして、自分がその人間になるのかもしれない。

無重力状態で泣く場合に困るのは、涙が頬を流れ落ちないことだ。目のまわりで小刻みに震える涙袋の中にたまっていくだけなので、首を振って振り払うか、何かで押さえて吸い取るかしかない。今はそれができるものが何もなかった。身につけているビニールの作業服の吸水性の悪さは、悪評高いものだ。だからダイナは、ただ〈アークレット〉の底を漂いながら、暖かく塩からい水のたまった目で、コントロールパネルの光を見ていた。

「あなたって、たいしたアシスタントだわよ！」しばらくダイナを放っておいたアイヴィが、呼びかけてきた。

「ごめん」ダイナはついそう言った。「重要なミッションなのに」

「装置をショートさせないようにして。涙は電気を伝えるわ」

「おしっこにも耐性があるようにつくってあるはずじゃない？　アマチュア向けに設計されてるんだから」

「わかってるわよ」アイヴィは鼻を鳴らした。「ユーザー・インターフェースがよすぎる。私がやることは何もないわ」

何か軽いものがダイナの頭に当たった。ユーザー・フレンドリーな原子炉のコントロールパネルにぶつかって跳ね返る白い物体が、涙の向こうにぼんやりと見えた。手でつかんでみると、パッケージに入ったティッシュペーパーだとわかった。ここでは貴重な品物だ。パッケージを破って何枚か引き出し、水滴を散らして

装置をショートさせたりしないようにしながら、涙の粒をそっと吸い込ませた。
「私が言いたいのはね、そんなんでマルクスがどう思うかってことよ」アイヴィの声がした。
ダイナはすぐに意味を理解できなかった。「マルクスと私が？　そういうこと？」
「見え見えじゃない」
リースとスリリングな何週間かを過ごしたあと、彼との関係は自然消滅した。それは別にいい。得やすいものは失いやすい、ということだ。長期にわたる安定した関係の相手だと思ったことはなかった。二人が過ごした時間も、過ごした場所も、長く続く絆につながるようなものではなかった。人類学者の立場にあるルイーザは、〈イズィ〉の住人の自発的な、そしてほとんどが長続きしない関係について、ドライな好奇心と科学的な関心と、率直で陽気な羨望をもって観察している。
「わからないな」ダイナは言った。「あんたが何を言いたいのかはわかるけど、彼、ちょっとカーク船長みたいで」
「小さなカーク船長が必要なのよ、あなたの……」
「私の何？」
「あなたの人生によ。リースはちょっと内省的すぎる」
「何が言いたいわけ？」
「彼、鬱よ」
「あああ、なんでかしらねえ」
「違うわ、そういう話じゃないのよ。世界の終わりとか、誰もが死ぬせいだなんて言ってない。リースは、プロジェクトに取り組んでるときは元気いっぱいなのに、終わるとぐったりしてしまうのよ」
ダイナは、彼のセックスのスタイルもそうよ、とあやうく言いかけたが、口を慎んだ。「この会話が全部記録されてること、わかってる？」

「慣れてるわ」アイヴィは言った。ダイナは、一二メートル離れたところにいるアイヴィが肩をすくめるのを感じ取った。「つかまってて。前部スラスターを点火するから——駐車場を出るわ」

これはジョークではない。推進エンジン(スラスター)に点火すると、ほとんど爆発のような現象が起きる。ダイナは何もつかまずにいたので、〈アークレット〉全体が後方に動くあいだ自分だけが静止していて、少しのあいだ方向感覚を失った。グリーンの格子がダイナから離れて遠ざかり、〈フロントドア〉が近づいてきた——とはいえ、すべてはとてもゆっくりで、ダイナはただ梯子に手を伸ばし、自分の相対的な動きをコントロールするために手を滑らせればよかった。何秒もしないうちに、〈アークレット〉の前端がダイナの近くまでやってきて、彼女はアイヴィのカウチの支柱を使って自分を止めた。その隣に、ロッククライミングのハーネスのようなストラップの結び目とパッドがあり、ダイナはそれを一、二分でほどいて身につけた。ストラップに自分をつなぎ、ヘッドセットをつけているあいだ、推進エンジンの爆音と、そこに連結された配管のシューシュー、カチカチという音、そしてアイヴィがマイクにつぶやく声が聞こえていた。このヘッドセットがあれば、ダイナ、マルクス、そして〈イズィ〉上の管制官とのあいだで、歯切れのいい軍隊スタイルのメッセージを聞くことができる。ヒューストンのエンジニアが何分かごとに、質問や展望を聞かせてくる。

いったん〈イズィ〉から離れると、少し高い軌道へ移るため、〈アークレット〉はプログラミングされた二、三秒の噴射を開始した。窓の外には、しばらくは何もない空間しか見えなかった。壁に丸い斑点が輝いているので、地球の周縁部から太陽がのぼってきているはずだ。

アイヴィの声がした。「〝スリー〟をレーダーで捕捉。MAP作動中」MAPとは監視自律操縦(モニタード・オートノマス・パイロッティング)

の略だ。これから彼らがやろうとしているオペレーション――〈ハイ・ファイブ〉――は、新米宇宙飛行士には難しすぎると言われている。すべてロボット操縦にすべきなのだ。だが、アルゴリズムや、パイロットに何が起きているかを教えるセンサーはすべて新しいものなので、ベテランのパイロットが制御室で窓から監視し、ロボ・パイロットがおかしなことを始めたら操縦を引き継ぐ必要がある。

推進エンジンが、また別のリズムで点火を開始した。人間の操作によるものとは、かなり異なる、小さな噴射音がパラパラと音をたてた。星空が窓を通りすぎていき、太陽光の斑が壁を回り、突然、二、三〇〇メートル離れたところにいる〈アークレット3〉が、回転しながら視界に入ってきた。向こうもMAPによる操縦で、〈フロントドア〉が進行方向に向くまで回転した。ダイナはマルクスとフーファに手を振りたいという衝動をこらえた。プロの振る舞いではないし、どのみちこんなちっぽけな舷窓から見えるはずもない。

〈アークレット3〉の脇からきゃしゃな白いアームが外向きに開き、特定の位置で止まり、片側に伸びた。少しして、こちらのアームも同じように発動する音がして、そのアニメーションがフラットディスプレイに表示された。

「〈かぎ爪〉のカメラを上げて」ダイナはそう小声で言い、アーム先端の望遠レンズからの高解像度ビデオがあふれんばかりに流れる、ディスプレイのコントロールパネルを叩いた。最初は何も表示されなかったが、やがて下の隅のほうに、地球の大気圏の青い周縁部が見えてきた。それからターゲットのような模様がディスプレイいっぱいに回り、スピードを落とし、逆回りを始めた。これらはすべて、推進エンジンから来る不安定な振動のせいで起きている現象だ。映像はとても精密で明瞭だった。舷窓からの直接のながめと比べているうちに、〈アークレット3〉の延長アーム先端の

ターゲットが、遠くにぼんやりと見えた。だが、彼らの小さな宇宙船をコントロールしている機械の視覚システムもすでにそれを見つけており、確認して、そして……。

「ロックした」アイヴィが言った。「見えるわ、〝スリー〟」

「こちらも見えるよ、〝ツー〟」マルクスが返事をした。「続行」

後部推進エンジンをもっと長く噴射し、前方に進むための手続きに移ると、ダイナの尻に圧力が感じられ、ハーネスのストラップがきつくなった。ターゲットがぐらぐらと揺れたが、少しするとふたたび固定された。〈アークレット3〉がしだいに大きくなってくるさまが、ダイナにも見えた。ディスプレイの数字、つまり宇宙船どうしの距離――厳密には、二台の宇宙船が伸ばした〈かぎ爪〉どうしの距離――の計測が始まった。

「すべて正常」アイヴィが言ったが、語尾は〈アークレット〉の原始的な発声装置から流れるディジタル音声のアナウンスに、かき消された。『〈ボロ〉カップリング・オペレーションは最終段階に突入。加速に備えてください』そしてNASA風の古典的なカウントダウンが始まった。『五、四、三、二、一、捕捉開始』

『一』のところでディスプレイのテストパターンが消えて暗くなったのは、カメラも接近しすぎて映せなくなったせいだ。〈アークレット2〉と〈アークレット3〉の〈かぎ爪〉が、すれ違うランナーが手を打ち合わせるかのようにぶつかり合った。泣き声のような妙な音がアームを伝わり、〈アークレット〉の硬い船体に届いた。

『捕捉完了』声が言った。

ようやくダイナは、泣き声のような音はスプールからケーブルがほどける音なのだと気づいた。〈アークレット〉は〈ボロ〉のパートナーのほうを向くために半宙返りで方向を変え、ダイナは胃が飛び出しそうな

気持ちがした。

この操作については何週間も学んだので、二台の〈アークレット〉がケーブルによって合体されたことはダイナにもわかっていた。両〈アークレット〉は互いにすれ違うように飛ぶが、ケーブルの張力が〈アークレット〉を回転させ、ふたたびお互いの方向を向く——そのことは、窓の外に見える〈アークレット3〉の先端が、自分たちからゆっくり"あとずさっていく"様子で確認できた。ドッキングポートの隣にあるスプールが動き、二台の宇宙船が互いから離れるにつれてケーブルがほどける。〈アークレット2〉と〈アークレット3〉のあいだのちょうどまん中で、それぞれのケーブルがカップリング装置によってつながれており、二台を引き離す場合、この装置を遠隔操作して連結を解除することもできる。

「おめでとう、〈ボロ〉ワン」ヒューストンのエンジニアが言った。「地球の重力と同じ人工重力を生む回転システムをつくるため、二台の宇宙船のカップリングを自律的に実行した初の事例です」

〈ボロ〉ワンの片割れの下を地球が通りすぎていくのが見え、ダイナは自分の喉が今から五分後に極限に達し、吐いてしまうだろうということを意識した。二台の〈アークレット〉はすでにお互いの周囲をゆっくりと回り、微小人工重力——〈バナナ〉で体験したものよりもさらに小さな重力——を生み出している。だが、MAPシステムはこれで満足はしなかった。二台の〈アークレット〉が充分に離れ、それぞれの推進エンジンの排気ガスからダメージを受けないようになると、システムが長期的な燃焼を開始し、ゆっくりとケーブルを繰り出して、四人の内耳を通じてわずらわしい変化を知らせてきた。ケーブルが末端まで来たときに引っぱられてダメージを受けないように、自動ブレーキがケーブルの繰り出しをスローダウンし、ケーブルのリールの音が変化した。その後、短い静寂ののち、ま

CamScannerでスキャン

た推進エンジンの噴射が始まった——〈ボロ〉の回転速度を上げるための、より長い、横向きの噴射だ。

最初の一分か二分、ダイナがかろうじて言えた言葉は、「ああ、くそっ！」だけだった。

彼らはここ一年で初めて、一G——地球の標準重力——を感じた。

何日か前に宇宙に来たばかりのマルクスは、元気そうだった。ヘッドセットから聞こえる様子で判断するかぎり、マルクスはパイロットの座席のストラップをはずし、あたかもダウベンホルンにのぼるかのように、〈アークレット3〉をよじのぼっている。

アイヴィとダイナは数分動けず、ダイナは自分が死にかけている可能性を深刻に検証していた。

「横になっているあいだに失神するってことはある？」ダイナはやっとそう言った。

「そのままでいてください」ヒューストンからのぼんやりとした遠い声が聞こえた。誰かが四〇〇キロ下から拡声器で叫んでいるみたいだった。「その〈アークレット〉の底への長い落下です」

長い落下。上や下という言葉で考えること自体、ダイナはもうだいぶ前にやめていた。落ちるという概念は意味のないものになっていた。軌道上にいるときは、誰でもいつも落ちている。それでも何にもぶつからない。ダイナはなんとか首を曲げ、〝下〟の格子をながめたが、そのせいで嘔吐袋を手にしなければならなくなった。

第三三三日

自分が人とたやすく心を通わせられるたちでないということは、ドゥーブには前からわかっていたはずだった。だが、地上で過ごす最後の一〇週間は、キャンプをしたいという自分の欲望が、家族に我慢の限界を超えさせてしまうのではないかと怖くなるほどだった。

それまで、ドゥーブにとっての満足のいくアウトド

ア経験とは、葉巻を吸い、ブランデーを飲みながら、ヨーロッパのホテルのテラスでのんびりすることだった。天文学者という職務柄、マウナケア山の頂上などの人里離れた場所に行くこともあり、そういうところではおとなしく外へ出て、何分か寒さに凍えつつ、すばらしい眺望や澄んだ空気を讃え、あとは屋内に戻ってワークステーションの前に座り、ディスプレイ上の画像をながめる。キャンプやアウトドア・ライフ全般は、ドゥーブの家族の娯楽には含まれず、一家はまともな屋根のある暖かい場所でドアを閉めきり、何もかも揃ったモダンなキッチンで大量の食料品を調理することのほうを好んでいた。生命科学や地球科学分野の同僚たちには、前もった予告抜きで、備蓄品を詰めたバックパックを背負い、危険で冒険的な生活を風変わりな場所で営むために旅に出る人たちもいた。ドゥーブはそんな彼らに敬意を抱いていたが、あくまで遠巻きに見るだけだった。

ヘンリーとモーゼズ・レイクに滞在したことが、遅ればせながらアウトドア・ライフへの関心に火をつけ、ドゥーブは最先端の装備品をたくさん手に入れ、奇妙なぐらいそれを使いたくてうずうずした。ブータン訪問も引き金となった。それ以前に、太平洋横断の長時間フライトや、航空母艦での短期滞在を味わったことも影響した。狭苦しく混み合った人工的な環境は、ドゥーブが残りの人生をすごす場所と似ている気がした。その後のあの神聖な数時間、ヘリコプターからブータンの冷え冷えとした高地に降り立ち、国王のランドローヴァーに揺られ、一九七〇年代のアルバムジャケットから出てきたような霧深い山をのぼったときのこと。そしてドゥーブは、あんな美しい場所さえもそのまま受け止めることができず、ただポップカルチャー的なたとえしか、もち出せなかった自分について内省した。さらに何時間かのち、ドルジやジグミのほか、ミャンマー、バングラデシュ、ネパール、インドの各地方、

CamScannerでスキャン

スリランカ、点在する島々から同じようにして集められた一〇〇名ほどの〈アーカー〉とともに、航空母艦に戻った。故郷の断崖のそばで初めて会ったときのブータンの若者たちは、実に安定し、自然で、素朴に見えていた。だが、空母の塗装スチールの階段で同じようにカラフルな服装をし、それぞれの祖国の土地（ネイティブ・ソイル）から離れ、自国の貴重な文化遺産を保存しようとしているほかの南アジアの若者たちと合流したときは、なんとも途方に暮れて見え、ドゥーブはそのコントラストに衝撃を受けたものだった。

ドゥーブは、ドルジやジグミと同じように自分も打ち上げられた先で途方に暮れてしまう前に、少しでも祖国の土地に触れておく必要があるという気持ちを抱いた。それが正しいことなのだと。だが、空母〈ジョージ・H・W・ブッシュ〉の軽食堂のひとつでコーヒーを飲みながらタヴにその話をすると、彼は反対した。

「君は土というものをロマンチックに考えすぎてるんだよ」

タヴはわざと異論を唱えるのが好きだ。タヴとドゥーブは、こうした会話をこれまで何度もしてきた。ドゥーブは肩をすくめた。「その意見が正しいとしよう。まだ土をさわれるうちにさわっておくことで、どんなまずい事態になるっていうんだ？」

「破傷風菌は？」

「ああいった場所に送られる前に、最新の予防注射ぐらい受けさせられたよ」

「いや、真面目な話、おれはだまされないからな、ドゥーブ」

「だまされないって、何が？　何をだまそうとしてるって言いたいんだ？」

「人間がそこで生きていくよう定められた自然環境というものがあるって考えを、おれに押しつけようとしてるんだ。『土はいいものだ』っていう仮説をね」

「だけど、人間が田舎のアウトドア環境で進化してき

たことは確かじゃないか。ある意味、そういう場所は人間にとって自然なんだよ」
「いや、人間は進化したんだ、ドゥーブ。もう動物じゃない。こういうものをつくれる有機体に進化したんだよ」タヴは、周囲に見える空母の塗装スチール部分を手ぶりで示した。「あるいはこれとか」と言うと、コーヒーカップを持ち上げてドゥーブのカップに音をたてて打ちつけた。
「それはいいことだって言いたいわけだな」
「ハイエナにズタズタにされるのと比べたらか？　ああ、間違いなくいいことだよ」
「別にハイエナにズタズタにされに行くわけじゃない。キャンプに行くだけだ」
タヴの微笑は、いくぶん無理に浮かべたものにも見えた。『どうやらおれの言ってることがわからないんだな？』と。そして言った。「いいか、シンギュラリティってものについてのおれの意見は知ってるよな。精神転送（アップローディング）についての」
「そりゃ、それを書いた君の本の推薦文を書いたからな」
「ああ、その節はありがとう」タヴが言っているのは、人の脳は総じて、デジタル化してコンピューターにアップロードできるという考えだ。これがいずれ大規模なかたちで行なわれる日が来る、実際にはもう起きているかもしれない――本当のところ、人はみな大規模なデジタル・シミュレーションの中で生きているのかもしれない、と。
ドゥーブはふと気づいた。「ブータンの国王に輪廻転生について聞いたのは、そのせいか？」
「それもある。いいか、おれが言ってるのはな、君が何か考えてるとしたら、それはおれがすでに考えてたことだってことだ。つまり――」
「もし君がシンギュラリティ・クールエイドを飲んでたら、っていう意味か？」

CamScannerでスキャン

「そうさ、ドゥープ、つまり、おれがすでにやったあとに、今度は君が"自然児"になるための一歩を踏み出した。おれはもう、自然児になる気はまったくない。人間の頭脳はほとんど無限の順応性をもっていて、何日、何週間かのうちに〈クラウド・アーク〉の生活に慣れると、おれは思ってる。自分が育ってきた文明から、いっせいに別の文明に向かうってだけのことだよ。人が自然について考えていたことは、全部忘れ去られる。今から一〇〇〇年後の人間は、〈アークレット〉で眠って、タン（NASAジェミニ計画で宇宙飛行士が愛飲したフルーツ味の粉末ドリンク）を飲んで、チューブの中に小便するっていう"キャンプ旅行"をするようになるよ。自分たちの先祖がやっていたようにな」

「彼らにとっては、それが自然回帰体験になるというわけか」

「確かにそうなっていくんだろうね、おれたちは」

ドゥープはよほど、あの有名なジョークで切り返そうかと思った。「"おれたち"って誰のことだよ、白人さん？」と。だが口には出さなかった。

その後の二、三週間にわたり、ドゥープは世界のさまざまな場所へ行き、カメラマンのマリオが言っていた"誘拐飛行"の任務をこなした。地上での残り時間を〈アーカー〉訓練キャンプですごし、軌道力学を教える精巧なビデオゲームをやらなければならない、気の毒な人々を集めてまわった。タヴィストック・プラウズもそのいくつかに加わった。それ以外のときのタヴは、空母で彼が話していたようなテーマについて、ソーシャルメディアに投稿していた。ドゥープはそれをクリックしながら、そうした投稿の読者数の多さにいつも感心した。タヴはフォロワーを増やし、来たるべき宇宙ベース文明の社会学における、重要な学者という評判を得るようになっていた。

二、三日の休暇が取れると、ドゥープは自分の子供たちの誰かが暮らす場所を訪れ、彼らをキャンプに連

れ出した。
ヘンリーはモーゼズ・レイクに家をもち、今の世界で可能なかぎりという意味ではあるが、そこに永住する気でいた。ヘンリーは末っ子で、真ん中の娘のハドリーはバークレーに住んでいる。彼女はオークランドにある組織のボランティア仕事をしており、自由な時間はいくらでも取れた。ドゥーブはよくハドリーを、タマルパイス山へのハイキングか、少し遠くのシエラネヴァダ山脈に連れだした。いちばん上の娘ヘスパーは、ワシントンDCの郊外で、ペンタゴン勤務の軍人であるボーイフレンドのエンリケと暮らしている。

〝最後のキャンプ旅行〟は、一〇月の上旬だった。ドゥーブにはまだ二、三週間ほど時間があったが、その大半は訓練と、テレビで訓練についてしゃべることに取られるのはわかっていた。そのあいだにうまく休むことは可能だったし、たまに午後のハイキングに出かけることもできなくはない。だが現実には、次に寝袋の中で眠るのは、窓のないアルミニウム缶のこぢんまりした環境で、無重力の状態でということになりそうだった。

おそらくはそれを感じてか、アメリアが突然飛行機でやってきた。本来なら学校で教壇に立っている時期だが、そのスケジュールも流動的になっていた。この先あまり長く生きられず、知識を使う機会もない子供を教育することの価値について、幻想をもちつづけるのは至難の業だ。受験準備をしていた標準テストもなくなった。アメリアの言葉を借りれば、ある意味ではこのせいで、教育界にルネッサンスのようなものが起きていた。テストで高得点を取る、大学に合格するといったプレッシャーからも解放され、生徒たちは学ぶために学ぶようになった——本来の教育のあるべき姿だ。分刻みのカリキュラムは消え、毎日教師と親が即興で考える活動に取って代わられた。山道のハイキング、〈クラウド・アーク〉に関するアート・プロジェ

クト、心理学者と行なう死についての対話、お気に入りの本を読む時間。見方によっては、アメリアやその同僚たちがこれほど必要とされているときはなく、彼らの資質を示す絶好の機会でもあった。それと同時に、日常の業務はゆるいものとなり、二日ばかりの休みを取ったアメリアがワシントンDCに来てドゥーブを驚かせ、ドゥーブやヘスパーやエンリケと一緒に山にドライブに行き、紅葉を楽しむこともできるようになった。

　ドゥーブはこれまで、エンリケと親密に接したことがなかった。ブロンクス生まれのエンリケは黒人とプエルトリコ人のハーフで、いかにも米国陸軍の軍曹という男だ。だが、レンタルしたSUVの後部ドアを開けてその下に座り、毛布にくるまってアメリアと寄り添って、見事に秋色に染まったなだらかな山の眺めに目をやりながら火鉢の上でソーセージが焼けるのを待っていると、エンリケにも普通の親しみを感じるようになった。エンリケのほうも、ドゥーブの気持ちが解けていくのを感じたようだった。

「宇宙には、何をしに行かれるんですか？」とエンリケが尋ねた。

　ドゥーブがここ一年でどれだけ変わったかは、そこで嘲笑的に鼻を鳴らしたりしなかったことでもわかる。表情ひとつ変えなかった、というか、変わらなかったはずだと自分に言い聞かせた。その確認を求めて、隣に座っているアメリアに目をやった。アメリアはこれまでもずっと、ドゥーブを助けようとしてくれた。子供たちのためよ、と彼女は言った。『あなたがどう考えるかじゃないの、デュボア。あなたがどう感じるかでもない。あなたは問題じゃないの。科学の問題ですらない。今大事なのは、私のクラスの子供たちが何を願うべきかを話すということ。だから、黙ってそうしてちょうだい』

　大事なのはそういうことだ。本心を隠せというので

CamScannerでスキャン

はない。自分の感情をうまく隠せれば、実際に自分は変わっていく。何カ月か前のドゥーブなら、つい冷笑を漏らしていたはずであり、エンリケにも気づかれただろう。何カ月か前のドゥーブなら、なぜ自分がシニカルになるのかの細かい説明を始め、〈クラウド・アーク〉が即興でやっているサバイバル実験でしかないこと、ほとんど勝算はないことを断言していたかもしれない。

しかし、そうはしなかった。ドゥーブは、顔の一方が青みがかった薄暮に染まり、もう一方は石炭の放つ光に照らされているエンリケとヘスパーに目をやり、質問に答えた。インターネットのストリーミング動画用カメラの前に立っているときと同じように、静かに語った。「宇宙の資源は基本的に無限でね。それは月が壊れる前からわかっていたことなんだ。月はピニャータ(メキシコでクリスマスなどに菓子や果物を詰めて天井から吊るす壺。子供が割って楽しむ)のように割れてしまった。適切な構造物を建設しなければならない——空気があり、地球の遺伝子を引き継いでいるものを育てられる、密閉された居住地がね。時間はかかるだろうし、最初はきつい時期が続く。〈ハード・レイン〉が始まれば、すべてに別れを告げなければならないし、感情的にもつらいと思う。〈アーカー〉が協力し合ったり、つらい判断を下すことを学んでもなお、厳しい時間は続くだろうね。これは人類が直面した最大の試練だ。しかし、われわれは生き残る。宇宙にあるものを活用して、〝われわれの遺産〟を保存しておくための場所をつくったり、地球から運んだものを改良したりする。最後にはきっと、われわれが帰れる日がやってくる。〈ハード・レイン〉は永遠には続かない。むろん、人の寿命の何倍もの時間は続く——今まで人間の文明が存在したのと同じぐらいの時間はね。そしてそのあとには、熱い岩だらけの荒地が残ることになる。だがそのころまでには、何世代もの人間が、今と同じぐらい、いや、ひょっとしたらそれ以上にす

ばらしい世界を再生するために、自分たちの希望のすべて、創造の才能のすべてを捧げているはずだ。われわれは戻ってくる。それが真実の答えだよ、エンリケ。われわれは生き残れるのか？　生き残る。ぎりぎりの仕事になるが、必ず生き残る。宇宙に居住地をつくれるか？　もちろんだ。最初は小さなものだが、いずれ大きなものになる。ただ、それがゴールじゃない。本当のゴールにたどりつくには何千年もかかる。本当のゴールは、もう一度地球をよみがえらせ、もっといい場所にすることだ」

　こんなふうにドゥーブがしゃべったのは、初めてのことだった。だが、最後というわけでもなかった。その後の二、三週間――ドゥーブの地上最後の時間――にわたり、テレビカメラに、大統領に、訓練中の〈アーカー〉で埋まったスタジアムに向かい、ドゥーブは何度もこれを繰り返すことになる。しかし、今このときのドゥーブにわかったのは、エンリケが『きっと大丈夫だ、ドゥーブは信じている』と言わんばかりにうなずいたこと、そしてヘスパーがエンリケのたくましい肩に頭を寄せ、涙に光る瞳で、父が語った想像の世界に思いを馳せたことだけだった。

　そのヘスパーの背後、大西洋の上で、黄昏の空を切り裂くようにして、隕石が爆発するのが見えた。

〈クラウド・アーク〉

第三六五日

「今日は、軌道に〈アークレット〉の群れ（スウォーム）を置くということか、実際にはどういうことなのかという話をします」著名な天文学者で科学評論家のドク・デュボアが言った。現在彼は、〈イズィ〉とドッキングしている〈アークレット2〉の中央を漂っている。与圧服を着ているが、はずしたヘルメットは腕の下にぶら下がっている。〈アークレット〉に備えつけのハイビジョン・ビデオカメラのひとつに向かってしゃべっていて、どこかにあるコンピューターがその場面を記録しているはずだ。

「カット」ドゥーブは言った。そして少し恥ずかしくなった。自分で自分のビデオのプロデュースと編集をしているので、「カット」は自分に向かって言っているだけだ。宇宙には、自分について歩いてくる撮影クルーも、カメラマンも、制作助手も、メイクアップ・アーティストもいない。そのほうがいい。とはいえ、部屋にせめてあとひとりぐらいいて、自分の言葉に反応してくれたらありがたいとは思う。アメリアがそこにいて、静かに首を振ったりうなずいたりしてくれたら。そのかわりに彼は、晴れた火曜日の午前中、サウス・パサディナの教室で、アメリアの生徒たちに授業をしている自分を想像しようとした。自分の言葉を彼らの身になって感じようと。

『実際にはどういうことなのか』というのは、なんだか懐疑的な言いまわしだ。まるで、ここまでの話がすべて嘘っぱちであるかのようだ。それに、『軌道』も必要ない。〈アークレット〉が軌道を描いていることぐらい誰だって知っている。

「今日は、〈アークレット〉のスウォームをもつとはどういうことなのか、という話をしようと思います」ドゥーブは言った。「通常の宇宙では、地球上と同じように、何かが存在する場所を伝えるために三つの数字を使います。左右、前後、上下をあらわす数字です。ハイスクールの幾何学でやったx、y、z軸ですね。これはそのまま軌道には適用できません。〈アークレット〉のような物体がどの軌道にあるかを完全に特定するためには、六つの数字を使わなければなりません。このうち三つは、位置を示します。残りの三つは速度です。同じ六つの数字を共有する二つの物体があれば、どちらも同じ場所にあるということです。今現在、私の六つの数字は、私が浮遊しているこの〈アークレット〉と同じで、われわれは一緒に宇宙を移動しています。ですが、ひとつ以上の数字が違うなら、私は宇宙を漂流しているということです」

ドゥーブは小さな圧縮空気の缶を持っていた。エンジニアが電子機器などからほこりを吹き飛ばすために使うものだ。それを〈アークレット〉の船尾の方向の"下"に向け、ボタンを押した。シューッと音を立てて空気が出ると、ドゥーブは〈フロントドア〉側の"上"にふわりと舞い上がった。前方隔壁に向かって上昇する勢いを和らげるため、片手を頭上に上げ、それから別のカメラを見た。

うまくいった。これが三度目の試みで、缶の空気もなくなりつつある。

「耐圧殻に閉じ込められた状態では、そう遠くまで漂流することはありません。が、私が止まることができない場合――たとえば宇宙遊泳をしている場合――には、遠くまで漂流することもありうるというのはわかると思います。軌道力学に従えば、今の私のように、〈アークレット〉内部の空洞にいて重力中心が一致しているというケースを除いては、軌道にある二つの物体が同じ六つの数字をもつことはありません。〈アー

クレット〉やそのほかの物体が、〈イズィ〉の左舷か右舷、もしくは天頂か天底、もしくは前方か後方にずれた場所にあれば、当然ながら異なる数字をもつことになります。軌道も異なります。そして、漂流していくのです」

　ドゥーブは頭の中のメモを確認した。この漂流の性質について、ここでもっと明確にしておきたいところだ。もっと高い軌道なら、後方に取り残される。もっと低い軌道なら、前方に突進していく。どちらか片側にずれていれば、九三分の周期で収束してから逸脱する。まっすぐ前方、あるいはまっすぐ後方に進んだときだけ、同じ相対位置を維持する。だが、それはまた別の、もっとグラフィックスを使ったビデオをリンクしてもいい。ここは要点に進んだほうがよさそうだ。

「重要な点は何か？　宇宙においては、編隊飛行といったものは存在しません。二つの近接した物体は、物理的に近づくか離れるかしかないのです。スウォームのかたちで編隊を維持したければ、選択肢は二つだけです。〈アークレット〉を物理的につないでひとつの物体にするか、推進エンジンを使って漂流を補正するかです」

　さらにもうひとつ、列車のように一列につないでしまうという選択肢もあるのだが、あまりスウォームらしく見えないので、ここでは数に入れないことにした。たぶんビデオをアップしてから何分もしないうちに、怒り狂ったユーチューブのコメンテーターたちが襲いかかってきて、間違いを指摘し、不正直、無能、陰謀のいずれか、もしくはすべてのせいにすることだろう。

　ドゥーブの最後の仕事は、ナレーションの録音だった。ヒューストンやバイコヌールで訓練のためだけにつくられた巨大なゲームセンターのような場所で、若い〈アーカー〉たちが訓練をしている場面にかぶせるための音声だ。「これを学ぶことは難しくはない——ビデオゲーマーならすぐにコツをつかめるだろう。世

界中から集められ、〈アークレット〉の操縦技術を磨くために精密なシミュレーターを使っている、若い〈アーカー〉たちに聞いてみるといい。〈アークレット〉の飛行時間の多くはもちろん、オートパイロットによる自動飛行だ。が、人間が制御する必要がもし出てきたら、そのときはこの若者たちがやらなければならない」

この仕事も終わると、ドゥーブは自分のタブレットを〈アークレット〉の無線ネットワークに接続して、何分かかけて動画ファイルをあちこちに移し、あとで編集できるようにした。サムネイルの静止画像を見て、自分の顔の丸さに驚いた。〇G状態では組織を通じて液体を振り分けることを身体が抑制するため、こうした兆候がよく見られるのだ。ここに来たばかりの新米という印だった。ドゥーブが宇宙に来て、六日がたつ。今はA＋1・0。アシニーアムにいて月が壊れるのを見た日から、一年が過ぎた。

さらに新しいモデルが出てきて時代遅れとなった〈アークレット2〉は、巨大トラスの左舷側、ハムスター・チューブのはしにドッキングしている。遅かれ早かれ、余剰品の保管庫か、睡眠区画として使われるようになるだろう。ドゥーブはドッキングポートを抜け、ハムスター・チューブに向かおうとした。ここへ来るときにわかったことだが、これには少し時間がかかる。チューブは、ポリエステルの作業服を着た細身の人間がかろうじて通れるだけの広さしかない。与圧服を着た大柄な人間は、あちこちぶつかったりこすったりする。それでも、脱いだ与圧服を引きずっていったり、無重力空間で殺人者が死体を捨てようとしているかのように前へ押していったりするよりは、与圧服を着用していたほうが楽なのだ。

何分かして、〈イズィ〉の中心軸のすぐそばにあるノードにたどりつくと、空間が広がって動きやすくなったので、ドゥーブは与圧服を脱ぎはじめた。大きな

CamScannerでスキャン

バックパック式の生命維持システムがついた完全装備の宇宙服でないため、ハムスター・チューブでもかさばらない。高高度パイロットが着るタイプの、ヘルメットのついた作業服だ。ただ、空気の漏れ穴があるため、コスチュームとしてしか役に立たない。これを脱ぎ捨てるのはほとんどレスリングの試合のようで、悪態をつきながら浮遊し、壁にぶつかるはめになる。

　ちょうどそのとき、誰かが与圧服のうしろ襟を強く引っぱってくれた。服から身をよじって抜け出せるぐらいまで引っぱってもらったので、腕が自由になった。

「ありがとう」と言って肩越しに振り返ると、そこには困惑したように自分を見つめているなじみ深い顔があった。

「ストームトルーパーにしては、ちょっと小柄じゃないですか?」

「モイラ!?」ドゥーブは声を上げた。壁のハンドルをつかんで身体を回転させ、相手の顔をよく見ようとした。今のレスリングのせいでメガネが傾いていたので、鼻の上に押し上げた。相手も明らかな丸顔になっていたが、確かにモイラだ。

　モイラ・クルー博士に最後に会ったのは、クレイター湖でのあの発表のときで、彼女は自分の師であるノーベル賞遺伝学者クラレンス・クラウチの助手として、その場にいた。気の毒なクラレンスは、〝クジ引き〟について世界に説明するという仕事を与えられていた。その後クラレンスは、〈ハード・レイン〉が始まったらまず保存の不可能な、生物学の標本や科学的な記念品に満ちたケンブリッジの自宅で、ガンのため亡くなった。彼にとってはよかったに違いない。ドゥーブはその後のモイラの消息を知らずにいたが、地球上の全人類の中でも、モイラは明らかに〈クラウド・アーク〉に加わるべき人間だった。西インド諸島の血筋を受け継いでいて、髪は指の長さほどのドレッドロックスにしており、無重力でも順応性が高そうなヘアスタ

CamScannerでスキャン

イルだ――白人の髪よりは間違いなくいい。ムーンフェイスのせいで本来の年齢より二、三歳老けて見えるが、二〇代後半のはずだ。ロンドンの危険な地域で生まれ育ち、奨学金で上流階級の学校へ進み、オックスフォード大学で生物学の学位を取った。さらに博士号を取るためにハーヴァードへ進み、絶滅種の再生プロジェクトに参加した。おしなべてカリスマ的な資質と、アメリカ人が魅力的に感じるアクセントのおかげで、モイラはそのプロジェクトで最も有名なスポークスパーソンとなった。TED（毎年大規模な世界的講演会を開催しているアメリカの非営利団体）のプレゼンテーションなどの公の場に登場し、自分たちのラボの研究によって毛深いマンモスを生き返らせたいと語った。しばらくシベリアに渡り、絶滅した大型動物相をよみがえらせて自然保護区をつくりたがっていたロシアの石油億万長者のために働き、それから英国に戻って、クラレンスとともに博士課程修了後の研究を開始した。

ドゥーブが知らないあいだに〈イズィ〉に来た仲間と驚きの再会を果たしたのは、これが初めてではなかった。こういうときの振る舞いは難しい。ケンブリッジでのパーティーや、ニューヨークの通りで知り合いに出くわしたときのように、喜びをあらわにして相手を抱きしめたい気持ちは湧く。ただ、楽しい仕事をしにここへ来ている人間などひとりもいない。そうでなくてもモイラは真面目で、距離を置こうとする雰囲気があった。

それに、無重力空間で人を抱きしめるのは、言葉で言うほどたやすくはない。まず相手に近づかなければならない。

ドゥーブは両腕を広げた。「ハグだ」

モイラも同じようにした。「ここではこうやるんですか？」

「ときにはね。モイラ、PCA、会えてうれしいよ」

PCAとは、『現在の状況はさておき（プレゼント・サーカムスタンシズ・アザイド）』の略で、

CamScannerでスキャン

フェイスブックやツイッターでよく使われている。
「あなたがいらしたとは聞いてました」とモイラ。「あまりに仕事に没頭してたもので、忘れてしまって」

「想像はつくよ。私は〈クラウド・アーク〉の売り込みで走りまわっていたが、君は実際に科学的な仕事をしてたんだろう？」

「準備を整えることのほうが、正確さを要求されるのかもしれません」オタク的だがスタイリッシュなメガネの向こうで、大きな茶色の瞳がどこかほかの方向を見た。「向こうが〝前部〟と呼ばれている場所ですか？」

「そうだ」

「私が働いているところは、これ以上は行けないというほど前方にあるんです。ラボを大きな岩で隠すためです」

「アマルテアか」

「ええ。行けば、私の仕事を少しはお見せすることもできます。本当はお茶でもごちそうしたいのですけれど、ここではどうやって淹れたらいいかわからなくて」

ドゥーブはモイラの話し方に微笑んだ。彼女はオックスフォードにいたころ劇場通いに熱中していて、ひょっとすると女優にぐらいは、なれたかもしれない。ロンドンの知り合いたちの話し方と、学校やオックスフォードの人々の話し方に大きな違いがあることを強く意識し、効果的にアクセントを切り替えるすべを心得ている。「見せてもらえるとうれしいね」とドゥーブは言った。「君が言っているモジュールのことなら、私も知ってるものじゃないかな。何日か前にドッキングするところを見たし、興味があるんだ」

モイラのラボの壁に吊るされたドゥーブの与圧服が、無気力なオブザーバーといった感じで見守る中、彼女

CamScannerでスキャン

は研究施設を案内してくれた。生命科学にはまったく門外漢のドゥーブにとって、モイラの説明はほとんど理解不能だが、かまわなかった。ほかの誰かが科学について説明するのをリラックスしながら聞くのは、歓迎すべき気分転換だった。

「クロアシイタチって、ご存じですか？」モイラが尋ねた。

「いや」とドゥーブ。「生物学や遺伝学について質問されても、私の答えはまず全部ノーだな」

「クロアシイタチの食物の九〇パーセントは、プレーリードッグなんです。農家がプレーリードッグをほとんど殺してしまったせいで、クロアシイタチの数が七匹にまで激減しました。それだけの種畜から繁殖させなければなりませんでした」

「ほう、たった七匹……じゃあ、近親交配が問題になったんじゃ？」

「ヘテロ接合性という言葉があります。ひとつの種の中の、遺伝的な多様性の量のことです。全般的に見て、多様性があるのはいいことなんです。これが少なすぎると、近親交配にともなう、さまざまな問題が出てくるようになります」

「でも、種畜が七匹にまで減ったなら……それでどうにかしなければならないということじゃないのかい？」

「そうでもありません。まあ、技法としてはそうです。ただ、遺伝子の一部を操作することで、ヘテロ接合性を人工的に生み出すことができるんです。全個体に広がりかねない遺伝的欠陥も、一緒に取り除きます」

「いずれにしても、今のわれわれには興味をそそられる話だね」

「もし〈クラウド・アーク〉が想定どおりの人口になり、冷凍した精子のサンプルや卵子や胚などを使うことができれば、人間の数はおそらく問題なくなるでしょう。成功させられるだけのヘテロ接合性があるはず

CamScannerでスキャン

です。私のここでの仕事は、人間ではないものの総数に関わることです」

「それはつまり……」

「私たちが酸素生成の方法として藻類を育てているという話を、あなたも聞いたことがあるんじゃないかと。単純な生態系が始まったばかりで、いずれ育って発展し、何年かのうちには単純でなくなるはずです。生態系を構成している植物や微生物は、最初は数少ない繁殖用の個体ですが、殖えていきます。植物を頼りに呼吸できるようにして、アイルランドのジャガイモ飢饉みたいなことは繰り返さないでいられればと」

「つまり君の仕事は、クロアシイタチのケースで行なわれたことを、その生態系でやるということだね」

「それも私の仕事の一部です」

「ほかには何を？」

「ヴィクトリア朝の博物館のキュレーターのようなことを。ケンブリッジにあるクラレンスの自宅に行かれたことは？」

「残念ながら、ないな。ただ、彼のコレクションがすばらしいということは聞いていたよ」

「ヴィクトリア朝時代の上流階級には、探検帽をかぶって大英帝国の周辺部で科学に貢献しようとしたコレクターがいましたね。ああいう人たちが集めてきた、剥製の鳥や標本の甲虫、壁に飾る動物の首が、詰め込まれた場所です。現在では科学者とは呼ばれない人たちですが、科学の高邁な目的に対する貢献者です。博物館からあふれてしまったそういう品を、クラレンスがトラックで手に入れてきたんです。エドウィーナが亡くなって、止める人がいなくなってからは、さらに増えました。とにかく、今は私がその役割を務めていますが、標本はすべてデジタル化されていて、みんなこういうものに入っています」モイラは、首にかけたチェーンにつながれて浮遊している、USBメモリを指でつついた。「あるいは彼らの〝耐放射線性（ラド・ハード）〟メモ

リに」モイラはその技術用語を曖昧で皮肉っぽい声音で発音し、自分とISSとが折り合えるには少しかかりそうなことを匂わせた。「だいたいの話はご存じでしょう――あなたがユーチューブでその話をしているのも見ました」モイラはアクセントを切り替え、ドゥーブの平板なアメリカ中西部母音を巧みにまねた。「シロナガスクジラやセコイアの木を、〈クラウド・アーク〉に運ぶのは無理です。たとえ運べても、生かすことはできません。でも、そのDNAを、1と0の連なりで暗号化して送ることは可能です」

「私を失業させる気かな」

「いいですね。そうしたらこのラボで仕事をしてもらえますね。ここの仕事はきついですし、充分な助けを送ってもらえているとは言えませんが」

「すべて自動でやっているのかと思ったよ」

「〈エージェント〉があと二〇年ぐらい待ってくれていたら、遺伝子合成技術も改良されて、自動にできたかもしれませんけれど。今はまだ、不器用で未熟な段階にとどまっています。もちろん、ファイルのひとつを使って――」モイラは首にかけたUSBメモリを指で叩いた。「――いくつかの単純な前駆体から始めて、そこからDNA鎖を生み出すことはできます。でも、人間の介入部分はいまだにすごく大きいんです」

「高レベルな人間の介入部分というものもあるんじゃないのかな」

「ジャマイカ人だった私の祖父は、海軍艦の機関室で働いていました。家族がイングランドに来たのは、そのためです。私が小さいころ、祖父がそうした船のひとつを私に見せてくれて、そのとき機関室にも行き、すべての部品が露出しているエンジンを見ました。むきだしのすごい機械で、人がオイル缶を持ってそのまわりで這いつくばって、手でベアリングに油を差すんです。私たちがすべてのゲノムを合成するのも、似たようなものです」

CamScannerでスキャン

「今のところは、だろう。将来的にはもっと進むということじゃないかな?」
「ええ、ありがたいことに」
「今のところは、無傷の有機体をいじりまわすということだね」
「そうです。そのとおり。それもとても難しいのですが、コントロールは可能です」モイラはあたりを見まわした。二人が浮遊しているモジュールの中は、まるでラボらしくなかった。すべてがビニールやアルミニウムのケースに密閉され、テープで封印され、黄色い付箋がついている。「ごめんなさい」とモイラ。「がっかりさせたでしょう。わざわざ来られるような場所じゃありませんでしたね」
「何か助けられることはあるかい?」
「重力が欲しいです」モイラは笑った。「ゼロG状態で液体を扱うとどうなるか、想像できますか? ラボってそのための場所なんですけれどね」
「今はいらだつのも無理はないよ。すべては箱に入っていて、無重力で機能するようになっているから」
「わかってます、わかってます。私、愚痴を言ってますね。これは〈ボロ〉に載せるんでしょう?」
「たぶん第三トーラスに。地球の標準重力に近いものが生み出せるぐらいに大きいんだ。働くためのスペースがたくさんある。熱心な〈アーカー〉のスタッフもいる」
「今はそれがあなたの仕事なんですね? 〈アーク〉のチアリーダー役が」
「それがここに来るための私の切符さ」ドゥーブは顔が少し熱くなってくるのを感じ、後悔するようなことは言わないよう自分を戒めた。「誰にでもそういう切符が必要だった。入場料を払った今、われわれはこれを機能させなければならないんだ」
モイラは言いすぎたと感じたのか、ドゥーブから目をそらして黙っていた。

「そして今は現在」とジョーンは言った。「まだ、生残っている。」

CamScannerでスキャン

A HAYAKAWA SCIENCE FICTION SERIES No. 5038

日暮雅通（ひぐらしまさみち）
1954年生，青山学院大学理工学部卒
英米文芸・ノンフィクション翻訳家
訳書
『都市と都市』『爆発の三つの欠片』（共訳）チャイナ・ミエヴィル
『最初の刑事』ケイト・サマースケイル
『シャーロック・ホームズの思考術』マリア・コニコヴァ
（以上早川書房刊）他多数

この本の型は，縦18.4センチ，横10.6センチのポケット・ブック判です．

〔七人（しちにん）のイヴ I〕

2018年6月20日印刷　2018年6月25日発行

著者	ニール・スティーヴンスン
訳者	日暮雅通
発行者	早川浩
印刷所	株式会社亨有堂印刷所
表紙印刷	株式会社文化カラー印刷
製本所	株式会社川島製本所

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2－2
電話　03-3252-3111（大代表）
振替　00160-3-47799
http://www.hayakawa-online.co.jp

（乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい
送料小社負担にてお取りかえいたします）

ISBN978-4-15-335038-0 C0297
Printed and bound in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上の例外を除き禁じられています。

CamScannerでスキャン